
姫と三騎士と平民A

弓槻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姫と三騎士と平民A

【Nコード】

N1353D

【作者名】

弓槻

【あらすじ】

僕の学校には、姫と三人の騎士が居る。そして僕は平民A。脇役中の脇役。舞台に出るのはほんの数秒。良くて数分。しかし、そんな僕を物語の主要人物にしたのは、艶めく長い黒髪と煌く紅い瞳を持つ、美しい姫君 『日宮千歳』だった。完璧無敵万能超人だけでなく無表情の姫と、平々凡々月並みな平民Aこと僕。そして姫の護衛の美形三騎士。その他にも個性豊かなキャラクターが現れる。……こんな感じのラブコメディー。ちなみに、主人公は平凡とは思えない女顔ですが、自覚していないので『平民A』には変わりありません。

ん。
悪しからず。

第一話：「平民Aの疑問」

とある高校の昼放課。そしてその学校の食堂。
僕は好物のオムライスを口に運んでいた。

目の前には三人の美男子。そして僕の横には一人の美少女。
人々はこの光景にざわつき、困惑した視線を向ける。中には嫉妬
の視線を僕に向けてくる者も居た。

……飯も食えたモンじゃねえ、と言いたい。

スプーンを置き、ふーっ、と溜め息とも深呼吸とも言えなくも無
いような呼吸を試みる。俯いて、何故自分が今こんな状況に陥っ
ているのか考えてみた。

……ダメだ。全く思い当たらない。

「秋、^{しゅう}どうした？ 腹が痛いのか？ 胃腸薬、保健室から貰ってこ
ようか？」

美少女の気遣う視線が、正直眩しい。紅い瞳が綺麗だなど思っ
てみたり。

そして外野の男達の視線が痛かった。中には女子からのも入っ
ていてなんか泣きたくなる。

「……おい、秋とやら。千歳^{ちとせ}をパシらせたらぶっ殺すぞ。俺の手で
な」

向かいに座る美形さんが僕を睨む。

黒髪の短髪が何故かうねっているようにも見えますが、僕の

気のせい……じゃないですよええ。ヘタレですいません。第一印象から怖かった人は、思った通り怖い。

「向坂秋くん。千歳を困らせたら、どうなるか分かっているんですよ？ 俺の警告はここまでですよ？」

右斜めに座る美形が、僕を見た。

猫っ毛で所々ハネている茶髪。お上品なオーラが背中からにじみ出ている。見た目は優しそうだったけど実際はそうでも無かったみたい。目、笑っていないし、はつきり言うところの人怖い。

「秋ちゃん、大丈夫？ 俺と一緒に保健室行く？」

左斜めに座る美形が僕を見る。

金に近い茶髪が少し近寄りがたい雰囲気を出してるけど、本当は凄く優しいらしい。ちゃん付けは気になるけど、その優しさが心に沁みる。

何時もと違う光景。それは、僕の目の前に美男美女がいる事。

僕が通う学園には、姫と三人の騎士がいる。

正直僕は騎士達の事はよく知らないが、姫の事なら知っている。
友人に自他共に認める姫フリークが居るのだ。

他校の生徒を入れたら軽く四桁は超える【姫ファンクラブ】の二桁代のバカ。

そのバカから姫の素晴らしい話を二時間も延々と続けられたのはいい思い出だ。勿論、皮肉である。

艶やかな黒髪を腰まで伸ばし、イギリス人の祖父を持つクォーターで、^{あか}紅い瞳を持つ彼女。

^{ひのみや}日宮千歳。

全国模試一位。弓道、テニス、剣道、バスケットボール、ピアノ、美術、その他多数。ジャンルを問わず必ず表彰台に上がる彼女を世間は天才と呼び、時には神童と呼んだ。

類まれなる才能と稀有なるその美貌。真紅の瞳。彼女はこう呼ばれる。薔薇姫 と。

彼女に初めて会った時 とは言っても、つい一週間前の事なのだが。彼女は、何かに絶望しているようなとても冷たい目をしていて、僕は思わず声を掛けてしまったのだ。

それから、僕の受難が始まる。

僕は物語の繋ぎでしかない平民Aでいたかった。けれど、それを簡単に壊したのは美しい真紅の瞳を持った姫君。王城から出てきた姫様が僕を舞台上に上がらせた。

護衛の三騎士と、真紅の姫と、平々凡々な平民A。

それは全く華にならない光景だった。

第二話：「平民Aと紅の姫」

それは約一週間前の出来事。僕は街中を歩いていた。

ふと電気屋の店頭に並ぶテレビを見てみる。そこに映るのは我が校の姫。テレビで見ない日は無いし、新聞で見ない日も無い。

そこら辺の芸能人より整った容姿をしていて、全国模試一位で運動も出来る。

マスコミがこれを見逃すはず無く彼女は時の人となり、その美貌と才能で国民から絶大な支持を得る事になった。僕のような凡人とは住む世界が違う人だ。

テレビの中で表彰台上がる彼女。どうやらフィギュアスケートの大会で優勝したらしい。だけど彼女の表情は優れない。いや優れないんじゃない、無表情なんだ。

表彰台の映像が終わり、氷上で踊る彼女が映し出される。それは綺麗だったけど、それと同時に冷たかった。彼女の目は冷たく表情も無い。それでもやっぱり見入ってしまう。

だけどその時。

「いつっ」

脇腹に突然痛みが走る。

驚いて目を向けるとアスファルトの地面に尻餅をついた女の子が目に入った。恐らく、僕にぶつかってきたのはこの子だろう。

「うわ。大丈夫ですか？」

慌てて手を差し伸べる。

「……あ」

そこで気付いた。女の子が自分と同じ学校の制服を着ている事に。僕の学校の制服はグレーのブレザーの下に白のカッターシャツを着ていて、赤のネクタイを着けている。黒のスカートは膝上の長さだ。ちなみに、男子は黒のスボン。

「あの、大丈夫？」

僕の呼び掛けに、無言で俯うつむく女の子。まさか、怪我をさせてしまったのだろうか？

「ど、どこか痛い所はありますか？」

地面に膝をついて顔を覗き込もうとすると、女の子は更に顔を俯かせる。どど、どうしようっ？

焦ってパニック状態の僕と、うんともすんとも言わない彼女。通行人が何事かと視線を向けてくるのが分かる。中には白い目を僕に向けてくる人も。

そして、甲高い声が通行人達の興味を更に惹く事になる。

「ねえ、あの女の子……日宮千歳じゃない？」

それは、僕と彼女のやり取りを興味深そうに見ていたカップルの女性の声だった。

その声は騒がしい街中でも十分に聞き取れる程の大きさで。

当然、僕にも聞こえた訳だから彼女に聞こえないはずはない。そして僕は見てしまった。咄嗟に顔を上げ、僕を窺うように見た彼女

の紅い瞳を。すぐに顔を下げってしまったので遠巻きの通行人には見えなかっただろうけど、僕は見た。

冷たい目。表情が無い彼女の顔を。

見間違える筈はない。薔薇姫と呼ばれる少女。 日宮千歳を。

自覚した瞬間、彼女の手を取った。気付いたら体が勝手に動いていたのだ。正直驚いた。自分の行為に自分で驚くなんてバカみみたいだけ。

手を掴んだ瞬間彼女が勢いよく顔を上げる。その表情は無ではなく、戸惑いと驚き。目は見開かれていて、しっかりと紅い双眼が見えた。それは遠巻きの通行人にも見えたのだろう。

「日宮千歳だ！」

男の叫びに、通行人が驚きの悲鳴を上げる。

日宮千歳のファンだと言う奴は少なくない。むしろファンじゃない奴が少ない。それを証拠に、黄色い悲鳴を上げる女子高生らしき人もいたし、顔を紅潮させて携帯で写真を撮る男も。老若男女を問わずその行為が行われる。

言わば、日宮千歳は国民的アイドルなのだ。同じ学校に通っている僕からして見れば普通の学生にしか見えないのだけ。

耳につく人の悲鳴を聞き流し、彼女の目を見た。

「僕に付いて来て」

更に見開かれる彼女の目。それを見て、彼女の返事を聞かずに走り出す。

走り出して数秒後、後ろから複数の足音が聞こえてきた。追われている。

ん？ ……追われている？ ……ちょっと待って！ こ、怖っ！

メチャクチャ怖いんですけどお！！

二人VS複数（詳細不明）。

こんな理不尽なルールはない。捕まったらどうなるのだろう。リ
ンチかな？ やっぱり。

って言うか、僕はそれよりも友人の方が怖い。日宮千歳の手を握
った事が友人にバレたら、一体どんな目に合うのか。ここ何日間は
夜道に気をつけなければならなくなる事は確実だ。

そして数分間の全力疾走。いつの間にか僕が彼女に引っ張られて
いた。そりゃそうだ。だって彼女の方が僕より足速いし、スタミナ
だって彼女が上だろう。それが当たり前だと思う。しかし、自分の
情けなさに泣けると思ったのは初めてだ。これからジョギングでも
始めようかな。

暫く走っていると、恐怖を抱いた足音は聞こえなくなっていた。
まあ、そんなこんなで行き着いたのが。

知り合いがやってる喫茶店だった。

第三話：「平民Aと紅の姫と女たらし」

目の前には木目調の扉。

カランカラン、と扉に取り付けられたベルが鳴る。
中に入るとカウンターに立つ男がこつちを見た。
僕はあらかじめ用意していたセリフを言う。

「タケちゃんかくま匿かくまってー。追われてるんだー」

「何だその三文芝居。棒読みにも程がある……」

タケちゃんの目が、僕の横の彼女に向いた。まあ彼女の身長は僕より数センチ低いだけだから、そう目線の高さは変わらなかった気がする。……はっ。僕はどうせ170ちょいですよ。

ちょっと拗すねながらカウンターに目を移すと、タケちゃんの目は驚きで見開かれている。普段は流し目を得意とするイケメンプレイボーイ・タケちゃん。この表情はレアだ。僕は携帯を取り出し、激写する。永久保存しよ。何なら汐姉に送ろうかな。

「お、おい、秋。その子……」

口をパクパクと魚のように開閉するタケちゃん。マヌケな事この上ない。常連さんが見たら泣くぞ。

「ご存じの通り、日宮千歳さんです」

そう言い、隣に立つ彼女の耳を塞ぐ。彼女は何をされているのか分からないみたいで視線を彷徨さまよわせている。

次の瞬間、店にはタケちゃんの絶叫が響き渡った。僕の両手は彼女の耳を塞いでいたので自分の耳を塞げず丸腰。案の定、耳鳴りがある。タケちゃんの声は無駄にでかいから嫌なんだ。どこで発声練習してんのさ。ポイトレしなくてその音量は凄いと思う。……デスマタルでもやればいいのに。

耳鳴りが止まらない。

って言うか、タケちゃん。調子乗って握手とか求めんな。急いで彼女の前に立ち、タケちゃんのギラついた目から遮る。するとタケちゃんは不満一杯な目を僕に向けた。

それに敵対するように、殺気一杯な視線をタケちゃんに投げ、彼女の方に目を向ける。背中に恨みの籠もった視線が突き刺さるが、無視した。

「じゃ、日宮さん、紹介します。里原武斗、二十七歳。僕の従兄弟です。周りに人が居ない時は半径五メートル以内に入らないください。妊娠させられますから。年中無休で発情期なんです」

「おい！ 何言っちゃってんの君い！！ この嘘八百！！ タコ八千野郎！！」

意味が分からないし煩い。^{めづ}歩く性欲が何か喚^{わめ}いてるが、冷たい目で見るとその歩く性欲はすぐ静かになった。

「君は？」

スツと店内に響き渡る声。それが彼女のだと気付くのに、数秒かかった。彼女の声は、思ったより低い。だけど、ハスキーボイスとまでは行かないソレはとても合っているように思えた。

「……………え？」

しかし、数秒かかって言う事がそれなのか自分つ。ヘタレにも程がある。

「私は、君の名前を知りたい」

男みたいな喋り方にも驚いたけど、一番驚いたのは はにかんだように笑う彼女だ。だけどそれは一瞬の事で次の瞬間には無表情に戻っていた。それでも、その一瞬の笑みは僕の網膜に焼き付いている。……………タケちゃんよりずっと希^{きしょう}少な表情である事は確かだ。

「……………」

「……………ダメ？」

「え？ い、いや！ 教えるよ！」

僕の沈黙を拒絶と受け取ったのか、少女は無表情で言う。自惚れかも知れないけど、声のトーンからして落ち込んでいた。

その様子に慌てて取り繕うように早口で言う。見惚れていた、なんて言える訳ない。助けを請うように後ろを振り返ると、タケちゃん顔は真っ赤にして固まっていた。

何たる事だ。日宮千歳の笑み、恐るべし。プレイボーイ・タケちゃんは一切どこへ行っただ。タケちゃん戻って来い。そう祈ってみたが、戻る気配はない。よし。僕だけは冷静でいよう。頭を冷やせ。自惚れるなバカ野郎。……って、こんな事を言ってる時点で冷静じゃないような気がする。

そう思いながらも、軽く深呼吸してから彼女に目を向ける。タケちゃんの事はもう忘れた。

「僕の名前は、向坂秋です。よ、よろしく、日宮さん」

僕は手を差し出す。さつきまで繋いでいた手。日宮さんはその手を握り、言った。

「日宮千歳だ。千歳と呼んで貰って結構。君は恩人だからな」

「いや、そんな恐れ多い　　いいたっ!？」

言葉を濁らせたその瞬間、握っていた手に力を込められる。油断していた僕は激痛に襲われる羽目に。油断していてもしていなくても同じ目に合ってたような気がするけど。

「あだだだっ!?!　　ひ、日宮さん!　　痛いです痛いです!」

「恩人なのだから、敬語は止めてくれ。それにネクタイの色は一緒だから、同級生だろう?」

少女は無表情で僕の手を握り潰さんとする。

僕達が通う学園は、ネクタイの色で学年が分かる。緑色が一年生。赤色が二年生。茶色が三年生。って言うかマジで潰れる！ネクタイの色なんか説明してる場合じゃない！

「ち、千歳！ 離して！」

「む」

パツと離された手は、真っ白だった。相当圧迫されたっぽい。ちよつと泣きながら彼女に視線を移すと、無表情のまま僕を見ていた。これは何か話すべきなんでしょうか。でも僕はタケちゃんのような話術を持ってない。その話術は女性を口説き落とすのに使われているのだけだ。

「え、と。ち、千歳？」

「何だ、秋」

「街中の事なんだけど。何で、変装とかしなかったの？ ほら、目立つじゃん。ち、千歳ってさ」

「変装ならしていた。ただ、秋とぶつかって、帽子とカラコンの両目とも落としてしまったな。尻餅をつきながら探していたのだが、気付かれてしまった」

あ、なんだー。変装してたんだー。……ってちよつと待って！

「と言う事は、僕が事の発端！？」

「まあ、そう言う事になるな」

うわ。僕は何て事を……。

「って言うかお前ら」

背中のタケちゃんはジトツとした目を僕に向けてくる。

なんだよタケちゃん。今まで無視されたからって、子犬のような目を僕に向けるな。虫酸が走る。

「そろそろ休憩終わるし、やばいんじゃないの？俺目当ての客があと三分で押し寄せるよ？」

「それを早く言ってよっ！」

ブレザーを脱ぎ千歳の頭にそれを被せ、手を取って店を飛び出す。千歳が犯罪者つぼく見えるけど、気にしない事にする。通り過ぎる人が怪訝な顔で見てきたけど気にしない。誰かが言ってたけど気にしたら負けなんだ。

そうして、僕達そのままは走り続けた。

「ち、千歳のっ、い、家って、どこお!？」

「次の角を左に曲がって、真っ直ぐ行けば着く」

息切れしまくり汗だくだくの僕に、息一つ乱れなくて頭からブレザー被った千歳。何だこの体力の差。日頃の運動不足がいけないのか？

「あ、はははっ」

何故だか、笑えてくる。高校二年生にもなつて全力疾走したからか、他の理由なのかは、僕にも分からない。

「はははっ」

横を走る千歳も、笑う。ブレザーで隠れて分からないけど、表情は無ではなく、笑っているだろう。

通行人に変な物でも見るような目で見られるが、僕達は笑うのを止めない。結局、彼女の家に着くまで、僕達は笑うのを止めなかった。

第四話：「平民Aの平穩な日は終了間近」

街中を抜けて、人通りの少ない住宅街を千歳と歩く。

「はあっはあっはあっ。は、走りながら笑うのって、案外、キツいな」

「は、走りながら笑うなど、初めての試みだ」

僕も彼女も息を切らしながら歩く。そして他愛も無い話を、彼女の家に着くまでした。誕生日とか、好きな色とか、お互いの話。とても満たされた時間。千歳を別世界の人なんかではなく身近に感じた。

しかし時間は過ぎていくモノで、あつと言う間に時は過ぎていく。

「……ここだ」

「……ここ？」

急に立ち止まった彼女は見上げながら言う。つられてその建物を見た。目に入ったのは最近出来た、超高級高層マンション。思わず絶句。

僕の家は普通の一軒家で、普通よりちよつと裕福ぐらいな家庭だ。こんなマンション、夢のまた夢……って事もないだろうけど、購入するには母さんと父さん合わせて四年分くらいの給料が必要だろう。中々な高給取りである母さんと父さんをもつてしても、四年分。目から鱗が落ちたような気分だ。それを買う千歳の両親って一体……。

「……秋？」

「あ、いや！ 何でもない！ そろそろ、帰る時間なんだよね？
確か門限、9時だっけ？」

「ああ」

門限は歩きながら話したから知っている。携帯の時計を確認。 8
時40分。タイムリミットだ。

「じゃあ、ね」

「じゃあな」

無表情の彼女は何を考えているのは分からなかった。それを無言で
見送る事しか出来ない自分が情けない。

千歳はチラリと一度だけ僕を見やりマンションの入り口に向かう。
そしてそのままオートロックの自動ドアまで行くかと思ったが、彼
女はホールで立ち止まった。

どうしてか分からないけど、呼吸が出来ないような錯覚に陥
った。

彼女は体ごと振り返り、無表情でこっちを見てくる。そんな彼女
に手を振り、バイバイ、と口だけ動かした。伝わっていればいいな、
と思いつながら。しかし彼女は動かない。数秒間だけ何か言おうとし
ていたが、諦めたかのようにオートロックを解き、自動ドアの中
に入っていく。

僕はその後ろ姿を見ながら、彼女に感謝していた。ありがと、千
歳。楽しかったよ。そう心の中で呟いて。

「ホントに、いい夢見させて貰ったなあ」

そつ口に出して呟いて、僕は家までの帰路についた。

それからの一週間はとても平穏なモノだった。

平日は学校。ある日、姫フリークの友人の前でつい千歳と言ってしまい『気安く薔薇姫の名前を呼ぶな！』と怒られてしまった。確かに馴れ馴れしくはあつたけどあそこまで怒鳴る必要性が感じられない。しかも、お前ただけ好きなんだよと聞いたら世界が滅ぶまですこの愛は尽きん！とか言うから気持ち悪かった。コレで二桁だから、一桁の人はどんなヤツなんだろう。とりあえず、こんなバカがいる世の中にちょっと絶望した。

休日は兄と姉と弟と妹と一緒に、ゲームセンターに行った（人数の事はほつといて。子沢山なんだよ）。僕以外の家族は全員美形だから、なにかと人の目を惹く。

その事を言うと、姉はニヤリと笑って、

「あんたは女の子を寄せ付けないオーラが出てんのよ。もう少し愛想良くしたら？ 私とか裕太ゆうたみたいだね」

と言ってきた。

汐姉おしは愛想良くないだろ、と言ったらローキックされたので口を閉じる。どうやら話はまだ続くらしい。

「それが嫌なら、善也よしやとか菊花きくかみたいに天然キャラを全面的に出しなさい」

意識してやった時点でそれはもう天然じゃないと思うのは僕だけ？

「どつちをやっても、きつとモテるわよ。女顔も今はモテる時代らしいから。それになんて言ったって、あんたは私の弟なんだからね！ 私の高校時代なんて、そりやもう凄かったんだから！！ 一年間一緒だったから、知ってるでしょ？」

後は自慢のオンパレード。延々と聞かされた姉の武勇伝には、アラブの石油王に告白されたのだの、嘘くさい話もあったが、それを否定するのも面倒臭ひじょうかったので聞き流した。

しかし、弟の鼻ひじょう目から見ても、姉は美人である。千歳と並ぶくらい、姉の容貌は美しい。茶髪のセミロングに文句ないプロポーシヨン、そしてその美貌。モデルになれば、直ぐにでもトップになれる。

その事を伝えると、姉は顔を真っ赤にして黙ってしまった。体調が悪いのかもしれない。……風邪？

姉は全く分かっていない僕に気付いたのか、僕を睨みつけて言った。

「流石タケちゃんの従兄弟よね。そんな歯はが浮くような台詞、サラ

リと言えるんだもん。天然も罪よ、罪！」

汐姉もタケちゃんの従兄弟だろうが。そう言ったら、ローキックを貰った。相変わらず、プロ顔負けな健脚である。

さて。では、ここいらで僕の家族を紹介しよう。

兄の善也、現在大学三年生。姉の汐、善也兄と同じ大学に通う一年生。そして弟の裕太と妹の菊花、この二人は中学三年生。

兄、姉、自分、弟、妹。少子化である現代社会には珍しい五人兄妹だ。母と父を含めば七人家族になる。両親はとても個性が強く、語るには大変時間を要するのでまた今度。

まあ、そんなこんなで過ぎていった一週間。

月曜日、平日の学校。四時間目のチャイムが鳴り終わる。

前の席に座る友人　　姫フリークでは無い。だが、僕の姉である『汐フリーク』である　　と雑談していると突然廊下が騒がしくなった。

「ん？　何か廊下、人だかりが出来てる」

「あ？　マジで？　秋、購買行けんの？」

友人は彼女から弁当を貰っているので昼食は購買に行かずに済むのだが、僕は違う。

生憎あいにく作ってくれるような親密な関係にある人は居ないのだ。時々、汐姉とか菊花が作ってくれるけど、この友人が羨バカましそうな顔をしてくるから、僕は二人に弁当を強要しない。

友人は汐フリークであると同時に彼女フリークでもある。友人曰く、汐に抱く感情は憧れで、彼女に抱く感情は愛なのだそうだ。

憧れと愛の違いを恍惚として語る表情がウザかったので、話の途中で友人の了承も取らずにトイレに立った。そして数分後、トイレから戻ると僕が居なくなつた事にも気付かずいまだ恍惚とした表情で語っている友人を見て、げんなりしたのを覚えている。

「あ、俺の弁当のおかず狙つてんの？ あげないよ!？」

「いらないよ!！」

誰が友達の彼女お手製弁当のおかずを狙うんだよ。少なくとも僕は狙わない。悲しくなるだろうが。

そんな軽口を叩きながら話していると、突然教室の扉が開かれた。

「 向坂秋！ 出てこいオラア!！」

そんな言葉を吐きながらの美形登場だ。何だかこの一週間、美形ばかりに会ってる気がするのは僕の気の所為だろうか？

第五話：「三騎士登場」

「向坂秋！ 出てこいオラア！！」

そんな暴言と共に入ってきたのは、黒髪を短髪にした少年。ちなみに、入ってきたのは教室の教卓側のドア。ネクタイは赤だから二年生か。一言で表すと美形。

って言うか、僕に何か用なんだろうか。

「琉、君はもうちょっと礼儀と常識ってモノを知った方がいいと思うな」

黒髪短髪の少年の後ろから、茶髪で猫っ毛の少年が出てきた。これまた美形。

「環も人の事言えないと思うよ？」

またまた美形登場。今度は金に近い茶髪を持った美少年。何か不良みたいで怖い。でも喋り方はソフトだ。何か背中から優しそうなほんわかオーラが出てるのは、僕の見間違いと言うか錯覚だろうけど。

三人の美形が集まった扉の周りだけ、異空間と化している気がする。何だここは。美形の国か？

「琉、環、壱！ 止めろと言っておるだろうが！」

……あれ？ どこかで聞いた声が、美形三人組の後ろから聞こえた気がする。

「千歳は黙ってる！俺はそいつの顔を見なきゃ、腹の虫が収まらねえんだよ！！」

琉と呼ばれた美少年が、後ろを振り向かずに行った。顔は教室を向いていて、教室内を見回している。その目は、肉食獣のようにキラついていた。

………ギラついていると言えばタケちゃんを思い出した。アレはまた違った意味でのギラついている、だな。って言うかやっぱり千歳だったんだ。

「俺も琉に賛成。千歳が気に入った奴、見てみたいし。それに何だか信用出来ないから、会って確かめるんだよ」

環と呼ばれた美少年が後ろに居る千歳の方に振り向き、諭すように言った。どうでもいいけど、信用出来ないって僕の事？だとしたら結構傷付く。

「俺はどつちでもいいんだけどねえ」

きと呼ばれた美少年は欠伸あくびをしながら言う。なんかその動作でさえも様になっているのは何故だろう。美形って得だ。別に美形になりたいとは思わないけど。

薔薇姫と三騎士。

その組み合わせに、クラスは阿鼻叫喚と化した。

と言うか、四人が話してるのってどうも僕っぽいよ。て言うか、名前言われたんだから僕に決まってるか。あはは。どうも、僕の中にあるヘタレな心が話題に出てる事を拒否してるんだよね。

「向坂秋って誰だよ」

琉と呼ばれた美少年が頭をガリガリと掻きむしる。相当イラついているご様子だ。何かいちいち動作が怖いんだよな、この人。

「千歳に聞けばいいんじゃない？」

ニコニコ笑いながら言う環と呼ばれた美少年。それが逆に怖い。お友達になるなら、あの後ろからほんわかオーラ出してる人がいいな。

「それもそうだな。千歳、行ってこい」

琉と呼ばれた美少年は、千歳の腕を引っ張って、教室の中に入れた。

クラスの女子が悲鳴を上げ、男子は彼女を紅潮した頬で見る。姫フリークの野郎なんて、興奮の余り鼻血を出している。後でちゃんと掃除してよ。

彼女が一步踏み出す。クラス中が、釘付けになった。教卓の前に辿り着き、彼女はクラスを見渡す。

「……」

「……」

目が合ったその瞬間、僕の体は硬直した。彼女が無表情でこちらを見つめ、おぼつか覚束ない足取りで歩き出す。

教壇からこの席までは数秒の距離だけど、何十秒と長く感じた。そうしていつの間にか目の前に千歳が居た。彼女は無表情で僕を見ている。静まり返る教室の中僕と彼女は見つめ合う。

「秋……」

「……」

僕は返事をしなかった。いや、出来なかったと言った方が正しい。返事を返したら、何かが変わってしまふような気がして怖かった。

ああ。なんて、臆病者。

千歳が返事をしない僕を見て傷ついたような、悲しそうな顔をす。無表情が微かに、ほんの数秒だけ変わった。今更ながらに僕は後悔した。彼女を傷付けて、悲しませてしまった事に。

彼女は何かを言おうとするが、直ぐに閉口する。俯いたまま首を横に振り、背中を向け立ち去ろうとした時、僕は思わず彼女の手を掴んでいた。

「……っ」

彼女が振り向く。その表情は驚愕。目を見開いて僕を見ている。

綺麗な紅い瞳に、僕が映った。ああ。何で僕は、今にも泣きそうな顔をしているんだろう。

クラスの女子が息を呑む音が聞こえた。男子は凄い形相で僕を睨むが知った事じゃない。僕は僕のやりたい事をやる。その意思を表すように千歳の手を強く、強く握った。

扉の前に立つ三騎士の目が見開かれている。一人は憤怒と驚愕の混ざった表情で、一人は嫉妬と戸惑いが混ざった表情で、もう一人は純粋な驚きの表情でそこに立つ。

でも、今の僕にはそんな事どうでもよかった。優先事項は、目の

前にいる少女。

「久しぶり、千歳」

一週間前、僕と彼女が初めて喋った日。それは夢の出来事のように。その事を夢であると決めた自分と同時に、夢でない事を望んだ。それは僕の中で確実にあった思い。

ああ、しまった。彼女の手を掴んだ瞬間そう思った。けれど微かに目尻が下がった顔を見て、そんな思いは消えて無くなった。

僕は少女に微笑みかける。彼女の瞳に映る自分は泣き笑いのような表情で、微笑みかけていた。こうなる事を一番望んでいたのは、己なのかも知れない。

手を繋ぎ、見つめ合う平民Aと姫。その光景を呆然とした様子で見ると三騎士。そして悲鳴を上げる民衆。

それが、約五分前の出来事。

第六話：「馬鹿もたまには役に立つ」

そして現在。僕は食堂でオムライスを眺めていた。うん。視線が痛くて食欲無くなっちゃった。逆に胃が痛くなっただけだね。

あれから大変だった。千歳の手を握った事で姫フリークの友人からは睨まれるし、クラスメイトからは、『何で？ え？』みたいな顔されるし、三騎士に無理矢理食堂連れてかれるし。千歳の手を握ったままだから、廊下に固まった方々や教室の廊下側の窓から顔を出す方々に睨まれるし。そう言えば、体育教師の大山からも睨まれた気がする。もう笑うしかない。

当然、廊下には姫ファンも居た筈だ。明日からの学校生活に不安を抱いてしまう。いっその事、不登校になってやろうか。ああ、もう、笑うしかない。

「……憂鬱だ」
憂鬱ゆううつ

小声でボソツと呟く。

目の前には美形三人組こと三騎士が勢ぞろい。隣には、全校生徒の憧れ日宮千歳。あれ、コレって両手に花状態じゃない？ 今の状況じゃ片手と目の前に花だけだ。

以前、バカ（姫フリーク）から教えてもらった情報は姫の事が主だったが、その中に三騎士が含まれていたのを憶えている。と言うか、その情報が書かれたメモを貰った。捨てるのが面倒で、内ポケットに入れっぱなしにしていたのが功を奏してみたんだ。

バカもたまには役に立つと言う事を証明された歴史的瞬間だ。お礼に、あとでジュースでも買ってやる事もなくはないかな？

僕は内ポケットからメモを取り出し、テーブルの下でソレを開く。

その一、草食獣を狙う肉食獣みたいな目で僕を見る美形の情報。

庵原琉二。

運動神経抜群。成績は下から数えた方が早いらしい。素行が悪く、言葉遣いが荒い。しかし顔がいいので女子からの人気は絶えない。言い寄ってくる女子には厳しいが、その他の女子や男子には割りとお優しいと評判。

『顔が良いからって何だ！俺達には心があるだろ！！ by 佑樹』

その二、親の仇を見るような目で僕を見てくる美形の情報。

明瀬環。

成績は常に上位をキープ。運動音痴。丁寧な物腰とはつきりした態度で生徒から親しまれる。教師がつける最も逆らってはいけない生徒ランキングで見事一位に輝いた経験あり。理由は、以前逆らった教師が異動になったから、が一番多かったとの報告。

『コイツには逆らわない方がいいぜ。 b y 佑樹』

その三、僕が最も友達になりたい美形。

齋木 吉人。
さいき きちひと

成績並。運動並。しかし素行の良さと教師からの信用は厚い。明るい言動から、男女問わず親しまれている存在。

『怒ると結構怖いつて話だ。 b y 佑樹』

う、うぜー……。バカ（佑樹）の個人的感想がどうしても目に入ってしまう。コイツ、嫌がらせか？ 僕に対しての嫌がらせと解釈しても、いいんだよな？ あとで100%オレンジジュースを目にお見舞いしてやる。味わって悶える。そして願わくば、その脳に湧いたカビが消えますように。オレンジの除菌効果で。

それにしても、三騎士の名前初めて知った。今まで興味無かったからなあ。千歳の事はテレビ見てれば嫌でも目に入るし、バカ（佑樹）が語るから知っていたけど。考えてみれば、三騎士とは初対面なんだよなあ……。ん？ 初対面？

「……僕達、初対面ですよね？」

「うん。そっだよ？」

よかった。きって人は、僕の問い掛けに答えてくれた。他の二人は完全無視だけだ。

「じゃあ、何で僕の名前知ってたんですか？」

「ああ、それはね、この前、人見知りの千歳が秋ちゃんの話をしたからなんだよねー」

「い、吉人！」

「別にいいでしょ？ 聞かれて困るようなこと言っていないだし」

「確かに聞かれて困るようなことは言っていないが………後で覚えてるよ、吉人」

「はいはい。分かったよ。まあ簡単に言っと、めったに他人の話をしない千歳が、初対面の秋ちゃんと手を繋いで仲良くお喋りしたって言うのを聞いて、秋ちゃんに対する不満が爆発しちゃったって訳なんだよ」

「はあ」

「あ、俺の事はきって呼んでよ。同い年でしょ？ 敬語も止め止め。琉と環も、呼び捨てにしちゃっていいよ？」

あははははー、と能天気には笑う。うーん。今までに見なかったタイプだ。それより、琉との手がプルプル震えてる事にきは気付いてないのだろうか？ あ、無意識で呼び捨てにしちゃってるし。これは千歳の影響？

「ふっ……ふざけんなっ！ 俺はコイツを認めた訳じゃ」

「俺、認めた覚えは無いよ。それに、気安く名前で呼ばれたくな

「二人が硬直する。何故か。そう、何故か壱の方を向いて。壱の顔は僕達から見えない。食器を載せるトレイで顔を隠しているのだ。スーツと血の気が引いてく琉と環。トレイの向こう側で、壱はどんな顔をしているんだろう。」

「……あつちで俺と、お話しよっか？」

トレイの向こう側から、今までの壱の声より一オクターブ低い声がした。

「い、いや！ 俺はいい！！！」

「俺も、遠慮しておく！！ これから宿題やるから！！！」

「……お話、しよっか？」

必死の抵抗を見せる二人。しかし壱はソレを無視。

「……」

「……」

「お話、しよっか？」

疑問符が付いてない。断定だ。断定されてる。壱はトレイを持ってたまま、食堂を出て行った。その後、肩を落とした二人がついて行く。……なんか、不憫ふひんに思えてきた。

隣の千歳と顔を見合わせる。

「……千歳」

「……何、秋」

「この空気、どうしょっか」

「……とりあえず、食べた方がいいんじゃないか？ 昼休み、もう直ぐ終わりそうだし」

「……そうだね」

まあ、数分後にはこの空気も霧散し千歳と楽しく会話しながら昼食を食べれたので、よしとする。ああ、それと何だか、三騎士が居なくなつてから視線が随分と増えた気がする。多分僕の気のせいだろうけど。

そして結局、昼休み中に三人が戻る事は無かった。

第七話：「この気持ちは何だろう」

時は夕刻。僕は今、自室にいる。ベッドに寝転がり、天井を眺めているのである。

「今日は色んな事があつたな……」

あの後、千歳を特進クラスまで送り届けて教室に帰ると質問攻めにあつた。そこで佑樹がいきなり僕に突進してくるから、買っておいたオレンジジュースを目に浴びせてやった。想像通りと言うべきか、バカは激痛に身を捩じらせ悶え苦しんでいたよ。ついには教室中を転げ回り、授業妨害をしていた程だ。まあ、何はともあれ除菌完了。これで佑樹も少しはマシになってくれたらいいなあ。

あとは、数学担当教師の宮藤みやふじが黒板に書かれた問題を解くのに、僕をやたらと指名する事。あいつ、絶対千歳のファンだ。僕と千歳が『手を繋いだ』との噂は校内中に広まり、更には他校にまで広まったらしい。恐るべし、姫ファンクラブの情報網。

そして、なんだか今日は闇討ちに遭いそうな気がしたので、僕は残りの授業を全部サボり、現在に至る訳である。

「はあ……」

溜め息。何かもうどうでもよくなってきた。睡魔が僕を夢の世界へと誘っているのを感じる。待ってて睡魔さん、今行きまぐー。

携帯のアラームが鳴り、目が覚めた。時計を見ると夕飯の時間。都合が良いとかのツツコミはしないで頂きたい。

ふと自分が制服でいる事を思い出し、部屋着に着替える。なんだか下が騒がしい。

リビングに行くと、汐姉を囲みながら我が家族は盛り上がっていた。もう、盛り上がりすぎて僕に気付いていない。なんか悲しくなった。僕はそんなに存在感がないのか。

「もう、可愛すぎるわ!」

片手に携帯を持ちながら叫ぶ汐姉は、酔ったように頬を染めていた。ただ、その顔も綺麗だと思ってしまうから、憎らしい。

「汐、顔がニヤけてるよ。でも汐の言う通りだと思っな。この美しさは芸術品だね」

善也兄は顎に手をあて、ウンウンと頷きながら言った。善也兄の顔も緩みきっているのはツツコンだ方がいいのだろうか。

「綺麗な寝顔です……」

頬に手をあてながら、惚けた様子で汐姉の携帯を見つめる美少女。妹の菊花だ。頬を軽く染めて溜め息をつく姿は中学三年生とは思えないほど艶めかしい。

「おれ、この写真欲しい。汐姉ちゃん、送ってよ」

頬を上気させ、汐姉に手を合わせる美少年。僕の弟、裕太だ。身長は菊花と同じ160センチで、ちよつと小さめ。でも、成長期まで待てば一気に伸びると思う。僕も、中学時代はちよつと小さかったから。って言うか、一体何を見てるの？

裕太の言葉に、汐姉が腕を組む。

「ええー？ どうしよっかなあ。秋の寝顔って結構レアなのよねえ」

「はい没収」

あ、と兄妹仲良く合唱した。

携帯を見ると、写っていたのは僕の寝顔。油断も隙もない。僕が寝ている間に部屋に侵入したのだろう。家族じゃなかったら通報してる。

「汐姉さ、肖像権しやうざいけんって知ってる？」

ニコ、と微笑みながら問い掛ける。嫌味のつもりでやったのだが、兄妹達は頬を染めやがったからさあ大変。なんだか僕、イラツときちやっただよ？

「うー。秋、返してよ」

「駄目です」

「じゃあ、じゃあ、大学で売るのは止めるから！ もう止めるから

！！」

「売るつもりだったのかよ！ しかももう売ってたっばいよね！」

「え。だって、秋の写真、結構高値つくし？」

「そんな可愛いポーズしたって駄目。大体、僕の写真を売ってどうするのさ。こんな平凡な男の写真、いらないでしょ？ 僕、可愛くもないし、カッコよくもないし、綺麗でもないよ？」

僕がそう言うと全員、何故か落胆の溜め息を吐いた。なんかムカつく。だってしょうがないだろ、平凡なんだから。僕に非凡を求められても困る。

「もー。秋ってば全然分かってない」

と、汐姉。

「まあ、そこが秋のいいところでもあるんだけどね」

と、善也兄。

「秋お兄ちゃん、よく言えば謙虚、悪く言えば鈍感ですからねえ」

と、菊花。

「要するに、秋兄ちゃんは」

と、裕太。

「」「」「勿体無い」「」

兄妹揃ってシンク口するな。疎外感を感じる。

「ねえ、秋？ いい加減、気付いて？ 貴方はとても綺麗なのよ？」

僕の両手を握り、上目遣いで僕を見る汐姉。本性を知っているとはいえその姿は聖母のようで、でもやっぱり中身は

「隙ありいつ！！」

悪魔だった。

やったー携帯奪取ー！ 永久保存しよー！ とはしゃいでる兄妹達。今、自分を自分で罵倒したい。汐姉に少しでもときめいた自分を殴り倒して蹴り倒してやりたい。って言うかも、穴があったら入りたい。つーか死にたい。

「なんかもう、どうでもいいや……勝手にやってるよ、もう」

僕の言葉を見無視してはしゃぐ兄妹達を見て、なんだか無性に泣きたくなった。

その時、何故か千歳の顔が浮かんだ。へこんでる時は、誰かに愚痴を聞いてもらいたいものだ、と、汐姉が言っていたのを思い出す。僕は無意識に、愚痴る相手として千歳を思い浮かべてしまったのだろう。知り合って間もないのに、何でこんな事を思うのか分からない。何だかおかしくて、ふふっ、と笑みを零す。

「今度、携帯電話の番号、聞いてみるか」

愚痴る為じゃなく、ただ単純に知りたかった。

悲しい気持ちはいつの間にか、暖かくて、なんとも言えない気持

ちになっていて。あの綺麗な紅い瞳を思い出すだけで、胸の奥が、
ちよつと疼いて。

この感覚が何なのか、僕には分からなかった。

第八話：「朝は疲れるけど友達が出来る」

朝。制服を着ている最中。

「秋、おはよー」

「ああ、汐姉、おはようって何て格好してるの貴女あなた！」

我が家の魔王、汐姉が下着姿で僕の部屋に訪問して来た。動揺のあまり、オネエ言葉になっちゃったよ。

「え？ ああ、コレ？ 可愛いでしょ？」

「え？ あ、うんって流されそうになっただけどそういう問題じゃない！ 違うでしょ、汐姉！」

「えー？ 可愛くない？」

「そうじゃないよ！ 僕、これでも一応男なんだから早く着替えてきなさい！ 目のやり場に困るから！ とても困るから！」

「うふふー。どうしよっかなー？」

ちょ、何その手つき！ なんかいやらしい！ って言うか普通なら配役逆だから！ いや、逆ならもう僕は犯罪者だけどね！

後ずさる僕と、じりじり寄ってくる汐姉。駄目だ。完璧遊んでやるよこの実姉！

「えいつー！」

「ひいつ！」

汐姉が僕に抱きつく。

何か顔近いし胸に柔らかいの当たってるって言うかスリスリすんの止めてお願いだからぁ！！

「あーもう、秋ってば可愛すぎー 髪の毛はサラサラだし睫毛長
いしお肌スベスベだし」

「ししし汐姉っ！ や、止めてくすぐりたい！」

「やだよーだ。べーっ」

「ガキかー！！」

「ガキだもーん」

「19歳のクセに！ ギリギリ未成年！！」

「……」

「痛い！」

炸裂する汐姉の蹴り技。怖いから無言で蹴るのは止めて！

僕と汐姉の攻防戦はこの後、数分間にも及んだ。結果は善也兄が
仲裁して引き分け。朝から余計な労力を使った。

まあ、そんな話は置いて。

朝食を食べ終わり、歯を磨き、さあ、出発とばかりに意気込んで玄關出たらあらびっくり。黒のカラーコンタクトをした千歳と三騎士が僕の家の前に立っていましたとさ。……なんで？

「おはよう、秋」

「ハロー、秋ちゃん」

「おす」

「どうも」

まあ、誰が言ったかは説明しなくても分かると思う。

「秋ちゃん、一緒に学校行く？」

かくして、僕はこの美形三人組と目を見張る美少女と肩を並べて歩かなければならないと言う事になりました。神様何がお望みだ。

歩き始めて数分。

不思議な事に、誰も僕の隣に歩いている美少女が日宮千歳だと気付かない。それを少し疑問に思い、彼女に聞いてみた。千歳が言うには、目の色が違うだけで見つかる可能性が薄く、見つかったとしても親戚とでも言えばいいらしい。思わず納得し、人の先入観は凄いなあと思った。

しかしそれでも、千歳の美しさは変わらない。その証拠に、通行人の視線が三騎士と千歳に突き刺さる。ただ、一つ気になることがある。……なんで、僕を見るんだ？ 千歳とか三騎士を見るのオマケとしてチラツと見られるのはいいけど、その中で僕をジツと見る視線があるってどういう事？ 哀れみの目で見られてんの？ 僕。それはそれで悲しい。

不安に駆られ、キョロキョロと挙動不審な行動をしているときが話しかけてきた。

「秋ちゃん、昨日の事は気にしないでね。琉と環、ちょっと拗ねてるだけなんだよ。ほら、千歳が秋ちゃんに取られちゃったー、みたいな感じでさ。ね？」

「齋木くん、気にするもなにも、僕は別にどうとも思ってますが」「敬語禁止って昨日言ったでしょ？ それに名前と呼んでよ、俺達の事。ね？ いいじゃん。琉と環も恥ずかしがってるだけで、本当は秋ちゃんと仲直りしたいんだよー？」

「「「「この野郎！」「」」」」

あははーホントの事じゃーん、と、能天気には笑っている彼。ああ、やっぱりこの人は凄い。険悪なムードを、一気に変えた。多分この美少年は、僕が昨日から、気まずい思いをしていると分かっていたのだらう。だから僕に、好機を与えた。その事を、無駄にはしていない。言い出すなら、今だ。
息を一つ、吸う。

「琉、環、吉」

僕の少し前を歩いていた三人は、驚いたように振り向く。少し、照れ臭い。誤魔化すように頬を掻く。ああもう、なんで、名前呼ぶだけなのに照れてんだ、僕。

「顔も平凡で、成績も運動とかも平凡な僕だけど」

言葉を切る。そして僕は 微笑んだ。

「これから、よろしく」

「……」

「……」

「……」

「……」

静寂。いつそ清々しいほどの静寂。それを破ったのは吉。

「……秋ちゃん、天然？」

そう言うときの顔は赤くて、他の皆も同様に赤くて。

「やばいやばいやばい。今はマジやばいって……！」

「絶対的な破壊力……！！！」

琉は口を手で押さえてなんか言ってるし、環は顔を手で覆っているけど耳が真っ赤で。そしてよく見れば、通行人も僕の顔を見たまま固まっついていて。

「……」

千歳は相変わらず無表情だけど、顔をほんのり赤くさせて僕をジッと見ている。余りにも異様な光景に少し怯んだ。僕の顔に、何かついているのだろうか？

「秋ちゃんさ、もしかして、学校では笑わない？」

雫がまだ顔を赤くしたまま、聞いてくる。僕は少し考えてから答えた。

「うーん……ないかも。鼻で笑う事とかはあるけど」

「ああ、なるほど。秋ちゃん地味だし、目立たないし、愛想悪いから、皆気付かないのかも」

「ぐっ。今のはかなり傷付いたよ、中々いいジャブじゃないか。っ
て言うか気付かないって何が？」

「んー……そつかそつか。まあ、いいや。さあ、皆学校へ急げー」

「ちょっと、はぐらかさないでよ」

「秋、でも、本当に急がないと遅刻だ」

千歳が僕のブレザーの裾を引っ張りながら言った。

「え？ マジで？」

「……行くぞ、秋」

「秋、俺、運動苦手だから、ゆっくり走って」

自分の目と耳を疑った。だって、琉と環が笑って僕の名前を呼んだのだから。

だけどそれは聞き間違いでも見間違いでも無く現実で。その事が嬉しくて、僕も笑った。千歳はそんな僕達を見て少し尻尾を下げ、舌は嬉しそうに微笑んで。

そうして僕達は、共に笑いながら学校に向かった。今日は何だか、朝から気分がいい。

でも、僕に平穏など許される筈なかったんだ。

だって、正門を抜けた時に凄い注目されてたんだ。てへっ ……
…さてと、また100%オレンジジュースを買わなくちゃ。朝から
除菌作業だー。

第九話：「ピンクの集団」

「秋うう！ ほげっ！」

飛びかかってきた佑樹を左ストレートで撃沈させ、席につく。100%オレンジジュースは時間が無かったので買ってない。凄く残念。オレンジジュースが買えなかった事を悔やんでいると、僕の前席に座る汐フリーク兼彼女フリークの友人が話しかけてきた。

「おはよ秋。さっき、薔薇姫の親衛隊が来てたよ」

「圭司おはよう。早速だけど、僕は帰る事にするよ。母が危篤で父が交通事故にあって兄妹全員が頭の病気を患っているんだ。それじゃ、バイバイ」

「ちょっと向坂くん？ どこ行くの？」

扉に向かって走り出すが、それを許さないのは我がクラスの委員長、桐谷成子。女子空手部部長で、鬼の成子と言う異名を名付けられ、全校生徒に恐れられている黙っていれば美少女な方。怒らなければとても優しく、元々美しい顔立ちをしている為、恐れられていると同時に、親しまれているのだ。

そして僕の前に立ちはだかる桐谷さんは、その名の通り、鬼。

「桐谷さん、そこを退いてくれると有り難いやらなんやらただけど……」

「ここを通りたいのなら、私の屍を超えて行きなさい」

「何でそんな少年漫画みたいなノリなの!？」

「人生には、命を懸けなきゃならないことだってあるのよ」

「じゃあ、確実に一回は間違えてるよ!」

「あー、もうっ! うるさいわねっ! しっちゃんしっちゃん言ってるどぶっ飛ばすわよ!？」

「ごめんなさい!！」

へタレって嫌だね!。

桐谷さんへの恐怖を抱きながら一時限目終了。親衛隊への恐怖を抱きながら二時限目終了。いつまでたっても現れない親衛隊を不思議に思いながら三時限目終了。欠伸あくびをしながら四時限目終了。そしていつの間にか昼休み。

「秋ー、親衛隊の方々が校舎裏まで来いってさー」

「圭司、お前、何で断ってこないんだよ。空気読めバカ野郎」

のほほんと笑う圭司にアップパーを食らわしてから校舎裏に向かった。行かないと後で酷い目に合うのは目に見えてる。だったら早いに終わらせた方が手っ取り早い。

そんな訳で只今校舎裏。

僕の前には、十人程の男達。頭には『姫様命』と書かれたハチマキと『薔薇姫に忠誠を誓う』と書かれたピンクのハッピを着ていた。見ている方が恥ずかしくなる。バカだ。バカがいます。誰か救急車。ここに頭の中がお花畑な人がいるよ！。

「で？ 僕に何か御用ですか？」

「とぼけるな！ 薔薇姫の事だ」

おかしな集団の先頭に立つ男が言った。痩せぎすな眼鏡の男。

「ああ、千歳の事ですか」

「薔薇姫の名を、お前如きが呼び捨てにするなっ！」

もー、何なのさつきからー。

「これから我々、『薔薇姫親衛隊少数精鋭』がお前に正義の鉄槌てつづいを下す！」

少数精鋭って……アホくさ。呆れる僕をよそに、ガリメガネは僕に指を突きつける。ここ、効果音が入るのなら『ドーン！』でお願いします。

「これからお前の下駄箱に毎朝不幸の手紙を入れる！ さあ、怖がれ！ 脅える！」

「わあ、怖い」

今時不幸の手紙なんて、その発想が怖いよ。

「ははははは！ そうかそうか！ 怖いか！！ お前達もそう思うか！？」

「はい！ 親衛隊長！」

「名案です！」

バカを褒めちぎるピンクの集団。異様な光景。目がチカチカする。せめて目に優しい緑にして欲しかったな、ハッピーの色は。僕の網膜にピンク色が焼きついてしまいそうだ。

「……帰る。時間無駄にした」

僕は背を向け、校舎裏を後にした。実にバカバカしい時間を過ごしてしまったようである。購買のパンが残ってなかったら、腹癒せに、佑樹を殴ろう。あとこの元凶の圭司も。

そんな事を胸に誓いながら、僕は校舎に帰った。

校舎に入った途端、誰かに声を掛けられた。

「秋ちゃん、ご飯食べた？」

「きだ。珍しく一人の様子。」

「まだだけど？」

「じゃあ、食堂一緒に行かない？」

「あ、うん。別にそれはいいけど、他の皆もいるの？」

「いるよー」

「ふうん」

何気ない会話を交わしながら、食堂に向かう。横切る女子生徒の視線が痛いけど、それなりに楽しかった。きは人を明るくさせる。勿論、き自身も明るい。というか、明るすぎなのだけれども。会話が途切れる事無く食堂に到着。

「おい！ き、秋！ こっちだ！」

場所取りをしてくれたいらしい琉が僕達に向かって大声で叫ぶ。

隣に座る環が煩そうに顔を顰^{しか}めているのが見えた。周りに居た人がビクビクしてるよ……。半ば呆れながらも、琉と環に向かつて手を振り、食券売場へきと共に向かった。

僕ときは日替わり定食を持ち、琉と環が居るテーブルへと向かった。琉と環と同じ側にきが座り、僕がその向かいに座る。ふと違和感を感じた。その原因に数秒してから気付く。

「千歳は？」

違和感の正体。千歳だった。いつもなら三人のすぐ傍に彼女は居る筈なのに。なのに、今は居ない。

僕の言葉にきは困ったように笑いながら答えた。

「あー、千歳は今、告白されてるの、かな？」

きの言葉に、琉は面白くなさそうに鼻を、フンと鳴らす。

「どうせ直ぐ帰ってくるだろ。あー思い出しても腹立つぜ。あの野郎、俺達の事、睨んできたしよー」

「だろうね。千歳、直ぐ戻るって言ってたし。それと琉、ここでは暴れないでよ」

環が琉を迷惑そうな目で見ていた。その視線に気付いたのか琉は、んな事しねーっつもの、と言って口を尖らせる。

それを余所に、僕は、胸に霞かすみがかかったかのような感覚を覚えていた。これを簡単に言い表すのなら、そう、モヤモヤ、だ。
その『モヤモヤする』奇妙な感覚に戸惑いながらも、僕は思いを口にする。

「……面白くない」

その眩きは三人の耳に届く事無く、開放されたテラスから吹いた風に掻き消された。

第十話：「黒い瞳の敵意」

何だか食欲が無く、三人には『千歳が来るまで待ってる』と言いついて数分後。

千歳が食堂の入り口に現れた。どうやら三人も気付いたようで、琉が大声を上げて千歳を呼ぶ。

「千歳！ こつちだ！」

千歳が振り向いた。自然と目が合う。何故だか、目が離せなかった。

だって。僕と目が合った瞬間、千歳は少し、目を細めて。微かに笑ったのだから。

その瞬間、僕の心にあった霞は跡形も無く霧散していて、その代わりに、爽快感にも似た感覚を覚えていた。

千歳がこつちにやって来て、当然のように、僕の隣に座る。不思議と鼓動が速くなるのを感じて、落ち着かない気持ちになった。

だけど、僕の意に反して、額から冷や汗が出た。極めて不可解。何だコレは。

「秋、食べてないけど、どうかしたのか？」

「い、いや、千歳が来るまで待ってた」

千歳に感づかれないように笑って答える。だけどそれは、余りにも頼りなく、弱々しい笑みだったのだろう。

フツと千歳の手が、僕の頬に触れる。その手は、冷たかった。前、

握った時も冷たかったけど、それよりも、ずっと。

告白場所は、屋外だったのかもしれない。季節は春。しかし今日は風が強く、肌寒い1日だと言う事を思い出した。

「秋、顔色が良くない。大丈夫か？」

僕を気遣う無表情の少女。その紅い瞳は心配そうに揺れていた。嬉しい、と言う気持ちと同時に、しっかりしなきゃ、と言う確かな思いが沸き上がってくる。

心配、させたら駄目だ。手を自分の頬に引き寄せ、千歳の手に重ねた。ビクツと驚いたように手を動かす千歳。その反応が面白くて、僕は冷たい手をそつと握り、暖めるように、包み込む。

「？ ……？」

「 ……ぷっ」

訳が分からない、と言ったような千歳の顔に、笑いが抑えきれない。だって、あの日宮千歳が、僕の一挙一動でこんなに狼狽うろたえているんだから。

「秋ちゃん大胆ー」

「秋、悪い事は言わん。イチヤつくなら場所を選べ」

「俺達は構わないけど、後が怖いよ？ 例えばファンクラブとか親衛隊とか千歳のことが好きな男子生徒とか。 ……ある意味怖いよ？」

三人の声は無視。

「千歳こそ、手、冷たいよ。大丈夫？」

薄く微笑み、手を僕の頬からそっと剥がす。千歳の手は僕の手と繋がったままだ。

ふいに。そう、ふいに。

「っ」

背筋の凍る感覚が襲う。その感覚の発生源を振り向いた。

そこは、食堂の出入り口。男が、僕を睨んでいた。

強烈な敵意。圧倒的な視線。黒い瞳に映るのは、憎悪。今まで向けられた事のない感情に、身が竦む。

「……秋？」

「あ……っ、ごめん」

無意識に千歳の手を強く握っていたらしい。痛みからか、千歳が顔を歪めながら僕を見ていた。

「秋、本当に大丈夫か？」

「ああ、大丈夫……大丈夫だよ」

千歳に向かって言うのと、自分に言い聞かせるように。僕は、大丈夫を繰り返した。異変に三人も気付いたのか、気遣うような言葉を、舌が三人の代表者として僕にかける。

「秋ちゃん、マジで大丈夫？ 顔が青いよ」

「ああ、大丈夫……」

僕を心配そうに見る琉が、何かに気付き、顔を向けた。そこは、食堂の出入り口。

「おい、アイツ、さっき千歳に告った奴だろ？ 何かこつち睨んでるぜ」

琉の言葉に、環が反応した。

「千歳、そう言えば、今日は遅かったね食堂来るの。そんなに告白、長かった？」

「……あ、いや、断つたのだが、中々引き下がってくれなくてだな。屋上から出ようとしたら腕を掴まれたから投げた」

僕に気を取られていたのか、千歳がワントempo遅れて返事をする。

投げたって……可哀想に。同情はしないけど。

「ねえ、琉……その人、もうどこか行った？」

怖くて振り向けない僕は、恐る恐る琉に聞く。琉は僕をチラリと見てから、どっか行ったぞ、と答えた。僕はその言葉に肩を落とす、安堵の息を吐く。それと同時に、硬直していた手から、スルリと千歳の手が抜けた。

「秋、どうかしたのか？ 体調が悪いんなら保健室に」

「いや、大丈夫だよ。ありがと、千歳」

まだ緊張感は抜けないものの、笑い返す僕を見て安心した千歳は、いつの間にか環が買ってきてくれた日替わり定食を食べ始めた。

「環、ありがとう」

「どういたしまして。早く食べなよ？ 秋が待っていてくれたんだから」

「ああ」

環にお礼を言う千歳を見ながら、考えていた。この事、言った方がいいのかな……。

「秋ちゃん、本当に、大丈夫？」

壱の確認するような口調に、少し戸惑う。けど僕は、必死に平生へいせいを装って、

「あ、ああ、大丈夫だよ」

そう答えるのが精一杯だった。僕を見る壱の目は、怪しく光っている。まるで僕が隠していることを、見つけ出そうとしているかのよう。でも、まだ、何かが起こったワケじゃない。そう。まだ、何も起こっていないんだ。

この時、僕は自分が冷静な判断力を失っている事に、気付いていなかった。何かが起こってからでは、遅い。その誰もが思う事を、僕は、思わなかったんだ。

その判断に後悔するのを、この時、僕はまだ、知らない。

第十一話：「僕ちゃんと僕」(前書き)

第十一話：「僕ちゃんと僕」

あれから何事もなく、一週間が過ぎた。

時にはピンクの集団と戦ったり、不幸の手紙は封を開けずにゴミ箱に捨てたり、佑樹の襲撃を難なくかわし、返り討ちにしてやった。色んな事があった。

あれ？ 何でここ一週間の事が頭の中でグルグル回ってるんだ？
こう言うの、何て言うんだっけ？ えーと……走馬灯だ！ は
ー、すつきりー。ようやく思い出せたよー。……ん？ でも、何で
僕が走馬灯見てるんだ？ これって、人が危機に陥った時に見るも
のでしょ？

閉じていた目を、薄く開ける。目の前で笑う、数人の男達。その
先頭に立つ男は、一週間前、僕に強烈な敵意を抱いていた黒い瞳。

……ああ、そうか。僕、後ろから誰かに、殴られたんだっ……。
それを自覚した途端、僕の意識は飛んだ。

「ん……」

目を開けると、そこは見慣れぬ場所。よく見ると、長年使われてない工場って感じ。

うわー。きたー。お決まりのパターンきましたよー。きゃー。っ
て言うか僕、椅子に縛り付けられてるー。……無理にテンション上
げるの止めよ。何か虚しい。

その時、キキキツと言う音と共に、数十メートル先の、錆びた大
きなスライド式の扉が開いた。

薄暗い工場内に光が差す。

現れたのは、数人の男達。その中に、あの男も居て。僕をニヤニ
ヤと笑いながら見ていた。

「どう？ お目覚めの気分は？」

「最悪です」

その皮肉に笑顔で答える。頭痛いし、吐き気はするわで、本当に
最悪だ。

「ふうん。ま、いいや。君、何でここに居るのか分かってるよね？」

そう言うと、男は僕の顔を覗き込む。うわ。死んだ魚の目。気持
ち悪い。内心そう思いながらも、笑顔で答える。

「ああ。千歳の」

乾いた音と共に、熱い痛みが頬に走る。これは予想外。平手打ち
されちゃった。

「テメエ如きが僕ちゃんの女の名前を呼び捨てにするな!!」

あーあー。そうですか。すみませんねー。……ちょっと待て。コイツ、今、“僕ちゃん”って言わなかったか？

「ええと、聞き取りにくかったんで、もう一度言っして下さい」

「ふん。いいだろう。僕ちゃんの女を呼び捨てにするなど言ったんだ!!」

「ぶふっ!!」

「は？」

「今の時代に一人称が僕ちゃん!? マジで!? 超レアだ!」

台詞は悪人なのに、一人称は僕ちゃんって面白すぎる。そう言えば、こつ言う一人称をする奴にはアレが相場となっている筈だ。聞いてみる価値は、十分にある。

「お母様は好きですか？」

「うん! 僕ちゃん、ママ大好き!! ……って何を言わす貴様あ!!」

「……」

「何だその目はあ!!」

自分で聞いたというアレだけど、ちょっと気持ち悪かった。ごめん、マザコン僕ちゃん。

数分後。

「それで、僕は何でここに？」

怒り出した僕ちゃんを落ち着かせてから、聞いてみた。

「お前を人質にして千歳ちゃんと付き合ってもらおうと思って」

「……………」

ち、ちっせー……。なんかもう、男としても人間としても小さい。僕の無言をどう捉えたのか、僕ちゃんは話し出す。

「ちなみに、千歳ちゃんにこの事は手紙で伝えてある」

「それで？ 内容は？」

「『君の友人を預かってるよ。向坂秋くんを解放するには、条件がある。私と付き合ってほしい。結婚を前提に。この事は誰にも伝えちゃいけないよ。ただ、君にも都合ってモノがあるだろうから、時間は何時でも構わない』……と書いた」

イラッとした。お前、手紙でカツコつけんな。なんで僕ちゃんから私なんだよ。しかも結婚を前提にって重っ。内心そう思いながらも、表には出さずに答える。

「その条件は無理ですね」

「はあっ!?!? な、何故だっ!?!?」

うーん。何故だと言われてもなあ……。ここ一週間ぐらい一緒に居て、遠くから見ていたのでは気付かなかった事を、僕は知った。

何者にも屈しない、毅然とした態度。強い意志を秘める紅い瞳。
他の追隨を許さない圧倒的な強さ。絶対なる存在感。

「千歳は誰にも屈しません。従いません。欲しい物は何が何でも、どんな手を使つても手に入れる。それが彼女です。まあ、これは僕の推論でしかありませんけど」

僕ちゃんの目を見て言った。これは、確信。

一週間の付き合いで千歳を語るのはおかしいと僕でも思う。でも、つい最近分かったんだ。彼女は人に頼るのが嫌いだって事に。ある意味それは、負けず嫌いと言つのかもれない。それは悲しい事だ。誰にも頼らないから、周囲に壁を作る。その壁が障害となり、人を近寄りがたくする。

その壁を壊してあげたい。そう思ってしまうのは僕の傲慢でしかないのだろう。

グツと押し黙ってしまった僕ちゃん。

僕はそれを気にせず、もう次の事を考えていた。

……そう言えば、今、何時だろう? まだ学校に間に合う時間だよね? 空、明るいし。

「あの、今何時ですか?」

アルティメット・ウエポン
最終兵器 桐谷成子 を連れて来る事無いつて！

第十二話：「鬼と女王」

開け放たれた扉。桐谷さんと千歳。

その桐谷さんの右手は、恐らく見張りでもしていたのである。その首を掴んでいた。そのほぼ瀕死状態の男が桐谷さんの怖さに拍車をかける。震える僕と僕ちゃんと、驚く他の男達（震えない事を不思議に思い、よく見たら、他校の生徒だと言う事に気付いた。なので鬼の成子を知らないのも納得）と、瀕死状態の男を引き摺る少女と、それを見ても顔色一つ変えない少女。もうどっちが悪役なのか分からない。

「やー、久しぶりに暴れられると思うと、顔が締まらないなー」

言葉で表すなら、二へ二へ。そんな笑い方をした桐谷さん。大丈夫です。貴方はどんな笑い方をしても鬼に見えますから。暴れる事を喜んでいるところを見ると、桐谷さんは欲求不満らしい。委員長って何かとストレス溜まるのかな。

男の首　生首ではない　を持った美少女と不気味に笑う美少女の突然の来訪に、数人の男達は恐怖に顔を引き攣らせる。うん。分かるよ、その気持ち。だって、夢にでも出てきそうな光景だもんね。鬼の成子を知らない人でも震え上がるような殺気を満面の笑みで出してる人が居るんだし、空気が一気に五度ぐらい下がりそうな冷笑をしている人も居るんだから。でも逃げる前にこの縄外して！僕も逃げたいから！

「あ、向坂くん、朝の挨拶がまだだったね。おはよー」

「やあ、桐谷さん。爽やかに挨拶するのはいいんだけど、右手に持っているのは何かな？ ああ、いいんだ、説明しなくても。うん。そんなの見れば分かるよ。と言うか、早くその首から手を離してあげてよ！ え？ 理由？ 何故って口から泡吹いてるからだよ！」

あ、ホントだ、と桐谷さんはそう言っつて、僕ちゃんの仲間かと思われる男の首から手を離れた。重力によって崩れ落ちる男の体。頭とコンクリートの地面がこんにちわして、ゴツ、と鈍い音を立てる。い、痛そう。

「さあて、私の暇つぶしに付き合ってくれるのは誰かなー？」

残忍な笑みを見せる鬼。冷酷な笑みを浮かべる女王。震え上がる子羊、僕と僕ちゃん（ややこしい）。目に見えぬ気迫に圧される他校の男達。

誰も答えない問いに、桐谷さんは肉食獣のように舌なめずりし、

「まあ、いいけどね。どちらにしる全員　ぶっ潰すから」

ニヤリと笑った。

他校の生徒達は、不良の溜まり場と言われる西高の制服を着ていて、髪を金やら緑やらに染めている事から、絶対不良。それに加えて体格も中々なもので、喧嘩もそれなりに強そう。そんな訳で、『ブツ潰す発言』をした桐谷さんに力チンときたご様子の不良さん達は、

「テメエ……ナメんなよ」

相当お怒りのようだった。ちなみにこの言葉はリーダーっぽい金髪さんがドスの利いた声で発したものです。だけどそんな事、桐谷さんは気にしません。

「へえ？ 面白い。千歳、コイツら私がやるから、手出し無用よ？」

サラリと言う桐谷さんに、不良さんの血管はブチギレ寸前。

「お言葉に甘えておこう。まあ、こんな雑魚、成子にかかれば簡単だろ」

冷笑を浮かべながら千歳が言った言葉に、不良さんはいいにキレた。

「女だからって容赦しねえ！」

金髪の男が桐谷さんに向かって走り出す。不良の数は十五人。これからはアルファベットを付けて区別させて頂く。

不良Aが桐谷さんの顔目掛けて拳を振るう。彼女はそれを微動だにせず、あと顔まで数センチと言う所。

小さく、乾いた音が響いた。不良Aの拳は、桐谷さんの手の

平に。彼女の目は不良Aの顔と自分の手の平に収まっている拳を
き来し、うーん、と唸りながら口を開く。

「問題外」

そう言った時には、桐谷さんの拳は不良Aの顔に打ち込まれて
いた。骨が砕けるような生々しい音を立て、鼻から鮮血を噴き出す
不良A。

彼女は返り血を浴びないようにバックステップする。

「やつ、やつちまえ!!!」

不良Bがお決まりの文句を叫び、不良達が走り出す。

「つらあ!」

「あはっ!」

不良Bが放ったハイキックを、桐谷さんは顔の横に右手を掲げて
防ぐ。次の瞬間、右手で足を掴み、残った片足をローキックで払っ
た。不良Bは支えを失い、そのまま倒れる。

そして かかと落とし。それは見事に不良Bの腹に入る。苦し
そうに咳き込む不良B。

その時、桐谷さんは、既に次の戦闘体制に入っていた。

マジで容赦ねえよこの鬼。そう思った僕を、誰が責めれるだ
ろう。ただ僕としては、桐谷さんの後ろで笑う千歳の方が怖いけど。
そんな事を考えながら、乱闘にまた目を向ける。

不良Cを踏み台にし、跳躍した桐谷さんの膝が、不良Dの顔を襲
う。嫌な音を立てて、不良Dの鼻がめり込んだ気がした。

そのままクルリと綺麗に着地した桐谷さんは、素早く不良Eの懐

に潜り込み、頭を掴んで体重をかけ、鳩尾を膝蹴り。
突進してきた不良Fには回し蹴りで対応。横腹にクリティカルヒ
ット。

不良Gの首筋に手刀。そしてその場を普通に横断する千歳。って。
危ないでしょ！

「秋、大丈夫か？」

「や、大丈夫だよ。ちょっと頭が痛むくらい」

すると千歳は長い睫毛を伏せ、悲しそうな顔をした。

「すまない。秋を巻き込んでしまって」

「ぼ、僕の事は気にしないで。結構楽しいよ？ 刺激があって」

刺激があり過ぎる時もあるけどね。そう言おうとするけど、口が
動かない。千歳の後ろに忍び寄る不良Hに釘付けになったから。縄
に縛られている自分を、忌々しく思う。

「千歳、危」

全て言い終える前に繰り出される千歳の裏拳。不良Hの顔に触れ
たのは一瞬だった。端から見れば、大してダメージがないように見
える。 だけど、不良Hは崩れるように倒れた。

……え？ 今の、何？

千歳を見ると、何事もなかったかのような涼しい顔をしている。

「もー！ 手出し無用って言ったじゃない！」

そう言いながら、不良達をバツバツと倒していく桐谷さん。
余裕だね！。

「秋に危害が及ぶ危険性があつたからやったまでだ。そう言うくらいなら、こちらに危険が及ばないような闘い方をしてもらおうか」

千歳は僕に背中を向け、冷たく言い放つ。って言うか、一体どんな関係なんだこの二人。

「ははっ！ 上等！ 了解しましたお姫様 っと！」

桐谷さんは不良Iに肘鉄を入れた。

縄も外され自由の身。そして床には不良が倒れていた。扉の傍には桐谷さんと千歳が居る。
隅で震える僕ちゃんを見た。

「じゃあね、僕はもう行くよ」

僕ちゃんは答えない。同情するつもりは無い。慰めるつもりも無

い。

ただ、別れの言葉を告げるだけ。背を向けた時　ぼつりと聞こえた声に、少し笑った。

一度も振り返らずに、工場を出る。空を見上げれば、太陽が眩しかった。そして僕ちやんが発した言葉に、また笑う。

僕は、まだ、諦めてないからな。千歳ちゃんを、お前から奪ってみせる。

「諦めの悪い奴」

そう呟き、歩き出した。桐谷さんと千歳が、僕の横に並ぶ。

諦めの悪い奴。さっき言った筈だ。彼女は誰の物でも無い。そもそも、奪うって言われても彼女は僕の物でもないのだ。もう僕が言った事を忘れてるのかなあ。

もう一度、空を見上げると、やっぱり太陽が眩しかった。

第十三話：「姫と鬼と平民Aの午後」

今更学校に行くのも面倒臭い、と桐谷さんが言い出したので、カフェに行く事になった。それでいいのか委員長。

「向坂くんは何にする？」

「あ、キャラメルマキアートで」

「……へえ、甘党なんだ。……くすっ」

く、屈辱的な目線が！ まるで小動物を見るような目で見てくるよ！

「千歳は？」

「む？ ハーブティーでいい」

千歳は常に常備している黒のカラコンをしているが、それでも目立っていた。オーラっぽいのが出てるのかな。

「キャラメルマキアートとハーブティーとアイスコーヒーください。あ、向坂くん、トッピングにホイップクリームはどう？」

「いらないよっ」

そんなに甘いものばかりじゃ流石に飽きるって。しかし、確実にバカにされてるよな、僕。

「はい、代金は千百六十円になります」

「あ、僕が払うよ。先に座って待ってて。持って行くから」

「そう？　じゃ、お言葉に甘える。千歳、行く」

「ああ。悪いな、秋」

「うん」

今日は天気がいいからテラスにしよう、と遠くなる桐谷さんの声を聞きながら、僕はふと思った。……これって、両手に花じゃね？　ああ、そっか。だからさつきから、視線が痛いんだ。あは、あは、あはははは……はあ。

「お待たせしました。……あの、お客様は優柔不断なのですか？」

「いいえ。違います」

だからその好奇心溢れる目を僕に向けないでください。

「お待たせ」

「おっ、ありがとう」

「む。すまん」

丸いテーブルには、千歳と桐谷さんが向かい合うように座っていて、僕がどこに座っても、二人に挟まれる。それを考えなしに座ってから気付いた。後の祭りだ。そしてリアル両手に花。ほら見てよ、あのテーブルに居る男の二人組。僕の事凄く睨んでるから。アレ、絶対、千歳と桐谷さんをナンパしようとしてたんだよ。

苦笑いをしながらキャラメルマキアートを啜る。あー、糖分万歳。思わず笑顔になっちゃう美味しさだ。

「秋、キャラメルマキアート好きなのか？」

「うん。好きだよ」

意識したつもりはないけど、自然と笑顔になってしまっ。

「……」

「……」

「……？ 二人共、どうかした？ 顔が赤いよ？」

糖分を摂取して機嫌がいいので、普段は見せない満面の笑み。そして絶対にやらない『首を傾げる』と言うオプシオン付きだ。

「……私、初めて向坂くんの笑顔見たわ」

「え？ そつ？」

「ニクニク」。

「うっ。心が揺れるような揺れないような……」

「……成子、環に言いつけるぞ」

環、と言つ言葉に固まる桐谷さん。

「や、やあね。冗談よ」

そつは言つものの、顔が引きつっている。僕はニコニコを止め、千歳に聞いてみた。

「桐谷さんと環ってどんな関係？」

「さ、向坂くん？ それは聞かなくても……」

「恋人だ」

「ち、千歳え！」

顔を真っ赤にさせる桐谷さんは、新鮮だった。
赤鬼。そんな言葉が僕の頭を過ぎよった事は内緒だ。

桐谷さんは環の従姉妹。二人は高校一年生から付き合っているらしい。桐谷さんと千歳が知り合ったのも高校一年生。会ってすぐに意気投合し、仲良くなった。どうやら千歳の方が桐谷さんより強いようだ。まあ、信じれなれない。

「とまあ、こんなところだ」

「うつつ……千歳のバカ」

「む。失礼な」

「バカバカバカ、バカあ！ プライバシーの侵害だ！」

「あつそ」

「ぐぬぬ……」

真つ赤にしながら怒鳴る桐谷さん。サラリと無表情でかわす千歳。苦笑いな僕。これからは醜い争いが始まるので会話だけでお楽しみください。

「向坂くんも何とか言っつてよ!」

「ええっ? 僕っ?」

「そつよ! 千歳にぎゃふんと言わせなさい!」

「そ、そんな事言われても……」

「見苦しいぞ、成子」

「何で優雅にハーブティー飲んでんのよ!」

「全く、少しは落ち着け。きーきーきーきー煩い。山猿か、お前は」

「……ごぼっ! や、山猿! は、ははははは! つ、ツボに入っ
たあ! げぼっ!」

「何笑つてんのよお〜!」

「痛い痛い痛い! 腕を掴まないで! 潰れる! キャラメルマキ
アートが零れる!」

「ああもつ。成子、静かにしないと、アレ、言っぞ」

「……ゴメンナサイ」

「ふん。まあいいだろう。貸しが一つ増えたぞ成子。ああ、その貸
しと言っつのは、成子の浮気疑惑の事だ。まあ、わざわざ繰り返し返さな
くても分かるだろうがな」

「……はい」

……。

何か今までのやり取りで桐谷さんと千歳の関係が見えた気がした。

秋の脳内日記

今日はとても騒がしい日でした。あと一つ新発見。

千歳がSでした。

第十四話：「1111111、合コンっ！？」

翌日。何事もなく登校した僕を待っていたのは、窓際一番後ろと言っ好物件な僕の席の周りで立っている三騎士だった。

クラスメートは遠巻きに、女子は頬を染め、輝いた目で見詰め、男子は忌々しそうに見る。男子の忌々しそうな視線の理由は、千歳絡みである事は間違いないと思う。

「……で？ どうして君達がここにいるの？」

「いや、秋ちゃんに頼みたい事があってさ……」

吉は困ったように笑い、浮かない顔をした。うーむ。何時も陽気な吉が表情を曇らすとは……。明日は雪かな。

「何？ 吉にしては珍しく歯切れが悪いけど」

「うーん。余り気が進まないんだよね、秋ちゃんに頼むの」

ははは、と吉は乾いた笑いを零す。

「それって、ここじゃ言いにくい話？」

「多分。直ぐに済むけど、今から屋上行ける？」

行こう、ではなく、行ける、と聞いてくる事がきらいな、と思
い、少し笑った。

屋上。今日は風が強い。そして僕の叫びが木霊する。

「うん、合コンっ!？」

「うん。友達から頼まれちゃってさ。秋ちゃん、そう言っの苦手そうだったから誘わないでおこうと思ったんだけど、琉は面倒くさいって言うし、環は」

「桐谷さんでしょ？ 怒ると怖いもんね」

昨日の事を思い出して、環に同情したくなった。合コンなんて行った日には、環が天に召されてる。

「なっ、何で知ってんの!？」

環が顔を赤くしながら僕に詰め寄る。ちょ、近いよ顔。ああもう、相変わらず整ってるお顔立ちですこと。

「何でって……千歳と桐谷さんと一緒にカフェに行った時、言っただよ」

「へえ。サボってそんな事してたのか」

目を見開き、琉は言った。失礼な。僕だってサボる事はあるぞ。去年までは。ただ、今年はサボると後が怖いからしなだけだ。…僕ってとことんヘタレだな、と感じた瞬間。

「秋ちゃん、話が逸れてるよ……」

「あ、そうだった。琉と環が駄目だから、僕に言ったんでしょ？でもさ、僕、そう言うの一回も経験ないんだけど……」

「いや、未体験でもいいから、人数合わせで来てくれないかな？俺、こつ言うの、苦手なんだ。親しい友人とかが一緒に居れば平気なんだけど、今回は付き合いが浅い友達から誘われたからさ。で、琉と環は絶対来ないから、そこで秋ちゃんにつてワケなんだよね」

ほう。それは驚いた。昔はそう言うの好きだと思ってたからなあ。

「……駄目かな？」

「うーん。まあ、別にいいか」

「ほんとっ!？」

「いいけどさ、それ、いつ？」

「明日の土曜日午後6時から!」

あーはいはい。感謝してるのは分かったから、いい加減、手を離

して。

「でも僕、何を着ていけばいいのかわかんないんだけど」

「じゃ、明日の昼、一緒に俺の母親の店に行つて、良い服貰おう！
それじゃ秋ちゃん、また昼休みにね！ バイバイ！」

「おいっ！ 待てっ！ あ、じゃあな！ 秋！！」

「秋、あの事は他言無用だからな！ つて待て、琉、壱！ 俺は走るの遅いんだ！」

「……一体なんなんだ、あいつら」

ポツンと一人残された屋上で呟いた。

青い空を見上げて思う。明日、何事もなく、平穩に過ごせますように。

それは僕の切なる願いだった。

第十五話：「マジですか」

翌日の昼。吉との約束の時間。

街に出た僕と吉。隣の吉に視線が集まる。そして僕はその視線に心身共に憔悴せいすい。そしてやっと辿り着いたのが。

「……マジっ。」

「うん。俺の母さん、ここの専属デザイナー兼社長だよ」

最近テレビでよく見る年商億単位の有名ブランドショップだった。マジですか。

緊張しながら吉の後ろに隠れるように入店。汐姉たいせだったら、泰然たいぜん自若じじやくとして臆せず、逆に吉を後ろにやって堂々と入っていただろう。この時ばかりは、汐姉の図太さを見習いたくなった。

「あら？ 吉人？」

広い店の奥、扉に手を掛けていた女性が、僕の前に立つ美少年の名を呼んだ。

「あ、母さん」

「どうしたの、あんた。……あれ？ そちらは？」

あ、バレた。壱の後ろからそろそろと出る。

母と呼ぶには若いその容貌。僕の母と父も子持ちとは思えないほどに若々しい。何故か僕の周りには、外見と年齢が比例していない人が集まる。しかも全員が美形。一体なんの運命か、と、神に問いたくなる。僕は無宗教だから、神と言うものを信じていないが。

「初めまして、向坂秋です」

少し苦笑い気味に、微笑む。苦笑い気味なのは、壱のお母さんに食い入るように見詰められているからだ。もしかして、朝食に食べたチョコパンのチョコが付いているのだろうか。もし付いていたら、自分の甘党を呪う事になりそうだ。

「……あの」

「いい」

「は？」

「いいわっ！」

「はいっ!?!」

突如として、手を握られた。壱のお母さんの瞳は、新しい玩具を与えられた子供のように輝いている。突然の事に困惑する僕。壱は、悪い癖が出たな、と僕の隣で呟く。

「創作意欲が掻き立てられるって言うか、そそられるわっ」

「母さん、落ち着いてよ。それより秋ちゃんの服を見立てて欲しいんだって。昨日言ったでしょ？」

「えー。私それほど暇じゃないしー」

「昨日、メチャクチャ暇だって言ってたじゃん」

「うん。暇で暇でしょうがない。だけど今は、忙しいの。私の頭の中、忙しいのよ。まあ？何かしてくれるんだったら、考えてあげなくもないかなー」

ニヤリと意地悪な笑みを浮かべる壱のお母さん。壱は困ったように口を尖らせる。

「……条件は？」

「被写体。要するにモデル。あんたと秋くんのツーショット。琉くと環くんもいれば、見立てた服はただあげるわ。あ、勿論、モデルにならなかつた場合の支払いはあんたよ」

「息子から金を取る気なのっ？」

「当たり前じゃない。あ、あと、千歳ちゃんもいれば、アカネ朱音ちゃんには黙っておいてあげるわ」

「ちよっ、母さん！ それだけは止めてお願いだから。朱音さんには黙ってて！」

「ふふふ。精々、自分の浅はかさを恨む事ね」

「くっ！」

「あー、楽しい」

僕はこの約十分間にも及んで繰り広げられる親子の会話を、啞然としながら聞いていた。って言うか僕、置いてけぼりだ。寂しい。誰か構って。

話の決着は結局、壱がその条件を呑む事で終わった。

今は広い事務室に案内され、店員さんに貰ったお茶を啜っている。壱は隣でうなだれていた。哀れ、壱。ところで朱音さんって誰だ。

「ごめんね、秋ちゃん。モデルなんて、嫌でしょ？ 母さんに、せめて秋ちゃんだけでも止めさせてくれるように頼むよ」

ちよつと泣きそうな顔で言う壱が面白くて、僕は笑みを零した。

「別にいいよ。モデルやっても」

パツと顔を輝かせる壱に、でも、と付け加える。

「朱音さんて誰？」

壱が微かに頬を染めたのを見逃さなかった。これはやはり、恋、とか言うヤツなんだろうか。純粹な驚き。次第に、僕の顔がにやける。

「壱、その人の事、好きなんだ」

「……俺、まだ何も言ってないんだけど」

「顔見れば分かるって。ほら今、顔赤いよ」

パツと頬を押さえる壱。僕は堪えきれず、声を上げて笑い出した。

「随分楽しそうね」

声の方に顔を向けると、そこには手に沢山の服を抱えた壱のお母さんがいた。服で前が見えにくいらしく、その歩き方はたどたどしい。慌てて立ち上がり、手に持つ服を全て、奪い取るような形で受け取った。

「大丈夫ですか？」

「あら、ありがと。そのさり気ない気遣いが、またそそられるのよねえ。私があと何年か若かったら、確実に手出してたわ」

「あはは。お世辞でも嬉しいです。でも壱のお母さんは綺麗だから、僕なんて横に並んでも、釣り合いません。あ、でも、引き立て役に

はなれると思いますよ」

「まあ、自分を卑下するのは良くないわ。それと、私の事は玲奈レイナと呼んでちょうだい。きのお母さんって呼ばれると、自分が老けたように感じちゃうもの」

ふふ、と、玲奈さんは笑う。そして僕達の様子を横目で見ていた。きは、ぼそりと呟いた。

「……実際老けてる」

「……き人、何か言った？」

「……いや、何も言ってないよ」

その時の玲奈さんの顔は、今夜夢に出てきそうなほど怖かった。美人が怒ると怖いって言うのは、強あながち嘘では無い。身に沁みて分かった。

玲奈さんは、僕達を別室へと連れ出す。僕達は荷物を半分に分け、玲奈さんの後に続いた。

通されたのは、これまた広い部屋。大きな鏡。何台もの三面鏡。ずらりと並んだメイク道具。そしてその部屋の下真ん中に立つ長身

の人。その姿は異様をそのまま表したようなモノ。

シヨッキングピンクのフリルが施された目がチカチカするシャツ。そしてピチピチの青いズボン。赤い髪の毛が、不気味に靡^{なび}く。

「
真幸^{マサキ}」

玲奈さんの呼び掛けに振り向いたのは、中性的な魅力を持つ男だった。

第十六話：「体は男、心も男」

「真幸、あんた、そのファックションセンスなんかしなさいって何時も言ってるでしょ。あんた、そんなのでよくウチに入店出来たわね。真弓、怒ってたでしょうね」

「相変わらず手厳しいわね、社長ったら。確かに真弓、怒ってたわよ。全く、義理とは言え姉弟なんだから、もう少し優しくしてくれてもいいと思うの。これでもあたし、普段着は結構イケてんのよ？ だけど真弓ったら、『なんで普段着がアレで、仕事場にコレなの！』って言うの。あたしは仕事とプライベートは分けたいのよ。だから、普段着がイケてたら、仕事がこうなる訳。社長、分かった？」

「分かった、分かったから。長々としたマシンガントーク止めてよ。って言うかあんた、ダサいって自覚あったのね」

「当たり前じゃない。社長はあたしの事どう言つ目見てたのよ」

「ダサいカマ男」

「ひどいっ！ あたし、オカマじゃないのに！！ オネエ言葉なだけなのにっ！ あたし、女の子が好きなの！！ だけど寄ってくるのはあっち系の男ばっか！ もう最悪っ！！」

「勝手に感極まらなくてくれるかしら？ 大体あんた、本命いるでしょうが。妙な演出してんじゃないわよ。大体、そのオネエ言葉だつて、職場で女に言い寄られないようにしてる演出でしょ？ 普段はバリバリな男言葉なクセに」

「……えへ。俺って、演技派だから？」

「……死ねば」

硬直。オネエ言葉にも驚いたが、一番驚いたのが、玲奈さんの態度と口調。真幸さんとやらと話す玲奈さんの表情は冷たく、口調も鋭い。しかし、嫌っているわけでは無さそうだ。

啞然として固まる僕と、困ったように頭を掻く吉。

自称ノーマルの真幸さんは、僕達を見て目を見開いた。

「社長、今日の仕事ってこの子と吉くん？」

「そつよ。いいでしょ？ この子」

玲奈さんはそう言って、僕にさっと寄り、ぎゅっと僕を引き寄せた。僕、たじたじ。

正直、抱きつかれるのは汐姉とか善也兄とか菊花とか裕太とか母さんとか父さんとかで慣れている。しかし友達の母親に抱きつかれた事はないので、僕は対処に困った。

そして真幸さんが僕をジッと見てくるので、更に困った。

「真幸、手え出さないでね」

「社長……あたし、ノーマルだから。ってか、普段はちゃんと男だから」

そつじゃないと、見つめられてる僕が困ります。

「冗談よ。真幸、紹介するわ。向坂秋くん。この子、変身させちゃ

って。あ、あとついでに吉人もね」

「俺、ついでなんだ……」

頑張れ、吉。そしてそろそろ離してください玲奈さん。

「そう、秋くんね。よろしく、あたし、蜂屋真幸よ。ヘアメイクを担当してるの」

「はあ……よろしくお願いします」

「じゃ、早速、ここに座つてくれる？ それと社長、仕事があるでしょ？ さっさと戻りなさいな」

「……年下のクセに生意気。何か敬意が全然見られないんだけど」
「あら、ごめんなさいね。まだピチピチの二十三歳なのよ。あと、敬意なんてあたしに求めるもんじゃないわよ。さっ、実年齢を言われたくなかったら、直ぐに仕事に戻りなさい。真弓に告げ口するわよ」

「ああ、まだ大変な仕事があつたんだっただ」

いつそ清々しい程に棒読み。風のように去っていった玲奈さんを見送り、僕は真幸さんが指す椅子に座った。吉はその隣の椅子に腰掛ける。

「吉くん、秋くんはどんな感じが一番合ってると思っ？」

僕の髪をブローしながら、真幸さんが吉に向かって言った。鏡越

しに、きと目が合う。その顔は、いつものヘラヘラしたきの顔だった。

「うーん。爽やか、じゃないな。知的、は違うか。クール？ は、少し違う。……それじゃ、甘め？」

「正解。秋くんの無愛想をカバーするには、雰囲気を柔らかくしなきゃいけないの。だから甘め。……あ、不快な気分になんかせてしまったかしら？」

「いえ。無愛想は自覚してますから、気にしてないです」

「そう。ならいいわ。あ、き人くん、真弓と社長と一緒に、秋くんに合いそうな服選んできて。き人くんのもよ。秋くんのは甘めなモノトーンルック。き人くんのは、爽やかな春風っぽいのを」

「わ。難題だね」

「真弓と社長に聞けば、分かるわよ」

「はい。じゃね、秋ちゃん」

正直、オカマかノーマルか分からない人と二人つきりになるのはちょっと抵抗があったが、まあいいや、と、僕は投げやり百パーセントで手を振った。

「……秋くん、あたしの好きな人、女の人よ」

苦笑しながら言う真幸さん。僕が警戒しているのが分かったらしい。なんだか僕は、急に恥ずかしくなって、頬を掻いた。どうやら、

僕の考えは杞憂^{きゆう}だったようだ。

「近くて遠い存在　それがあたしの好きな人」

ヘアワックスの甘い香りが漂う。僕はなんだか、真幸さんの顔を見てはいけない気がして、視線を逸らした。

「はい、ヘアはこんなもんよ。どう？　秋くん、髪の毛の色素が薄いわね。綺麗な茶色だわ」

真幸さんの言葉を聞いて、鏡に目を移す。

「うわ！　誰だ、って僕でした」

一人コントに恥ずかしくなったが、驚きの方が大きかった。鏡に映っていたのは、全くの別人。ふんわりと整えられた髪は、確かに僕の無愛想をカバーしていて、普段の僕なら出せない、優しく、甘い雰囲気を出している。

「髪型だけで、人って結構変わるものよ？」

そう言った時の真幸さんの顔は、楽しげだった。

第十七話：「消えてしまいたい」

数分後。吉が戻ってきた。そして続いて入ってくる玲奈さんと、美女。

女性にしては長身な体躯たいく、スラリとしたスタイル、ピンとした背筋、凜とした表情。キツイ雰囲気を出している鋭い目。モデル顔負けの美貌。

……なんだか最近、美形しか見てない気がするなあ。

「あら、真弓、眉間に皺が寄ってるわよ」

え？ この人が真弓さん？ うわ。全然似てない。って当たり前か。義姉弟だっけ。

「うるさい」

真弓さんの眉間の皺が深くなる。整った顔立ちに迫力が増した。やっぱり、美人は怒ると怖い。

「怒るとお肌に悪いわよ。二十六歳で、お肌の管理怠っちゃダメ」

ニコリと笑ってサラリ言ったのは義弟真幸さん。嫌味の無い、純粹な笑顔。悪気が無いのは一目瞭然。しかし年齢を言ったのは失敗だった。僕でもそれは分かる。

真弓さんの眉が急角度に吊り上がる。眉間の皺が更に深くなった。言葉に表すなら、それは憤怒の形相。

そして、

「黙れ！」

「ええっ!?!」

キレた。真幸さんに向かって走り出す。向かってくる真弓さんに驚きながらも、本能からの行動か、真幸さんは逃げる。大の大人が追いかけてこ。テーブルを挟み、グルグル回る二人。

「ちょ、一体何なのよ!?!」

「自分の胸に手を当てて考える！」

真弓さんにそう言われ、胸に手を当てる真幸さん。この人、バカ正直か。

「ダメだ! 分かんねえ！」

素だ! 素が出てるよ真幸さん!

「じゃあ大人しく捕まれ！」

「イヤよ! 何されるか分かったもんじゃないわ!」

「なにい!?!」

真弓さんは阿修羅の形相。その迫力は、鬼の成子にも劣らない。真幸さんは必死の形相。その表情は、肉食動物に追われる草食動物のよう。二人共、尋常じゃないほど速い。だけど二人共、どこか楽しそう。

まあその様子をぶち壊す、

「あんたら……いい加減にしないで！」

玲奈さんの雷が落ちただけだ。

玲奈さんのお説教もどこ吹く風な真弓さんは、玲奈さんから逃げるように、僕の前へと。

「はじめまして、蜂屋真弓です」

真弓さんはそう言うと、ニコリと笑う。冷たい印象を持たせる鋭い目が、ゆるくカーブを描いた。

「カメラマン兼スタイリストです。よろしくね、秋くん」

「はあ……真弓さん、ですか。よろしくお願いします」

真弓さんの笑顔に応えるように自然と笑顔になる。真弓さんは一瞬、きよとんとして、それからまた、さっきよりも数倍は輝いてい

るような笑顔を見せた。

「うん。秋くん、いい笑顔」

「いい笑顔……ですか？」

意味が分からず、首を傾げる。いい笑顔って何だろう。

「そう。いい笑顔。ついカメラで撮りたくなっちゃうような笑顔なんだよ、秋くんは。私と社長が選んだ服、絶対似合うと思うんだ。ちよつと着てみてくれない？」

「あ、はあ……わかりました」

そうして僕は今、試着室にいる。

黒のスラックス。白のシャツ。銀灰色のナロータイ。黒のベスト。黒のブーツ。それが手渡された物だった。

そしてソレを着た僕。

「えっと……どうでしょう？」

出来ればそんなに見つめないで頂きたいのですが。

「私の目に狂いは無かったわ……！」

「さ、秋ちゃん、早く行こうか。母さんが暴走する前に出よう」

いつの間にか着替えていたき。顔が強張っている。

「あたしも、壱人くんの意見に賛成。暴走しだしたら止まらないわ

「よ」

「私が社長を止めておくわ。貴方達は逃げなさい」

なんか、皆、玲奈さんの扱いが酷いなあ。僕は舌に引つ張られながら、そう思った。って言うか、引つ張られてる腕が痛い。どんだけ必死なんだよ。

店を出て携帯を見ると午後5時30分。そんなにいたのか。時の流れは早いなあ。うん。早い早い。……無理矢理言い聞かせてる感が否めないのは何故だろう。

「もうそろそろ、行った方がいいね」

「あ、うん」

そんなやり取りを終えて、現在、某名犬前。そこには二人の男がいた。

「初めまして、向坂秋です」

少し微笑む。すると何かおかしかったのか、二人が顔を見合わせ

た。

「向坂秋ってあの？」

何が、あの、なんだろう。まあ、千歳絡みであるのは間違いないだろうけど。

「秋、よろしくっ！俺、柴田^{シバタウタル}亘！亘って呼んでくれ！」

どうやらもう一人は空気が読めないようだ。隣で落胆してるよ、君の友達。

「もういい……。俺、曾根^{ソネキヨウヘイ}恭平。よろしく、秋」

苦笑いを浮かべている恭平。僕も苦笑いをするしかなく、よろしく、と言った。

「つつーか、秋は知ってるの！？今日の相手、レベル高えんだよ！^{ひがし}東高校の女の子！」

テンション高っ。鼻息荒っ。興奮しすぎだろ。どんだけガツガツしてんだよ。タケちゃんを思い出すわ！

そんな事を考えてるのを、僕は持ち前の営業スマイルでカバー。学校では絶対やんないけど、今は出血大サービスだ。じゃないと、今考えてた事が顔に出る。

「あつ、来た！」

少し紅潮させた頬で僕の後ろを指さすのは恭平。

「うわ！ 全員すげえ美人！ つか、あの子が一番綺麗じゃね！？」
鼻息を荒くさせ、そう言うのは旦那。

「千歳以上に綺麗な子、いるかな」

その昔の言葉に、僕は軽く笑って、答えた。

「わかんないけど、多分、いないでしょ」

そうして、僕と昔は振り向き 硬直した。

向こうから歩いてくる四人組。遠目でも分かるほどの美貌を持つ四人。千歳以上に綺麗な人はいない。だけど、その四人の中に。

千歳が、いた。

彼女は隣にいる女の子と話していて、僕と昔に気付いていない。僕は一体、どうすればいいんだろう。

引き攣った頬は、僕の心情を表していた。

出来るなら、消えたい。今すぐに。

カラコンを付けた千歳が僕に気付くのは、あと十秒。

第十八話：「模索中」

「初めまして！ 俺、柴田亘って言うんだ！」

亘の視線の先には、美少女四人組。特に熱っぽい目で見詰めているのは千歳。

「あ、あの、俺、曾根恭平って言います！ よろしく！」

恭平の視線の先には、やっぱり千歳。そしてその千歳は僕を無感情の目で見ている。

僕は引き攣った笑顔で、きき視線を向けた。アイコンタクト。

(助けて)

(無理)

即答。もう少し考えてくれてもよくない？

「俺、齋木壱人。よ、よろしく」

壱の声が震えて、みっともない自己紹介。分かる。分かるよ、その気持ち。千歳のあの無感情の視線を向けられたら、タケちゃんも凍てつくだろうから。って言うか現時点で僕がそうなるから。

「ほらっ！ 秋っ！ お前だよっ！」

亘が僕の耳元に口を近付け、小声で叫んだ。小声で叫ぶって凄
特技を持つてるものだ。と言うかそれより耳に息がかかって気持ち
悪い！

「……向坂秋です。よろしく」

片耳を押さえて笑顔で自己紹介。……千歳の視線が痛い。

「スキハラ ミナミ杉原美波です。よろしくう！」

千歳と仲良く話していた美少女。千歳が綺麗なら、彼女は可愛い、
と言ったところか。彼女の『よろしくう！』の発音はギヤルのよう
な語尾下げではなく、あえて言うならば、『夜露死苦う！』。何故
に一昔前の不良イントネーション。

「スミタニマドカあたし炭谷円。よろしく」

日に焼けた健康的な肌の美少女。ショートカットがふわりと摩なび
いた。むむ。僕の周りにはいないタイプだ。だって皆、肌が白い。そ
う言う僕も白いけど。いや、僕だって日焼けしたいよ？ だけど真
っ赤になるだけで3日ぐらいしたら白くなってるからなあ。

「キンマエヒ木島恵美だよ。よろしくね」

どこか小動物を髻ほっか髻させる美少女。少し菊花に似ている。あ、そ
う言えば、もう直ぐ菊花と裕太の誕生日だ。今年はどうしよう。帰
ったら汐姉と善也に相談するか。

そして、次は千歳。

ジーンズに黒のシャツと言う出で立ち。その質素な格好は、千歳に合っていて。逆に千歳の美しさを際立たせているような気がする。

「……」

千歳は無言で眉をしかめ、空を見上げた。様子がおかしい。数秒の沈黙が続く。一体どうしたんだろう、本当に。

亘と恭平の急かすような目が、一心に千歳を見ている。

僕ときは顔を近付けて囁き合う。

（千歳、どうかしたの？）

（……多分、偽名を考えてなかったんだと思う。美波ちゃんがフオローしてくれるとは思っただけど……）

（ええっ？）

慌てる僕に、苦笑いを零す。千歳の方に意識を向けると、千歳はまだ視線をあちらこちらに彷徨わせていた。その様子に美波さんも気付いたのか、千歳の袖をくいと引っ張る。

「ちと　ちい、もしかして？」

ちい、とは千歳の事だろうか。

「……模索中だ」

そう言い、困ったように顔をしかめる千歳は、僕の顔を見、何か

思いついたように目を見開いた。

「千秋^{チアキ}。うん。そうだ。私の名前は千秋だ」

いや、うん、そうだ、とか言ってる時点で今思いついたみたいになってるから！ って言うか、僕の顔見てから言うのは明らかに不自然。しかもその名前が“秋”と“千秋”なんて、絶対誰かツッコむって。

「へえ！ 千秋ちゃんかあ！ よろしく！ 俺の事は亘でいいよ！」

「亘、抜け駆けすんな！ 俺の事は恭平で！」

「千秋かあ。そう言えば、あたし達、初対面なのに自己紹介してなかったわね。円よ、よろしく」

「千秋ちゃん、よろしくね。あたしの事は恵美でいいよ」

あれ。誰もツッコまない。まあ僕からしてはバレない方が有難いんだけどさ。疑問を感じるよ、この展開。って言うか、初対面なのに自己紹介してなかったってどういうこと？

僕のそんな困惑など露知らず、千歳は何事もなかったかのように、ああ、よろしく、と言った。

全く、前途多難な始まり方だ。視線をきに向けると、きは困ったように笑っただけだった。

「では、俺から歌います！ 聞いてください！ 柴田亘の美声を！
」！

言うまでもなく現在地カラオケ。どうやら美声を持っているらしい亘の選曲は、アニソン。どう反応したらいいのやら。ただ女性陣のウケは上々（千歳以外）。

千歳は現在僕の隣でひたすらに沈黙しています。怖い。沈黙が怖いです。

「千歳、何か飲む？」

勇気を出して果敢にアタック。

「……千歳だ」

あ、その設定、僕の前でも続いているんだ。

「千秋、何か飲む？」

「呼び捨てとは馴れ馴れしい」

あ、そっか。他人の設定ってヤツですね。

「千秋さん、何か飲む？」

「いらん」

もうやだ……。お母さん、お父さん、僕、逃げてもいいですか？

第十九話：「白い鳥」

秋と言う少年は、人を魅了する才能を持っていると私は思う。無愛想で、女顔で、憎らしいほど綺麗な笑顔をする少年。無自覚で鈍感で、自分が美形って事を理解してないバカ。

そして私は、そんなバカを嫌いになれないバカ。秋はどこか危なっかしくて、ついつい世話を焼きたくなくなってしまふのだ。

吉も琉も環も、秋を気にかけている。しかしそれすら理解していない秋は、天然と言うか無自覚と言うか。本当に、分かっていないから、心配なのだ。

机に入っていた手紙で、私目当ての変態が秋を攫ったと知って正直焦った。秋が襲われていないか心配で心配で、授業内容など耳に入るはずも無く、昼休みの鐘と共に教室を飛び出して成子を有無を言わず連れ出したのだ。

自嘲。らしくない。私らしくない、行動。他人の事など、どうでもよかった。どうでもよかった筈なのに。

秋が気になる。感情など、無用だと思っていたのに。表情など、必要ないと思っていたのに。

「はあ……」

溜め息が、質素な部屋に響く。ベッドとクローゼットと本棚しか無い広い部屋。黒のシーツに包まれて、私はベッドに横たわる。

考えても仕方ない。もう一度、寝るか。再び眠りに堕ちようと、目を閉じ

ドンドンドン！

眠れなかった。誰だ。安眠妨害だぞ。

「千歳え！ パパが帰って来たよお！！」

ドンドンドン！

「パパ、今日は千歳と一緒に千歳の美味しいお昼ご飯が食べたくて早く帰ってきたんだから！」

そんな気遣いは無用だ、と、小声で毒づく。

ドンドンドン！

部屋から出たくない。しかし父親は私が顔を見せるまで、騒音を続けるだろう。

「……はあ」

体を起こし、扉に向かう。開けた瞬間、抱きついてくる可能性がある。あるから、とりあえず八極拳の構えをとる。

「どんぞん」

「千歳え！ パパがハグしてあげ」

「ふっ！」

肘を曲げ、掌を胸板に押し付け、力を指先に集中させ　肘を伸ばし、腕を突き出す。

「ぐげえ！」

轆ひかれたカエルのように鳴きながら、廊下を転がっていく。そしてその勢いのまま階段から落ちた。ズドドド、と、落下音を立てながら父は落ちていく。階段に歩み寄り、上から階下で倒れている父を見る。出血、なし。目立った外傷、なし。失神しているようだ。出来ればそのまま死んで欲しい、と言うのは強あながち冗談でもない。

ふむ。二階があるマンションの難点は、足を滑らせて落ちると言う事だな。うん。全く、父親バカはおっちょこちよいなだから。はっはっはっ。……アホらしい。何をしているんだ私は。

ふわぁ、と欠伸をして、ピクピク痙攣している父を素通り。キツチンに立つ人影に声を掛ける。

「おはよう、由衣ユイさん」

「あ、千歳、おはっ」

キツめの美女がこちらを向いて、満面の笑みで挨拶を返した。それは他ならぬ私の実の母親。彼女は母さんと呼ばれる事を嫌う為、私には名前で呼ばせているのだ。

ところで、何でキツチンにいるんだ。……何かコゲくさいけどまさか。

「由衣さん料理してるのか？ キッチンから両手を上げて今すぐ立ち去ってくれ。さもないと家が火事になる……って、電子レンジが爆発したっ？」

電子レンジを開けたら、中には破裂して見るも無残な卵の残骸が。由衣さん……卵を割らずにそのまま加熱したら破裂するんだ。それぐらい知っていてくれってもういない。

「……はあ」

自分の家族ながら、その自由奔放さには脱帽するばかりである。

「やっぱり千歳のご飯は美味しいわね……」

何せ、五歳から料理を作る事を強いられたからな。味と見栄えには自信があるんだ。それと由衣さん。口いっぱいに頬張るのを止めてくれないか？ どうもハムスターに見えてしまう。

「パパも美味しいと思うよ！」

いつの間に復活したんだ貴様。

「由衣さん、キッチン出入り禁止。お父さんは私の部屋に近付くな」

「ええっ、ひどー!」

「由衣さんの料理下手の方が酷い」

「千歳っ! パパが嫌いなのか!？」

「嫌いじゃない」

「えっ!？ じゃあ……」

「好きじゃないだけだ」

「……何故だ。嫌いと言われるよりダメージが大きい。あれ？ 視界がぼやけて……」

父が涙を流したその時、私の携帯が鳴った。ディスプレイを見ると、『杉原美波』との表示。

美波は私の幼馴染みで、私が引越した今もよく連絡をとっている。そんな訳で、何の疑いもなく電話に出ってしまった私を誰が責められよう。

「美波、何だ」

『千歳え、助けて』

「むっ。どうした。何かあったのか」

『……絶対に助けてくれる?』

「ああ」

『約束だよ？』

「ああ」

『約束だからね。破ったら千歳のお父さんに千歳のスリーサイズ教えてっちゃうからね？』

「いい加減しつこい。それに、私のスリーサイズをお前が知ってる訳ないだろ」

『知ってるもん。上からDの8』

ばきつ。

「きゃあつ。千歳、お箸お箸！ お箸が真つ二つ！」

折った箸を机に叩き付ける。叩き付けた箸は跳ね、その箸の先が、涙を流し続ける父の手に 刺さった。

「痛っ！？ 何かチクツときた……ってな、何じゃこりゃあああああ！」

「分かった。分かったから今すぐそのお喋りな口を閉める。黙れ。沈黙しろ。何で知ってるんだ貴様」

『ふふん。私にかかれれば千歳のスリーサイズなんてちょちょいのちよ』

「意味がわからん」

『まあまあ。それより、約束してくれるよね?』

「分かったからさっさと見え」

『合コン行かない?』

「……は?」

『じゃ、5時に迎えに行くから用意しててね!。バイバーイ』

「は? ちょっと待てオイ切るな切るな」

……切られた。はあ、と本日何回目か分からない溜め息をつき、席を立つ。スリーサイズを父親に知られる程恥ずかしい事は無いからな。覚悟を決めねばならん。

「美波と遊びに行ってくる」

「なっ、何じゃこりゃああああ!」

「ジーンパン!」

一生やってる馬鹿夫婦。

「美波、きがいるとは聞いてないぞ」

「わ、私だつて知らなかったよ」

「しかも秋までいるじゃないかつ」

「わわっ。千歳が取り乱すなんて珍しい」

「どうやって二人に接したらいい」

「こつ言つ時は他人の振り！」

秋ときにまであと数メートルの所。私と美波は、小声で言い争っていた。

その所為で、偽名を考え忘れると言つ私らしくない失態を犯してしまい、つい秋の名前を借りてしまった。それに私は他人の振りの仕方を知らない。

故に何かもうめんどくさくなつて無感情無表情で秋を見、カラオケでも必死に他人の振りを徹していた。しかし他人の振りは、心身共に非常に疲れる。

「はあ……」

「ちと、千秋さん、大丈夫？」

溜め息を秋に聞かれてしまったようだ。少し戸惑い気味に聞いてくる事から、どうやら私はやり過ぎてしまったらしい。

罪悪感と、少しの安堵感。秋は他人の振りをしてる私にも、優しい。

秋は、本当の私を見てくれている。

私は、狡い。

皮肉げに、唇の端を上げる。そんな顔を秋に見られたくなくて、俯かせた。

「千歳でいい」

「え……？」

「千歳でいいと言ったんだ。秋、悪かったな。他人の振りをして」

「ちと、せ？」

眉尻を下げながら、困ったように私の顔を覗き込む。

「千歳………どうしたの？ 泣きそうな顔、してるよ？」

一瞬目を見開いて、瞬きを繰り返す。コイツは一体、何を言っているんだ。

「泣きそう？ 私が？」

「うん。何か、傷付く事でもあった？」

その瞬間、直感した。私は、こいつを嫌いになれない。だから、こいつが私を、嫌えばいい。

そうすれば、誰も傷付かずに済む。どうせ嫌いになるなら、離れがたくなる前に嫌ってほしい。今ならまだ、引き返せる。引き返せるから。

「どうして、私が傷付いたと思うんだ？ 私が傷付けたのかも」

冷笑を浮かべる。嫌いになれ、私を。私は、お前の事を、嫌いになれないから。

「無いよ」

何故、言い切れる。

「無い？」

何故、嫌いにならない。何故、嫌いになれない。

「うん。千歳は、優しいから」

綺麗で、純真で、真っ白な彼の笑顔に、泣きたくなった。違う。違う。私は、優しくない。優しくなんか無いんだ。

「私は、優しくなんか」

「優しいよ。だから、一人で泣こうとしないで」

何でお前は、そも私を戸惑わせる。

「千歳は優しいから、自分が傷付いてもいいって思ってる。だけど僕は傷付く千歳を見たくない。だから、何か辛い事があったら、僕に何か話してよ。口の堅さは保障するよ？ 約束してもいい」

秋は小指を差し出した。

この手を取れば、もう、引き返せない。

だけど、私はおずおずと、その小指に自分の小指を絡ませる。

もう、引き返せないと分かってても。

「分かった？」

「……ああ」

「じゃあ、二人だけの約束だね」

へへ、と照れくさそうに笑う秋を見て、私は思う。秋を嫌いにならない自分は狡いと。

「あああつ！ 何イチャついちゃってんの君達い！！」

「い、イチャ！？ 言ってるの巨！ て言うかマイク持ってんなら叫ばないでよ！ 耳にキーンときたわ！」

パツと離された小指。自分のソレを見て、唇の端を上げる。

「約束……か」

言葉だけの約束は儂い。裏切りなど生きてく上では絶対にあるもの。だけど

「指切りは、した事なかったな……」

秋には、裏切られたくないと思った。

小指をそつと折り曲げ、片方の手を重ね、隣に座る、秋を見た。

信じてみるのも、いいかもしれない。

出会った切っ掛けは、私の前方不注意。私の手を取り走り出した秋の背中に、白い翼が見えた。一見天使のように見えたけど、私が抱いたイメージは

「約束。中々いい響きじゃないか」

大空を翔る、白い鳥。

第二十話：「笑う千歳」

「千歳でいい。秋、悪かったな。他人の振りをして」

その時、僕には、千歳の声が震えていたように聞こえたんだ

千歳も僕も、歌うのは余り好きではない　　と言つても、皆に強要されて僕も千歳も1、2曲歌わされたが、彼女の歌唱力はやはりと言つべきか『天使の歌声』『女神の美声』とも言い表せる程のものだった。選曲も洋楽ばかりで、それが更に歌声の美しさを際立たせていたのである　　と言つ事で、隅っこで二人、話していた。

「へえ。じゃあ今度、フィギュアの大会があるんだ」

「ああ。今はフィギュアに専念していてな。弓道やテニスはたまにやるが、それ以外は控えている」

「そうなんだ。テレビ、絶対見るよ」

「ありがとう。本当は会場に呼ぶべきなんだが、生憎、満席でな」

まあ、千歳が出る大会は大概満席だと言う事は知っている。視聴率だって20パーセントや30パーセントは堅い。それほどまでに彼女の人気は凄まじい。

しかし、気にしないで、とは言ってみたものの、やはり生で見たいと言うのが本心。

まあ、仕方がないと心中で諦めたその時。

「何なら今から行くか？ スケートリンク」

唐突なその言葉にフリーズ。

「えっ？ でも、もう開いてないでしょ」

「いや、最近、二十四時間営業のスケートリンクが出来たらしいんだ。それにここから近い」

そう言えば、テレビで見たような気がする。今が旬のデートスポットとか……デート？

「~~~~」

ヤバい。意識してしまった……。顔が熱くなるのを感じる。暗いオレンジ色の照明が誤魔化してくれるが、つい頬を手で隠してしまう。どうかバレませんように……！

「……秋？ お前、何か様子が変わだぞ？」

「へっ？ いや、いや、な、何が？」

早速バレたよ。ダメだなあ、僕。昔から嘘はつけない。

「拳動不審って言うか、何故そんなに狼狽うろたえてるんだ」

「な、何でもない！ 何でもないから！ うん！ 行こうか、スケートリンク！」

あれ。今、勢いに任せて（と言うか誤魔化す為に）何かとんでもない事言ったような……。……いや、確実に言ったな。頬が引き攣り、苦笑いが崩れ気味になるのを感じる。

「分かった」

千歳はそう言うと、携帯を取り出し、メールを打ち始めた。

数秒後に聞こえた、某有名アーティストの歌声。それは勿論、今歌っている恭平ではなく、発信源は美波さんの携帯。

美波さんはディスプレイを見た後、訝しげにこつちを見てくる。

だがそれは数秒の事で、直ぐに高速で指を動かし始めた。

そしてそれから1、2秒で千歳の携帯がなった。

は、早……。女子高生って皆こんなもんなの？ って言うかやっぱり千歳も今時の女の子なんだね（失礼）。

「それじゃ、行くか」

必要最低限のモノしか入らないようなバックに携帯を仕舞い、彼

女は席を立つ。

「あれ？ 千秋ちゃん、どこ行くの？」

すかさず声を掛ける亘。結構目聡い。

「…………チツ」

彼女は、皆には聞こえないように（僕には聞こえたけど）、舌打ちをして、亘の方に振り向いた。 微笑みを浮かべて。

「ごめんなさい。門限なので帰りますね」

作り笑いと感じさせない微笑み。完璧な演技。凄まじい演技力。余りにも、今の彼女とテレビに映る日宮千歳は、かけ離れている。“千秋”と“千歳”は、別人物だと思わせるようにする為の演技。その演技に違和感はない。千歳、十分女優でもやっていけるよ……。

「あ！ じゃあ俺、家まで送るよ！」

と亘が自分の顔を指差す。

チラツと彼女を上目遣いで見ると、少しばかり眉間に皺が寄っていた。普段が無表情だから、非常に分かりやすい。『余計なお世話だ』みたいな顔ですね、千歳さん。しかしそこは天才。一秒も経たない内に、笑顔になる。

「いえ。悪いので、いいですよ」

「いや、夜道は危ないよ！ 女の子一人で歩かせられないって！」

巨くん。心の中で言っておくけど、彼女はめちゃくちゃ強いです。鬼の成子が、同等、もしくは上として見ている程の強さです。君の目の前に居るのは千秋じゃなくて、千歳なんです。

彼女も彼女で、『これ以上近付いたらクロス。しつこいウザい消えろ』みたいなオーラ出さないでください。カタカナで殺すつての、とっても怖いです。つて言うかそんなキャラだった？

多分このオーラを読み取っているのは、顔を引き攣らせている僕と吉と美波さんだけだろうな！。

「ね！？ 送ってくよー！」

中々食い下がると言うか、空気が読めないと言うか。巨の諦めの悪さに苦笑いを零したその時
がしつ。

「……ん？」

あれ、千歳？ 何で僕の腕掴んでるの？

戸惑い気味に見上げると、視界にはニコニコ笑っている千歳が。な、何かその笑顔怖い！

「いえ、結構ですよ。向坂くんが送ってくれるそうなので」

「え、な、いつ！？」

ギョツと抓られた腕。何かデジャヴだよ。まるで千歳と自己紹介した時のよう。

「あ、そう……。秋、送り狼になるなよ」

いや、なるうにもなれませんって。返り討ちに遭っただけだよ。

「それじゃあ、さようなら。またの機会に」

「ええと、皆、バイバイ」

そんな感じで抜け出しましたとき。

ああ、街を歩くと視線が痛い……。ま、カラコンしてても千歳が美人なのには変わりないし。それに、ニコニコ笑っている事によって、日宮千歳とは全くの別人だと思ってしまっただろう。なので道行く人々の視線が超不躰。そんなにジロジロ見ないで頂きたい。

ホント、胃に悪いよ……。

第二十一話：「ラブコメ的な、現実では有り得ない話」

広い浴室。広い浴槽。

「秋、着替え、ここに置いておくからな」

磨^すり硝子の向こうから、千歳の声がした。

「あ、うん。ありがとう」

現在地、千歳の家。何故、彼女の家にいるのかと言うと、これがまた長い話なので省略させてもらおう。

スケートリンクである程度遊んだ後、空腹になった僕達は、何を食べるか相談し、そこで千歳が、『私が作るうか?』とかなんとか言っ^て、こうなったのだ。

わあ。凄え簡単だ。などと言わないように。僕だって、混乱してるんだ。説明ぐらい省略させてくれ。ああ、そうそう、今日、千歳のご両親はいらっしゃらないらしい。

平然と言ってくれたよ、あのお姫様は。何だか僕が狼狽えるのも馬鹿らしくなって、ふうん、そう、と平静を装ってここまで来たのはいいものの。

これって、道徳に反しているんじゃないのか……!? つか、そもそも付き合ってもいない男女が一つ屋根の下(マンションだけで)に2人つきりなんて言うのはラブコメ的な現実では有り得ないであろうシチュエーションだろうが僕のバカ!

ああ、何かもう、自分で何言ってるか分かんなくなってきたぞ。落ち着け、僕。冷静になれ、僕。ピークール。

友達だ。千歳は、僕を友達として家に招待したんだ。よし。これだ。この設定で行こう。おお。何だか心に余裕が出来たぞ。

すーはーすーはー、と、深呼吸を繰り返す。

あれ？ 何か目が回る。まさか……のぼせた？

「あう……。やば、早く出なきゃ」

うう。気持ち悪。そして、僕に悲劇が降りかかる。浴槽を出ようとすると

【ここからは、音声と説明文と会話だけでお楽しみください】

つるつ。滑った。

はうっ。僕の心の叫び。

ばたーん。倒れた。

えう。僕の心叫び。

ドタドタ。足音。

ガラッ。扉が開いた。

「秋！ 何だ今の、は……」

かあー。 千歳が赤面。

「……ッ!？」

ずずずずずず。 千歳が後ずさる。

ゆらり。 僕が立ち上がる。

「あの……お水もらえる？」

「は……?？」

「いや、のぼせちゃって……」

……。 沈黙。

ゴロゴロ。 千歳の怒り?

たらー。 僕の冷や汗。

「この……」

「え?」

「愚か者ーっ!！」

だだだだだ。 千歳が走り去る。

「……ええ?」

下を見る。うん。腰にタオル巻いてる。問題はない。

「……何故？」

後にその疑問を聞いた瞬間、叩かれるのだけど。

パーで叩かれた頭が痛い。あと、フローリングで正座はキツイよ。

「全く！ 心配して向かったと言うのに、その、あれだ、上半身を見せつけられた私の身にもなってみろ！ 上半身でも恥ずかしいものは恥ずかしいんだ！！」

「ごめんなさい……」

うちわ片手に怒鳴られても、迫力がない……あー涼しー。怒りながらも心配してくれる彼女に感謝だ。

「しかも第一声が水をよこせだと!？」

……お腹すいた。

「む。騒々しい腹の虫だな」

「……だね」

赤面しながら答える僕を見て、彼女はほんの少し笑う。

「仕様がないうツだ。待ってる、すぐとは言わんが、作ってやるから」

千歳はそう言い残し、キッチンへと立つ。
そして僕は、別の意味で、赤面していた。

白いテーブルクロスに、白い皿が並べられて、そのお皿には、色々美味しそうな料理が飾られていて。

「うわ……美味しそうだね」

「じゃがいものビシソワーズ、牛フィレ肉のステーキ、カンパーニ

ユ。ライスを所望なら、遠慮なく言えばいい」

「いや、もう、十分過ぎるくらいに十分です」

「そうか。じゃあ、食べよう。マナーとかは気にせずな」

千歳はそう言い、席に着いた。僕もそれに続いて、向かい側に座る。

「……あ、ちょっと待って。家に連絡するの忘れた」

誰に電話するか迷うなあ。うーん。ま、自宅のでいいか。

プルルルル。プルルルル。がちや。

『はい』

この声　汐姉が。

「あー、汐姉？　僕僕」

『な、何？　オレオレ詐欺ならぬボクボク詐欺？』

「違うよ！　汐姉って言ってる時点で気付いて！..！」

『むむっ！　そのツッコミ……秋ね！　そうでしょ..！』

「何でツッコミで僕を判別してるんだよ！　しかも何か自慢気！..！」

『あの鋭い切れ味とも言えないツッコミイコール秋、と私はインプ

ツトしてるわ』

「けな貶してるだろ、確実に！」

『やーほら、私ってツンデレだからよー』

「自分で言うなっ！」

第二十二話：「グレープフルーツシャーベット」

『で？ 一体何の用？』

「相変わらず変わり身早つ。……まあいいけどさ、今日僕、夕飯いらないから」

『あーそう、残念ねえ。今、家に^{うち}タケちゃん来てるのに』

「別に僕は残念じゃないけど……どうせまた二股とかして振られたんでしょ」

『七股らしいわよ。さっきまでお父さんが正座させて説教してたわ。でも、あの女顔で説教されてもイマイチ迫力に欠けんのよね』

「それ、僕にも当てはまるから止めて」

『あら？ タケちゃんがヤケになって菊花が飲み比べしてるんだけど……ちよつとー！ 勝負するならするで、私に一言くらい言いなさいよー！』

「……飲み比べで菊花に勝てる訳ないよ」

『日本酒を一人で二リットル飲んでも翌日には二日酔いなく登校してる化け物だからねえ……あーあ、お父さん、止めさせようとしてるよ』

「つか、汐姉も止めてあげてよ。明日のタケちゃんの事を思うなら」

『ヤダ、めんどくさい。あー、お父さん、お母さんに馬乗りになれてるよ。邪魔されてる。お母さん、面白い事大好きだからねえ』

「助けてあげなよ……」

『嫌よ。面白いもの』

「汐姉は確実に母さんの血を引いてるよ……」

『そりゃどうも。あんたは父さんそっくりよ。じゃあね、あまり遅くならないようにしなさいよ。あ、そうそう。私、今、彼氏振ったところなのよ。帰ったら、愚痴聞きなさいよね』

ぶちっ。ツー、ツー。

……切られた。相変わらず、マイペースな姉だ。しかも、振った、とか言ってたな。やれやれ。今年で何人目だよ。

姉の飽き性に苦笑しながら、スプーンでビシソワーズを掬う。

「ん！ 美味しい！」

「そうか。デザートもあるから、食い過ぎないようにしろよ」

「大丈夫！ デザートは別腹！」

「さながら女子高生のような発言だな……」

……ぐう。否定できない。

「……やっぱり、甘党な男って、変？」

「いや、変じゃない。いいんじゃないか？ 少なくとも、私は嫌いじゃない」

嫌われるのは避けたいなあ、と、そんな気持ちで表情に出たのか、千歳は少し目を細めて、優しく諭すように言った。

嫌いじゃない。その言葉に何故か気恥ずかしくなって、意味もなく笑った。頬が緩んだ、と言ってもいいかもしれない。

「はは……そっか。よかった」

顔が熱いのは、気の所為だと言う事にしておこう。味が分からないのも、多分、気のせい。

彼女はキッチンで洗い物。僕も手伝うと言ったが、千歳が頑なに拒んだ為に断念した。僕はソファーに座ってテレビ鑑賞。

家が大きいとテレビも大きい。テレビは確実に一般家庭よりは大きいだろう。一般家庭の基準がよく分からないけど。

「千歳のお父さんとお母さんは、何をしている人なの？」

「仕事か？ 本業はアイドルらしいが、今は俳優みたいな事をしてる。特に興味がなくて聞き流したから、今、何をやっているのかは知らない。母は女優だ」

「げほっ！ ごほっ！ ちょ、ちょっと待って！ お父さんがアイドル！？ お母さんが女優！？」

思いもよらない言葉に、口に含んでいた麦茶で咽せてしまった。鼻がツーンとする。痛い。

「ああ、二人共、芸名で活動してる。名前は確か……父が仁科上総ニシナカズサ母が久瀬由衣クセユイだったかな」

「ぶほっ！ げほっ！」

事も無げに言う千歳。しかしその名前は、大女優と国民的アイドルの名だった。

……また咽せちゃったよ。って言うかもう、咽せるとかの問題じゃないんだけどね！

「本名は日宮上総と日宮由衣だ。それより、この事は秘密にしておいてくれよ。二人が所属している事務所が公にしないんでな。知る人は少ない」

確かに、メディアで千歳の両親の話題が上がる事は少ない。上がる事はあるけれど、結局は謎で終わってしまうのだ。

「父と母も、それに賛成した。多分、私を世間の目から離す為だ。」

その為に、この階のワンフロアを母と私が買って、壁を取り払って一部屋にした。それから父が上のワンフロアを買いきって、天井を取り払って二階を作った。扉が二つあるのを見たか？ 左が私で、右が母。上が父。見事なカモフラージュだろ？」

千歳はそう言い、キッチンから出る。両手には、デザートの入った皿を持っていた。

コト、と音を立てて、目の前に置かれるデザート。

「昨日作った、グレープフルーツシャーベットだ」

ドサツと、勢いをつけて千歳が僕の横に座る。勢いをつけすぎて眼鏡がちよつとズレてしまっている。それに気付いた千歳は、眼鏡を中指で押し上げた。

「私は、父と母が十八の時に生まれた子供でな。母が妊娠した時、父は既にテレビに出ていて、母はまだ学生だった。母が妊娠したと知った父は周囲の反対を押し切って母にプロポーズし、母もまた、私を産むと言い切った。そこで父が所属していた事務所は、二人が結婚する条件に、この事は一切公表せず、知る人間を限るようにと言ったんだ。……まあ、これは祖父と祖母から聞いた話だ。愉快な人達だから、少し誇張が入っているかもしれん」

言い終えた千歳は、無表情でシャーベットを口に運んでいく。視線はお笑い番組が映るテレビへ。

「それを知っているのは、肉親以外に、父と母に古くから親交があった吉人と琉二と環の両親。だから、私と三人は必然的に幼馴染みとなった。例外なのは美波と 秋だけだよ」

テレビから聞こえてくる笑い声が、もどかしい。千歳は機械的に、スプーンでシャーベットを掬う。

「……何で、僕に？」

掠^{かす}れた声。考えて考えて考えて、ようやく出た言葉。
千歳は数少ない言葉から意味を汲み取る。

「何でだろうな……」

スプーンを口にくわえたまま、少し首を傾げる千歳。そして彼女は、何を考えたのか、可笑^{おか}しそうに　クスクスと、笑った。

「多分……秋は、私の事を軽蔑しないか知りたかったから、かな」

口に含んだシャーベットは、甘くて　少し、苦い。

そしてその時、僕の中で何かが壊れた。

感情の爆発。何かどす黒いものが僕の中で渦巻き、それを口にす
るのは、今の僕にとっては容易い事だった。

第二十三話：「僕の嫌いな僕」

軽蔑、と言う言葉が耳に残る。

「何、それ」

自分でもビックリする程の、低い声が出た。
分かってる。千歳に苛立つのは、お門違いだったこと。頭では分かっているんだけど、止まらない。

「え……？」

「まだ付き合いの浅い僕は、千歳を軽蔑するかもしれない？ だから、一ヶ月間だけ様子を見て、事実を伝えて、僕が千歳を軽蔑しなにか試してたの？ 僕が軽蔑したら、離れるつもりだった？」

一生懸命描いた絵を、下手くそ、と言われ、認められなかったかのような敗北感。それを今、僕は味わっている。

「ち、違う。私は」

「まあ、それもそうだよな。僕なんて、何の取り柄もない凡人だし。それに、つい最近知り合っただけで、その前は他人だったんだ。千歳が信用できないってのも、頷けるけどさ」

それは、千歳には全く関係のない自嘲だった。

「違う。違うんだ、秋。私は」

「違う？ 一体何が？」

ハッ、と、鼻で笑う。これは嘲笑。余りにも、惨めでちっぽけな自分に贈る嘲笑。

「ああそうさ。僕は千歳のことを何一つ知らない。知らなかったんだよ。千歳に言われるまで、知らなかったんだよ！」

何をムキになってるんだ。落ち着け。冗談だよって、言うんだ。今なら辛うじて、戻れるから。

今なら、今なら。

「違う！！」

千歳が声を張り上げる。その声に引かれるように、逸らしていた視線を千歳に向けた。そして

「あ………」

愕然とした。

僕の目に映ったのは、紅い瞳を潤ませて、僕を睨む彼女。その顔は、今にも泣きそうで。こんなに感情を表した彼女を見るのは初めてで。それは、僕を混乱させ、正気に戻すのに十分な威力を持っていた。

やってしまった。僕は、なんてことを。気付いても、今さら遅い。僕は、取り返しのつかないことをしてしまった。自分のエゴで、千歳に怒鳴るなんて最低だ。

「ごめん、千歳」

「 出て行ってくれ」

千歳は顔を俯かせ、掠れた声で僕に退室を命じる。

「でも」

「出て行ってくれ、頼むから」

僕の手を掴み、引っ張る。僕はそれに促されるように立った。

「……「じめん」

そう言うしかない。千歳は何も言わずに僕の胸を押す。……仕方ない。帰ろう。

「ホントに、「じめん」

そう言い残し、千歳の家を出た後も、暫くは扉にもたれて佇たたずんでいた。

「参ったなあ……なにやってんだよ、僕」

泣かせるつもりじゃなかったのに。泣き顔なんて、見たくなかったのに。少し乱暴に頭を搔いて、ズルズルと、扉にもたれたまま腰を降ろしていく。

「バカ野郎……」

結局、千歳の家の前から立ち去ったのは、一時間後だった。

ただいまも言わずに、足早に自室へ向かう。途中、汐姉に会った。汐姉は何かを言おうとしたけど、すぐに口を閉じて黙ってしまった。僕はその様子に何も言わずに階段を駆け上がる。背中に痛いほどの視線を浴びて。

コンコン。

自室の扉がノックされる。

「汐だけど、入ってもいい？」

いつもはノックなどしないのに。それほどまでに、今の僕の顔は酷いのか。

「どうぞ」

「ん……」

そろりそろり、と入ってくる汐姉を見て、苦笑した。だつてまるで、怒られた子供のような顔をしている。汐姉のこんな顔、見たことない。

その汐姉は、僕の顔を見ると、明白あからさまに溜め息をつき、僕の横に座った。

「愚痴聞いてもらおうと思ったんだけど、やっぱりいわ。だつてあんた、相当酷い顔してるんだもの」

「そんなに酷い？」

「うん。何か今にも泣きそうって感じ。どうかした？ お姉ちゃんに相談してみなさい」

こんな時だけ、お姉ちゃんの特権を持ち出すんだから……ずるいなあ、もう。でも、それが汐姉なんだよね。

「友達を、怒らせちゃったんだ。僕がつまらない事でキレちゃってね。その友達は何にも悪くないのに、僕が勝手に怒った」

「……ほほう。そりやまた、青春ね」

「真面目に聞いて。でね、その友達には、まだまだ秘密がありそう
で、それで、僕だけが知らなくて、僕以外の友達が知ってて……え
と、その、何て言うか、僕は」

「嫉妬したのね」

嫉妬？ え？ これって、嫉妬なの？ …… ええ？

「……嫉妬かどうかは分かんないけど、そんな感じなの、かな？」

「何で疑問系なのよ。って言うか、友情の嫉妬なんてあったんだ。知らなかったわ」

僕も知らないよ。

「……でさ、僕はどうしたらいいと思う？」

「知らないわよ。自分で考えなさい、愚弟。って言うか、あんたに出来る事なんて、ないでしょ」

即答。一刀両断だ。しかし、愚弟って酷くないか？

「そうね……でも、五つだけあるわ、あんたに出来る事」

そ、そうか。僕に出来る事が五つ……。……って、ちょっと待て。

「多っ！ 今気付いたけど、五つだけとか多いよ！ 普通そこは一つだけでしょ！ だけの用途間違ってる！」

「これでも少ない方だわ。私だったら、二十はあるのよ？」

「それは多すぎだろ！」

「いい？ 一つしか言わないから、よく聞きなさい」

「結局一つだけなんだ！」

そんな僕のツッコミを無視し、汐姉は人差し指を僕に突きつける。目は至つて真剣。その様子に、僕も黙らざるを得ない。

「待つてあげなさい。ただ、それだけよ。分かった？」

汐姉の言葉が、頭の中で反芻はんすうされる。待つ、か……。

「うん。分かった。ありがと、汐姉」

「ふふつ。いいわよ、今度、愚痴を聞いてくれたらね」

「うん。何時間でも付き合っ」

「じゃあ、来週はどこかに奢おごりで連れてってくれるかな？」

「いいともー！ ……ん？ あれ？ え？」

「はい決まりー！」

いえーい、と汐姉はベッドに飛び乗り、跳ねるわ飛ぶわの狂喜乱舞。しまいには、奢り奢り、と歌い出す。……この人、来年には成人なんだよな……。

「じゃ、私は下に行ってるわー！」

なんて事を言いながら、この自称・永遠の十七歳は、

「おやすみ。私の財布もとい、愛しき弟くん」

なんて事を言いながら、僕の頬に唇を当てて去って行った。

て言うか、財布で。愛しき弟くんて。何してんの、自称・永遠の十七歳……。

僕は両手で、汐姉の唇が触れた頬を呆然としながら押さえるのだった。

「と、取り敢えず、今日の事をきに電話して相談しよう………」

ああ、電話って素晴らしい。メールじゃ伝わりにくい事が伝わるし、なんて言っただって、顔が赤いのがバレないのだから。

第二十四話：「語り」

「バカ」

「バカだね」

「バカだなあ」

事の顛末^{てんまつ}を三人に話した後の反応。上から、環、壱、琉と、それぞれ僕に向かって言うのだった。

時刻は昼下がり。

顎が外れるつてくらいに驚いた琉の家、つて言うか豪邸にいた。僕、メイドがいる家なんて初めて見たよ……。聞けば壱と環の家も、こんな風らしい。

琉のお祖父さんは外資系企業の会長。壱のお母さん 玲奈さんは世界的に有名なデザイナーさん（後から壱に聞いた）。環のお父さんはIT企業の社長。

聞いた時は、そりやもう驚いた。『生きる格差社会だな、お前ら！』とか意味不明な事言っちゃうくらいに混乱してた。

「さて、ではそろそろ、調査員の琉二さんと環さんに、千歳の様子はどうだったか聞いてみようか」

ふおっほっほっ、ときはある筈もない髭を撫でる仕草をし、琉と環は、敬礼をしながらイエッサー！ と叫んだ。

……案外ノリがいいね、君達……。

その様子を冷たい目で見ている僕も何のその、琉と環は敬礼したまま兵隊口調で喋りだした。

「はっ！ 庵原琉二軍曹が調査した結果、日宮千歳は大変落ち込んでいる事が発覚しました！ 詳細はめんどくさいから、環二等兵、頼んだ！」

「俺、二等兵なんだ！？」

む。中々いいツツコミ具合。……じゃなくて！

「僕は二人の漫才を見に来たんじゃないんだけど」

「「漫才なんかやつとらんわボケエ！！」」

……怒鳴られた。怒られた。ぐすん。

「秋ちゃん秋ちゃん、落ち込まないで。部屋の隅っこで膝抱えるの止めて」

「うん。分かった。じゃあ、部屋の真ん中で膝を抱えるよ」

「悪化してるよ！ って言うか何で俺がツツコんでんの！？ ここは普通、秋ちゃんがツツコむ所でしょ！？ 秋ちゃん、今日なんか様子がおかしいって、絶対！！」

「ああ、俺もそう思った。どうせ、昨日の事、引きずってんだろ」

「俺も。なんか、秋のツツコミにいつものキレがないって言うか…
…今日、ボケにいつてない？」

「吉人少佐、琉二兵長、環二等兵……」

「だからもうそれはいいって」「」

「結局俺は二等兵なんだ……」

だって環、運動神経鈍いんだもん。司令官とかなら納得出来るけど。

「ほん、と環は一つ咳をつき、話し出す。

「えー、では、由衣さんから聞いた、千歳の様子を報告したいと思
います」

「じくんと、喉が鳴った。

「千歳は非常に落ち込んでいて、昨日からボーっとしているらしい

です。あんな様子は、初めて見るとの事。あ、あと、部屋で泣いて
るような雰囲気だったってさ」

「……」

唇を噛む。

ガリツ。

……うん。マジで鉄の味がした。手加減し忘れたね。色んな意味
で、僕のバカ。……痛いいいいいい。

「……なんか、あの時の千歳みたいだね」

「……きもそう思った？」

「……いや、あの時よりひどえよ」

あの時。その言葉が、頭の中を駆け巡る。

「あの時って……？」

三人は、顔を見合わせ、苦虫を噛み潰した顔をした。きは僕を見
て、笑う。

それは、泣き顔に似た笑い。

「秋ちゃんには、知っていて貰いたい事かな……」

きは、淡々と語り出した。僕の知らない彼女を。

信じてもらえないかも知れないけど、昔は千歳、よく笑う子だったんだ。……あ、信じられないって顔してる。まあ、信じられないのもしょうがないよね。そこらへんは、後で写真見せてあげるから。えーと、何だっけ。あ、そうそう、昔の千歳だったね。もう、それはそれは可愛かったよ。何せ、俺達三人の初恋は千歳だし。あれ？ 知らなかった？ ま、初恋は実らなかったんだけどね。ちよ、痛っ！ な、何？ 何で琉と環が怒ってるの？ わ、わ、ごめんごめん！

……。

……ごほん。じゃ、次ね。

えーと、あ、そうそう。それでね、中学がさ、千歳の家の近くに建つて、学区が違っちゃったんだよ。美波ちゃんは千歳の家の隣だったから、一緒の中学だったんだけど。あ、でも、週に一回は千歳の家に行ってたよ。そう遠くない距離だったし。まあ、初恋だったから、必死だったのかも。え？ しつこい？ ごめんごめん。

それでね、ある日、見つけたんだ。千歳の腕に青痣があるのを。それは見る度に増えていって、千歳にそれを聞くと、転んだ落ちたの一点張り。

俺達は千歳に絶対的な信頼を寄せてたから、それを信じてしまっただ。

本当はね、虐められてたんだよ。目の色が、違うから。

千歳は頑張ってたよ。俺達に悟られないように、いつでも笑ってた。でも、俺達は知ってしまったんだ。

ある日、美波ちゃんが俺達の中学に乗り込んできて　美波ちゃん、美少女だから、結構注目浴びてたよね？　ははは。それでさ、俺達三人の中の誰かと付き合ってるとか一時期、噂されてたなあ。紹介しろって友達が煩かったよ。え？　話がズレてる？　あはは。ごめんね、俺、どうしても話が違う方向へズレちゃうんだよねえ。あ、何だっけ？　ああ、そうそう　俺達にさ、言ったんだよ。

『千歳をちゃんと見てやって。それが出来なきゃ、あんた達に千歳を好きになる資格はない』

ってね。その時、初めて知ったんだ。千歳が虐められてるって事。

で、ここからが、美波ちゃんから聞いた話。

千歳が学校では無表情な事。誰とも喋らない事。美波ちゃんを巻き込まない為に、美波ちゃんを無視してる事。時々、ボーっとしてる事。千歳が美波ちゃんに頼んで、俺達に言わないよう頼んでる事。

その日、俺達は美波ちゃんと千歳の家に行って、その事を問い詰めた。

千歳は、美波ちゃんを責めなかった。

で、美波ちゃんは言ったんだよ。今でも憶えてる。

『千歳、もう頑張らなくていいから。頑張らなくてもいいんだよ』

『そう……か。ありがとう、美波』

憑き物が取れたように千歳は笑ってた。そしてその時から、千歳の笑顔は消えたんだ。

まあ、その時ね、何と言うか、若気の至りって言うの？ 勢い余って琉が千歳に告白しちゃってさ、続くように俺と環も告白して、玉碎って訳。今も友達でいられるのは、千歳の気遣いかな。ん？ 未練？ あー、ないない。今はいい友達関係築けてます。いえい。あ、キモイとか言わないで。普通に傷付くから。

第二十五話：「一週間後」

千歳と言い合いをしてから、一週間が経った。事態は何も変わっていない。むしろ悪化している。

一週間前のあの日から、千歳とは会っていない。別にこっちから会いに行ってもいいんだけど、吉との約束がある。それを破るなんて、僕には無理だった。

鬱屈うっくつとした気持ちで空を見上げる。

まあ、いい機会だと俺は思うよ。

諭すような笑みで言う吉に、僕は怪訝な顔を向ける。

これは千歳の問題で、俺達は口出し出来ない。だから、秋ちゃんも千歳から会いに来るまで何も行動しない事。まあ、応援してるよ。

脳天気な笑顔に少なからず殺意が湧いた。僕のかめかみに青筋でも出ていたのか、吉は苦笑した。

離れて見れば、気付く事もあるって事だよ。

「なーにが、離れて見れば気付く事も、だよ」

僕、何も気付けないんだけど、と呟いてから、溜め息をついた。視線は青空から、グラウンドへ。体操服姿のおよそ三十名の男子生徒が、サッカーボールを蹴っている。ちなみに僕もその一人。

「秋、パス！」

「はいはい」

圭司から回されたボールを足で蹴って（サッカーなんだから当たり前だけど）、敵のゴールに向かって走る。敵はほぼ全員、僕達の陣地フィールドにいるから、がら空き。ご利用は計画的にってCMでやってるのにな。

ゴールが間近になって来た時、僕の後ろから足音が。

っ！ 敵！？ 速すぎないか！？

ちよつと千歳ファンとの追いかけてを思い出して泣きそうになった（トラウマ）。

意を決して振り向くとそこには

「秋う！ パスパスう！」

佑樹がいた。まあ、足が速い事しか取り得がない佑樹だ。でもこいつ、ゴール付近でディフェンスしてた筈だぞ。いくら何でも速すぎないか……！？

「早く早く！ 早くくれないと俺死ぬかも！」

どんな呪いだよ。一瞬、そのまま死んでくれないかなと思ったけど、どうせ死なないのでパス。

「はいはい」

佑樹の顔目掛けて思い切り蹴りたい衝動を抑えて、普通にパス。

それを受け取ると、佑樹は、シュートの体制に入った。

「イナズマシュート!!」

「ダサッ」

そんな不名誉な名前をつけられ、飛んでいったボールはゴールを飛び越えて遙か彼方へとフライ・アウェイ。僕はそれを、おー、飛んだなー、と清々しい気持ちで見っていた。

そして試合終了の笛が鳴る。

ふと、視線を感じて、校舎を見た。でもそこには誰もいない。見えるのは全開の窓からヒラヒラと揺れるカーテンだけ。

「……あれ？」

「秋ー早くー」

「あ、圭司、待って！」

「くっそお！ 何故入らなかったんだ！ 俺のイナズマシュ」

「ウザい！」

グラウンドに拳を打ち付ける佑樹に、飛び蹴りを食らわせた。

「おい、向坂」

教室へ帰ろうとした所、大山に呼び止められる。

「はい？」

「体育倉庫の整理をしておいてくれ」

「え、でも、次の授業が」

「お前、体育係だろ？」

嫌味な大山の笑み。

千歳と仲良くなってから、こう言う事が増えた。もう慣れたし、気にしてないけど、流石に体育の後は疲れる……。

溜め息をついて、大山から体育倉庫の鍵を受け取った。

体育倉庫の電気を付け、後ろ手で扉を閉める。

「はあ……」

思わず漏れてしまう溜め息。

「何だよ、辛気くせえ面しやがって」

「え!？」

驚いて振り向くと、そこにはマットに寝転がった琉がいた。

「何だ、琉だったのか……驚かせないでよ、もう……」

「そつちが勝手に驚いたんだろうが」

「まあ、そうなんだけど……琉は何してんの？」

「サボリ」

「うん。だよね。聞いた僕が間違いだつたよ」

僕も琉をマネして、隣のマットに寝転がる。うーん。お世辞にも、寝心地がいいとは言えないな。

「なあ、秋。ずっと前から言いたかったんだけどさ」

「んー？ 何？」

「あの時は、冷たくして悪かったな」

あの時……？ その言葉に首を捻る。

「ああ、初対面で食堂行った時か」

「忘れてたのかよ……」

ポン、と手のひらを拳で叩く僕を琉は呆れ顔で見た。

「まあ、いいけどよ。環も、同じ事思ってる。……ホントに、悪かったな」

「や、気にしなくていいって。千歳を思ってるの行動なんでしょ？」

「……初めてだったんだ。千歳が、他人の事を話すのは。無表情だったけど、微かに楽しそうだった。だから、怖かった。千歳がまた傷付くんじゃないかって、怖かったんだ。日に日に、俺達の不安は大きくなっていった。傷付くのなら、傷が浅い方がいい。一週間考えて、そう思ったから、引き離そうと思った」

でも、と琉は続ける。

「昔はそれに反対した。千歳は進んでる、もう止める事は出来ないって。それでも俺は納得いかなかった」

「……それが、何で？」

琉は、くくつ、と笑いを噛み殺しながら答える。

「秋って、話してると何か、草食動物みたいだよ。ピリピリしてるこっちが馬鹿らしくなるんだよ。つか、小鹿っぽい」

僕は小鹿かよ………！

楽しい時間は過ぎていった。

琉とは、他にも、他愛のない話をした。

気付けばそろそろ昼休み。授業をサボってしまった……。やばい、サボリ回数が早くも二回目だ。一回目は仮病を使って桐谷さんを納得させたからなあ……。うつつ。……。体育倉庫に閉じ込められたって言うっておこつ。

「じゃ、僕はもう行くよ………」

「ん？ おお、何か分かんねえけど元気出せよ」

君の優しさが心に染みるよ………。

体育倉庫を出て行く秋を横目で見ながら、琉二は呟く。

「……秋、知ってたか？ お前がサッカーしてる間、千歳がずっと見てたんだぜ……？」

琉二はまた、くくつ、と笑いを噛み殺す。

「千歳は、お前が思うよりも、ずっと強くて厄介なんだ。覚悟して掛からねえと、お前が喰われちまう。……応援してやるから、頑張れよ」

その不敵な笑みは、まるで肉食獣のよう。

第二十六話：「ぐきっ」

桐谷さんの厳しい追及を何とか潜り抜け、待ちに待った昼休みをバカ1（佑樹）バカ2（圭司）と共に過ごした。

圭司が彼女の作った弁当を自慢するものだから、佑樹が僻ひがんで玉子焼きを取って、それを圭司が怒って喧嘩を شدしたのは参った。あの二人、マジで馬鹿だ。

あと、今日は佑樹より圭司の方がウザかった。

今日は汐姉が作った弁当だったから、汐フリークとしては気になるんだろうけど、食べる姿をジッと見られているのは落ち着かない。佑樹が食いついてこないのを不思議に思って聞いてみたら、佑樹は菊花の方がタイプらしい。……佑樹が家に来た時は、菊花に絶対部屋から出てこないように言っておこう。って言うか、二人は絶対家に入れない。

さて、時は変わって6時限目。次は音楽なので、音楽室へ移動する必要がある。

僕は佑樹と圭司を伴って、廊下を歩いていて。そして階段に差し掛かった時。ふと、右を向いた。そこで、見慣れた後ろ姿を見た。一歩、歩く度に揺れる黒い長髪。スラリとした体軀。背中に針金でも入っているのかと思うぐらいに綺麗な背筋。

千歳。

胸が締め付けられる。走り出したい、そんな気持ちに駆られた。

その衝動は、計り知れないもので、きとの約束を一瞬でも忘れさせるのには十分だった。

「ちと」

「秋、危ない!!」

先を歩いていた佑樹から発せられた叫びが、僕の意識を前方へ向けさせる。

瞬時に理解した。

階段から女生徒が落ちてくる。

まるでスローモーションのように、ゆっくりと感じられる数秒。それは僕だけが感じられるもので、はた端から見れば一瞬の数秒。

僕はその女生徒を受け止めようと、手に持っていた教科書を放り投げ、手を伸ばすが

ぐきつ。

如何せん、非力な僕は、女生徒の下敷きとなった。ついでと言つては何だが、自分の手首が鳴るのも聞いた。

倒れる際に頭を打ったのか、意識が混濁する。目が霞むのは、衝撃が強すぎたからか。

「秋！ おい！ 大丈夫か!？」

佑樹の声が聞こえて、大丈夫、と伝えようとしたけど口が動くだ

けで声が出ない。

「秋！？ ちょっ、誰か手え貸して!!」

焦る圭司の声が、頭の中で響く。

首に力が入らなくて、頭は自然と右を向いた。

そこには騒ぎに気付いた彼女がいて、宝石みたいな紅い瞳と目が合い、その紅い瞳が、目一杯開かれるのを見た瞬間 僕の意識はそこで途絶えた。

「う、あ ?」

鼻につく消毒液の匂いが、意識を覚醒させる。目を開けると、白い天井が真っ先に目に入った。

「保健室……? って言うか、頭痛いー……」

ズキズキする頭を押さえようと、左手を上げようとして、

「あ」

僕の脇腹付近のベッドに頭を預けて、眠っている彼女に気付いた。

僕の左手は、彼女の右手に固く、固く掴まれていた。……繋がれている、じゃなくて、掴まれている、と言う表現がこの場合正しいと思う。

「えーっ……と」

どうしたもんかな、この場合。

カチリ、カチリ、と時計の秒針が白い部屋に響く。彼女の規則正しい寝息が、白い部屋に響く。

「あ……」

目を擦ったのか、取れた睫毛が頬に付いている。取るべきか、取るべきか。

もう少し、もう少しで頬に触れる

「はい止め」

「うわあああ！？」

「な、何だ！？ 敵襲か！？ ええい！ ドラゴンを召還しろ！！」

突然の保健室の主（通称・ユリカちゃん）による乱入で、騒然と

なる保健室。しかしそれよりも、千歳が一体何の夢を見ていたかが気になる。

どうやら、僕は二時間も寝ていたらしい。外に出ると空は真つ暗だった。

千歳を送ってやれ、とユリカちゃんに言われ、今は下駄箱で、靴を取りに行った千歳を待っている。元より送っていくつもりだったから別にいいんだけど、あの事があつてちよつと気まずい。

包帯で巻かれた右手を見る。ユリカちゃんによって、右手は全治1ヶ月の捻挫と診断された。ほぼ勘だから病院に行け、と言われたのはどうなんだろう。……あの人が教師でいいんだろうか。そう思っていると、たたた、と彼女が小走りでこっちに寄ってきた。

「待たせたな」

ん、と僕に右手を差し出す彼女。……何だろう。取り敢えず、手を乗せてみた。直ぐに払われる。

「違う、鞆だ。か・ば・ん」

「え。いや、いいよ。自分で持てるし」

「いいから、よこせ」

「いって、ほんと」

「よ・こ・せ」

「いや、ほんといいから。ね？ むしろ千歳のを僕が持つから」

「……」

「……」

無言の攻防は五分にも及び、結局、自分の鞆は自分で持つと言っ
事になった。

現在地、とあるファーストフード店。

真正面に座る彼女は、カラコンをしていない。忘れた、のではなく、カラコンをする事なく僕と話したいらしかった。

彼女の紅い瞳が、こちらを映す。店内中の視線が、こっちに向いているだろう。

僕達のテーブルの横を通った中学生らしき少年達が、彼女を紅潮した顔で盗み見て、僕を怪訝な顔付きで睨みつけてくるのはどういう事だろう。

「むう……。こう言う店は初めて来たのだが、中々美味だな、このハンバーガーは。……何て名前だっけ？」

眉を寄せてハンバーガーを見る千歳。その様子が可笑しくて、ついプツと吹き出してしまった。

「肉厚ハンバーグ特選チーズ乗せバーガー。色々略してハンチーバーガーだよ」

ちなみに、この店で一番高い商品。ポテトとジュース付きで840円。ついでに僕も頼んだから、合計1680円。今回は、払うと言った千歳をこの前の夕飯のお礼、と言って無理矢理納得させて僕が出した。って言うか、もうちょっと他に略し方無かったんだろうか。

「それはまた変わった名前だな……。ああ、そうだ」

と、そこで千歳はごほん、と咳払いをし、至って真剣な顔をして僕を見る。

「秋、話がある。 あの事で」

……あ。

千歳には悪いが、すっかり忘れていた僕だった。

第二十七話：「手を繋ぐ」

忘れていた。もう、すっかり。学校を出るまでは覚えていたのになあ。あは、あは、あはははは。

視線を千歳から逸らす。後ろめたい、もの凄く。

「……………忘れていたのか？」

君は心理学でも学んでいるんですか。だが凶星。そう、凶星なのです。千歳の顔をチラッと見てすぐ戻した。……………半眼だった。うとう……………怖いよ。

「……………はあー」

うつつ。溜め息つかれた……………。呆れられたよ、確実に。

「まあ、いい。奢ってもらったから、許す」

「ありがとうございます……………」

840円で許してもらえるなら、安いもんだ。ホッと安心の息を吐き出し、千歳に笑って見せた。

「……………まあ、あれだな。それは別にいいけど……………」

千歳は眉を寄せて、困ったような顔をした。なんだかほのぼのとした空気が漂う僕と千歳の半径1メートル。

だけどやっぱり、邪魔者はいるもので

「あれえ？ 日宮さん？」

鼻につく甘ったるい声が、横から聞こえた。彼女に声を掛ける人間がいた事に少し驚いて、声がした方向に振り向く。

そこには、他校の女生徒が、同じ制服を着た男女数人を連れて立っていた。その内の何人かは、千歳に携帯を向けて写メを撮っている。

「えー、何々？ ありい、日宮千歳と知り合い？」

「うお！ マジすげえな、ありい！ 日宮千歳と知り合いかよ！！」

「同中おひななんだあ。ね？ 日宮さん？」

ありい、と呼ばれたその女生徒の言葉が、僕の頭の中で反芻はんすうされる。

同じ……中学？ それって……！

ハッとして、彼女に視線を移す。

「……」

彼女は顔を少し俯かせて、下唇を噛んでいた。眉は辛そうに、歪んでいる。その苦汁を嘗なめたかのような表情に、凍り付く。

千歳にこんな顔、して欲しくない！

左手で鞆を持ち、肩に掛け、席を立つ。僕の突然の行動に、千歳

は驚いたように顔を上げた。実は自分でも驚いてる。

「千歳、出よう」

「え……」

目を見開く千歳。僕はその様子に気付かぬ振りをして、千歳の手を取った。そのまま引っ張って歩こうとすると、誰かに右手を掴まれた。途端に、激痛が走る。

「いつ……!!」

「ちょっと待ってよっ」

金切り声が、頭の中で響く。吐き気がしてくる。僕は痛みと吐き気で顔を歪められるのを何とか我慢し、ありいと呼ばれた女生徒に笑顔を向けた。

「ごめんね。僕達、用事があるから」

「あ……」

何故か顔を赤くしたありいさんは、僕の右手を掴んだ手を離れた。幾分か、マシになった痛み。だけど、やっぱり痛いものは痛い。やばい、泣きそう。僕って、こんなに涙腺弱かったかな……。

それじゃあ、とありいさんに言いたくもない別れの言葉を口にし、僕は千歳を引っ張って店を出た

足早に歩いて、辿り着いたのは川沿いの遊歩道。僕達は川と道を分ける柵に背中を預けて、空を見上げていた。

「なあ、秋……」

「ん？ 何？」

僕は空を見上げたまま、千歳の呼び掛けに応えた。

「三人から聞いたのか？ ……私の、事」

「うん」

「そう、か……」

そうだよ、と言って、視線を彼女に向けた。彼女は、僕の顔をジッと見ている。

「本当は、千歳から聞いたかったけどね」

ビクッと少し肩を揺らし、僕から視線を逸らす彼女。僕がまだ怒

っていると思ってるのか、少し勘違いをしてるみたいだ。

「でも、もういいんだ」

不安そうな彼女に、笑顔を向ける。きよとんとした顔を僕に見せる彼女。無防備な彼女の表情に、笑みが抑えられない。頬が緩みきつてるだろうな、今の自分。

「どうして?」

驚きで少し口調が変わってる千歳に、僕は諭すような笑みを向ける。

「千歳を、信じてるから」

「……」

「僕は待てるから。千歳が、話したくなかった時でいい。その時まで、待ってるから」

左手で、俯いてしまった千歳の頭を、菊花や汐姉にするように、優しく撫でる。左手は使いにくいなあ。ぎこちないや。

「さ、帰ろうか。あまり遅くなると、怒られちゃうからね」

「……」

柵から背中を離して、歩き出す僕。

「待て!」

「うわあっ!？」

千歳に後ろから足払いをされた僕は、受け身もろくにとれず、コ
ンクリートに尻餅を思い切りついた……かと思ったら、鞆が下敷き
になっていた。それでも痛い事には変わりないよう……うっ。

痛みに堪え、上を見上げると、そこには仁王立ちした千歳が。

えーと……僕、何か気に障る事言っただかな？

「……ありがとう」

「え？」

千歳は僕と目線を合わすように、膝を地面につけた。スッと彼女
の手が僕の頬に触れる。なんだか、彼女と初めて会った時の逆バ
ジョンみたいだ。

「千歳、どうしたの……？」

「不安だった。怖かった。私の過去を知らば、秋は去っていくかも
しれない。私の事を嫌うかもしれない。それに、同情で、優しくさ
れるのは嫌だった。でも、違った。秋はいつでも、さつきも、
今も優しくかった」

彼女は、弱々しく笑う。

「ありがとう」

彼女の潤んだ瞳に、心拍数が上がるのを感じる。

「仲良くしてくれて、ありがとう」

笑う彼女から、目が離せなくなる。

「こんな私に、笑って見せてくれて、ありがとう」

彼女の目から、涙が溢れ出してきた。

「優しくしてくれて、ありがとう」

それでも彼女は、笑っている。

「待っていてくれて、ありがとう」

泣きそうになるのは、何故だろう。

「ありのままの日宮千歳を受け入れてくれて、ありがとう」

千歳が泣いているのは、何でだろう。僕は何で、泣いているのだろう。胸が苦しくなるのは、何で？

「ずっと、認めてほしかった。誰かに、見て欲しかった。私と言う人間が、存在していると言う事を。日宮千歳はここにいると」

千歳の悲痛な呟きが、僕の胸に刺さる。

「昔みたいには、泣けないけど、怒れないけど、
秋は、私の傍
にいてくれる？」

ポス、と胸に彼女の額が当たる。頬に触れていた彼女の手は、いつの間にか、僕の手を重ねられていた。

「いる、いるよ。僕は、千歳の傍にいる」

彼女の頭を、優しく撫でる。

「私、秋の傍にいてもいい？」

「いいに決まってる」

そう言っ僕は、笑って見せた。そして、疑問が湧く。

僕は千歳を、どう思っているのだろうと。

彼女と手を繋いで歩く。何だか自然とそうになっていた。

告白じみた事を言い合ったけど、これからも、僕達の関係は変わらない。

まだ自分の気持ちが分からないから。彼女の事をどう思ってるのか。そう問われると、面と向かって、ハッキリ言う自信がないから。

だからまだ、今は友達のままでもいい。

まあ、もし僕が、彼女を好きだとしても、彼女が僕を好き、なんて事は有り得ないんだよなあ……。それだったら、友達のままが気楽だったりして。

そう考えていると、グイッと、左手が引っ張られる感覚。

「……？ どうしたの、千歳？」

「言い忘れてた事がある」

首を傾げる僕。千歳は微かに笑う。

「いつも助けてくれて、ありがとう」

はにかむように笑う。

「ぶつかったのが、秋でよかった」

懐かしむように笑う。

「秋にぶつかったのが、私でよかった」

ああ 今更だけど、本当に、思う事がある。

彼女にぶつかったのが、僕でよかった。
僕にぶつかったのが彼女でよかった。
本当に、そう思ったんだ。

「私は、あまり笑えないけど、それでも秋は、この手を離さないで
いてくれる?」

「……離さないよ」

にいつ、と笑う。

「って言うか、笑っても笑わなくても、千歳は千歳でしょ?」

千歳は一瞬、驚いたように目を見開き、すぐに笑う。

「ああ、そうだな。……私は、私だ」

月明かりの下、手を繋いで歩く。

恋を知らない僕らは、少し疎いのかも知れない。手を繋ぐと言っ
のは、恋人同士がするもの。それを知らない僕達は、その重要さに
気付いていない。

本気で他人を好きになるのを知らない僕らは、周りから見ればと

ても子供だと思う。

だけど、子供のままで良かった、と思うんだ。

紅い瞳を持った少女は、穢れなき真っ白な心を。

白い翼を持った少年は、何も知らない純粋な心を。

何色にも染まっていない僕らだから、理解し合える。知らない僕らだから、手を繋いでいける。

僕の一步は、彼女より大きい。彼女の一步は、僕より小さい。

歩幅を合わせて歩くのは大変だけど、彼女となら、苦じゃないって思える僕がいる。彼女となら、歩いて行けるって思う、僕がいる。

少し距離を開けて歩く。友達以上恋人未満な僕らには、この距離が丁度いい。

月明かりの下、手を繋いで歩く。僕には、この距離が、とても愛しくて、心地良いと感じたんだ

第二十八話：「汐姉とデート（1）」

あれから何の進展もなく、月日は流れた。

やたらと三人 誰、とは言わなくても分かるので省略 が、僕と千歳を2人つきりにさせたがるのが分かんなかったけど、それなりに楽しく過ごした。

そして今日から夏休み。学生が最も待ち望むものである。

しかし僕は素直に喜べない。……だって、汐姉が、下着姿で家中歩いたり、露出の多い服で僕を外に連れだそうとするんだよ……。

とまあ、個人的に色々あるけど、夏休み突入

「暑いわね、ちっ」

隣に歩く汐姉しおねえが、不機嫌そうに舌打ちをする。暑いのは分かって

る。現に今、僕は汗だくだ。

「秋が捻挫で全治1ヶ月じゃなかったら、もっと涼しい時期に行けたのに」

う……。それを言われると辛いなあ。ごめんね、と言いながら、包帯の取れた右手で、汐姉の頭を撫でた。

本当は、汐姉も都合が合わなかったんだけど、それを言わないであげると言う大人な対応をする弟（僕）。そして弟に大人な対応をされた姉（汐）。

そんな感じで、僕達は街に向かう。

デニム素材のショートパンツ、黒のキャミソール、白のミュール。それが汐姉の今日の服装だった。

随分と露出が多い気がする。そんなに露出しているのだろうか。僕達の家系は、小麦色に焼ける事なく真っ赤になって痛むだけの肌だと言うのに……。

現在、気温は三十度以上。明日の汐姉の様子が目に見える……。

「ちよつと、何ぼーつとしてんのよ。お姉様のご機嫌取りでもしなさいよね」

と、ジーンズのポケットに手をつ突っ込んでいた僕の腕に、自分の腕を巻き付け、体を押し付ける汐姉。そして焦る僕。

「ちよ、離れて……は、くれないよね」

汐姉の悪戯好きはもう小さな時から知っているので、早々に諦める。だって絶対ワザとだし、楽しんでるし……何より、嬉しそうなんだもん。そんな顔されたら、何にも言えない。って言うか、もんとか言っちゃったよ、僕。……まあ、それは置いといて。

でもちよつとくつき過ぎだと思つよ、これは。やっぱり一言ぐらい言つておこうかな……、と思つただけど、

「うん」

汐姉の本当に嬉しそうな顔を見て、そんな気は失せてしまった。

……ま、いいか。腕を貸すぐらいで喜んでくれるなら、何本だつて貸そう。僕の腕は二本しかないけど。

そして汐姉を剥がそうとして持ち上げた右手は、汐姉の頭を撫でる事になったのだった。

「おい、き、何してんのお前……」

琉が変態を見るような目で俺を見てきた。何だか失礼なので、取り敢えず頭を叩いておく。あらら、持ってたソフトクリームに顔を突っ込んだじゃったよ。

「いてえ！」

顔がサンタクロースみたいに真っ白な流。まず言う言葉、それなの？ ソフトクリームの事じゃないの？ 相変わらず、どこか抜けてるんだよなあ、琉は。

「変態を見るような目で幼馴染みを見た罰だよ、それ」

「いや、俺から見ても、あの電柱に潜むきは変態だった」

キャップを被った環が、何故か俺達を冷たい目で見てきた。環、何か俺達に冷たくて、秋ちゃんと千歳に優しいんだよねー。成子ちゃんには甘過ぎるし。……まさか環って、女好き？ ………………んなワケないか。そんなんだったら、成子ちゃんに殺されてるよね。大体、秋ちゃんは女じゃないし。

「環が言うんならそうだったんだね、あはは琉ちゃんごめんねー」

「謝り方が軽いっ!？」

「いや、てつきり琉の事だから、俺の事を変態扱いして心の中で興奮してるのかなって」

「お前こそ俺をどんな目で見てるんだよ！ その俺は確実に変態だから!！」

きゃんきゃん吠える小型犬……もとい、マイベストフレンド琉二を黙らせて、俺はある一点を指差す。

「ああ？何があるって言うん……うええっ!？」

「ちょ、琉、変な声出さないでよみっともな……はうえっ!？」

俺が指差した先には

「ほら見て、あの子の足首。メチャクチャ琉が好きそうな足首だよ?」

「俺はそんなフェチを持った覚えはねえ！ お前はそこまでして俺を変態に仕立て上げたいのか!！」

「その通り!！」

「いつそ清々しい!！」

「二人ともうるさい！ って言うか、何で秋が女の人と歩いてんの!?! しかも何だか仲良いつばい!！」

そう、俺が差した先には、女の人と腕を組んだ秋ちゃんがいるのだった。いや、マジで美人だね、二人とも。横に並んでると、まるで姉妹のようだよ。

美女さんが腕を組んでくれてるから、秋ちゃんは辛うじて男に見えるだけで、カツラ被ったりしたら絶対姉妹だな。

街は人通りが多くて参る。何に参るのかって言うと、人が多い分、汐姉に振り向く人が多いって事だ。

あうっ。視線が痛いっ。汐姉が露出の多い服着てるからだよ、絶対。……まあ、僕が汐姉と腕組んでいるのにも問題があると思うんだけどさ。

ほら見てよ汐姉。あの二人組、僕らをガン見してるよ。メチャクチャ怖いから。

「あのさ、汐ね　ぐふ!？」

汐姉から、無防備な腹にパンチを貰った。いや、そんな『プレゼントフォーユー』。誕生日おめでとう。これ欲しかったでしょ?』み

たいな顔でやられても……。

「あんたさあ、分かってんの？」

「は、はい……？」

「これはデートなのよ？ どこの恋人がデート中に姉と呼ばせるのよ。姉弟プレイ？ 姉弟プレイなの？ 変態じゃない。変態じゃん。変態でしょ？」

「そ、そうですね………」

目が、目が怖い。顔は笑ってるのに、目が笑ってない。こんなに恐怖を覚えたのは、千歳の冷笑以来だよ。もう、あそこにいるナンパ男二人組なんて目じゃないくらいに怖い。

「と、言うワケで、あんた、これから私の事、呼び捨てにしなさい」

「りよ、了解しました………」

お腹痛い……。もう帰りたいたい……。

そんな僕の願いも虚しく、先行き不安なデートはまだ続くのだった。

「ちよっ、どうすんのこれ！ 俺達の『秋と千歳をくっつけよう作戦』はどうなの！？」

「環、落ち着け！　っつーか吉！　お前は何やってんだ！」

「え？　尾行しようかなあ、と思って電柱に隠れてるんだけど」

「逆に目立つわ！　っつーか何、当然でしょ？　みたいな顔してんだテメエ！」

「ああもう！　吉、琉、うるさい！..!」

ちなみにこっちも続く。

第二十九話：「汐姉とデート（2）」

「し、汐……さん」

「何？」

「それ、全部買っんですか？」

汐姉が手に持つ、数十着の服。思わず敬語になってしまふ僕だった。ここ、玲奈さんのお店だけど、なんかさ……高いのばっかり選んでない？

「玲奈さん、すみません。割引してもらっうなんて、迷惑かけて」

頭を下げると玲奈さんは、意地悪く笑った。

「いいのよー。秋くんが、モデルをしてくれるって約束してくれたんだもん。割引するのなんて、苦でもないわ」

そう。僕がとても払えそうにない金額となったのを、玲奈さんが助けてくれたのだ。まあ、代わりに交換条件を出されたんだけど……。

「でも僕に割引する程の価値があるとは思えないんですけど……」

「いいからいいから！ ほら、彼女、外で待ってるんでしょ？ 早く行ってあげなさい。あと、出来れば彼女もモデルにならないか誘ってみて！ お願い！」

「いや、彼女じゃないんですけど、まあ、一応誘って見ますね。……えと、じゃあ、行きます。それじゃあ、また今度」

「はいはい。日程は壱人に言っておくからねー」

僕は玲奈さんに頭を下げ、店を出た。

秋ちゃんがいた店は、俺の母さんの店だった。結構な値段なんだけど、秋ちゃんは買えたらしい。だって、両手にいっぱい紙袋持つ

てたし。

「よし、じゃあ、玲奈ババアに事情聴取行くか」

琉は、俺の母さんの事を、陰で玲奈ババアって呼んでる。いつか殺されると思う。

「でも、事情聴取している間に、秋ちゃんがどっか行っちゃおうよ？環、どうする？」

「大丈夫。今、ファーストフードの店に入ったから。三十分の余裕はあると思う」

「おっし！ んじゃ、行くぞー！」

玲奈ババア、待ってるよ、と言い店に走っていく琉。……暑い。暑苦しいよ、マイベストフレンド。

「肉厚ハンバーグ特選チーズ乗せバーガーを2つください」

「……はい」

え。何、今の間。僕、何かしましたか。って言うか、僕、貴方に見覚えがあるんですけど、どこかで会った事ありましたっけ？

「お客様は、優柔不断なんですか？」

「……っ!？」

営業スマイルと共に、ぼそりと呟かれた言葉に固まる。

思い出した。千歳と桐谷さんと一緒にカフェに行った時の店員さんだ。見た所、僕より少し年上みたいなんだけど……。肩甲骨あたりまで伸ばされたダークブラウンの髪が、力なく揺れる。暗いオーラ(?)でよく分からなかったけど、凄い美人さんだ。目に生気が無いのが怖いけど……。

って言うか。……そこまでお金に困ってるんですか。

「ええ。困ってます」

……僕、無意識に口に出していたらしい。

「私の家の会社、倒産してしまって、今、私が大黒柱って言うか、稼ぎ手と言うか。……まあ、言ってしまうえば、私が働かないと、家族皆が行き倒れてしまうんですよね」

隣にいる汐姉とアイコンタクト。

(……重いわね)

(……重いね)

「私には小さい時からの許婚いいなずけがいるんですけど、その方、世界を股に掛ける大企業の跡継ぎなんです……。しかも年下……。ああ、こう言うのって、何でしたっけ……。玉の輿？」

隣にいる汐姉とアイコンタクト。

(……変なのに捕まっちゃったわね)

(……そう言う事を言わないの。めっ)

(……ガキ扱いすんなっ)

いてっ。ふくらはぎにローキックされた。

「何かもう、その言葉が重くて重くて。家族は玉の輿玉の輿ってうるさいし、店長は仕事仕事ってうるさいし、友達は合コンばかり誘ってきてうるさいし」

隣にいる汐姉とアイコンタクト。

(……愚痴られてるわ)

(……愚痴られてるね)

「あれ？ って言うか、汐ちゃんじゃないですか？」

「え。汐……さん、知り合い？」

「うっん。知らない」

即答かよ、と僕がツッコむと、店員さんはああ、と思い出したかのように手を打った。

「すみません。私、大学では眼鏡かけてるんです」

スツと、胸ポケットから牛乳瓶の底ぐらいの厚さがありそうな眼鏡を取り出し、それを掛ける店員さん。

「あああああつ！ 桜、^{サクラ}あんだ、ええっ！？」

と、意味不明な日本語を喋る汐姉と、ニコニコ笑っている店員さん 桜さんの間に挟まれて、頭の上に『？』マークが飛んでいる僕。

って言うか桜さん、仕事してください。僕達の後ろに、いっぱい人が並んですけど。

店長の言葉は、^{あなが}強ち間違いないなあ、と思う僕だった。

「秋くんは、別に彼女じゃないって言うてたけど？」

「ふうん。そっか、分かった。ありがとね、母さん」

「別にいいけど、何かちょっと気になるのよねえ」

母さんはそう言つと、顎に手を当てて唸り始めた。……お客さんが変な目で見てるのに気付かないのかなあ。

そう思いながら、店の中をざっと見回す。

何故、琉でもなく環でもなく、俺が母さんと話しているのか。それは、琉と環が、母さんに弱味を握られているからだ。本当に、弱味を探し出すのが上手いなあ、と思う。

俺は知らないんだけど、何か、二人にしてみればやばいらしい。まあ、どうせ琉は例の許婚絡みだろうし、環は成子ちゃんにバレたらいけないものだろう。

『弱味を握られてる人間とは、極力話したくない』

そう言つて、琉と環は、マサくとマユさんと（真幸と真弓の事）一緒に、あつちで女心について話し合つてる。

つて言うか二人達、何でここに来てるのか分かつてるのかな？

女心について話し合つてる場合じゃないと思うんだけど。

あーあ、やってらんない。美波ちゃんに電話して、慰めてもらおうかな。俺、失恋しちゃったってね。まだ誰にも言つてないけど。

つい、ふとした拍子に告白して、フラれただけ。小さい時からの

幼馴染みが好きとか。

別に、傷付く事は無かった。幼馴染みって言葉に、胸が少しチクツとしただけ。

思えば俺は、あの初恋から、人を本気で好きになつた事が無いのかも知れない。だからと言って、今更、俺の気持ちが千歳に向く事は、絶対に有り得ない。

時の流れは、人の気持ちも傷も風化させていく。千歳の傷が消える事は無かったけど、俺の気持ちは確実に消えている。あの時の胸の痛みは、懐かしさからくるものだ。

あの時から、琉も環も進んでいる。千歳も、一步踏み出した。だけど俺は

「……吉人、聞いているの？」

「ん？ ああ、聞いてたよ」

無意識に考え込んでいたらしい。慌てて笑顔を作る。すると母さんは、呆れたように言った。

「作り笑いがヘタねえ」

「ん……そうかな」

流石、母親だね。そう言うと母さんは、バカ、と言って笑った。

俺はちゃんと、前を向いて歩いていけてるのかな。

取り敢えず、美波ちゃんに電話しなくなってきた。帰ったら、早速電話しよっかな。合コンの時から一度も会ってないけど、遊びに誘ってみるのもいいかも知れない。

長い休みは、何か、俺に気付かせてくれるかも知れない。そう思って、探して探して、いつも、見つからなかった。

だけど今は、秋ちゃんがいる。鈍感で天然で無自覚な男の子。

でも、だからこそ、気付かせてくれるかも知れない。

教えてくれるかも知れない。俺を 救ってくれるかも知れない。

「助けてくれよ……頼むから……」

心の叫びは悲痛な呟きとなり

夏休みは、まだまだある。その間に、俺は答えを見つけられるのかな。

第三十話：「汐姉とデート（3）」

横には汐姉、そしてその汐姉の前には桜さん。美女二人を連れて
いる僕を見る男（複数）。

それを全部無視して、窓の外を眺めポテトを食べ続けると言う行
為をかれこれ五分は経っている。ああ、早く帰りたい。

しかしそれは無理な事。こうしているのも暇なので、汐姉と桜さ
んの会話に耳を傾ける。

「私、あんたの家が倒産してるの、聞いてないんだけど？」

汐姉は怒り気味……というか、怒っていた。

何気に汐姉は人情深く、一度懐ふところに入った人は、最後まで面倒を見
るのだ。普段の僕の扱いはこの際スルーして、汐姉を賞賛の視線で
見た。

「ごめんなさい……。あまり心配かけたくなくて……」

対する桜さんは、怒られた子供のように縮こまっていた。少しば
かり目に生気が戻ってきた桜さん。あれかな、仕事の時だけ、死ん
だ魚の目になるのかな。

桜さんの答えに、汐姉は、はあ、と溜め息をつき、頭を掻きむし
った。

昔からの癖。汐姉はイライラすると頭を掻きむしるのだ。

僕は汐姉のボサボサになってしまった髪を撫でる。しばらく撫でていると、汐姉のサラサラした髪はすぐに元のヘアスタイルに戻った。

「心配かけたくないって何よ。私とあんたってその程度の仲だったんだ？」

「違っ
」

「少なくとも、私は桜を親友だと思ってた」

桜さんの言葉を遮り、汐姉が言う。

うつ……。何かこの会話、僕が千歳と喧嘩した時の会話みたいでやだなあ……。やっぱり、血筋って言うか姉弟だから？

と、そんな事を思っていると……。

「い、ごめんなさい〜」

桜さんは泣き出してしまった。

「あ、あわわ」

と、マヌケな声を出したのは僕。ヘタレ全開である。

「ああもうっ。何泣いてんのよあんたっ」

そして泣かせた張本人は、僕の隣から、桜さんの隣へと移動し、ぎゅっと桜さんを抱き締めた。

「うっ」

それでも桜さんは、下唇を噛み締め、声を押し殺して泣き続ける。汐姉も、もーごめんってー、とか言いながら桜さんを子供みたいにあやすが、彼女は泣き続ける。

集まる注目。冷やかな目が僕に一斉砲撃。

あー、皆さんあれだね、僕が桜さんを泣かせたって思ってるんだね。うん。言わせてもらおう。なんでやねん。

「し、汐ちゃん」

「あーはいはい、泣け泣け。私の胸で思いっきり泣け」

「ふえ」

……完璧に置いてけぼり状態だな、僕。とりあえず、そんな寂しさを紛らわす為にバナラシェイクを飲んでおいた。

「何で！？ 何で、サク姉ちゃんがここにいるんだ！？ ボクは聞いてない！！」

と、琉。

「ちょ、落ち着け、琉！」

と、環。

「琉、昔の口調に戻ってるよー。ボクって言うのが子供っぽいからって直したのにさー……………もしかして俺、今、秋ちゃんのこと否定しちゃった？」

と、俺。

「ごめん、秋ちゃん。と心中で謝罪し、今にも店に入ろうとする琉を羽交い締めにする。

俺と環に取り押さえられた琉は襟足にも満たない長さの髪を、一生懸命振り回して抵抗してきた。

うっん。琉はサクさんのことになると、我を忘れちゃうんだよねー。小さい頃よく遊んだからと言って、ここまで過保護になるのはサクさんの人柄か、それとも琉のガキくさい独占欲か。恋愛感情なんて持っていないのに、この超過保護っぷりは千歳のお父さんに値する。と言っ訳で。

「えいつ」

「むぎゅっ」

暴れる琉の首に手刀を食らわせて、意識を奪った。気絶する際に、

琉が変な呻き声^{うめ}を上げたような気がするけど、気にしないことにした。

そして俺は、琉が向かおうとしていた店に目を向ける。全国チェーンのファーストフード店。そのガラス越しには、秋ちゃんと美女と、サクさんがいた。

……どうなってるんだかな、これは。

桜さんが泣き止み、僕に向けられる視線が大分なくなってきた頃。桜さんは僕に、弱々しい笑顔を見せた。

「いきなり泣いたりして、ごめんなさい」

「いえ、別に気にしてませんよ」

僕はバニラシェイク飲んでただけですから。

「汐ちゃんの彼氏さんに、悪いことしてしまったわ」

「「彼氏？」」

二人揃って首を傾げる姿は、流石姉弟と言った所。しかし、桜さんからは恋人同士に見えるらしい。

「あははっ、違うわよお」

汐姉は、おかしそうに笑いながら、否定の言葉を口にする。

「秋は弟よ、弟。私達、何となく似てるでしょ？」

すると汐姉は、僕の隣に座って顔を寄せてきた。うわわっ！ 顔が近い！ と、心の中で叫ぶ。現実リアルの僕は硬直中。

「うーん……言われてみれば、そうかも……」

「でしょ？」

「えっと……弟、くん？」

「は、はい？」

桜さんの呼び掛けに、汐姉を押し返しながら答える。声が裏返っているのは、汐姉の所為だ。

「初めまして。汐ちゃんの友達エフハラの榎原桜です」

「あ、初めまして。汐姉がいつもお世話になってます。僕のご事は秋でいいですよ、桜さん」

「はい、了解しました。秋くん、ですね」

うふふあはは、と二人で笑っていると、横から汐姉が口をはさむ。

「波長が合ってるわね、あんたたち」

「「そうかな？」」

あ、と二人、口を揃える。あはは、と二人、照れ笑いをする。
…ほんとだ！ 波長合ってる！ 凄い！

「汐……さん、凄い！ほんとに波長が」

「ちよつと桜あー、許婚つてなによー」

聞けよ。

「あつ！ イケメン三人組発見！」

落ち着けよ。

「りゅ、りゅーくん！ たまちゃんに、いつくんも！」

落ち着けよ、汐姉……つてあれ？ 桜さん？

目を見開く桜さんが指差す先を、見る。

「ああつ！」

とまあ、奇声を上げましたよ、ええ。一つだけ言いたい。なんでやねん。

第三十一話：「おまけ」

【馬鹿な友人】

「あ、佑樹、スプーン睨んで何してんの？ 大体予想はつくけど」

「おう、秋か。俺は今、スプーンま」

「ふうん。スプーン曲げねえ……出来た？」

「……いや、で」

「出来てないんだ」

「いや、うん、そうなんだけどさ、俺のセリフを」

「まあ頑張っつてよ。じゃあねー」

「無視しないで!？」

【彼女馬鹿】

『いやあ、俺の彼女はさ、料理がメチャクチャ美味いんだよ』

「……ふっん」

『それに、あの薔薇姫より、とは言わないけど、可愛いし』

「……へえ」

『って、秋、ちゃんと聞いてる？』

「聞いているよ……今、圭司が話し始めて約三時間二十七分三十二秒が経過した所」

『うっわ、秋、細かつ！ 神経質な男は嫌われるよ？』

「……今、生まれて初めて、純100パーセントの殺意が沸いたよ」

【千歳と美波】

「にははー千歳の匂いが染み付いたベッドですよ、画面の向こうの皆様！」

「……誰に向かって話してるんだ？」

「む、むむむ？ おやおやおやあ？ こりゃまた、大胆な下着をお持ちですなあ」

「……それは由衣さんのだけど？」

「あ、どうりで、ちょっと胸のサイズが小さいと思ったワケだ」

「……聞かなかったことにしておいてやるよ」

「かたじけない」

【その頃の由衣と上総】

「くしゅんっ」

「あれ？ 由衣さん、風邪？」

「んー、かもなあ。上総くん、風邪薬買ってきてよ」

「ええっ？ 今、ロケ中だよっ？」

「むづ。上総くんのケチ」

「おわあ！ 見てくださいよ、上総くん、由衣さん！ 立派な力二ですねー！」

「きゃあー！ 美味しそう！」

「僕、力二大好物なんですよ！」

【意外と純粹、成子さん】

「環、お腹空いた」

「ん？ ああ、何か作ってこようか？」

「ん。ありがとう」

「別にいいよ。わざわざ、メイド達の手を煩わづらわせることもないしね」

「あら、成子ちゃん、来てたの？ もっ、一言ぐらい言っつてよ」

「あ、どうも茅美カヤミ叔母おばさん。お邪魔してます」

「ゆっくりしてっつてね」

「あ、はい」

「あ、成子ちゃん、耳貸して？」

「え？」

「あのね」

「ええっ？」

「……で？ 何で顔が赤いの？」

「な、何でもない何でもないっ！ 茅美叔母さんに成人したら結婚してねなんて言われてないっ！」

「……そんなに赤面するようなことかな？」

「え！？」

【ゴツゴツ】

「サク姉ちゃん、見て見て！ ボクが捕った虫だよ！」

「わあー、すごいねえー！ あれ？ りゅーくん、なんかゴツゴツしてない？」

「サク姉ちゃん、それ、ボクじゃなくて木だよ！」

「あ、そうなの？ お姉ちゃん、眼鏡忘れてきちゃったからわかんないわ」

「サ、サク姉ちゃんっ！ 前に木が」

「いたっ！」

「サク姉ちゃん！？」

【吉人と玲奈】

「吉人、お茶」

「はい」

「吉人、ご飯」

「はいはい」

「吉人、お風呂」

「はいはいはい」

「やっぱり吉人は、私には無くてはならない存在よ」

「喜んでいいのか微妙……」

【秋と善也】

「うーん……」

「善也兄、どうしたの？」

「あ、秋。いや実は、困ったことがあってね……」

「僕でよかつたら相談にのるよ？」

「ああ、うん。……何を聞いても、秋はぼくを見捨てないでくれるかな？」

「……まあ、それは話を聞いてから決めるよ」

「うん。それがいいかな。……秋、非常に言いにくいんだけど」

「？」

「この前、秋の寝顔写真を友達に見せたんだ」

「……はあ。それがどうかしたの？」

「何かさ、友達が秋のことを女の子って思っちゃったみたいで」

「……は？」

「紹介しろってうるさくて……」

「……」

「ああっ！ ごめん！ だからそんな冷たい目で見ないでええええ！
！」

【秋と汐】

「うふふ」

「……」

「あはははは」

「……」

「うひひひひ」

「……何で笑ってんの？ 気持ち悪い」

「最後のは余計よ」

「いてっ！ さり気なく脛すねを蹴らないで！」

「何で笑ってるのか知りたい？」

「え？ いや別に……知りたいつ！ 知りたいですっ！」

「よろしい。何で笑ってるのか……それは、秋の寝顔写真が売れまくって私のお財布の中で諭吉さんと樋口さんと野口さんが楽しそうに談笑してるからよっ……！」

「……要するに、お金が一杯あって嬉しいってことなんだね」

「そうとも言うつかも」

「そうしか言わないよ」

【秋と菊花】

「秋お兄ちゃん、ごめんなさい……」

「な、何、いきなり。菊花に謝られるようなこと、何かあったっけ？」

「はい。お話、聞いてもらえますか……？」

「う、うん」

「実は先日、友達に見せてしまったんですよ……」

「な、何を？」

「秋お兄ちゃんの……寝顔写真です」

「な、何だ、そんなことが」

「そしたら話が広がっちゃって……いつの間にか、秋お兄ちゃんは秋お姉ちゃんになってました……」

「……んっ？ ちょっと待って。どういうこと？ っておーい。菊花、テーブルの下から出ておいでー」

【秋と裕太】

「あ、ねえ、裕太。なんか菊花から聞いたんだけどさ、秋お兄ちゃんが秋お姉ちゃんになるってどういうこと？」

「んん？ ああ、だから、菊花が無口なんだなあ。いや、なんかさ、秋お兄ちゃんのこと知らない珍しい人達の間では、最初は女顔の兄貴ってことで広まってたんだけど」

「（珍しい？）だけど？」

「なーんか、ファンクラブなんかが出来ちゃったみたいで。秋お兄ちゃんを知ってる人と、今まで知らなかった人達が結束しちゃって、規模がでかくなっただよ」

「……………は？」

「そのファンクラブの間では、どうも兄貴のこと、『お姉様』とか『王子様』って呼んでるみたいなんだ。あ、じゃあ俺、風呂入ってくるから」

「……………お、お姉様？ 僕が、お姉様、王子様……………有り得ないだろう……………」

【由衣と上総2】

「ナオ、パパも行くから！ 高校の入学式なんて、一生に一度だし！」

「ダメだつてば！ あなたは仕事があるでしょう？」

「いやだー！ ママのケチ！ ナオは、パパが行くことに賛成だよな？」

「来なくていいよ、別に」

「がーん！」

「凄い演技力ですね、上総さんと由衣さん。まるで本物の夫婦のよう
うに息ピッタリだし。ね、監督？」

「うむ。『親バカ一直線』、視聴率二桁は固いな！」

【そのドラマを見る千歳と美波】

『ナオ、パパは好きかい？』

『嫌いじゃないけど好きでもない』

『うぐうっ！こ、これが思春期と言うヤツなのか……？』

『いや、貴方は思春期とか関係なく娘に嫌われるタイプだから』

『ママ、きつしこよ……』

「……」

「……なんか、日宮家でよくありそうな感じだね」

「……うん……」

【もしも千歳がツンデレだったら】

「千歳、ほら、早く行こ」

「ちよっ、何だこの手はっ」

「え？」

「はっ、恥ずかしいだろ、バカ！」

「うええっ？」

「ま、まあ、別にイヤじゃないけど……」

「……熱ある？」

【もしも千歳が素直クールだったら】

「秋、好きだぞ」

「……ち、千歳？ 熱でもある？」

「秋を見ると、頭がぼーっとなって、胸がポカポカするんだ。……」

…これっってもう、好きっつてことだろうっ?」

「だ、誰か救急車を呼んでー! 病気の子がー!」

【もしも千歳が妹だったら】

「お兄ちゃん、起きろ、朝だ」

「ち、千歳が何でここにいるのっ?」

「全く、早く起きないとちゅーするぞ」

「だ、誰か救急車ー! ここに痛い子がー!」

【もしも千歳が無口だったら(意味不明かも?)】

「……(くいくい)」

「ん? 何? どうしたの?」

「……(じーっ)」

「……お腹空いたの?」

「……(ぶんぶん)」

「……手？ 手を繋ぎたいの？」

「……(じくじく)」

「……はら」

「……(ぼっ)」

「……って言っただけが無言が多すぎだよ」

【馬鹿2】

「おい、馬鹿日本代表」

「そんな代表ねえよ!？」

「馬鹿ワールドカップはいつやるの？」

「そんなワールドカップはありません！」

【特別編：秋と千歳と弓槻の脳内会話】

弓槻

「や、や、どーも。作者の弓槻です」

千歳

「美少女な妹がいるらしいぞ」

秋

「なんでも、モデルを目指している妹だとか」

弓槻

「はは、そうなんですよねえ。作者はその妹を暖かい目で見守っています。あと、相当モテるので、変質者に狙われたりしないか心配なんですよ。バイクの免許とったら、家と学校の送り迎えを考えるほどに心配しています」

千歳

「シスコン」

弓槻

「うるさい。で、なんで脳内会話を開いたかと言うと、先日、おかげさまで三十話を突破したので、そのお礼に、作者の脳内をちらっと見せよっかな、と考えたワケです」

千歳

「本当は大分前に更新しようと思っていたのだが、何やら執筆中に風邪をひいて、とうとうこんな日になってしまった、らしい」

秋

「すぐ体調崩すから、更新ペースがどんどん遅くなるし」

弓槻

「ぐふっ」

千歳

「実は今も風邪ひいてたり」

秋

「よく風邪ひくクセに、治るのが遅いから」

千歳

「生活管理が出来てない」

【その後数分によって責められる作者】

弓槻

「よ、容赦ねえよ、この二人……。ま、まあ、言い返せないけどね
「！」

千歳

「ところで、何かお知らせがあるんだろ？ さっさとやれ、さっさと
と」

弓槻

「あ、えーと、お知らせがあります。作者は4月から受験生になります。そのため、更新ペースが遅れると思います。どうかご理解頂

けるよう、お願いします」

千歳

「夏休みイベントは、まだまだ続くからよろしくな。海水浴、秋のモデル体験、秋と家族の触れ合いなどを書くぞ」

秋

「リクエストの『平安版・姫と三騎士と平民A』は、本編完結後に記載予定です。待っていてくださいね、さくらさん」

千歳

「夏休み明けは、イベント満載だ。学園祭、体育祭、球技大会、クリスマス、修学旅行。」

学園祭では、秋が大変な目にあつて、私が……まあ、その、なんと、とにかく色々あるんだ」

秋

「六十話を軽く超えそうな内容だけど、見てくれると嬉しいです」

弓槻・秋・千歳

「それでは、これからも『姫と三騎士と平民A』をよろしくお願いします！」

【おまけ】

「べっ、別に秋のことが気になったからじゃないからな！」

「話が読めないんだけど!?!」

第三十二話：「汐姉とデート」(4)「

吉と環と琉。そして僕と汐姉と桜さん。二組は、向かい合う形で座っていた。

「えっと、とりあえず、右から紹介していくね」

桜さんはそう言い、汐姉に三人を紹介していく。

「斎木吉くん。私の幼馴染みで、秋くんと同い年」

「どづもっ」

「明瀬環くん。以下同文です」

「よろしくお願いします」

「で、眠ってるのが庵原琉二くん。以下同文で、一応、私の許婚です」

「「許婚え!?!」」

見事にシンクロした僕らは注目を浴びることになったが、今はそれどころじゃない。

マジで? と言う視線を吉に送ったら、肯定の頷きが返ってきた。んなアホなー、と言いたかったが、そうすると僕が空気読めない、みたいな感じになりそうだったので黙っておいた。

「青臭い許婚ねー」

失礼なことを言ったのは僕の実の姉、汐姉だ。毒舌はいつでも健在らしい。そしてそれに賛同したように頷いたのが壱と環。幼馴染みとは時に残酷なり。

「うーん……でも、親同士が約束しただけだから、そんな大それたものじゃないよ。それに、りゅーくんも私も、お互いに恋愛感情抱いてないし」

桜さんの言葉に、うんうん、と頷く壱。

「琉はサクさんのこと、本当のお姉さんみたいに思ってるから超過保護なんだよねー」

「って言うか俺は、琉の頭に恋愛って言う文字が入っているのかさえ怪しいと思うけど」

と、環の言葉に、あー、有り得るねー、と笑い合う壱と桜さん。琉の扱いが物凄く酷いように思うのは、気のせいじゃないみたい。

「ところで、秋ちゃん、この美女さんは誰かな？」

壱のその言葉に、僕は自分の家族のことを話していなかったことに気付いた。って言うか、僕たちが一年の時、汐姉は三年で、あまりのモテっぷりに、知らない人はいないってぐらいに有名だったのになあ。

日宮千歳と向坂汐の二人は、学園で一、二を争う美貌を持つってその当時言われてるし。その汐姉が有名すぎるがあまり、僕も『あ

の向坂汐の弟』と言うことで一時期、凄い注目を浴びていた。

善也兄も、僕たちが通っている学園が母校で、凄くモテたらしい。まあ善也兄は運動も勉強も出来る人だったから、当然かも。汐姉もそう言う『才色兼備タイプ』だし。ちなみに、千歳は規格外。

菊花は運動が苦手な所を勉強でカバーしてるし、裕太だって、勉強が苦手な所を運動でカバーしてる。結局、平凡なのは僕だけなのだ。……なんかへこんできた。

……げふん。

まあ、と言う訳で、『向坂ブランド』と呼ばれるようになった僕を含める向坂兄妹。

それは時代の波と言ったようなもので、

『向坂兄妹と付き合った人は幸せになれる』

と、都市伝説か、とツツコミたくなるような噂が街中に広まり、汐姉は毎日、告白の嵐。善也兄も大学でモテモテ。菊花も裕太も凄かったらしい。

その所為^{せい}で菊花と汐姉に、変な男からの危害が及ばぬようと、僕は汐姉と一緒に菊花を中学まで送り届け 裕太はサッカー部の朝練で、菊花と一緒に登校が出来なかった 下校時にまた汐姉と一緒に迎えに行く、と言うことを繰り返していた。

そのおかげで、僕は母校の中学ではちょっとした有名人らしい。寝顔写真とは別で。

今は菊花と裕太が三年になり、裕太の部活動が少し余裕が出来たことで、二人は毎日一緒に登下校し、汐姉も、善也兄と同じ大学に

進み、善也兄と一緒に大学に向かい、そして一緒に帰ってくる、と言うことで向坂家は未だ安泰だ。

話を戻すが、そしてその余波は勿論向坂兄妹の一員である僕にもきた。

……うん。正直に言ってしまうと、僕もそれなりにモテていたのだ。アレだろうね、皆。珍しいものを欲しがる、みたいな感じだったんだと思う。

ただ、僕は顔も知らない人と付き合うつもりはなく、そこは丁重にお断りして、友達になる、と言うスタンスをとっていた。

たまに顔見知りがいるのだけど、いくら友達とは言っても、昨日まで友達だった子に、いきなり友情から愛情に変えるなんてのは僕には無理な話だったので、やっぱりここも丁重にお断りをし、今まで通り友達を続けよう、と言う、さっきのとはまた別のスタンスを使った。

たまに男子生徒からの告白があったのだが、そう言う場合は即座に逃げた。

そして汐姉の教室に逃げ込んで、よく匿かくまってもらってた。しかし、汐姉の教室に逃げ込むと、汐姉の友達や、知らない先輩にちよっかいを掛けられたり、連絡先を聞かれたりするので、僕としてはあまり行きたくなかったのだけど、背に腹は変えられなくて、結局行く羽目になってしまったのだった。

だけど、それも汐姉が卒業して落ち着き、僕は平穏を取り戻した。ま、それも直ぐに終わってしまったけど。

とまあ、ようやく僕は長々とした思考を打ち切って、舌に言った。

「知ってるでしょ？」 『向坂ブランド』の長女

きと環の顔が固まった。ぱちくり、と目を見開かせて、二人は顔を向かい合わせる。

「こら、秋。もっと他に言い方あるでしょ。お姉様、とか」

「汐姉はちょっと黙ってようね」

笑顔を向けて言うと、むっ、と唇を尖らせる汐姉。その男心をくすぐる仕草に、ちよっと参る。その顔は反則だと思っ。

「……ほんとに、向坂先輩？」

と言うのはき。まあ、当然の反応だと思う。その当時の汐姉は、ちよっと反抗期に入っていて、髪の毛は金に染めて、化粧もちよっと濃かったのだ。しかし今はすっかり落ち着いて、髪は茶色だし、化粧もほんの少しのナチュラルメイク。とても同一人物とは思えないのもわかるかも。

「う……あ、あの時は若気の至りと言うかなんと言うか……結構私も気にしてるんだけど……。そ、そんなに変わったかしら……？」

髪の毛を指でクルクル巻き、珍しくいじらしい汐姉に、きと環が頬を染めた。男なら、誰でも見とれるだろうから、二人を責められることは出来ない。そして汐姉も相当気にしているらしく、ちよっと不安げに僕を見上げた。

「しゅ、秋。私、そんなに変わった？」

さてさて。ここはどう答えるべきか。僕のポケャブラリーからして、伝えることは難しいだろう。

「えーっと、まあ、変わったよ。うん。面影なく。あ、でも、僕は今の汐姉の方が好きだよ」

「う……あ、ありがとう」

「……？ どういたしまして？」

にこり、と笑って告げると、何故か琉を除く全員が頬を赤くした。……皆、熱でもあるのかな？

第三十三話：「汐姉とデート（5）」

あれから五人仲良く談笑し、数十分が経過した頃。

「ん……ふああ……あれ、なんで俺寝てたんだ？」

と、伸びをしながら起きる琉。舌が不自然なほどにニコニコして、環が気の毒そうに琉を見る。琉は、舌、環、僕、汐姉、桜さんの順に見てから、首を傾げた。よく理解できてないみたいだ。

「おはよう、琉」

誰も口にしないから、僕が口にした。可哀想な琉。君の扱いは、僕とは違った意味で酷いんだね。ちょっと仲間意識がわいてきたよ。

「え、ああ、うん。はよ、秋」

目をぱちぱち瞬まばたく琉。はよ、っておはようって意味だと思っ。

「……誰？ こいつ」

琉がそう言って指差したのは、我が家の魔王、汐姉。僕は見た。汐姉の頭に角が生えるのを。

「あ？」

とは、汐姉が不機嫌になる時特有の低い声。ひいつ、と悲鳴を上げる僕。皆は知らないだろうけど、僕は知ってる。

汐姉はメチャクチャ短気で、柔道黒帯だつてことを。それなら変質者対策の送り迎えはいらないんじゃないの？ ちなみに、善也兄は合気道有段者。つてことで、琉が汐姉に敵うはずもないのだ。

「ガキがナメた口利きいてると、捻ひねり潰つぶすわよ？」

につこり笑顔だけど目が笑ってない汐姉の、右手の中指が天を指す。つまり、天国へ逝いつちまえ宣告。

その汐姉の変貌ぶりに、壱と環の顔が凍り付き、琉が気圧されたように目を見開き、桜さんが戸惑う。つて言うか、僕の周りのほとんどの女の人が強いんだけど、どう言うことですか神様。試練ですか。一体なんの試練なんですか。

「表出る、小僧」

「えっ、ええっ？」

現実逃避をする僕の脳内に響く、汐姉の低い声と、琉の戸惑う声。意識を現実リアルに戻すと、そこには汐姉に片腕を掴まれた琉。その状態でもう脱出不可能と悟った。

「琉……」

「しゅ、秋っ。何が何だかわかんねえんだけどっ」

僕は琉に、ありつただけの憐あわれみの視線を送った。

「本気でやらないと、殺やられるよ」

「ちよつ、今、殺すつて漢字が入ったと思うんだけど、冗談だよな!? ……おいっ! シカトすんなっ! たすつ、助けるおおおお!」

そうして琉は、引きずられていった。

ごめん琉。僕は、魔王を止める術すべを知らないんだ……。

「……琉は星になったとさ」

そんなことを呟いて、ふと窓を見ると、琉が飛んでいた。……。
さよなら琉。君のことは忘れないよ。

合掌。そして南無。

あれから、琉を投げ飛ばした汐姉はにこやかに、顔面蒼白な琉を引きずって帰ってきた。そして今、汐姉は僕の隣に座り、琉は汐姉の向かいに座っている。

「クソガキ、これからは調子乗るんじゃないわよ?」

汐姉は笑いながらそう言うが、言ってる内容は実に酷い。

「はい……」

敬語なんて琉にはあるまじき、と思っていたが、それが今、覆された。汐姉によって、と言うのが少し複雑だけど。

「次、なんてないわよ。あれでも手加減してやったんだから、感謝しなさい」

「はい……」

「ところであんた誰？」

そのタイミングで聞きますか、汐姉よ。あまりの傍若無人振りに、血縁けつえんの僕としては涙が出るよ……。目から零れ落ちた雫を、皆から見られないように拭った。

「い、庵原琉二と申します……」

「イハラ？ 変わった名前ねー」

って、おい。自分から聞いといてそれは無いでしょ。

「よく言われます……」

琉は汐姉の投げ技がトラウマになったようで、逆らうことも出来ないみたいだ。無理もない。事実、汐姉が学園滞在中に投げた男は数知れず。その投げられた男たちは、トラウマになったりならなか

ったり、暫くは汐姉に近付こうとしない。

あの細い体のどこにそんな力があるんだろう？ って思わせるほどに強く、自分の三倍の面積と体積はありそうな巨漢を軽々と投げた汐姉。とりあえず、向坂家は汐姉と善也兄のおかげで安泰……なのかな？

「……秋、この女性は一体誰だ？」

居心地が悪そうに僕を見る琉。あー。そっかそっか。琉には説明してなかったか。そうして僕は、本日二度目の姉紹介。

「向坂汐。大学一年生。血が繋がっていることがたまに恥ずかしくなるような姉です……痛いっ！」

「だ、れ、が！ 恥曝はじしだつてえ〜〜!？」

ぐりぐりぐりぐり。

僕のつま先が、汐姉のヒールで潰されて。

ぎゅううううう。

僕の頬が、汐姉の指に摘まれて。

「いひゃいひゃいひゃい！ ぐめんなひゃい〜〜!！」

「許さないわよ〜〜!！」

げ、幻覚かなあ。汐姉にはないはずの八重歯、って言うか牙生えてるように見えるのは……。

滲み出る涙を堪え、向かいに座る三人に救難信号を送るも、目を

逸らされた。お前ら……薄情なつ……！ それなら僕にだって考えがあるぞつ！

「ひつ、ひおねえ！ ほりゃ、三人に見りやりえてりゆよ！ ね！？ だきやら、はなひて〜！」

「そうはさせるか！ その三人、もう帰っていいわよ？ ここからは、姉弟の話し合いだから、ね？ ……ちなみに、誰かに言ったらどうなるか、分かってるわよね？」

くつ！ 流石汐姉、脅すのを忘れず、帰宅を促すとは、恐るべし！

三人は、僕に視線をよこしてきた。帰っていいの？ って言う視線。……。よく考えれば、三人は関係ないんだよなあ……。

「……み、みんなや、ま、また今度……僕が生きてたりや、会いりゆよ」

僕がほぼ半泣き状態でそう告げると、三人は、くつ、と涙を堪えて店を出て行った。今度、何か奢おしってもらおう。それでチャラだからな。

「さあ、私たちも帰りましょうか」

「えっ？」

見ると、頬から汐姉の指が離れていた。ヒリヒリして痛いけど。

「当分、あんたは私の奴隷よ？」

「ど、奴隷……」

「ここで人権とか主張したら、また頼とか抓つねられる？」

「あはっ、じゃあね、桜。今度、家に遊びに来なさいよ？」

「うん。わかったよ」

と、桜さんは笑いながら頷く。桜さんが家に来る時は、夕ヶちゃん呼ばないでおこう。って言うか、夕姉から夕ヶちゃん入場拒否令が出るだろうけど。

「バイバイ、夕ちゃ」

「ちょっと待って。桜、あんた一人で帰る気？」

帰ろうとする桜さんを、夕姉が引き留める。僕としても、桜さん一人で帰すのは反対だ。そして素早く携帯を取り出し、誰かに電話をする夕姉を、僕は横目で見た。

「あー、うん。私だけど、今ヒマ？ あっそう。じゃあ桜、家まで送ってくんない？ いい？ 場所はいつもの店よ。わかった？ ありがと。じゃあね」

通話時間、三十秒足らず。

パチンと携帯を閉じると、夕姉はニコリと笑った。

「店の中で十分、待ってなさい。あんたのよく知ってる人が来るから」

「え？ 誰？」

僕も聞きたい。そんな視線に気付いたのか、汐姉が苦笑した。そして僕の腕を掴み、店の自動ドアまで引きずっていく。

「ほら、行くわよ、秋」

「え、あ、うん」

戸惑う桜さんを置いて、僕たちは店を出た。隣を歩く汐姉は、何故か楽しげに鼻歌を歌っていた。

もうすっかり暗くなり、時間が経つのは早い、と改めて感じる。隣を歩く汐姉に、ふと、気になったことを口にしてみた。

「汐姉、桜さんの送り迎えする人って、誰？」

「……大学で桜に好意を抱く好青年」

え、と固まる。いいのか？ それっていいのか？ 過保護な琉に

バシたら、ヤバいんじゃないの？

「なによ、信用ならないって顔ね。まあ最後まで聞きなさいって。大学でね、桜は眼鏡を外さないの。要するに、桜の外見に惚れたんじゃないのよ、好青年は。しかも私の、男では初めての親友なんだからさ」

「はあ、と生返事しか出来ない僕。まあ、汐姉が選んだのだから、間違いはないだろう。汐姉の人を見る目は確かなのだ。」

「恋のキューピッドって、私の柄じゃないんだけど」

照れくさそうに笑う汐姉。僕はその頭を撫でた。

「確かに、そうかもね」

「でしょ？」

二人で、笑い合った。

暗い夜道。隣を歩くのは、自慢の姉。友達思いで家族思いな、自慢の姉だ。

「僕も、相当なシスコンらしいなあ」

どの言葉に、隣の姉が、ニヤリと笑った。

「私も、相当なブラコンよ。善也兄は、シスコンとブラコンが混ざ

ってるけど」

「僕たち、って言うか、兄妹全員そんなものだと思うよ」

「確かに、そうね」

じゃあ、と汐姉が続ける。

「愛しの兄妹が待つ我が家に、帰りますか？」

「そうだね」

また、顔を見合わせて笑った。

夏休みは、まだ始まったばかり。今度、家族で旅行に行きたいな、と言う考えは、今日の夕食に言ってみよう。

はしゃぐ裕太。涼やかに笑う善也兄。僕の隣を歩く菊花。穏やかな笑みを零す汐姉。唇の端を上げる母さん。笑う母さんを見て、嬉しそくに笑う父さん。そして、苦笑いの僕。

考えただけで、頬が緩んだ。

第三十四話：「向坂家」

閉め切った窓の外から聞こえる蝉の鳴き声。その声で目が覚めた僕。

記録的猛暑を叩き出した今日は、何もしないで家にいるのが一番。そう結論付けた僕はエアコンの温度を22度に設定して、ソファーに寝転がりながら涼んでいた。そしてその視界に、我が兄妹の姿が映った。みんな寝起きのようで、あくびをしながら、ソファーの上にいる僕に気付く。物凄いシンクロだなあ、と思った。

「秋、おはよー」

と、汐姉。

「秋、良く眠れたかい？」

と、善也兄。

「秋お兄ちゃん、おはようございます」

と、菊花。

「秋兄、おはよー」

と、裕太。

「あ、みんな、おはよー」

と、僕。

体を起こすと、みんながそれぞれ定位置に座る。

テレビの正面に位置するソファは三人用で、そのど真ん中には僕が座り、その左隣には菊花、右隣には汐姉。テレビに側面を見せられているソファは二人用で二つあり、それは向き合うような位置に。そしてその片方には、善也兄と裕太が座った。

さてさて、ではここで、向坂家の内装を簡単に説明しよう。

まず、リビングの隅にあるランドピアノ。菊花が弾くためだ。実は僕もピアノを習ってたんだけど、中学生になってから忙しくなってきたから止めた。

そして家族全員が座れるダイニングテーブル。母さん好みの黒で作られたキッチン。

二階にはそれぞれの部屋。大体そんな感じ。

「ふああ〜」

そんなあくびと共に、パシン、と後ろから頭を叩かれる。思わず振り返ると、そこには我が家の大魔王　汐姉は魔王　もとい、母さんがいた。どうやら寝起きのようで、とことん機嫌が悪い。頭ボサボサでパジャマのボタン掛け間違えてるし。がさつなんだよなあ、母さんは。若作りしすぎてくくらいに若々しい母さんの美貌にボサボサ頭とよれよれパジャマがミスマッチ。よく見れば、靴下も左右違う。……どこまでがさつなんだ、一体。

「母さん、仕事は？」

頭をさすりながら尋ねる。ちよつと痛かったんだよ。つて言うか、母さんと父さんは共働きで、普段なら仕事中だよな？ 秘書も楽しやねえなあって言ってたの、母さんだよな？

「んふふー？」 母さんの鼻息。

牛乳パックを開けて、そのまま飲み始める母を何とも言えない気持ちで見ると、おどろきながらも程がある。コップを使うのが嫌なら、せめて腰に手を当てるのは止めて。つて言うか、飲んでから話してよ。僕は鼻息で会話する特技なんて持ち合わせてないから。そんな僕の思いを余所に、母は牛乳パックを飲み終えた。

「休みだよ、休み。ナナが、今日有給とつてどこか行くつて言うから」

「はいはい、ごちそうさまー」

と、僕。

さり気なく惚気ほろられてもうお腹いっぱい。説明すると、ナナ、とは父さんのことだ。本当は七瀬ナナセって名前なんだけど、母さんがそれを省略した。

「で？ 肝心の父さんはどこのかしら？」

そう汐姉が言う。その言葉に、善也兄と裕太と菊花が辺りを見回すも、見つからず。

そして母さんの顔がいやらしく歪んだ。……あ、なんか、嫌な予感。

「ああ、まあ、昨日頑張っ

「はいはいはい。下ネタ禁止！。よい子に悪影響だからねー」

なんだよ、と不満そうに口を尖らせる母さん。なんだよって、子供にそう言う話を聞かせる母さんの方がなんだよ。しかも今は太陽が昇ってるんだよ。そう言う話は夜にしてください。……いや、夜なら言ってもいいじゃないけど。

ともあれ、母さんが落とした爆弾は、確実に僕たち兄妹に影響を及ぼした。

菊花は顔真っ赤だし、善也兄は唾然としてるし、裕太は額に手を当てて、まるで世界の終わりみたいな顔してるし。僕は適応能力が高いの知らないけど、母さんの下ネタは慣れてしまった。汐姉も順応して、平然としている。

と、その時、

「ふあゝ、みんなおはよ〜」

ゴシゴシと目をこすりながらリビングに入ってきた父さん。僕たち兄妹の白い目が、父さんに突き刺さったのは言うまでもない。

『えっ？ えっ？ な、何っ？ ぼく、何かした？ ちょっ、やめ、そんな目で見ないでっ』

とは、僕たちの目を見た父さんの言葉である。ついには泣き出してしまったから、今度は兄妹みんなで慰めたけど。

【次回に続く】

『番外編：汐の独白』

はつきり言って、秋って極度の鈍感。しかも無自覚で人に優しくしちゃうから、なんて言うの？ ほら、現代の女の子が求めている、さり気ない優しさ、みたいな？ 思えば秋は小さい時からそんな感じ。自分のことは後回しで、他人優先。

今でも覚えてるけど、あれは小学校の時。私が四年生で、秋が二年生。あの当時、私クラスのガキ大将みたいな奴にいじめられてたの。ほら、クラスに一人はいるじゃん。好きな子をいじめるって男子。あれってやってる本人は気にかけて欲しいからなのか知らないけど、やられてる方はいい迷惑なのよね。え？ 話が逸れてる？ うっさいわね。女の話はコロコロ変わるのよ。文句ある？ あんたも投げてあげようか？ ……ふん、わかればいいのよ。

で、ある日体育館裏に呼び出されて行ったのよ。そしたら、髪の毛引つ張るわ、叩かれるわ。その時の私はまだ柔道やってなくて、今では考えられないくらい泣き虫だったの。

……え？ 信じられない？ ぶっ飛ばすわよ？ ……ごほん。話を戻すけど、とうとう泣き出しちゃってねえ、私。そしたらさ、聞こえたのよ後ろから。『しおねえ』って。振り向くと、秋が泣きそうな顔して立ってんの。なんで秋が泣くんだろうなあってその時ほんやり思ってたんだけど、今なら分かる。あいつ、人の痛みが分かっちゃう奴だから。どこまでも優しくさんのよ。それから秋はね、『しおねえをいじめるなっ』って言って、自分より二倍の身長はあるガキ大将に向かって行ったのよ。あいつちっちゃい時から凄く華奢なのに、無謀にも程があるでしょ？ あーでも、あの時はキョウときたなあ。弟じゃなかったら絶対惚れてた。……笑うな、そこ。

ん？ 結局どうなったか？ あー、あの後ね、偶然近くを通りかかった善也に助けてもらったわ。秋は二発ぐらいパンチ喰らっちゃってねー。口から血が出てたわ。もう善也ったらキレル寸前。笑ってガキ大将たちを説教してたけど、頬が引き攣ってたわよ。

でもさ、あいつ聞いてきたのよ。『しおねえ、だいじょうぶ？ ケガしてない？』って。笑っちゃうわよね。私よりあんだの方が大丈夫って感じなのに。

中学の時もね、友達が不良たちにリンチに合ってるって聞いて教室飛び出してそこに向かったらしいのよ。私は後からそれを聞いて駆けつけたの。そしたら秋が殴られてたから、ぶん投げてやったわ、そいつ。その時私はもう柔道黒帯だったから。全員、ぶっ飛ばして気絶させた。

それから、秋にも一発ビンタを喰らわせてやったわ。物凄く痛そうな顔してたけど、秋は笑って、私の頭を撫でた。『心配してくれ

てありがと。僕は大丈夫だから、泣かないで』って言いながらね。その瞬間、キレたわ、私。つか、泣いたわ。いや、もう泣いてたんだけど。あんな優しい奴、他にはいないでしょ。あー、なんか思い出したらまたムカついてきた。帰ったらあのバカにちよつと一発食らわしてやるうかしら。

……ん？ 結局、何が言いたいのかって？ 秋は私の理想ってことよ。なんか文句ある？

『善也の独白』

秋は優しさの固まりだと思う。偽善とかお節介だとか言う人もいるけど、秋の優しさはそう言うものじゃない。見返りを求めない優しさ。だけどそれは、言い変えるなら、犠牲の上で成り立つ利他^{りた}。秋はそれを無意識的にやってしまうから。だから、秋に媚びてぼくや汐、裕太や菊花に近付こうとする奴は嫌い。と言うか、何でみんな秋の魅力に気付かないのか不思議だ。また秋も鈍感だから、媚びられてることに気付かない。

ああ、そう言えば、汐が大学で売ってる秋の写真、凄く売れてるらしい。……秋、街を歩いて注目されないのかな？ って言うか、汐だったら、秋の写真だけじゃなく、ぼくと裕太と菊花の写真まで売ってるみたいなんだよなあ。そこまでお金に困ってるんだらうか。

……今度、相談に乗ってあげよう。

え？ シスコン？ ……ううん、否定できない。ははは。でも汐にはよくブラコンって言われるんだ。で、秋にはシスコンって言われる。結局どっちなんだろうねえ。

って言うか、汐は何でぼくのこと、お兄ちゃんって呼んでくれな
いんだろ……。

【こっちもつづく】

第三十五話：「向坂家と水辺にて」

母さんの名前は比呂ヒロ。時々、父さんと母さんの名前を逆にした方がよかつたんじゃないかな、と思う。でも、がさつな母さんに七瀬と言う名前は似合わないし、可憐な父さんに比呂と言う名前は似合わないなあ、と考え直して思考を中断。

軽く現実逃避気味な僕の視線はソファアに座る母さんと父さんへ。

「なあ、ナナ。今日は有給とってまでどこに行くんだよ」

「えー？ みんなで、どこか行こうかなーって思ってた」

父さんのその言葉に、その場にいる全員が嫌そうな顔をする。まあ、当たり前だ。誰が好き好んでこの炎天下、遊びに行こうとするのだろう。少なくとも僕は嫌だ。

「めんどくせー」

そう言って、腹をボリボリ掻く母。自分の実の親だと思つと、涙が出てきそう。がさつすぎるよ……。

「で？ お父さんは、どこに行くつもりなの？」

汐姉の言葉に、父さんの顔が綻んだ。

「実はね、みんなで、最近出来たウォーターパーク行こうかなって」

みんなの耳が、ピクツと動いた。

ウォーターパークとは、最近出来た大型施設。十八のプールがあつて今、最も人気がある所だ。何やら人気がありすぎて、人が溢れんばかりに押し寄せてくるらしいが。

「でも、特別招待券は？」

善也兄が顎あごに手を当てて言った。

あまりにも人が多い為、ウォーターパークは事故を予防して、特別招待券を作った。それが無いと、入場出来ないのだ。その特別招待券を手に入れるには、ウォーターパークを経営する『ミヤビ財閥』のホームページで購入するしかない。しかし特別招待券は1ヶ月に1回行われる発売時刻から数分で完売。

購入するとしたら、もうネットオークションしかない。その値段は数万にも及ぶと言われている。

「まさかナナ、お前、ネットオークションで万単位のヤツを……？」

母さんの目がギラリと、危険な光を放つ。我が家の大黒柱的存在な母さんは、金庫番でもあり、お金を勝手に使うのを許さないのだ。がさつなクセに、こう言う所はうるさい。

父さんは慌てて両手を顔の前で振った。

「違うよヒロさん！ 誠マコトくんから貰ったんだってば！」

「誠が？」

母さんの問いに、うん、と頷く父さん。

誠くんとは、僕らの従兄弟いとこであり、タケちゃんの弟でもあり、日々バイトに励む勤労青年である。現在、大学一年生で汐姉と同じ年。僕たち兄妹はマコちゃんと呼んでいる。

「誠くんと偶然会った時、『オレはもう一回行ってるんで、使ってください』って言われて貰ったんだよ」

マコちゃん、色んな所でバイトしてて、結構顔が広いからなあ。バイト先の誰かから貰ったんだろ。タケちゃんと違ってマコちゃんは一途で、彼女一筋な人だ。その『もう一回行ってる』は、絶対に彼女で行ったんだと思う。なんで兄弟であれだけ違うんだろ。……まあ、僕が言えたことじゃないか。

「なんだよ、ナナ。だから私に、和真カズマから特別招待券貰うなって言ってたのか」

母さんのその言葉に、父さんの顔が引き攣こった。和真、とはミヤビ財閥の会長で、母さんが秘書として務めているのが、その和真さんなのだ。

父さんは和真さんを嫌っている。その理由はどうやら、大学時代に父さんと和真さんが、母さんのことを取り合ったとかなんとか。僕としては、母さんのどこが好きになったのか不思議でしょうがない。そして結果は父さんの勝利。

「そうだよな。ナナは理由もなくそんなこと言わねえもんな」

笑いながら父さんの頭を撫でる母さん。父さんの顔は引き攣こったままだ。

……絶対、嫉妬だよな。

「あいつ、それで、どうするの？ 行く？」

誤魔化すように言った父さんの言葉に、みんなが動きを止める。

ウォーターパーク＝プール＝涼しい。そんな図式が僕らの頭の中で展開されて

それからの行動は、早かった。

そして現在、ウォーターパーク。人はざっと見て、二百人いるかいないか。ウォーターパークが広大なので、そう数えられない。日を遮る磨り硝子すのような屋根。ウォーターライダー。滑らないように作られた床。南国の花も植えられている。

「母さんたち、遅いなあ……」

僕の言葉に、頷く向坂家の男性陣。女は支度に時間が掛かるってタケちゃんによく言うけど、本当にそうなんだなあ。暫くボーっと

立っていると、後ろから突然の衝撃。

「うぎゃっ!」

変な声出ちゃった! つーか、なんなんだ一体! 心臓止まるかと思っただわ!!

「お待たせっ」

「まあ、大体は予想してたよ……汐姉」

背中からタツクルをかましてきたのは汐姉でした。そしてそのまま、僕のお腹に手が回る。

「細っ! 細すぎっ!」

「僕のコンプレックスをそれ以上刺激しないで!」

ふと、右手に柔らかい感触。見ると、菊花が僕の手を握っていた。

「秋お兄ちゃん、どうです? 私、変じゃないですか?」

「変なんてとんでもない。凄く可愛いよ」

ポツと頬を赤らめてはにかむ菊花は更に可愛い。十代前半の子が持つ可愛いと綺麗の中間のオーラを、菊花は上手に纏っているよ、うん。

そして二の腕が掴まれる感触。……もうパターンは読めた。

「秋、お前、もうちょっとぶよぶよしてるかと思っただけど、結構筋肉ついてるな。やっぱり、どんなに華奢で女顔でも、男なんだ」

「一言余計だよ！」

気にしてることズバズバ言わないで！

とまあ、そんなこんなで全員揃った向坂家。汐姉は白のビキニで、スタイルの良さが際立っている。菊花は淡いピンクのビキニで、胸元にあしらわれたリボンがまた可愛い。母さんは黒いビキニで腰にパレオを巻いている。外見が二十代だから似合っているんだけど、誰も四児の母親だとは思わないだろうなあ。

って言うか、そろそろ離れてほしい。

「母さん、ほら、父さんが寂しそうな目でこっち見てるよ。行ってあげたら？」

「めんどくさいから嫌だ。それより息子いじりの方が大事だろ。もっと大事なのが毎朝の牛乳と毎晩の酒」

「確実に優先順位違ってるだろ！」

つづく。

『菊花の手紙』

天国のお母様とお父様へ

二人とも、元気ですか？

私は元気です。私が向坂家の養子になってから、10年が経ちました。

あ、あと、私が5歳の時、お母様とお父様が事故に遭って帰らぬ人となってしまい、10年が経ちましたね。早いような遅いような、不思議な感じですよ。

お母様とお父様が死んでから、祖父母もいない私は親戚中をたらい回しになっていた所を、今のお母さんとお父さんが引き取ってくれました。お母さんとお父さんには、感謝してもし足りないですよ。お母さんから聞いたんですけど、お母様とお母さんは親友だったそうですね。私、聞いて驚きました。

初めて、今のお家に行った日　ユウちゃん、汐お姉ちゃん、善也お兄ちゃん、秋お兄ちゃんは、私に優しくしてくれて、なにや

ら汐お姉ちゃんは妹が欲しかったらしく、私を本当の妹のように扱ってくれました。

その日、私は久しぶりに泣いてしまいました。

もう、お母様とお父様の顔は覚えていませんが、写真は有るので寂しくはないですから、安心してください。それに私には、傍にいてくれる家族がいます。

今、私は凄く幸せです。

私と今の家族が出会えたのって、天文学的な確率だと思うんです。

お母様とお母さんが知り合ってなかったら、私が生まれていなかったら、お母様とお父様が事故に遭っていなかったら、もしかしたら、秋お兄ちゃんたちが生まれていなかったら、なんてこともあるでしょう。

人生は奇跡の連続だ、とお父様は言っていましたね。私も、そうだと思います。

私がお母様とお父様の子供として産まれてきたのも奇跡で、私と今の家族が出会えたのも奇跡。いえ、奇跡だと、私がそう思っていただけなのかもしれません。

私は、前のお母さんとお父さんが事故に遭って良かったとは思っていません。今でも、その当時のことを思い出すと、悲しくて涙が溢れてきます。

でも、悲しい出来事が遭った後には、必ず幸せなことがある。私はそれを経験しました。

だから今、私は幸せです。幸せすぎて怖くないか、とお父様に聞かれそうなので、先にお答えしますね。

……うーん。どうなんでしょう。多分、怖くない、です。そんな怖さを忘れてしまつくらい、幸せな気持ちで満たされているんだと思います。

私が怖い夢を見て眠れない時は、秋お兄ちゃんが私の頭を撫でて安心させてくれます。心配そうな顔で、ずっと。

汐お姉ちゃんは私を抱き締めて、穏やかな気持ちにさせてくれます。それから、一緒に寝たりします。汐お姉ちゃんと寝ると、とても安らかに眠れるんです。

善也お兄ちゃんは笑って、元気づけてくれます。でも、眉尻を下げて笑っているの、私より不安そうです。その顔を見て、善也お兄ちゃんには悪いですけど、私はクスツと笑ってしまいます。

ユウちゃんはおどけて、私を笑わせようとします。眠たそうな目で、一生懸命。ユウちゃんには、本当に悪いことをしています。

お母さんはホットミルクを作ってくれます。お母さんは無類の牛乳好きでお酒好きです。私もお酒は飲みますが、ペースではお母さんには適いません。その代わり、先に酔うのはお母さんですけど。

お父さんが泣きながら私に抱きつこうとするけど、それはお母さんの強烈な蹴りによって防がれています。お母さんが言うには、お

父さんは『ハーレムラブコメ体質』と言うものらしく、不死身なのだそうです。よく意味はわからないんですけど、凄いなあ、と思います。

ふふふ。なんだから、長々とごめんなさい。

私は元気でやっているので、心配しないでくださいね。

私の秘密を教えますけど……お父様は聞かない方がいいかもしれ
ませんね。うふふ。

私の初恋は、ですね。

なんですよ。

うふふ。秘密にしてくださいね。

今でも好きですけど、それはもう家族としての愛情ですから。
だからお父様、怒らないでくださいね？

では、おやすみなさい。

菊花より、愛を込めて

第三十六話：「向坂家と大滝にて」

家族全員で、やたらと注目を浴びながら歩く。

「おい、秋！ お前、あそこに飛び込め！」

母さんがそう言って指したのは、『大滝』と言うプールで、上から水が落ちてくる、まさに滝のようなプールなのだ。

「嫌だよ！ 死んじゃう！」

泳げないと言う訳では無いけど、上から落ちてくる水の重圧で水面に上がれなくなることは確かだ。だって、立て札にも『危険。注意して泳いでください』って書いてあるし。って言うか、それなら作るなよって話なんだけど。

「つまんねえなあ。 よし。ナナ、行け」

ガシツと父さんの腕を掴む母さん。

「えええ！？ ヒロさん、ちょっと待って！ 手を離して！ ちよ
っ
」

「おらあ！ 行っていい！」

「いやあああああ！」

投げ飛ばされた父さんは、まるで狙ったかのように滝プールの中
心へ。

「がぼぼ！　ぐばば！　うぶぶぶぶ！？」

『飛び込まないでくださいーい』

「ナナー！　お前なら出来る！　お前はハーレムラブコメのお約束
体質『不死身』だろ！？」

お約束なのは知らないが、確かに父さんの体は頑丈だ。

「大丈夫かしら……」

「汐、父さんは大丈夫だよ。きっと生きてるって」

いや、善也兄。きっとはマズイって。それ、多分ってことじゃん。

「お父さん……苦しそうです……」

「菊花、父さんは大丈夫だよ、絶対に」

裕太、なんでそんな自信満々なの？

すると誰かさんの大爆笑が聞こえて、そっちに視線をやる。

……あれ？　よそ見してた隙に、父さんが見えなくなった。首を
回して辺りを見回してみるけど、見当たらない。再びプールに目を
戻すと

「はいはい。わかってるっつーの」

「ヒロさんは、絶対に渡さないからね!」

「へえへえ。私はナナの物ですよ」

「ヒロさんは物じゃないよ!」

「あーそーだなー」

呆然としている僕らをよそに、二人は言い争う。

「ほら、見ろよ。お前がさっさと上がってこないから、菊花が泣いちまったじゃねえか」

おーよしよし、と菊花の頭を撫でる母さん。菊花は涙で濡れた瞳を目一杯に開いて、父さんを見ている。

「よっ、良かったです……お父さんまで、死んでしまうんじゃないかって思って……」

「菊花……お父さんの胸に飛び込んでおい」

「私の菊花に触るな! つつつか、お前は誰にでも抱きつこうとするな!」

そう叫んだ母さんが、父さんに強烈な回し蹴りを一発ガツン。

「ぎゃぶう!?!」

「あ」

華奢な父さんは、そのまま　　大滝へ。

「ゲボガボゴボ!？」

『飛び込まないでください』

監視員の声が、虚しく響く。

「もう……何もかもがめんどくさい……」

ツッコむことさえ拒否した僕だった。

『裕太の独白』

秋兄ちゃんは、おれの憧れだ。

秋兄ちゃんのように、自分より他人のことを考えられるようになりたい。そうしたら、みんな、おれが守ってやれると思うんだ。いつでも正しい善也兄ちゃん、プライドが高い汐姉ちゃん、どこまでも優しい秋兄ちゃん、脆^{もろ}そうで誰よりも強い菊花、がさつだけど意外と泣き虫な母さん、いつも母さんにベツタリな父さん。

おれが守りたいのは、それだけ。

ただそれだけが、おれの存在する意味。一年前のある日　　そう
秋兄ちゃんに言ったら、叱られてしまった。

『誰かを守る為の人生なんて、悲しいよ。裕太の人生なんだ。僕は裕太に、楽しく生きてもらいたいし、自分の人生を生きてもらいたい。でも、そこまで人を考える裕太は、凄^{すご}いと思う』

それは秋兄ちゃんだよ。そう言ったのだけど、秋兄ちゃんは笑って否定した。

『僕はそんな凄い人じゃないよ。みんなを守れるような力もない。平々凡々、人並み月並み。あの日宮千歳と比べたら、月とスッポン。ちっぱけな僕は、誰かを守る力なんてない』

その顔で、平凡なのか？

秋兄ちゃんは、いつも自分に自信がない。それに、あの日宮千歳と比べる方が間違ってると思う。

秋兄ちゃんは、何でそんなに自分を卑下するんだろう。おれの中学には、秋兄ちゃんを好きな子だっている。

何でも話を聞くと、登校中に自転車がパンクして困っていた所を、秋兄ちゃんに助けてもらったらしい。他の子にも聞くと、大体そんな感じ。自分の顔も名前も知らないはずなのに、プリントを持って

もらった、とか、転んだ時に絆創膏もらった、とか。話を聞く限り、誰にでも優しくしてる。

秋兄ちゃんの恋人になる人は、きつと大変だ。でもその人も、秋兄ちゃんの優しさに惹かれたんなら、理解してくれると思う。

秋兄ちゃんの優しさは、秋兄ちゃんにとっては普通なことだっことを。

おれのクラスの委員長も秋兄ちゃんが好きなんじゃないかなあ、多分。今年の学園祭は、大変だ。委員長が、張り切っちゃうだろうから。

秋兄ちゃんは、おれと菊花の中学校の学園祭、汐姉ちゃんと善也兄ちゃんの大学の学園祭には必ず来る。こう言うイベント事は欠かさない人だ。だから、今年は大変だ。

秋兄ちゃんを知らない一年生と二年生は、三年生の女子の浮かれっぷりに驚くだろう。それに、今回はおれと菊花の最後の学園祭と言うことで、善也兄ちゃんと汐姉ちゃんも来るだろうから、更に浮かれる。汐姉ちゃんと善也兄ちゃんは、おれの中学校では有名。

って言うか、この地域で、二人を知らない学生はいない。もう情報も流れているだろうから、今年の文化祭は人が集まってくるだろう。写真部の連中なんて、いまからフィルムを買い漁っている。

『向坂兄妹を全員見られるなんて、幸せっ！ 菊花、裕太、学園祭は目一杯萌えさせてね！』

とは、おれのクラスの変態、西園寺冷子サイオンジレイコの言葉である。別名、ヒヤコ。美少女のクセに、萌え萌えうるさいから、困り者である。

話は変わるけど、中学生にとって、大学生は恋愛対象外。っておれは思ってる。

まあ、汐姉ちゃんは中学生なんか眼中にないだろうし、善也兄ちゃんも彼女がいるから興味なし。汐姉ちゃんを頑張つて落とそうとしている奴が一杯いるけど、絶対無理だ。だって、汐姉ちゃんの好みのタイプは秋兄ちゃんだから。秋兄ちゃん以上にいい男なんて、中々いない。少なくとも、おれの学校には。

中学生にとって、高校生は恋愛対象内。おれは、そう思っている。

だから、今年の学園祭は大変だ。

秋兄ちゃんは女顔で、男にも女にもモテる。

学園祭。そこは戦場となるだろう。

秋兄ちゃんは、おれが守る。

そう胸に誓う。決戦は、九月だ。

「よし、後で菊花と相談しよう」

風呂場で呟いた言葉は、思ったより響いた。

第三十七話：「向坂家と平民Aの初恋」

視線が痛い。その原因は、僕の右腕に掴まっている菊花。さっきのあの、「父さん、溺死寸前？」事件がトラウマになったみたいで、ちよつと足取りが危なかったので、僕の腕に掴まらせているのだ。そして僕と菊花の両脇を歩く母さんと汐姉。……うん、どう見ても、僕が三人を連れている、みたいな構図になってしまったのだ。

「秋お兄ちゃん」

「ん？」

菊花を見ると　まだ怖いのか　潤ませた瞳で、こう言った。

「もう少し、このままでいいですか？」

カハア、と、吐血に似たような音がした。発信源、僕の心。

「菊花……そう言うことは、今後3年間、誰にも言わないでね」

「？　はい、わかりました」

うん。菊花は物分りのいい子で助かる。しかし、兄としては、無自覚にあんなことが言えちゃう菊花が心配でしょうがない。

家族みんなで昼食をとろうと、水着のままに入れる店に入る。流石ミヤビ財閥。設備充実だなあ、と思いながら、店内にあるテレビが目に入った。

そこには

『行けば楽しいウォーターパーク。今ならチケットが八割引で手に入る。この夏はウォーターパークで決まりだな』

千歳がいた。

……。

「えっ ええええええ？」

な、何で？ え、え、ええええ？ って言うかこれ、CMだよな？

僕の視線の先に気付いたのか、母さんが、ああ、と納得したような顔をした。

「和真のどこの姪っ子じゃないか。そういやあ、CM撮ってたなあ、

この前」

「ち、ちと……日宮千歳が？」

千歳と友達だって言うつと混乱が起きそうだったから、慌てて言い直した。だけど、無意識な内に呼び捨てに慣れていたので、フルネームが言いにくい。って言うか、千歳、ミヤビ財閥がスポンサーだったんだ。姪っ子とか初めて聞いた。

「あら、千歳じゃない」

隣から聞こえてきた声。え？ と、横を見る。

「し、汐姉、知り合い？」

「ええ、そうよ。去年のミスコンでね」

「へ、へえ……」

何だこれ。向坂家と日宮家、結構関わってるけど。なんか、今さら仲がいいなんて、言えなくなっちゃったよ。ごめん千歳。今は他人のフリをします。世界は狭い。

乾いた笑いを零す僕を、みんなは変な目で見てきた。

父さん、母さん、菊花、汐姉が、どこかへ遊びに行ってしまう、取り残された僕と裕太と善也兄。

男三人、ぼつんと立っているのはなんだか寂しい絵である。でもまあ、騒がしくないから僕はこのメンバー好き。

「……秋兄ちゃんはさ、好きな人、いんの？」

「んにゃあ？」

やば。気を抜きすぎて、変な声が出てしまった。裕太が引いてる。善也兄、フォロープリーズ。

「秋に好きな人が出来たら、汐と菊花と母さんが嫉妬しちゃうだろうなあ」

ははは、と爽やかに笑う善也兄の歯は白く輝いてた。……いやいやいや。兄さん、そこは笑うところじゃないし。しかも、何で母さんが入ってるわけ？ って言うか、フォローしてないよね、それ。

「って言うか、鈍感な秋兄ちゃんに、好きな人なんているわけないか」

「裕太もそう思うかい？」

「なんで僕が好きな人いないって決め付けちゃってるんですか御兄弟」

「「えっ？ いるの？」」

「え……………いない」

よくわからないけど、一瞬、千歳の顔がちらつく。それを疑問に思う時間もなく、気付けば口にしていた。

「 わかんない」

いない、とは言えないし、いる、とも言えない。だから、わかんない。そもそも恋ってなんだ。 なんて、中学生が言うようなことを思ってみた。でも、本当になんなんだろう。

「善也兄ちゃん、このことはおれたちだけの秘密だから」

「わかってるよ。絶対誰にも言わない」

思考に耽^{ふけ}る僕の隣で、こんな会話がされていた。

中学生ってのは、色々と大人ぶりたくてしょうがないんだと思う。

好きでもない彼女、好きでもない彼氏　いや、中には真剣に好きって人もいただろうけど　を作って、友達に自慢して、数ヶ月もしない内に別れる。僕が知る中での最短記録は半日。十二時間だけの恋人って言えば聞こえはいいいけど、要は遊びだったってことだ。悪ぶりたくて、タバコを吸ったり、お酒を飲んだり、先生に反抗したり。言っておくけど、菊花はその中に含まれない。あの子は純粹な酒好きだ。それもどうかと思うけど。

みんな、とにかく悪くなりたくて、しょうがない。一步でも早く大人になりたくて、背伸びをしている。まあ、中学生みんながそうじゃないんだけど。

僕はそれが理解出来なくて、いつも不思議でしょうがなかった。

「向坂くんが、好きだよ」

そう僕に告げたのは、誰だったっけ。今はもう、名前も顔も思い出せない誰かがそう言った。

「優しい向坂くんが好き。人の為に泣ける向坂くんが好き。笑ってる向坂くんが好き」

随分、好き好きと軽く言う人だった。放課後、屋上に行くと、彼女はいつもそこにいた。

「時々、向坂くんを私だけのものにしたいなあ、って思うんだ。あんまり、他の女の子と喋らないで欲しい。他の女の子に優しくしないで欲しい。でも優しくない向坂くんは嫌。そんなの向坂くんじゃない」

独占欲が強くて、ワガママな人だった。僕と彼女は付き合っさえないのに。手を繋いだこともなければ、デートしたこともない。

「ねえ、向坂くん。わたしのこと、好き？」

上目遣いで聞いてくる彼女を悲しませたくはなくて、好きです、と嘘をついた。そう言つと、決まって必ず、

「嘘つき」

と彼女は言った。

「ねえ、向坂くん。今日、転んだ女の子を保健室まで連れてってあげたんでしょ？」

頬を膨らませながら言う彼女。僕はなんだかばつが悪くて、頬を搔いた。

まだ寒い、三月。凍えそうな空の下。いつもの屋上で、彼女は言った。

「向坂くん、わたしのこと、忘れないでね」

彼女の胸にある、紅い^{あか}花が、別れの時を告げていた。僕は笑って言う。

さよならなら、先輩。またいつか、どこかで会えたらいいですね。

彼女とはそれっきり会ってない。

今思えば、あれが僕の初恋だったのかもしれない。でも確かめる術すべがなくて、よくわからない。

だけど、今でも心に残っている、彼女との会話。顔も名前も思い出せないけど、それだけは覚えていいる。

「これから先、もし向坂くんに好きな人が出来るとしたら、その人は、優しい人だよ」

僕は笑った。先輩は超能力者ですか、なんて冗談を言った。彼女はそんな僕を無視して、話を続けた。

「優しくて、強くて、だけど弱くて」

彼女の様子がおかしくて、僕は心配になった。

「向坂くんは、その子を、守ってあげたくて、しょうがなくなるばかり、と落ちる雲。僕はやっと、彼女が泣いていることに気付いた。」

「だから、向坂くんが、私のことを好きになるなんて、有り得ないんだよねえ……」

それから堰せきを切ったかのように泣きじゃくる彼女を、僕はどうすることも出来なくて、ただ隣に座って彼女の頭を撫でるだけだった。

先輩。僕は貴女のことを忘れてしまったけど、今なら言えるよ。

僕は貴女のことが好きでした。それが恋と呼べるものだったのかはわからないけど、先輩のことが大切でした。

「優しくて、強くて、弱くて、守ってあげたくなる……」

呟いた言葉は、じんわりと僕の心に沁みてゆく。

「え？ 秋兄ちゃん、何それ」

「どうかしたのかい？ 秋」

心配そうに僕を見る二人に向かって、僕は笑ってこう言った。

「僕の好きな人は、優しくて、強くて、弱くて、守ってあげたくなる……そんな人だよ」

そうでしょ？ 先輩。

第三十八話：「向坂家のちアメリカにて」

先輩のことを思い出したのはいいけれど、何故、千歳の顔がちらつくのか。

そう言えば、暫く千歳に会ってない。だけど会えない訳がある。

千歳は今、アメリカに遠征中なのだ。

会いたい、と思うのは、本音。うーん。千歳依存症？ いやいや、

そんな訳……うーん。にしても、強くて弱くて優しい人が……。

僕の周りにそんな人 ……あ。

……千歳？

いやいや、ちょっと待て僕。それはただ、千歳が最も近いからじゃないのか？ 大体、千歳は弱くなんか ない、訳じゃない、か……。現に僕は、千歳を弱いとは思っていない。

強いけれど、どこか脆い普通の女の子 僕はそう思っている。

だとしたら 好き？ 僕が、千歳を？ いや、確かに千歳は好

きだ。 でもそれは、友達として？ それとも、一人の女の子として？

わからない。どうしたら、いいんだろう。 いや、どうしようもない。

この問題は、解決しようがない。

僕が動くか、千歳が動くか

それで、この問題は解決するんだと思う。わからない。どうしたらいいのか。

いや、何もなくていい。答えは最初から

「秋っ！」

「っ！？」

慌てて目を開けると、そこには怪訝そうに僕を見る母さんがいた。見れば父さんも、汐姉も、菊花や裕太、善也兄まで僕を心配そうに見ている。

「あ、あれっ？ みんな、どうしたの？」

「どうしたのって……お前なあ……」

はあ、と溜め息をつく母さん。

「お前が目を閉じたまま動かないって善也と裕太が慌てて言いなきたから、心配して来たんだろーがっ」

「あだっ」

ばちん、と強烈なデコピンを喰らった。な、なにすんだー！ 母さんのデコピンは二週間腫れがひかないのにつ！

「っ」

痛みで涙目になる。思わず母さんを睨むと、母さんは笑って僕の頭を乱暴にワシワシと撫でた。

「全く。無駄な心配かけさせるんじゃないっつもの」

……そっか。心配、かけたんだ。

「じめん、なさい」

そう言うと、母さんはまた笑った。父さんも、汐姉も、善也兄も、裕太も、菊花も、笑っていた。

それからはみんなで遊んで、あつと言っ間に閉園時間になった。家族みんなで遊ぶのなんて久しぶりで、本当に楽しかった。

僕らが小さい時、母さんと父さんは休みの日にはよく遊んでくれた。だけど僕が小学三年生になった頃から、母さんの勤めるミヤビ財閥は世界で五本の指に入る程の大財閥に成長し、『仕事だけ』は出来る母さんは社長秘書に抜擢。それからは遊ぶ暇なんてなく、いつも忙しそうだった。今じゃ会長秘書だ。

それから程なくして父さんの仕事も波に乗り出し、帰ってこない夜もあった。芸能界に関わる仕事だったから、仕方ないとは思ってたけど、やっぱり寂しかった。

だけどそんなことは言えなかったから。

今は仕事の方が一段落してゆっくり過ごせているし、今がいいなら、それでいいかなあって思うんだ。過去を気にするような性質じゃないし、今更言ってもしょうがないと思ってるから。

また、一緒に行けたらいいなあ。そう思いながら、ウォーターパークを見上げた。

過去の^{まえ}ことなんて、どうでもいい。現在の^{いま}ことが良ければ、それでいい。未来の^{あひ}ことなんて、わからない。

そうやって、僕は^{ボク}生きていくんだ。

「秋、なにしてんだ。さっさと行くぞ」

「秋ー、早くしないとヒロさんが怒っちゃおうよー」

「秋、早くおいで」

「早くしなさいよね、バカ秋」

「秋お兄ちゃん、早く、です」

「秋兄ちゃん、早くしてよー」

振り返れば、そこにいるから。

【同時刻　アメリカ】

校舎から駆けてくる金髪フロンドの少女を視認して、帽子を取る。

少女はスピードを落とさずこちらに　　って、ちよっと待て。受け身もままならぬ私に、少女はその勢いで抱きついた。体に掛かる衝撃を受け流す為に、一、二、三步後ろに下がる。その一連の動作で、美波を思い出した。

『ハイ！　チトセ！』

『　　リリー。悪いな、突然押し掛けて』

リリーは体を離して、私に笑顔を見せる。向日葵ひまわりのような笑み。果たして、百合リリーと言うおしとやかな名前は、天真爛漫な彼女に似合っているのだろうか。

『うっん、別にいいのよ！ でも、学校にまで来て大丈夫なの？』

『？ 何で？ 私が学校に来たらいけないことでもあるのか？』

リリーは、まさか、と言って肩をすくめる。

『私は大歓迎なんだけどねー。でもチトセ、貴女あなたの美しさは万国共ばんこく通なのよ？』

『……ありがとう？』

何が何だか解わからんが、とりあえず褒められたのだと解ったので礼を言っておいた。首を傾げて言うと、何故かリリーは困ったように笑った。

『無自覚さんはこれだから嫌なのよねー』

む。失礼な。

「秋と一緒にしないでくれ」

リリーに解らないよう、日本語でぼそりと呟く。すると何故か、リリーは目を丸くしてこっちを見た。

『シユウ？』

『あ。い、いや、何でもない』

しまった。こいつ、日本語をいつの間にか習ってたのか……！
教えたのは、サミュエル辺りだろう。

しかし、時すでに遅し。ニヤリと笑うリリーを見て、数秒前の自分を恨んだ。

『シユウって誰なのかな？ チトセちゃん？ コーチの可愛い姪っ子に、教えてくれないかなあ？』

全く。女が色恋のことに關して興味を示すのは、どうしてこうも万国共通なんだか。と言うか、自分で可愛いって言うな。確かに美少女だけど。

リリーはフィギュアのコーチ サミュエルの姪であり、去年知り合った。知り合ったばかりにも関わらず、親しくしてくれた彼女には感謝している。

去年の私は荒れていて、ニコリともせず口を開こうともせず、一日の殆どをアイスリンクで過ごしていた。

そんな時に出会ったのが、サミュエルの家に偶然遊びに来ていた

姪　　リリーだった。

私は、リリーに救われた。

彼女に会わなかったら、私は欠陥品ダメになっていただろう。臆病で、弱くて、総すべてから目を逸らして逃げていた私。

太陽のような少女は、日陰に逃げようとする私を許さなかった

第三十九話：「鏡」

日本とは違う氷の感触。足を踏み出す度にそれが感じられる。

『チトセ、ここの氷はどうだい？ やっぱり、日本の方がよかったかな？』

恐ろしく整った顔が、私に問い掛ける。金髪碧眼の、正に童話の中の王子のような美しさを持つ男。

『……すぐに慣れます』

『普通はちよつと時間が掛かるんだけど……チトセなら不可能じゃないね』

アハハ、と困ったように それでいて、悲しそうに笑う。理由はわかつている。私が必要以上に口を開かず、笑おうとしないから。

『さ、帰ろうか。由里ユウリと里香リカと理恵レイが、君の帰りを待ってるよ』

『……はい』

私はそれを知っていて、知らない振りをする。

リビングに続く扉を開ける。

『チトセ、お帰り』

『チトセ、遊んで!』

ソファーに座りながら私に声を掛けるのは里香。勢いよく私に飛びついてくるのは由里。

実の父であるサミュエルは、娘に全力で無視されて、部屋の隅でいじけていた。その様子は私の父を思い出させた。

そうしてその間にも、私は圧迫死寸前にまで陥っていた。苦しい。

『……ただいま』

『チトセ、ただいまのチューがないよ!』

『……ん』

由里の頬に口付ける。由里はスキンシップ過剰だ。里香はしなないと云うのに。

私は如何せん、この双子に弱い。それは里香の子供とは思えぬ知

識と由里の怪力の所為でもある。里香に何かを言えば、私が言い負かされる可能性があるし、由里とは漏れなく圧迫死だ。

子供版の美波と成子、と考えて貰えれば解りやすいだろう。見分け方は実に簡単。金髪碧眼が里香で、黒髪黒眼が由里。幼きバイリンガルだ。日本語も、英語も話せる。

『チトセ、今日は遅かったわね』

里香が手に持つ本から目を離す。

『……………そうか』

『そうよ』

『……………それが、どうかした？』

『いえ、別に』

里香はそう言って、手に持つ洋書に目を戻す。そのタイトルを見て驚愕。

『……………ドストエフスキーの罪と罰？』

『ええ、そうよ？』

『……………私の鞆から？』

『人聞きの悪いこと言わないでよ。ちょっと借りただけ。勝手に持ち出したのは悪いと思ってるけど』

ドストエフスキーの“罪と罰”は、私が暇な時間に読もうとして持ってきた本だった。しかしそれは原文　つまり、ロシア語だ。

『別に持ち出したのは怒ってない。……ロシア語、解るのか？』

『単語だけよ。でも大体の流れは解るわ』

……末恐ろしい奴。小学三年生でロシア語が理解出来るのか。まあ、つい最近出来るようになった私が言うのもおかしいか。

『それよりも、チトセはロシア語解るの？』

里香は本から目を離さず、私に問い掛ける。

『……一応、な。五カ国語は出来るように特訓した』

『……ふうん』

パラパラと捲^{めく}られていくページ。

一体、里香は何が言いたかったのだろう。首を傾げると、リビングの奥から女性がやって来た。サミュエルの妻である。その美女は私に抱き付いたままの由里と、本から目を離さない里香を見て笑った。

『ワガママな娘たちでごめんね。でも二人とも、チトセが大好きなの。許してあげてね』

『……』

頷くと、理恵さんは、ありがとっ、と言って私の頭を撫でた。

『チトセ好きー!』

『ママっ! 何言ってるのよ!』

理恵さんはまた笑う。どうでもいいが、サミュエルはまだいじけていた。

夕飯を食べ、風呂に入った後は怪物双子と一緒にテレビを見た。
た。

『チトセ、寝る前にこれ読んで』

そう言って里香が差し出してきたのは先程の原文・罪と罰。

さっき里香が言いたかったのはこれか。澄み切った碧いあお双眼
を見てると、里香が睨んできたので咳払いで誤魔化した。

『……解った』

頷いてそう言うと、里香は笑った。こうして笑っていると、年相応の可愛さがある。私のような無表情ではその美貌も損だろう。なんてことを思って、自嘲わらった。それは、本来私のことを指しているのだろう。里香と私は、同類なのかもしれない。……いや、まだ笑えるだけ、里香はマシだろう。それに、穢けがれた私と里香を同じカテゴリーにするのは間違っている。

『チトセー、今日一緒に寝よー』

そう言いながら腕を掴む由里。無邪気な笑顔を見ていると、何故か心が痛くなる。

痛い。痛い。痛い。イタイ　ボキボキボキッ。不吉な音を立てる私の腕。……痛い。折る気が、お前。

『リカも一緒に寝たいよね？』

『……好きにすれば』

ニコニコ笑いながら言う由里。そして無表情でこちらを見る里香。

あ。

こうして見ていると、心の痛みの原因が解った。解ってしまった。

この二人は、私の鏡。由里と里香。笑顔と無表情。過去むかしの私と、現在の私いま。だから、胸が、心が、痛くなる。

「……愚かだな、私は」

「あ、千歳、ダメだよー。アメリカでは英語で話すって、決めてたのにー」

「……別に、いいんじゃない？」

里香は、解っているのだろう。私が何を思っているのか。何を考えているのか。本当に、聡い子だ。だから、人の痛みが解ってしまう。また私は、心の中で自嘲った。

「……部屋に戻るから、寝る時に呼んで」

「うん！一緒に寝よー！」

「……」

由里の笑顔から、逃げるように。里香の視線から、目を背けて。私はリビングを去った。

明日、太陽のような少女に会うとも知らずに

第四十話：「世界」

氷の上は、私だけの世界。この世界では私が主役。誰が為に、この世界はある？ それは勿論、私だけの為に。

俯^{うつむ}けていた顔を上げて、一步を踏み出す。冷気を含む風が顔に当たり、不思議と心まで冷え切るのを感じた。

何も考えないで。世界にいるのは私一人だから。
何も映さないで。他人^{ほか}は存在しないから。

「……ふう」

軽く息を吐く。準備は整った。ただの千歳^{わたし}が、日宮千歳になる。

「ッ」

力強く踏み出す。それだけで、景色は変わる。この景色は、私だけの、私のもの。この瞬間が、堪らなく好きだ。流れていく景色。静寂がとても心地よく、私を癒してくれる。

しなやかに、軽やかにステップを繰り返す。透き通った白い床^{じゆ}に線が入る。そして、跳ぶ体勢に入ろうとした時、有るはずのない人の声が聞こえた。

『凄いわ！』

「えっ!?!」

気を逸らし、声が出た方を向いたのが間違いだった。驚愕で体勢が崩れ、転倒してしまった。

「あっ!」

徐々に感じる、氷の硬い感触。痺れのような痛みが全身を襲う。

顔は腕で庇かばったが、顔を傷付けると、父と母が煩うるさい。体を傷付けるとも煩うるさいが、その代償が全身打撲。こんな事なら、顔を庇わずに、手を着いて衝撃を最小限にすれば良かったかもしれない。

氷はキチンと整備されているようで、滑る速度は緩まない。これでは人間カーリング状態だ。

「いつ……あっ!」

緩まないスピード。全く今更だが、このリンクが広い事に気付く。サミュエルの奴、無駄に金を儲けてるから、リンクも無駄に広い。これだけ速いと、私がどんな速さで滑っていたかが解る。滑る速さと転倒した際の痛みは、常に比例している。次からは、速く滑る事に恐怖を伴ともないそうだ。

さて、先程からのんびりと悠長に語っているが、そろそろ本当にマズい。目は開けられないが、背中に壁が迫っている事が解ったからだ。本能的にそう感じ取った。

この速度のまま激突したら、打撲では済まないだろう。最悪の場合、骨折でも済まなくなるかもしれない。それだけは避けたい。

「く……っ!」

右足の踵かかとの刃エッジを氷に突き立てる。左足は摩擦の痛みで動かなくなっており、片足だけの滑り止めは心許しんぷない。

壁が迫る。だが、衝突は防げなかった。

「うあっ！」

背中に走る、重い痛み。余りの衝撃に呼吸が出来ない。

「かはっ」

吐血の際に漏れるような一息が出る。血は出ていないが、それ相応の痛みはある。

「げぼっごぼっ」

何度か咳き込み、目を開けると、視界は白い。エッジで削れた氷が巻き上がり、白い霧のようにもうもうとリンクを覆っていた。

そして何故か、その白い霧の向こうから、人が転ぶ音と、鈴の鳴るような声の悲鳴が上がる。暫くぼっつとその悲鳴と音を聞いていると、白い霧を腕で払いながらこちらにやってくる少女が見えた。

流れる金髪は氷の霧を浴びてしっとり和白磁はくじのような肌に張り付き、空の色をした碧眼は転んだ所為か少しだけ潤んでいた。

一瞬、里香かと思ったが、すぐに違う事に気付いた。里香はハーフで、顔の造形は日本人に近い。だが目の前にいる少女は、完璧なまでに異国の顔立ち。どこことなくサミュエルに似た、可愛らしい少女だ。

『いたた……』

少女はそう呟きながら、首を回して辺りを見る。そして倒れている私を見付け、駆け寄ってきた。

『だ、大丈夫っ!?!?』

慌ててそう問い掛けてきた少女の顔色は悪い。それ程までに、私の転び方は凄まじかったのだろう。だが、今の私には返事をする気力も体力もなかった。

『ちよ、ちよっと……?』

少女の心配を無視し、ゆるゆると視線を下げる。

白いワンピースからスラリと伸びた足は転んだ所為で赤くなっていて、低めのミュールは少しだけ濡れていた。瞬間、怒りが沸き上がってくる。

『ど、どうしたの?』

少女は私の怒りに気付かず　私の無表情が最大の原因だろう　氷の上に膝を着いて私を気遣う。それでも怒りは治まる事はなかった。

「……私の」

冷たく、それでいて熱を含んだ声。それが自分のだと気付くのに、暫く掛かった。

『え？ 何？ 日本語？』

首を傾げる少女が、憎くて憎くて、仕方なかった。

「……………っ！」

『きゃあっ！？』

気力を振り絞って、少女の胸倉むなぐらを掴み、顔を近付ける。近距離で見た少女の頬は、寒いのが赤く染まっていた。

「私の世界に、入ってくるな……………！」

私だけの世界が壊れた。私だけの、私のもの。

「私の居場所を、取らないで……………！」

世界こゝろは私が存在する理由。それを奪われたら、私はどこへ行けば？

「い……………っ…！」

無理をし過ぎたようで、体を激痛が襲った。意識が朦朧まろろとしてくる。気力も底をつき、胸倉を掴んでいる事も出来なくなった私は、必然的に氷上に倒れる。

目を開けているのも疲れて、目を閉じた。氷の上は、熱くなった頭を冷やすに丁度いい。

『サ、サミュエルを呼んでくるわ！ 待ってて！』

殆ど聞き取れなくなった耳に届いた声。そしてすぐに聞こえてきた人が転ぶ音と悲鳴。それを最後まで聞く事は出来なかった。

これが、私とリリーの出会いだった。

第四十一話：「道化」

滑稽で、惨めな貴女。

道化はそう言っどっけて、私の手を取った。

孤独で、可哀想な貴女。

道化はそう言っどっけて、私の手を引いた。

哀れで、救いよあわうのない貴女。

道化はそう言っどっけて、私の涙を拭ぬぐった。

不幸で、神に愛あされている貴女。

道化はそう言っどっけて、私の頭を撫なでた。

道化は言っどっけつ。

願ねがいましょう、貴女の幸福を。

悲かなしむように。

認まめましょう、貴女の過去を。

哀あれむように。

祈いのりましょう、貴女の未来を。

請こうように。

叶かなえましょう、貴女の希望を。

笑わらうように。

誓いましょう、貴女の成功を。
捧げるように。

いつか貴女に、神の祝福が有らん事を。
慈しむように。

そう言って道化は、私の背中を押した。

「ん」

目を開けると、まず一番に目に入ったのは白い天井。続いて、鼻につく消毒液の匂い。この独特な匂いを持つ所は、一つしかない。

病院、か……。

あれから、どれくらい経ったのだろう。

感情に任せて少女を怒鳴ったものの、幾らか後味が悪い。あの少女は日本語を理解出来ないようだし、あちらにして見れば、突然、見知らぬ女に訳も解らず怒鳴られたようなものだ。助けに来ようとして何回も転んだのに、その結果、助けようとした相手に怒鳴られるなんて、どんな気持ちなんだろう。自分がやった事ながら、少しばかり少女に同情してしまう。

「……まだまだ未熟だな」

ふう、と溜め息混じりに吐いた言葉は、自分自身に向けたもの。

あれしきの事で、感情を制御出来なかった自分を恥じる。全く情けない。

怒った事を、悪いとは思う。怒る前にまず、心配してくれた事に対して感謝の言葉を言っておくべきだった。それが人としての最低のマナーだった。

「ああ……しまったな。ん？」

過去の行いを悔いているその時、突然病室の扉が開く音が聞こえた。扉の方を見ると、そこにはあの少女の姿があった。

「……」

『……』

お互いが硬直し、数秒後に口を開いたのは私だった。

「あ」

あの時の、とそう言おうとした次の瞬間

『ごめんなさいっ!』

病室の白い床に、土下座をしている少女がいた。

「ええっ!？」

無表情・無感動の私が、驚愕に目を見開いて、大声を出しているのは仕方がない。この状況で驚かない方がどうかしてる。

「えっ、ちよっ、ええっ？」

『この身を持って償うわ！ ハラキリ、ツジギリ、キリストゴメン、何でもする！』

「いや、その、あの」

その間違った知識は一体どこから来ているのか問いたい。

『私的には生かして貰う方向で、奴隷辺りをお願いしたいわ！』

「……意外とちゃっかりしてるんだな」

『ごめんなさい。日本語が解らないから、私には貴女が何を言っているのか理解出来ないわ』

「……理解してくれなくていい」

『なにに？ ハラキリなんてとんでもない？ 奴隷なんていらないっ。』

「……言ってない。……都合よく解釈するな」

『許してくれるの？ わーいやったー』

土下座されたまま喜ばれても……。それよりもまず、土下座を止めて欲しい。とりあえず、土下座を止めさせるには何らかの方法で驚かせるのがいいだろう。

……ふむ。数秒考え、この少女に、適した驚かし方を思い付いた。

『……いまいち自信がないみたいで棒読みだな。……それでは、騙せる奴も騙せない。……一つ言っておくが、日本語と英語では発音や口の形が違うから、……君が都合よく解釈しているその言葉は、私の実際の発言とは全くと言っていい程……違っている』

英語でそう言っていると、少女は土下座から正座に変えて、私を驚いたような目で見た。

正座も嫌だが、土下座よりはマシだ。

『え、英語出来るの!?!』

『……1ヶ月しか勉強してないから、心許ない。……不徳の致す所があつたら、遠慮なく言ってくれ』

『いやいやいや! 貴女、完璧に喋れてるから! 不徳なんて見当たらないくらいに!』

『……お世辞はいい。……私は無口だから無言が多いが、……気にしないでくれると有り難い』

『お世辞じゃないんだけど……』

少女が困ったように笑う。

そしてまた、突然扉が開く。

『チトセ、具合はどうだい?』

ヘラヘラ笑ったサミュエルの登場。

……。何と言い表せばいいのかこの感情。何か解らないが、凄
ム力つく。

リンクがあんなに広がったのは、サミュエルの所為だ。絶対そ
うだ。

『……………死ね、へボコーチ』

『な、何でっ!?!』

『……………お前はもう解雇だ。……………これからはミヤビ財閥の後ろ盾もな
いと思え』

『僕には家族がいるんだよ!?!』

『……………案ずるな。リカとユウリとリエさんは、お前の年収より遥か
に贅沢な暮らしを提供させて貰う。……………直々に、私かな』

『チトセ、君はまだ未成年なんだよ? そんな君に、三人も養える
訳』

『……………お前の年収なんて、私にとっては月収。……………つまりは、はしたかね端金
なんだよ。……………それに、お前より私の方が慕われている』

『ぐ、ぐはあっ!』

胸を押さえて倒れるサミュエル。そしてその後ろから、バタバタ
と慌てたように入ってくる里香と由里と理恵さん。

『チトセが起きたって本当なの!?!』

『チトセー！ 大丈夫ー！？ ユウリがナデナデしてあげるー！』

『チトセ、林檎好きだったかな？』

『うぎゃあああー！』

三人は、サミュエルを躊躇なく踏んで私の元へ走ってくる。この事から、サミュエルより私の方が慕われているのだと解るだろう。

『チトセ、怪我は平気？』

里香にそう問われて、やっと気付いた。

『……私、どこか怪我をしているのか？』

『ええ。骨折はしなかったけど、全身打撲で擦過傷だらけの右足首を捻挫よ』

『……そうか』

骨折ではなかったただけ有り難いと思うべきだろう。

『チトセ、2日も寝たままだったから、死んだのかと思っちゃったよー』

『……ユウリ、不吉な事を言うな。……それにしても、2日も寝てたのか……』

『そうよ。リカとユウリ、チトセは大丈夫か、チトセはまだ目を覚

まさないのか、って煩かったんだから』

『……リエさん、すみません。……ご迷惑をお掛けしました』

『わっ、私は別に心配なんかしてないわ。ただ、まだ本を読んでもらってないから……』

『ユウリはチトセ、心配してたよー。リカちゃんも、ずっとチトセを心配してたー』

『ちよっ、ユウリ！ 勝手な事言わないでよ！』

『だってホントだもん』

ギャーギャー言い争い始める二人。その元凶は私なのだが、止める気にはなれない。

あの少女はどこに行っただらろう。

部屋を見回し、少女に目をやると、少女は部屋の隅で肩を震わし、怒りのオーラを背中に携えていた。何故か金髪がうねって見えて、少女がメデューサに見えてしまう。

そして、怒れるメデューサの咆哮ほろいが、私たちの耳を貫く。

『わっ、私を無視するなあああっ！』

その悲痛な叫びは、病院中に響き渡った。

『み、みんな……僕を忘れないで……なんて言っても、無駄だよね
……』

サミュエルの眩きは、誰の耳に届く事なく消えた。合掌。南無。

第四十二話：「絶望」

変化を要求するのなら、何か対価を払わなければならない。相手が変わるか、自分が変わるか。決めるのは、自分次第。

『……………』

病室の隅で蹴られる男と蹴る少女を、私は冷めた目で見ていた。

『ちよっ、ごめん！ ごめんなさい！ 許してえ！』

『誰が許すかあああ！ おかしいと思ったのよ！ 今の日本にはハラキリなんてものは無いのに、お前が“チトセは文化を重んじる人だから、ハラキリ、ツジギリ、キリストゴメンは覚悟した方がいい”とか言いやがって！』

『ちよっとした出来心なんだって！ まさか信じるとは思わなかったんだよ！』

『死ねえ！』

『おじおっ！』

サミュエルは鳩尾みぞおちを蹴られ、気絶した。……どうやらやっと終わったらしい。中々の凶暴性を持った少女だ。その少女がスタスタとこちらへ歩いてくる。

『チトセ・ヒノミヤ。怪我をさせてしまっでごめんなさい』

今度は土下座ではなく、頭を下げるだけ。私は切腹も辻斬りも切り捨て御免も望んでいないので、後でサミュエルを殴る事にして、少女には、気にしていない、と言うように首を横に振った。すると少女はあからさまに安堵の息を吐き、笑顔を見せた。その太陽のような笑みに、私は何も言えなくなった。

『……どうして、私の名を？』

『アメリカでも、貴女は有名よ。“氷の妖精チトセ・ヒノミヤ”ってね。だって、突然彗星のように現れて、優勝トロフィー搔かつ攫むさって行っちゃったもん。それからは負けなし二位なし全一位。有名にならない方がおかしいわよ』

『……じゃあ、次の質問。……どうしてリンクへ？』

私の言葉に、少女がはにかむ。

『チトセ・ヒノミヤが滑ってるってサミュエルが言っていたから、つい、気になっちゃって……』

『…………』

『そこで見た貴女の演技が凄く綺麗で、無意識の内に声に出していたわ。今までに色々な選手の滑りを見てきたけど、感動したのは貴女が初めて』

ああ。

少女の無垢な笑みに、絶望する。

解ってしまった。私はこの少女の近くにいたら、壊れてしまうだろう。

日陰に咲く花は、日の光を浴びれない。それは現実で。紛れもない事実。私には、眩まぶし過ぎる場所。私に、暖かくて、綺麗な居場所は無応しくない。

胸が痛む度に、その答えを思い知らされる。

しよせん 所詮、私は太陽の下に出る事を許されない。

『…………私は、私の存在を忌まわしく思う』

自分でも驚く程、冷たい声。今の私の顔に、表情なんてものはない。凍った空気が、私を追い詰める。訳が解らない、と言ったような表情をする少女を無視し、話を続ける。

『…………壁に激突した時、心の奥のどこかで、このまま死にたいと願った』

自分の手のひらを握って、開く。その動作を何回か繰り返す。

その場にいる人間全員が青ざめているのが解った。それもそうだな私だって、傍観者であつたら青ざめているだろう。

『……目を開けた時、残念だ、と思った』

誰かが息を呑む音が聞こえる。

『……死の好機を与えてくれたのは感謝しよう。自分の深層心理が解った。……だが、それ以外はない。……これ以上、私に、近付くな』

これは自虐だ。自分への戒めだ。これ以上は、危険。私が私で、なくなる。

『……皆、出て行ってくれ』

全ての拒絶は、結果的に何もならない。意味もない行為に、笑みが零れる。ああ。なんて滑稽。なんて惨め。なんて哀れ。

『私は、穢れている』

無知な私は、理解していても続ける。

『……これ以上、私の世界に入ってくるな……』

私が私で在る為に。

『私は、一人でも生きて行ける』

ごめんね。ママ、お仕事なの。お祖父ちゃんとお祖母ちゃんがもうすぐお買い物から帰ってくると思うから、待っててね。

ごめん。パパは、お外に出ちゃいけないんだ。パパを狙う怖

い人たちがいるからね。

一人は慣れている。一人なのは解っている。

『私なんて』

いなくなってしまうえば、いいのに。

そう言葉にする前に、頬に衝撃が走った。

『……なに、言ってるのよ……っ！』

『……』

先程まで笑っていた少女は、泣いている。何故、少女は泣いているのだろう。本来なら、泣くのは私の方ではないのか。

痛いと言うより、熱い叩かれた頬。私は少女を何の感情も籠こもっていない目を見た。

『忌まわしいって何よ！ 死にたいって何よ！ 一人でも生きて行けるって、なんなのよ……っ！！』

少女が、私の胸倉を掴む。リンクでの出来事が今、ここで再現されているようだ。ただ違うのは、配役だけ。

『何でそんな事言うのよ……っ！』

間近で見る少女の顔。碧あおい瞳には生気が溢あふれていて、爛らん々《らんらん》と輝いている。

『悲しい事、言わないでよ……』

少女は私の胸に顔を押し付け、声を上げて泣き出した。私には、何故少女が泣いているのか、解らなかった。

第四十三話：「アメリカのち日本にて」

あれから、二週間が経った。

あの日から、少女　リリーは、私の病室を毎日の様に訪ねて来た。

『チトセ』『リリー』と呼び合うまでに親しくなるのには、そう時間は掛からなかったと思う。

リリーの傍にいれば、不思議と救われるような感覚がした。人の温かみを、私はリリーに感じていたのだ。

しかしまだ、他人は苦手だ。それをこれから、私は治していかなければならない。

入院してから二週間後に退院した。

そして三日後には、世界中から名選手が集まる大規模な大会が控えている。サミュエルと相談した結果、出場を決めたのだが、やはり多少は気になるブランク。

しかし退院したばかりで練習する訳にもいかず、サミュエルから与えられた自室でパソコンを使用している。

【「やっほー　千歳、元気？　私は超元気だよー。千歳がいなくて超寂しい！　壱人くんも琉二くんも超寂しそー。やっぱり、あの三人にはまとも役な千歳が必要だと思った今日この頃でした　じゃあねー。帰る時は連絡してー」】

相変わらずの軽いメールに、自然と笑みが零れる。

元気……では、ないだろうな。先日まで怪我をしていたし。やは

り報告するべきなのだろうか。って言うか、超を使いすぎだろう。凄く読みにくい。ワザなのだろうけど。

先程も言った通り、他人はまだ苦手だ。リリーにも、どこか心が許せない自分がある。

世界に絶望して、他人を拒絶して、希望を与えられながらも、それを受け取るうとしない。そんな自分があるのを、隠せない。

日本に戻ったら、私はまたダメになってしまうだろう。あっちは、怖い。

人の憎悪、嫉妬、羨望、期待、恋情、憧憬。

自分に寄せられる様々な感情が、私を消してしまう。

だから　アメリカにいる時だけは、私でありたい。日本では、私が消えているから。せめて、今だけは。

心にそう決め込んで、私は目を閉じた。

大会の翌日、日本の新聞には、優勝の二文字と私の名前が載った事だろう。

現在

リリーに校長室にまで連れて行かれ、学食を食べさせて貰う事になった。校長が私を見た瞬間、椅子から数センチ飛び上がり握手を求めてきたのには驚いたが、それはまあいい。ファンサービス、と言う言葉が頭を過ぎ^よったが、それもまあいい。

それよりも、気になるのはリリーの目だ。

『で？ シュウって誰なの？』

さつきから執拗に聞いてくるのは秋の事。何でそんなに顔がニヤケてるんだ。美少女がそう言う顔をしてはいけませんって、サミュエルから習わなかったのか。

『シュウって誰ー？』

『友達』

『嘘』

即座に否定された。

『チトセの事が好きな子よね？』

ぐはっ。水が気管につ。

『げほっ。げほっ。ち、ちが、違っ……っ』

『え。じゃあ、チトセがその子の事好きなの！？ チトセが片思い！？』

『ど、どうしてそうなるんだっ』

『え！ じゃあもう恋人なの！？』

『ち、違っっ』

女と言うものは、どうしてここまで色恋沙汰に食いつくのであるうか。私には理解できない。

数分後。

結局、秋との出会いから今までの事を吐かされてしまった。かくかくしかじかと言うものが使えたらいいのに。これ程思った事はない。

『ふむふむ。で、チトセはその子の事をちょっといいなー、って思

『つてるんだよね?』

『誰がそんな事を言った』

『感じ取ったのよ』

自信満々に胸を張るリリー。思わず溜め息が出る。勝手に事を進めないで欲しい。

『よしっ！ 善は急げよ！ 今から美容院に行きましょう!』

『はあ？ 何だいきなり』

『命短し恋せよ乙女！ そのシユウって子の度肝たくて、抜いてやるうじやないの!』

『別に私は 』

『お黙りっ！ 今集中してるんだから！ やっぱり髪全体にウエーブを掛けて 』

こうなってしまうたりりりは、もう誰にも止められない。イメチエン、とか言うヤツを私に施すつもりなのだろう。止める、と言ってもリリーは止めないだろうから、何も言わない。

苦笑いをしながら、程々にしてくれよ、と告げると、彼女は笑って答えた。

数日後、日本。

僕は今、空港にいる。原因は昨日、吉から届いたメール。

【千歳が明日、アメリカから帰ってくるから、秋ちゃんも一緒に空
港行こー？】

その内容に、緩む頬を抑えきれなかった。返事は現状を見ていた
だければ分かるだろう。

「しゅーうちゃんっ。なーにソワソワしてんのー」

……頼むから、突然現れて僕の頬をつつくのは止めてもらえませ
んかね、吉くん。

「千歳が帰ってくるのがそんなに嬉しいのか？」

琉がニヒヒと笑いながらやって来た。頭をクシャクシャにしない
で。

「もうすぐ着く頃だよ。ゲートまで行く?」

環に服の襟を持ち上げられる。まるで猫になった気分。って言うか首が苦しいからそろそろ離して。

「皆ー、今着陸したみたいだよー。ゲートまで行こー?」

のんびりした口調の美波さんに急かされ、僕らはゲートへ向かう。何だか分からないけど、ドキドキしてきた。よし。とりあえず、深呼吸だ。すうーはあー。

「あっ、千歳だ! おーい!」

「っ!? げほっごほっ」

驚きで息を吸いすぎてしまった。気管がつ。涙で霞む目を、ゲートに向ける。

そして、硬直。

それは三人も、美波さんも同じのようで、とじもく瞠目していた。今時の大きな白い縁のサングラス。波打つ長くて艶やかな黒髪。ショートパンツに白いキャミソール。耳栓型イヤホンをしている彼女は、まだこちらに気付いていなくて。

そして。

目が、合った。

その瞬間、確信する。彼女は、僕が知っている千歳だ。

衝動を抑えきれなくて、走る。僕に気付いて驚く彼女はサンゲラスを押し上げた。その下から、紅い瞳が見える。綺麗な紅色をした瞳を見て嬉しくなる。

外見が変わっていても、やっぱり千歳は千歳なんだ。

久しぶり。

まずは一言、そう言おう。

彼女はきつと、笑顔を見せてくれるから。

お帰り。

一言目は、そう言おう。

彼女はきつと、ただいまと言ってくれるから。

僕は笑って、千歳に言った。

第四十四話：「鈍感天然無自覚たらしって酷くない？」

梅雨時にも関わらず、雲一つない澄み渡る晴天。

今日は寮を新設するとかで、学校は休み。来年からは遠方の生徒でも通えるようにと、学校側の配慮によるものだ。私立だけあつて、お金の使い方が荒い。まあ、そこに通つてる僕が言う事でもないかと、そんな事を考えながらリビングのソファアに座る。

汐姉と善也兄は大学、母さんと父さんは仕事、菊花と裕太は学校。よつて、一人寂しくお留守番だ。凄い暇なんだよね。

「ふわあ。……ん？」

欠伸をしながら冷蔵庫を開けると、目に入った一枚の紙。手に取つて見ると、『授業参観のお知らせ』との書いてある。

どうやら、今日は菊花と裕太の学校で授業参観があるらしい。もうそんな季節か、と懐かしくなる。僕の母校である中学は少し変わった学校で、授業参観が三年生だけしかなく、春に一回しかないのだ。

しかし、共働きである母さんと父さんは行けないだろう。当然、汐姉と善也兄も講義があるから行けない。

「……」

中学の時、それで少し寂しい思いをしたのを思い出した。仕事に励む母さんと父さんにも言い出せず、高校で忙しそうな汐姉と善也兄にも言い出せなかった授業参観。言ったら、きつと困ってしまうだろうから言い出せなかった。菊花と裕太には、そんな思いさせたくない。

「……よしっ」

俯けていた顔を上げて、部屋に向かう。

一度しかない授業参観、いい思い出にしてあげたい。そう思いながら。

先程も話した通り、僕の母校は変わっている。その中でも一番変わったのが、授業参観だ。登校時間に始まり、下校時間に終わる。好きな時に来てもいいし、好きな時に帰ってもいい。そんな感じで、不思議なのだ。

「うわー。懐かしー」

私立ならではの綺麗な校舎を見上げて、また懐かしくなる。昔は放課後によく、屋上にいたなあ。思い出に浸る僕の耳に入ったのはまたまた懐かしくさせる鐘の音。スピーカーから流れるその音は、二年前と一緒だった。

もうそろそろ、授業が終わるらしい。時間にして二時間目ぐらいか。

確か、菊花と裕太は同じクラスだった。

三年生の教室を目指す事五分。クラスはすぐに見つかった。二年前の事でも、意外と覚えてるものである。

「よっ」

菊花と裕太に恥を掻かせてはなるまいと、ちゃんと服も軽すぎず重すぎず、すっきりなカジュアルにしたし、髪も鏡を見てワックスと一緒に頑張った。顔はまあどうしようもないから洗顔だけして後は放置。

完璧な筈だ。変な所なんて無い。そう意気込んで教室ドアを開けて その意気は脆くも崩れ去った。

だって、だって、だって！ 教室中の人間が僕に注目してるんだよ！？ 先生、生徒、保護者まで！ やっぱり、どこかおかしい所があるとか……。そう不安に駆られながら、我が弟と妹に目を向ける。

僕、どこかおかしい？ と言うアイコンタクト付きで。

目を丸くしている二人。裕太は口をパクパクと開閉し、僕に何かを伝えようとしていた。

目を凝らして、口の形をよく見る。

(どっしてここに?)

その問いには、今日は授業参観だから、と答えるしかないだろう。

(……秋兄ちゃん、自分の立場分かってるの?)

(立場? ……卒業生?)

そう答えると裕太の溜め息が聞こえた気がした。って言うか裕太、君、僕のアイコンタクト無視? ……傷付くよ、それ。

弟にアイコンタクトを無視されて悲しんでいると、今度は菊花が口をパクパクして何かを伝えようとしている。

なになに。

(秋お兄ちゃん、とても素敵です)

……菊花。僕は今、君の兄で良かったと思っている。こんな平凡な兄を素敵だなんて言ってくれるのは君ぐらいだよ。その心遣い、汐姉も見習うべきだね。

ところで、さっきから浴びてる視線は何? 菊花と裕太から目を離すと、僕を興味深そうに見ている若い女性の先生と目が合った。

……とりあえず笑って会釈しておこう。そんなやつつけ仕事精神でまだ若々しさ漂う先生に微笑みかける。すると、先生は顔を赤くしてしまった。暑いのだろうか。

今日は晴れてるし、気温の変化についていけないとか。首を傾げていると、鈍感、と裕太がそう言ったような気がした。

授業の終わりを告げる鐘が鳴り響いて直ぐ様、菊花と裕太がこちらにやって来た。そんなに急がなくても僕は逃げないのにご苦労な事である。

余談だが、この中学校の制服は男子が白いシャツと緑色のネクタイで、女子が白いシャツと赤色のリボン。ズボンとスカートは黒だ。冬服はその上に青のブレザーを羽織る。聞いた話だけど、世界的に有名なデザイナーが作った制服らしい。私立ならではのお金の掛け方だ。通っていた僕が言える事でもないけど。

あれ？ さつきも似たような事を言ったような気がする。……まあいいや。

と、そんな事を考えていると、いつの間にか菊花と裕太が目の前に来ていた。

「秋お兄ちゃん、来てくれて嬉しいです」

そう言って、笑う菊花。ああ、もう。なんて可愛いんだ、この妹だったら。思わず抱き締めたくならないか。それにしても、裕太はさつきから仏頂面　と言うより、拗ねたような顔をしているのだが、理由が分からない。何か悪い事をしてしまったんだろうか、僕。

「ねえ、裕太。何でそんな怒ってるの？」

顔を覗き込むように聞くと、裕太は僕を睨んできた。びっくりして、少し怯む。

「秋兄ちゃんの鈍感天然無自覚たらし！　秋兄ちゃんが無差別に優しいから、おれたちが困ってるんだよ！？　どうするのさ、今日！　おれには止められる自信ないよ！？」

ひ、酷い。鈍感天然無自覚たらしつて、それではまるで僕がタケちゃんみたいじゃないか。それは酷いと思う。って言うかシヨックだ。それに、僕に来て欲しくないみたいなのその言葉は、胸が痛くなる。って言うか、止められる自信って何？

「秋お兄ちゃん……」

呆然とする僕を、菊花が慰めるように手を握ってきた。菊花は、『止められる自信』と言う言葉の意味が分かっているようである。

「ね、菊花」

菊花に問おうとした、その時。

「向坂先輩に、なんて事言うのこの脳内筋肉ドチビがああああっ！」

ドゴツ、と鈍い音を立てる叩かれた裕太の頭。突然の事に驚いて、先程まであつた疑問なんてどこかに吹っ飛んでしまった。

「いってええええええ！」

「向坂先輩を貶けなすなんて、そんなちびっ子は地に這っていればいいのよー！」

頭を押さえて蹲る裕太の後ろから現れたのは、ポニーテールの女の子。活発そうな印象を受けるその女の子の目は輝いており、頬は紅潮している。そして何故かその女の子は輝いた目で僕を見てきた。

「向坂先輩、お久しぶりです！ 二年前、自転車がパンクしている

所を助けてもらった者です！」

そう言えば、そんな事もあった。自転車がパンクして困ってたみたいだから、自転車を修理してくれる所に案内したんだっけ。

「ふふつ。うん、覚えてるよ。あの後、大丈夫だった？」

失礼だけど、女の子が手に持ったままの上履きを見て笑ってしまった。だって、上履きをぎゅぎゅ握り締めて、片足だけそれ履いてないんだよ？ それで裕太を叩いたんだって思うと、凄く面白い。

「ユウちゃん、大丈夫？」

裕太に手を差し出す菊花と、その手を取る裕太。まるで天使（菊花）が子供（裕太）に手を差し伸べている絵画のようだ。

「ん、ああ。菊花、ありがと……。……って委員長お！ その手に持つ上履きは何だ！ まさかそれでおれを叩いたのか！？」

「煩い！ あっ！ さ、向坂先輩、気にしないでくださいね！ 普通のあたしはこ、こんな人を上履きで叩くなんて事は」

「嘘つくな！ 昨日だって、チヨークを投げつけて」

「黙って死ね！」

腰を軸にした回転が加えられ、繰り出された打撃は相当なものだったのだろう。裕太の頭は再び鈍い音を立てた。いや、先程よりも凄い音がしたような気がする。

「いったあああつ!!」

「余計な事言わないでよ！
訳があるんです！」

あつ！ 向坂先輩、これには深い

裕太の悲鳴と委員長さんの叫びが重なって両方ともよく聞き取れない。いつもこんなに騒がしいのだろうか。楽しそうなクラスである。

まあ、何はともあれ。

「仲がいいのはいい事だよね」

「……あれが仲良く見えるのなら、秋お兄ちゃんは病院に行った方がいいと思います」

菊花は中々な毒舌だった。

第四十五話：「触らぬ神に祟りなし」

あれから数分、委員長さんと裕太の口論は続いた。そしてそれを止めたのは菊花の言葉。

「次は体育ですから早くした方がいいですよ？」

鶴の一声。その言葉を聞いた委員長さんは素早く女子を統率して更衣室へ向かい、喧しかった教室には虚しくなるまでの沈黙が訪れた。

「秋兄ちゃん。次、男子と女子はどっちも体育館だから、先に行つてよ」

「あ、うん……」

この立ち直りの早さは父さん譲り。そう確信した。

体育館の中に入ると、中に誰かいた。その後ろ姿には、見覚えがある。

……あー。なんか嫌な予感。

僕がまだ中学の時、とても個性的な体育教師がいたのだ。

超が付く程の自己中心的で、バカ。横暴な所行を繰り返してきたが、その人柄の所為か、何故か問題にはならない野郎。

嫌な予感で背筋が寒くなる。そして、その原因が振り向いた。

「おおっ！ 向坂あ！ 早速だが勝負しようぜー！」

「今日は授業参観だよ！ バカか！ バカだな！ そう言えばバカだったな！」

熱血教師、シフトホズミ白戸穂純。

そいつは視界に入った生徒に片っ端から勝負を申し込む事で有名だった。

佑樹やら圭司やら穂純やら。僕の周りにはバカばかりだ。

「僕の周りにはこんなのしかいないのか！？」

思わず床に額を打ち付けなくなった。

「向坂！ お前、見ない内にデカくなったなー！ 中学ん時はこんなくらいだったのよー！」

人差し指と親指を見せる穂純。昔の僕はそんなにミクロじゃない。

「じゃ、早速勝負しようぜー！」

「やらないよ！」

「何でだ？」

「何でって……。そりゃ、僕スリッパだし」

「安心しろ。お前が置いていったバツシュ（バスケットシューズ）はオレが大切に保管してある」

何で持ってるんだよ。気持ち悪いな。保管せずに捨ててくれよ。唾然として僕が何も言えないのを知ってか知らずか、穂純は、じやあ決まりだな、と言って立ち上がり、どこかへ行ってしまった。そうして、無駄な争いをやる事になってしまった。

「うわ。マジでめんどくせえ……」

誰もいない体育館で一人、ポツリと呟いた言葉は誰にも聞かれる事なく消えた。

「今日は授業参観だからそう時間は掛けられねえ。五分だ。五分でケリつけようぜ」

「分かった。分かったから、さっさと始めようよ」

菊花と裕太、そのクラスメート達は体育館の隅っこで見学中。そちらに視線を向けると、どうやら裕太も穂純の洗礼を受けていたようで、同情の眼差しで見られた。

「向坂次兄先輩、死ぬ程萌えさせてくださーい！」

菊花の隣にいる女の子に変な名前と呼ばれる。言動がちよっと危ないのはスルーしよう。うん。触らぬ神に祟りなしってね。

「おい、西園寺！ オレを応援しろ、オレを！ 委員長、皆に穂純先生を応援するように言っちゃってくれ！」

「嫌です！ 冷子、もっとやっちなさい！」

「イエッサー！」

哀れ穂純。信用も信頼も何も無い。

「……………」

靴底を押し付け、床の感触を確かめる。柔軟運動もしっかりと。

「……………」

覚悟は決まった。菊花と裕太の前で恥は掻きたくない。

五分で、ケリをつけてやる。

「さあ、始めようか。ね？」

嫌みつたらしくニツコリと笑顔を向けると、穂純も笑った。

「きゃああ！ 向坂次兄先輩のレア笑顔が見れたー！」

……触らぬ神に祟りなしだよ。うん。

始まりを告げる笛の音が鳴ってから、どれくらい経ったか。残り時間、数十秒。

点差は二点。僕が負けている。勝算は少ない。

だけどチャンスはある。今、ボールを持っているのは僕だ。

「お姫様、どうする？ このままだと、負けちまうぞ？」

「……ちよっと、黙れば？」

酸欠に近い状態で出す声は掠れていた。視線を流し、相手の隙を探す。

「お姫様、そろそろ諦めたらどうだ？ あと二十秒しかないぞ」

隙がないなら、作るまで。

「穂純。黙ってないと、舌、噛むよ？」

「はっ？」

一瞬の間。その隙に、潜り込む。

「あ チィッ」

横を通り抜ける瞬間、悔しそうな舌打ちが耳に入った。それを聞き流して、そのままシュート。

そして、試合終了の笛が鳴る。

「あんまりナメてると、痛い目見るよ？ 穂純センセ？」

振り返って言うと、穂純は困ったように頭を掻いて笑った。

「向坂次兄先輩、色っぽい！ 超萌えー！ あたしにも笑いかけてくださいー！」

……触らない。僕は触らないぞ。

第四十六話：「トラウマよもう一度」

時は過ぎて昼休み。

なんだかとても騒がしいなあ、と思いつつ、菊花と裕太と共に食堂へ向かう。

高校では僕に安寧あんねいはない。だが、中学では違っだろう。幸い、僕が千歳と親しい事は高校生の間だけで広まっているみたいで、まだあまり知られていないのだ。

なので、久しぶりに、衆人観衆に晒される事なく食事が出ると思ったのだけど

「うおっ」

食堂に入った途端に視線が集まってくるものだから、驚いて声を上げてしまった。な、なんでこんなに見られんの？ 千歳の事？ それとも善也兄とか汐姉絡み？

「秋兄ちゃん、落ち着いてよ」

挙動不審な僕を、宥なだめるように言う裕太。これが落ち着いていられますか。だって僕、こんなに注目される覚えないんだよ？

「この様子からすると、既に体育の時間の事が広まっているんだと思います」

頬に手を当て、菊花が困ったように言う。

「体育？ それって穂純とのバスケの事？」

「そうだね。多分、おれのクラスか、隣のクラスの奴らが言い触らしたんだと思う」

「えー？ そんな事言い触らしてどうするのさ」

「えと、秋お兄ちゃんは綺麗ですから、噂されるのは当然かと」

「いや、それはない。絶対ないよ」

「……」

「……」

うっ。な、何その呆れたような目。そんな目で見られるとは思わなかったぞ。

「……まあ、いいや。さっさと食べて退散しようよ。ゴタゴタに巻き込まれるのはもうたくさんだからね」

「もう？ ゴタゴタ？ 何それ。どう言う意味？」

食券販売機に向かっていく裕太の背中に問い掛けると、袖を引っ張られる感覚。目を向けると、菊花が僕の服の袖を掴んでいた。

「ユウちゃんは秋お兄ちゃんの事を心配してるんです。怒ってる訳ではないので、許してあげてください」

菊花の言葉を聞いて、なるほどと思った。どうやら菊花は、裕太の態度に僕が怒っていると思っっているらしい。そんな訳ないのに。

「許すも何も僕は怒ってないよ？ 裕太が怒るんなら、それは僕が悪いと思うし……」

苦笑しながら告げると、菊花は首を横に振る。

「秋お兄ちゃんのいい所は優しい所で、悪い所は自分を卑下する事です」

ですから、と菊花は続ける。

「私は、秋お兄ちゃんが大好きで、ちょっと嫌いです」

「ひうえっ？ き、嫌い？」

「はい。もっと自分に自信を持ってくれたら、そんな事はなくなりますけどね」

うふふ、とどこか悪戯めいた笑みを浮かべながら、菊花は裕太の後を追って行った。よ、喜ぶ所なのか悲しむ所なのか微妙……。

複雑な心境だが、置いてけぼりにされないように、僕は二人の元へ急いだ。

大好物と言っても過言ではないオムライスをパクついている僕を、ニコニコ笑顔で見つめてくる菊花と、面白そうに見てくる裕太。

「……あの、見られてると食べにくいんだけど……」

「秋兄ちゃん、味覚が子供なんだよねー」

「ユウちゃん、幼いと言った方が聞こえがいいですよ」

「オムライスが好きなんだから、別にいいでしょっ。それにね、菊花。それフォローになってないから」

とは言え、僕だって味覚がお子様なのは自覚している。ハンバーグとか好きだし。でも、好きなんだから仕方ない。って言うか、裕太だって好きじゃん。カレーとか。

「あ、あの」

裕太と菊花にどう反論しようか考えていた時、声が聞こえてきた。思わず声かした方を振り向くと、そこには菊花より小さな女の子が立っていた。いかにも小動物って言う感じの女の子。怯えているように見えるのは、僕が年上だからか、部外者（いくら母校と言えど、今は部外者に過ぎない）だからか分からない。

「僕に何か用かな？」

怖がらせないように、笑顔を浮かべて対応する。僕は結構、子供の面倒を見るのが得意だ。相手の警戒を解く笑顔は取得している。

「あ……」

「あれ？ えと、そんなに怖がらなくてもいいんだよ？」

しかし女の子は顔を赤くして黙り込んでしまった。自信あったのに……。やっぱり、小学生と中学生は違うのだろうか。

女の子の緊張と警戒を解けなかった事にちよっと落ち込みつつ、再度チャレンジ。

「ほら、怖がらないでお兄さんに何でも話してみて？」

（秋お兄ちゃん、まるで幼稚園児や小学生を相手にしているかのような口振りですね……）

（実際そうなんだと思う）

「ん？ 二人とも、何か言った？」

「いえ、何も」

「別に言っていないよ」

「そう？ ……あ、もう一度聞くけど、僕に何か用かな？」

「あ、それは、その……」

しどろもどろな女の子の言葉を聞き取るうと、耳を澄まして笑顔
を浮かべる。

「うん。何？」

「握手……して、くれませんか？」

「いいよー。握手ぐらい……って、ええっ！？ な、何で握手っ！
」？

（と、突然の急展開です！）

（ああ……そうしておれはまた、ゴタゴタに巻き込まれていく……）

（遠い目で現実逃避しても虚しいだけですよ、ユウちゃん）

視界の隅で何やらゴソゴソしている二人はとりあえずスルーして
置いて。

「あのっ、そのっ、どうして僕なんかと握手を？ しても何の利益
もないよ？」

「さ、向坂先輩はわたしの憧れなんです」

「あ、憧れえ？」

「はい」

目の前の女の子が嘘をつくようには思えない。だとすると、その

女の子が言ってる事は本当だ。

「でも、僕なんか」

「いえ、わたしは向坂先輩に憧れているんです」

そう言っただけの子は、僕の手を握ってきた（意外と積極的？）。

「向坂先輩は凄い人です。素晴らしい人です。優しくて、綺麗で、思いやりがあつて……。わたし、見てたんです。向坂先輩が、捨て猫に餌をあげていた所……」

（うわあ。ベタだな、それ）

（まあ、秋お兄ちゃんは優しいですから、そんな事があつても不思議じゃないんですけどね。静奈^{シズナ}ちゃんはそれで、秋お兄ちゃんを尊敬しているみたいですけど）

（あれ？ 菊花、知り合い？）

（ええ、友達です）

「そしてその捨て猫を抱いて友達の家を一軒一軒回っていた事を、菊花ちゃんから聞きました」

「た、確かにそうだけど……」

な、なんだかこの子、見掛けによらず明るいなあ。って言うか菊花の友達なんだね。

「ですから向坂先輩、わたしは」

と、その時、食堂の入り口で大きな音がした。

「ま、マズいつ！」

「秋お兄ちゃん、逃げてくださいっ！」

「はあっ!? 一体何が」

僕の言葉を遮ったのは、地鳴りにも聞こえる、いくつもの足音。

その時、僕の中でのトラウマが 目を覚ました。

春、足音、フラッシュバック。

あの夜の鬼ごっこが、ふと脳裏に。

「 ! ! ! 」

声にならない悲鳴をあげて、僕は走り出した。

「ゆ、裕太! 後ろから追ってくる人たちは何なのお! ? 」

「秋兄ちゃんは知らない方がいいよ! 」

「き、菊花は大丈夫なの! ? 」

「菊花はあの静奈って言う女子と一緒に! 」

後ろから聞こえてくる足音は止まない。

「秋お兄様っ！ お待ちになって！」

お嬢様言葉！？ 誰ですか！？

「俺の姫え！」

だ、誰が姫だ！ 誰が！ 僕は男だあ！

「王子！」

僕は平民Aです！

「お姉様！」

最早男もはやですらない！

って言うつか、王子とか姫とかお兄様とかお姉様とか……。

「いつ、一体なんなんだあああっ！」

鬼ごっこは昼休み終了間際まで続き、僕は恐怖で保健室に籠城する事になったのだった。

そして下校時間。

「今日は凄い疲れたなあ……………」

「おれも……………」

「私もです……………」

あはははは、と三人で乾いた笑いを交わす。
と、その時。

「向坂先輩！ 一緒に帰りませんか!?!」

「い、委員長!?! 何でこんな所に！ 家は逆方向」

「煩いつ!?!」

「向坂次兄先輩！ あたしと一緒に萌えの世界を目指しませんか!?!」

「さ、向坂先輩！ 仲良くなった記念に一緒に帰りましょう!?!」

「れ、冷子ちゃんと静奈ちゃんです……………」

「あ、あははは……………」

またもや僕は乾いた笑いを零す。しかしそれは次の瞬間、悲鳴と変わった。

後ろから聞こえてくる足音。春、鬼ごっこ、フラッシュユバツク。

「秋お兄様っ！」

「お姉様！」

「あたしの王子！」

「姫え！」

「も、もう嫌だあああっ！」

今日の日記。

トラウマが一つ、増えました。

第四十七話：「今までとは違う」

夏休みも終わりに近付いていたある日。

携帯電話が、振動した。

「はい。もしもし？ タケちゃん、何の用？」

「よう。夏休み堪能してるか？」

「あー、まあまあ」

「そっかそっか。ところで秋」

あれ？ 何だろう？ 何だか凄い嫌な予感が

「バイト、してみないか？ って言うか、手伝ってください」

果たして、嫌な予感は当たっていたのか当たっていないのか。まあとりあえず、僕にとっては迷惑な話でしかなかった。

話によると、タケちゃんは今、海の浜辺で店を開いているらしく、人手が足りなくて困ってるようだ。そこで、都合よく浮かんだのが僕の顔。全く迷惑な話だ。

もう一人くらい連れてきてくれとタケちゃんは凶々しくも言った。そんな事言える立場じゃないだろお前、と声を大にして言いたかったが、それでは僕が変人扱いされるのが目に見えているので止めた。ちなみに現在地、自室。

「あ、琉？ 明後日は暇あつて？」

『あー、わりい。その日は社交パーティーがあるんだ。出席しねえとジジイがうるせえから』

「環？ 明後日は暇？」

『明後日？ ちょっと待って……。ああ、その日はダメだ。父さんの仕事の手伝いで大阪支部に行くから』

「壱、明後日、暇？」

『明後日？ ごめん秋ちゃん。行けそうにないよー。明後日は母さんとパリに行かなきゃいけないんだよねー』

三連敗。どれも次元が違う断り方だった。

他には……と考えた所でバカ二人の顔が浮かんだが、すぐに打ち消した。間違ってもあの二人は連れていきたくない。佑樹は仕事そ

っちのけでナンパするだろうし、圭司は彼女がいないとネガティブ思考になるし。

「……他の人探そ」

そうして携帯の電話帳を探していく内に、一つの名前が目に入った。

『日宮千歳』

「……いや。いやいやいや、来ないって。絶対来ないから」

千歳が、バイト？ 有り得ない。そんな事、想像出来ないし。

でも。

そう頭の中では否定しつつも、心のどこかで期待している自分がいる事に気付く。

胸に手を当てると、伝わる鼓動は早い。

何で僕は、こんなにドキドキしているんだろう。

「……」

僅かな期待を胸にしながら、通話ボタンを押す。

お馴染みの機械音を数回聞いて、彼女は、いつもと変わらない様子で電話に出た。

正直に言おう。僕はあの時、どうにかしていたんだと思う。

それは昨夜。千歳が電話に出た時の事だ。

『もしもし？ 秋？』

ち、千歳？

『ああ。どうした？』

い、いや、あのさ、千歳。

『うん？』

あ、明後日、暇かな？ 暇なら、一緒に海に行かない？

『…………それはデートの誘いか？』

ほえあつ！？ い、いや、デートとかそんなんじゃないから、
た、タケちゃんが、人手が足りないからバイトに来てくれって言
うから…………っ！

『ふふつ。冗談だ。落ち着け』

っ！ うう……。ごめん……。

『いや、私もからかいすぎた。それで、海の件だが』

う、うん。ダメだよ。だって、千歳なんだし……。

『？ 私だと言う理由は分からないが、喜んで同行しよう』

……へう？

『この前、美波と一緒に水着を選んだのだが、着る機会が無くてな。ちよっと困ってたんだ』

そ、そうなんだ。

『それに、秋とも遊びたかったしな』

そ、そ、そうなんだ。ありがとう。

『ああ。で、どうするんだ？ 当日、どこかで待ち合わせするの？』

あ、それはまた明日教えるよ。まだタケちゃんから、よく事情を聞いていないんだ。

『そう。じゃあ、また明日だな』

うん。また明日。

『お休み、秋』

お休み、千歳。

これが昨日の会話である。

正直に言おう。あの時の僕はどうかしていた。(二回目)

正直に言おう。

……は、恥ずかしいいっ！ 何あんなに動揺してんのさ僕っ。
恥ずかしすぎる！

赤面しながら悲鳴を上げて床を転げ回る男は不審者以外何でもないだろう。それ僕。今の僕。

「うわ、うっわ、うっわー！ 恥ずかしいー！ 何、ドキドキしちゃってんの過去の僕ー！」

千歳にドキドキしてしまうなんて、信じられない。いや、千歳は凄く魅力的だ。彼女が傍にいと、僕はいつもドキドキしてるか、穏やかな気持ちになるかのどっちかだ。

だけど、今までなら何度かしたドキドキと、今回のドキドキは違う。

よく分からないんだけど、どこか違うんだ。

こんな感覚を覚えたのは彼女がアメリカから帰って来て、空港で

会った時から。

本当に、どうしたんだよ、僕。

「……」

転がるのを止め、天井を見ていると、視界の隅に何かが映った。手を伸ばしてソレを取る。

手の中にあっただのは、携帯。

ああ、そう言えば、タケちゃんに電話しなきゃいけないんだ。すっかり忘れていた。

履歴から『里原武斗』の名前を探し、通話ボタンを押す。

馴染みの機械音が数回聞こえて、やっと電話に出る。

『よ、秋。どう？ 友達、来てくれるって？』

「ああ、うん。いいって。どうすればいい？」

『そうだな。明後日の昼頃、来てくれ。地図は後で送るか？』

「そうして貰えると助かるな」

『分かった。あ、秋』

「何？」

『一緒に来る人って男？ それとも女？』

どう答えるべきか、数秒迷った。

千歳は女だ。それは間違いない。しかし、タケちゃんに同行するのが千歳だと言っていていいものか。だが、タケちゃんは既に彼女と顔見知りである。となると、事前報告は必要だろう。

彼女が日宮千歳だとバレないように、色々と手助けもいるだろうし。協力者は多い方がいい。

「タケちゃん、実はね」

『ん？ 何だ？ オカマなんて言うオチはいらないぞ？』

「安心してよ。そんなんじゃないから。 あのね、日宮千歳なんだよ。一緒に来るの」

『……………』

「……………」

数十秒による沈黙。それを破ったのは、

『何いいいい！？』

電話越しのタケちゃん・シャウトだった。
相変わらず煩い。

「タケちゃん、もう少しボリューム下げてよ」

『ばっ！ だっ！ おまっ！』

「何？ ちゃんと喋ってよ」

『バカ秋っ！ 俺はてっきり、男を連れてくると思って、相部屋にしちまったじゃねえかっ！ 一泊三日だぞお前！ どうするんだよ』！

「……は？ ちょっと待って。話が見えない」

『だからっ！ お前と日宮千歳は、一緒の部屋で寝るって事なんだっ！』

「……」

『……』

数十秒の沈黙。

それを破ったのは、

「嘘おおお！？」

滅多に聞けない、僕の絶叫だった。

第四十八話：「イジワルな千歳」

それから時は経って。千歳にはメールで、駅前にも一時と送っておいだ。

相部屋の事は、面と向かってちゃんと伝えた方がいいと思ったから、メールでは伝えていない。

「……………」

正直、気が重い。どうしてもその……………あ、相部屋の事を考えてしまい、それから千歳にどうやって伝えるかを考えてしまうから。

だって、一つ屋根の下ならまだしも、一つ部屋の中だよ？ 無理でしょ！ そりゃドキドキして眠れないって！

大体、タケちゃんもタケちゃんだよ。僕が女の子を連れてくる事は有り得ないって思ってたみただけど、それって酷くないかある意味。要するに、僕は女の子も誘えないような奥手野郎って思われてるって事だろ。……………ひ、否定はしないけど肯定もしないぞ。

「ああ……………もう嫌だー」

自分の体が重くなるのを感じる。

タケちゃんめ。これで千歳に嫌われたらどうしてくれるんだ。いや、でも、もし本当に嫌われたらどうしよう。……………泣くかもしれない。まあ、その時にはタケちゃんを恨むか。

「はあ……………あ」

溜め息を吐き時計を確認し、そろそろ千歳との約束の時間が近付いているのに気付く。旅行の用意は前日に済ましてあり、今更焦る事はない。

昨日、母さん達に旅行の事を伝えたら、勝手に鞆の中に詰め込んできたのだ。主に女性陣が。楽と言えば楽なんだが、どうにも僕は自分の事が自分で出来ないようなダメ男と認識されているみたい。荷造りぐらい自分で出来るのに。

と、そんな事を考えている内に、家を出なければいけない時間だと気付く。

そしてそれは、彼女にあの事を話さなければいけないと言う事で

「……よしっ」

気合いを入れて、笑ってみる。折角の旅行だ。千歳にがっかりさせないように、頑張ろう。

玄関で、いつてきますと言うと、リビングから数人の声が混ざった『いつてらっしゃい』が聞こえてきて、不思議と頬が緩んだ。

駅前に着くと、人ごみが凄かった。夏休みとあって、遠出する人もいるのだろう。

だけど千歳はすぐに見付かった。

目を伏せてオブジェに寄りかかる姿は、まるで絵画のようで、近寄りがたい雰囲気を漂わせている彼女。

以前、空港で顔を合わせた時の髪型の癖がまだ残っているのか、長い髪がふわふわしていた。……うん。可愛いと思ってしまいました。あの千歳を見て可愛いと思わない人は異常だと思っくらいに可愛い。

服装もいつもと違い、いつもはシックなモノトーンカラーを着こなしている彼女だけど、今日は何だか違った。

詳しく言うと、肩が露出するように作られ、ゆったりとした丈が長いライトグリーンの七分袖シャツ。袖までゆったりしていて、浴衣の袖みたいだと思った。そしてそれにはずり落ちないようにと黒の肩紐が付いている。そして丈の長いシャツからチラチラと見えるショートパンツ。履^はいているのは低めのミュール。

まあ、簡潔に言ってしまうと、露出度が高いのだ。暑いので、仕方ないのかもしれない。

って、見とれてる場合じゃないよね。

黒いカラコンをしているので、別に名前を呼んでも大丈夫だろう。

静かに歩いて、彼女の前に立つ。すると僕だと気付いたのか、彼女は顔を上げた。その綺麗な顔に、不敵な笑みを浮かばせて。

「遅いじゃないか。私を待たせるとはいい度胸をしているな」

「千歳が早すぎるんだよ。そんなに待ちきれなかった？」

「くくつ。秋のクセに言うじゃないか。内心、私に軽口を叩いてヒヤヒヤしてるんじゃないだろうな？」

「ははっ。まさか」

そう。そのまさかである。

僕がこんなにも饒舌じゆうたつなのは、いつあの話を切り出そうか迷っている訳であって、彼女の言う通り、内心ヒヤヒヤなのだ。

でも、今の内に言っておかないと後々ヒドい目に合いそうで怖い。言い出すなら、今なんだろう。

「あのだ、千歳？」

「うん？」

首を傾げる千歳。その仕草で何人の男が見とれた事やら。

「あー、そのー……泊まる部屋が僕と相部屋なんだけど……大丈夫？」

「……？　つまり、私と秋が一緒の部屋で寝る、と言う事か？」

「うん！　やっぱりダメだね！　待ってて！　タケちゃんに言って何とかして貰うから」

「私は別に構わないけど」

「……ふあ？」

「ぱーどうん？　今、この人は何と言いましたか？」

「何を今更。私に裸を見せたクセに、一緒の部屋が恥ずかしいのか？」

「誤解を招くような言い方はよしなさい！　それに僕は好き好んで見せてないよ！　あれは事故！　一緒の部屋が恥ずかしいのは当たり前なの！」

一気に捲まくし立てた所為で息切れを繰り返す。そんな僕を見てはクスクス笑う彼女。

「冗談だよ。からかいすぎた。でも一緒の部屋でもいいと言っるのは本当だ」

「だって、と千歳は続ける。

「私は秋を信用しているからな。お前が変な事をしない限りは、だが」

「しないから！」

「冗談だ」

また千歳は、クスクスと笑い出した。ホントに、ホントに、この娘ってば。

「……千歳には敵わないよ」

「当たり前だ。私は日宮千歳だからな」

真面目な顔でそう言った彼女がおかしくて、僕達は顔を見合わせ
て笑った。

何はともあれ、二泊三日の二人旅行は始まったのだらう。

第四十九話：「少年のような従兄弟」

青い海。白い砂浜。灼熱の太陽。普通だったらそんなありきたりなフレーズが頭の中に浮かぶだろう。だが僕が思うのは、もう帰りたいと言う事だけだった。

「……人間が多いな」

「夏休みだからね」

まるで現実を拒否するかのように目を細め、ビーチの人ごみに辟^{へき}易^{えき}としている千歳に補足をする。何だか責めるような目をこっち向けてくるのは僕の勘違いだと願いたい。

しかし、人ごみの中にはやはり千歳に気付いてる人もいるようで、こつちを指差してヒソヒソ話してる。その事で隣に目配せすると、彼女は頷いて頭に上げていたサングラスを下ろした。

「千歳も大変だね」

「もう慣れた」

そう言う千歳の顔は晴れない。何故なら先程から、

『日宮千歳さんですか？』

『いえ、違います』

『え？ 本当ですか？』

『はい。でも彼女とは親戚なので、似ているんだと思います』

『あ、そうなんですか。……メアド交換しません？』

『しません』

と言うやり取りを何回も続けていて、千歳は飽き飽き、隣で見ている僕はハラハラしているのだ。これが現代の中高生ならもっと疲れ。

熱烈に注がれる視線に、二人揃って溜め息をついた。

「全く……。私は見せ物じゃないぞ」

今時な大きいサングラスを中指で上げる様は、雑誌の表紙モデル顔負け。日宮千歳だと気付かない人でも見とれている。そして僕に羨望や嫉妬を向ける者も少なくはない。そこにいる二人組の大学生ぐらいお兄さんなんて、虎視眈々こしたんたんと千歳を狙っているのがバレバレだ。僕がここから離れた瞬間、餌を見つけた肉食獣のように彼女に迫るだろう。それだけは断固阻止。

「……」

「ん？ どうした、秋」

肩と肩が触れ合う距離にまで近付くと、千歳が訝しげに僕を見た。さて、どうしよう。まさか『他の男を牽制けんせいしてます』なんて言えない。変な目で見られるのは嫌だ。こんな時はアレだろう。ベタなセリフの一つを使うか。それで納得してくれるかは微妙だけど。

「あ、えっと、はぐれちゃ大変だと思ったんだ」

「なるほど」

「どうやら心配は杞憂きゆうに終わったらしい。何事もなく納得してくれました。」

「人ごみは嫌いだ」

「そうだね。じゃあ、さっさと行こうか」

千歳の荷物を受け取り、歩き出す。後ろから、返せ、と言う声が聞こえた気がしたけど多分空耳だろう。

空を見上げれば、太陽が僕らを焼き焦がさんとして輝いていた。

「……」

「……」

言葉も出ないとはこの事だろうか。僕と千歳の目の前で繰り広げ

られる黄色い悲鳴の嵐。その台風の目は、何を隠そう我が従兄弟、里原武斗だった。店内の客は殆どが女性。タケちゃんが焼きそばを焼く一挙一動に、いちいち歓声が響く。そして調子に乗っているナルシストな従兄弟。

それを見た瞬間、自分と千歳の周りの空気だけに辟易オーラが発生した。もう十分疲れているのに、ここで働かせる気なのか。張り倒すぞ。

「あ、秋！」

やっとこちらに気付いたタケちゃんが、キラキラ光る汗を飛ばしながら満面の笑みで僕を見た。そして隣に立つ彼女を見て、更に嬉しそうな顔をする。

「なあ。何でお前の従兄弟はああも嬉しそうなんだ？」

「ああ。タケちゃん、夏になると精神年齢が退行するんだよね。去年は虫取りに無理やり連れて行かれたし」

「……まあ、いくつになっても純粹なのはいいと思うが……」

「少年のような心って言えば聞こえはいいけど、二十五歳の男が十五歳の従兄弟を連れ出して虫取りしてたら変だと思わない？」

「……うん」

千歳は非常に言いにくそうな顔をして頷いた。でも、しょうがない。僕が五歳ぐらいだったらそんな事なかったんだろうけど。

「秋、今から部屋に案内するからなー！
藤沢^{フジサワ}、ちよっとこれやっ

「てて！」

「分かりましたー！」

厨房にいた従業員らしき人に交替してもらったタケちゃんは、入り口で突っ立っていた僕らの元に駆け足でやって来た。本当に落着きがないなあ。これで二十六歳かよ。そう言えば、タケちゃんは高校生の頃からこんな性格だったような気がする。

「よう、秋。一昨日は悪かったな。日宮　ぐむうつ！？」

千歳のフルネームを言おうとしたタケちゃんの口を素早く塞ぐ。
危ない危ない。危うくバレる所だったよ。名前ならまだしも、名字なんて出したら一発でバレてしまう。このバカで女たらしな従兄弟にも、釘を刺しておかなければならぬだろう。

「いい？　ここで千歳の名字は出さないで。もし呼ぶんなら　ど
うする、千歳？」

隣に目を移すと、彼女はちょっと首を傾げて言った。

「木崎^{キサキ}。母の旧姓だ」

「じゃあ、木崎千歳って事で。分かった？」

首を縦に振るのを視認してから手を離した。

タケちゃんは基本的にいい人で、言い触らすような事はしないから信用出来る。だから一緒に行くのは日宮千歳だって正直に言ったんだ。

「部屋に案内してくれる？」

「あ、ああ。それにしても、世界的有名人とお前が付き合ってたなんて、ビックリだぜ」

「……」

隣の千歳には聞こえないような囁いてくるタケちゃん。とりあえず、軽く蹴っておいた。

店の二階は旅館風になっていて、全室冷房完備らしい。中々な設備に驚いていると、タケちゃんに笑われた。

「あのなあ。俺だって、結構稼いでるんだよ。これくらいで驚くなつつの。あ、ここがお前らの部屋だ。一応、一番いい部屋にしといたから」

そう言って、開けられた扉。

正直、驚いた。二人で使うのには広すぎだと思っぐらいのスペースがある。

「後で従業員を紹介するからよ。ああ、バイト中は水着が制服だから、ちゃんと守るように。パーカー、Ｔシャツの着用は許可する。じゃ、今の内にゆっくりしとけよ。一時間後また呼びにくるから。冷蔵庫の飲み物は好きにしてくれ」

言うだけ言うと、タケちゃんはさっさと部屋を出て行った。よっぽど忙しいのだろう。無理に引き止めるような事はしない。

閉められた扉から目を離すと、千歳がのんびりとお茶を飲んでいった。いつの間に冷蔵庫から取り出したんだか。

「いい天気だな」

「そうだね」

でもこの和やかな空気は、嫌いじゃない。

一時間後。僕は部屋の外に立っていた。水着を着ているが、上にＴシャツを着ている。今は部屋で着替えている千歳を待っている所だ。

壁にもたれながら立っていると、部屋の扉が開く。

中から現れたのは、黒いビキニを着た千歳。所々にチエーンのア
クセサリーが付いていて、スタイリッシュな水着だ。ソレは彼女の
肌の白さを際立たせていて、スタイルがいい事を表している。

「悪い、待たせた」

少し眉を顰め、申し訳なさそうに言う彼女。

「……」

「？ どうしたそんな怖い顔をして。 眉間に皺しわが寄っているぞ？」

長い指が、僕の眉間の皺を伸ばそうとしている。 ちよつと痛い…
…ってそんな事より。 まだ眉間の皺を伸ばそうと頑張っている指を
掴む。

「千歳、上に何か着てよ」

「？ 何故？」

ああ、何でだろう。 彼女と目が合わせられない。

「……秋？」

「っ！ 何でもいいから！」

千歳の気遣うような視線に堪えきれなくなって、部屋に押し込
だ。

「秋!？」

「お願いだから、何か着て？」

数秒の沈黙。そして何故だか嫌な予感がした。

「ははあ。なるほどな」

確証はない。だけど、千歳が扉の向こうでニヤリと笑っているような気がした。何かなるほどなんだ。

「ふふつ。分かった。秋の言う通り、パーカーを着る」

「そ、そう？ ならいいけど……」

部屋の中から物音がして、その音が止んだと思ったら、白い薄手の半袖パーカーを着た千歳が出て来た。……前を開けているのはまあ良しとしよう。

「これでいいか？」

「え、あ、うん」

何だか気まずくて目を逸らしていると、腕を急に引っ張られる。

「早く行くぞ」

「ちよっ、ちよっと待って」

「ん」

「わっ。何でいきなり止まるの」

「お前が待てと言った」

「う……」

僕はさっきから何をやっているんだ。自分で自分が分からない。理解不能な自分の行動に頭を悩ませていると、また腕を引っ張られた。

「どうしたの、千歳？」

「なあ、秋」

「うん」

「ヤキモチを妬いてくれてありがとう」

「んなっ!？」

……ヤキモチ? ヤキモチって、あの?

その言葉の意味に気付いた瞬間、どうしようもなく顔が熱くなる。千歳がニヤニヤ笑ってたのは、それが原因か。

「ちが、ちが、違うっ! あ、あれはその」

「ほほう? そこまで取り乱すとは、凶星か?」

「ずぼっ!?!」

ダメだ。慌てれば慌てる程、墓穴を掘っていく。穴があつたら入りたい。出来ればその墓穴に入りたい。

それにしても、やっぱり千歳はドSだ。僕を苛めて楽しんでる。

「う、うう……。ひ、酷いよ千歳」

「ははっ。本当、秋はからかい甲斐があるな」

「うつつ。もう嫌だ……」

「気にするな。さあ、早く行こう」

そう言つて今度は、僕の手を取る。久しぶりに感じる、冷たくて柔らかい感触を懐かしく思いながら握り返す。

彼女もそう感じたのか、顔を見合せて笑った。

平然とした顔で廊下を歩く僕の鼓動は、速い。

彼女に凶星かと問われた時から、落ち着かないのだ。隣を歩く彼女を盗み見ると、更に鼓動が速くなる。

まさか。

一瞬、脳裏に浮かんだ考えを、鼻で笑って打ち消した。いつの間にか千歳がこちらを見ていたので、静かに笑い返す。

何だか無性に、彼女の紅い双眸まなこが恋しかった。

第五十話：「ナンパから守る方法」

突然ですが、僕は今、非常にイライラしてます。それもこれも、注文をとる彼女に群がる男達の所為。お客さんが帰った後のテーブルを拭きながら、彼女のことを気になってチラチラと見てしまう。

「ねえねえ。君いくつ？」

そう言いながらテーブルに座る四人組の男の一人は彼女に手を伸ばす。

触ったら殴る。絶対殴る。

僕の思考を読み取ったのか（それとも自身の防衛本能か）、彼女はそれをさり気なくかわし、ご注文は？ と必殺の営業スマイルを繰り出した。

それでも諦めない餓えたハイエナ達。

「注文とかは後でいいからさー」

「そうそう。俺達は君の事が知りたいな」

「だから、さ。名前教えて？」

ああもうつ！ 我慢出来ないっ！

「千歳っ！」

「っ？ 秋？」

彼女の肩を引き寄せせる。タケちゃんから教わった、女の子をナンパから守る方法の一つだ。とうとう、これを実践する時が来たのか。出来れば来て欲しくなかった。

「人の彼女に何か用ですか？」

「っ？ は？」

何か言おうとした彼女を、肩を更に引き寄せせる事で止める。

何かこれ、凄い恥ずかしいんだけど！ タケちゃんはこれをやってたのか！？ 恥ずかしさでどうかかなりそうだよ！

「えー、彼氏？」

「はい」

「なーんだ。まあ、君みたいな美人が彼氏いないとか有り得ないしね」

「それもそうだな」

「つか、彼氏も美人だよね」

今、不本意な事を言われた。男に美人とか褒め言葉じゃないし、そもそも僕は美形ですらない。

彼女とは釣り合わない事は分かりきっている。だから偽の彼氏として立っている今も、彼女の趣味が悪いとか思われていないか気が気でない。

もしここにきや琉、環がいたとして、二人のどちらかが彼氏役をしたとしても、見劣りなどせず見事に釣り合った恋人同士に見えた

だろう。

あれ？ 何か僕、落ち込んでない？

「店の真ん中でイチャつくなよ、秋」

「あ。タケちゃん」

後ろを振り向くと、ニヤニヤとした笑いを見せるタケちゃんがいた。俺の教えは役に立っただろ？ と顔に書いてある。その顔止める。

「お前ら休憩時間な。奥に引っ込め」

肩をポンポンと叩かれ、押される。そのまま歩いていっていると、後ろからタケちゃんのご注文は？ と言う声が聞こえてきた。

店の奥に行つて一息つくくと、彼女は僕の背中を叩いて溜め息をついた。

「とりあえず手を退けてから休め」

「え？ あ、ごめん」

肩から手を離し、二歩の距離を開ける。

あー。ドキドキした。バレるんじゃないかと思ったよ。

「全く。無茶をするな。顔が赤い」

「はは、やっぱり？ 暑さの所為にしといてよ」

「恥ずかしいのはお前だけじゃないぞ」

今更気付いたけど、彼女も顔がほんのり赤い。

「でも、ありがとう。おかげで助かった」

「あ、うん。どういたしまして」

「もしかしたらまたあるかも知れないから、その時はまたよろしく」

「うん。こんな僕だけど、出来る限りは」

そんな事態は余り起こって欲しくないけどね。

そう思ってしまうと、苦笑いを零すしかなかった。

今日の仕事が終わり、この店で働く従業員さん達を紹介された後、夕食を食べた僕と彼女は部屋に戻ってきた。

布団は十分に離して敷き、間に仕切りを立てて、今は二人でテレビを見ている。バラエティーで、毎回豪華ゲストを呼んでクイズを

すると言う中々人気な番組だ。

「秋はいつもこの番組を見ているのか？」

オレンジジュースが入ったグラスに口をつけた彼女が聞いてきた。黒いジャージにTシャツと言う簡単な服装だが、見てみるとそのジャージはさり気なくブランドものだった。しかも玲奈さんのブランドの。

「いや、汐姉がいつも見ててさ。習慣になっちゃったんだよね」

「汐先輩が？」

「うん。でも、いきなりどうしたの？」

「いや、何か引っ掛かるんだ。昨日、父と母が何か言っていたような」

「はい！ 今週のゲストは、仁科上総さんと久瀬由衣さんです！」

司会者の声を皮切りに、悲鳴が響く。現れたのは凛とした勝ち気な美女と、王子様のような笑顔を浮かべる美男。

「ああ、そうか。今日はこの番組に出るって言ってたんだ」

「引っ掛かったのはそれ？」

「ああ」

「そっか。 あ、ごめん」

鳴り続ける携帯を手に持ち、部屋を出る。

ディスプレイを見ると、『明瀬環』との文字が。通話ボタンを押して、耳を近付ける。

『あ、秋？』

「うん。環、どうしたの？」

『いや、ちょっと聞きたい事があった。秋がいる所って、前言ってた海だよな？』

「ああ、うん。そっだよ」

『……分かった。聞きたい事はそれだけだから』

「？ そっ？」

『じゃあ、お休み』

「うん。お休み」

『あ、ちょっと待って』

電話を切ろうとした時、静止の音が掛かった。

「何？」

『千歳の寝起き、悪いから気を付けて。もしもの時に備えて、テイ

ツシユを用意しておいた方がいい』

「え」

『じゃあ、お休み』

「あ、ちょっと待って！ それってどう言う」

電話は無情にも切られた。

ティツシユ？ もしもの時？ 何それ？

「環、意味わかん」

首を傾げて部屋に戻ると、彼女はテーブルにもたれるようにして眠っていた。寝るの早いね。でも、それ程までに今日は疲れたのだらう。

「よっ」と

眠る彼女を抱き上げて窓際の布団まで運び、そっと降ろして、電気を消す。

すると、不思議と僕まで眠くなった。どうやら自分も、相当疲労が溜まっていたみたいだ。

ノロノロと自分の布団まで歩き、倒れ込むように寝転がった。ああ、眠い。なんだか今日はよく眠れそうだ。

目を閉じれば、今日の出来事が次から次へと浮かんで、いつの間にか眠っていた。

朝。

彼女を起こそうとしたらキツイ一発を貰い、鼻血が出て来る事態が発生。環の言ったのはこう言う事かと、鼻血を出しながら納得するのであった。

第五十一話：「朝は色々大変」

朝の鼻血事件から何分か経過し、ようやく止まりかけてきたソレ。鼻は変形してない。恐らく、手加減はしてくれたのだと思う。千歳が本気を出したら、どうなるかを想像してすぐに止めた。どうしても、どこかしらの骨が折れると言うバッドエンドしか思い浮かばなかったからだ。

鼻をティッシュで押さえながら、布団からはみ出ている艶やかな黒髪を見る。

さて。この眠り姫をどうやって起こそうか。

鼻血が止まった事を確認し、その痕跡が残るティッシュを捨て、そろそろと四つん這いになって布団に近付く。

「……………」

「……………」

安らかな寝息をたてる彼女。いつでも逃げれる体勢を取りつつ、頬をペチペチと叩く。……………いつも思うけど、女の子の肌って柔らかいよね。

「千歳ー、起きてー」

ペチペチ。

「……………」

「あ、起きた……」

意外な事に、彼女はゆっくりと起き上がった。本当はもうちょっと手こずるかと思ったんだけど。

少し驚いていると、彼女は首を回して、僕を見つけた。

昨日、部屋に戻った時にカラコンを外していたから、今は黒い瞳じゃなくて紅い瞳。

よく分からないけど何か懐かしい。最近気付いたんだけど、紅い瞳が見れないと落ち着かない気分になる。

「おはよう、千歳」

「……うん」

ゴシゴシと目を擦る彼女は、どこか微笑ましい。少々寝ぼけているようだけど、会話は出来るようだ。

「おはよう……もう朝食の時間？」

「うん。そうだよ」

「コンタクトつける……」

「あ、つけなくていいよ。部屋まで届けてくれるみたいだから」

「そう……。分かった。じゃあ、起きる」

「あ、待って。そんないきなり起きたら」

忠告も聞かず、起き上がった千歳の体は、ふらりとよるめく。まだ完全に覚醒していないのに、突然立ち上がったら立ちくらみがあるのは当然の事で、僕は彼女の背を支えようと手を伸ばした。

しかし、僕の筋力は人の体重を支えられる程、強くない。

結局、二人仲良く布団に倒れ込む結果になってしまった。それも、僕が彼女を押し倒したかのような体勢。

あまりにも近距離にある彼女の顔。

長いまつげ。薄紅色の唇。紅い瞳。白磁のような肌。頬にかかる長い前髪。シュツとした細い眉。イギリス人である祖父の血を引いたのであろう高めの鼻。スラリと伸びた手足。どこか艶めかしい五指。文句など付けようもないスタイル。

その全てが人を、魅了する。

そして、視線が絡み合う。

「……………しゅ、う?」

形のいい唇から、戸惑いがちに紡つむがれた自分の名前に、体中に歓喜と言うしびれが一瞬にして広がり、吐息を震わせる。

無意識の内に開けた口は、震える吐息と共に彼女の名前を紡いだ。

「千歳……………」

「……………」

一瞬だけ揺れる彼女の体。熱を帯びたような紅い瞳は、徐々に潤む。

それでも、僕を恨めしそうに睨む双眸。

「秋。なんかお前、色っぽい。ムカつく」

「色っばい……？ 僕が？」

「ああ。男のクセに色っばい目をしてる。ムカつく」

それなら千歳の方が色っばい。その潤んだ瞳とか、正に。そう言おうとしたけど、それは飲み込んだ。

原因は、少しだけ不機嫌な彼女が尖らせた唇。何故か無性に、その唇に触れたくなつて

そして運悪く、開いた扉。

「グッモーニンツ！ 青春してるかお前、ら……」

「……」

「……」

静寂。僕を含む三人の視線が交差し、この場に気まずい沈黙を呼ぶ。

タケちゃんの目が、仰向けに寝る千歳と、彼女に覆い被さるような体勢を取っている僕の間を動く。そして響く、のどの奥から無理やり引つ張り出しているような乾いた笑い声。

「アハハハハ……お邪魔しましたっ！」

律儀にも、朝食をテーブルに置いてから退出したタケちゃん。

僕らはそれを、他人事のように見ていた。

逃げ足が相変わらず速いな。流石、高校時代にスプリンターを

やっていただけの事はある。

朝食を食べ終わり、水着に着替えて下に降りた。

今朝の事があつたからか、中々目を合わせてくれないタケちゃんから言い渡された今日の仕事。

「アイスいかがですかー？」

今日は浜辺で、アイスボックスを引つさげながらのアイス売りだ。隣にはもちろん、千歳がいる。数知れない野獣がいるあの店に、彼女を置いてくる訳がない。

でも、こうしていると、今朝の事を思い出す。

あの時はどうかしていた。あれは一時の気の迷いだ。うん。そうだよ。

だから、断言する。

向坂秋は、軽い男じゃありません！ まだ付き合ってもいない女の子に手を出すなんて、タケちゃんみたいじゃないか！ アレはそ

の場の雰囲気流されただけで、断じてタケちゃんのようにアバンチュールを試してみようなどとは考えておりません！ 僕なら、付き合っ了解を千歳の両親に取っからじゃないとキス以上の事はってなに考えてんだ！ 彼女と付き合っとか、妄想もいい加減にしるよ！

「秋、秋。おい、聞いてるのか」

「うえ？ な、何？」

思考に耽り^{ふけ}すぎて、彼女の声に気付かなかった。サングラスの奥にある目が、心なしか怒ってるのは気の所為であって欲しい。って言うか、色々と変な妄想してゴメンね？ と心中で謝罪する。

すると何故か、引いている千歳が目に入った。

「何で泣きそうなんだお前……」

「え？」

「いや、いい。それより言いたい事がある」

彼女は上空を指差す。

「へりの音が聞こえる」

「……あ、本当だ」

耳を澄ませば、微かに聞こえてくるへり特有の音。彼女は耳がいらいしい。

「それにしてもこのへり、なんか近付いてくるような……」

「ああ。音が近い。……速いな」

二人して空を見上げていると、視界を通る白いへり。想像していたよりずっと速かった。

目に入ったその機体には、『IHARA』との文字。

「……」

「……」

数秒の沈黙。見間違いではなからうかと、二人で目を擦っていた。イハラ？ いやいや、まさか。

「……琉二？」

「そ、そんな訳ないって。ただの偶然だよ」

とは言いつつも、つい目で追ってしまうへりの行き先。そこは海の上で、小さなクルーザーが用意されていたかのようにあった。

そしてへりからクルーザーに移る、三つの人影。

拡声器でも持っているのか、その声が浜辺にいる僕の耳にも聞こえてきた。

「秋ー！ 来てやったぞー！」

「ちよっ！ 琉、嫌い！ 他の人に迷惑だろ！」

『まあまあ、二人とも落ち着いてよー。秋ちゃんと久し振りに会うからって、興奮しすぎだってー』

『ああ！？ 誰も興奮なんてしてねえよ！』

『興奮とか気持ち悪い事言っな！』

ああ、懐かしいですね、そのコント。

浜辺にいる人間は、いきなりの出来事に啞然としている。恐らく、僕の名前は皆さんの頭に刻み込まれたでしょう。

頭痛がしてきた頭を無視して隣を見ると、彼女はサングラス越しでも分かるような、鬱屈うっくつとした目をしていた。

お姫様の騎士ナイト達は、どこまでも一緒らしい。

姫と三騎士と平民A、ここに勢揃いせいぞろ ってね。

第五十二話：「眩き」

「空が青いねえ」

「海が青いなあ」

現実逃避をする僕と千歳。

その間にも、三人を乗せたクルーザーは、こちらに向かって来る。そしてとうとう、そのクルーザーが波止場に着き、三人が降り立ったのが見えた。

って言うか琉二くん。走ってこっちに来ないで。目立ってるから。浜辺からは突然の美形三人組に女性の黄色い囁きささやきが聞こえてくる。

ああ……グッバイ、僕の楽しい二泊三日。

一筋、汗と涙ともつかない液体が、僕の頬を濡らすのだった。

「た、ただいまタケちゃん……」

「おう、おかえりー」

今朝の事はすっかりと忘れたようで、タケちゃんはキラキラした笑顔で返事を返してくれた。そしてその笑顔は怪訝なものに変わる。視線は僕と千歳の後ろに立つ三人組に注がれている。

さて、ここで状況説明。まずは後ろに立つ三人を紹介しよう。

ワクワク、と言った感じの琉二くん。その顔は子供のように輝いている。

ハラハラ、と言った感じの環くん。どうやら彼は、琉二くんが不祥事を起こさないか心配なようです。

ウキウキ、と言った感じの壱人くん。君はどうしてここに来たのかな？ 今頃はパリじゃないの？

そんな不思議な三人に、店中の女性は釘付け。中には目がハートになっている人も。

そして、どんよりとしたオーラを漂わす僕と彼女。

そんな僕らを見て、タケちゃんが何を勘違いしたのか、親指を立てて言った。

「ナイスファイト！」

何が。

あれから、すぐにタケちゃんが変な気を使ってくれて、僕らは別室に通された。しかしそこは、僕と彼女が寝泊まりした部屋。案の定、何かを察した三人がニヤニヤとこつちを見てくる。

「秋ちゃんもやるねー」

壁にもたれる僕の隣に座る吉。

「おう。まさかここまで進んでたとはなあ」

ビーチが見渡せる窓辺に座る琉。

「二人で何をしてたんだろつなあ」

座椅子の上で正座をしてお茶を飲む環。

はつきりと言わせてもらっつ。

……ぐあー！ ウザい！ このエロオヤジ達め！ その不躰ぶしつけな目を止める！ 今朝の事があるから何も無いとは言えないけど、結果的には何もしてないから！

だけどそんな事を言える訳がなく、代わりに質問を返す。

「ところで、何でここにいるの？」

その問いには、座椅子にもたれて、すっかりくつろいでいる彼女が答えてくれた。

「九十九パーセントの確立で、冷やかしだな。多分、私と秋が二人でいる事を知ったからだろう」

三人の顔を見ると、全員が顔を逸らした。

……凶星か。そう言えば、千歳と来ている事は誰にも言っていないのに、昨日の電話で環は知っていたのだ。昨日の内に気付かなかった僕は相当の鈍感だと思うが、彼らは人間としてどうかと思う。

「最低だね」

「ああ、こいつらは、そう言う奴なんだよ」

彼女と心が通じ合った瞬間だった。

「まあ、その話は置いとこうぜ。それにしても、俺、いつもプライベートビーチ使ってるからこう言う所は新鮮なんだよな。千歳もそうだろう？」

琉が窓の外の浜辺を見て、感慨深そうに呟いた。窓からは、ビーチパラソルや人が見える。

「うむ。人が多くて新鮮だ。しかし、賑やかで中々楽しい」

「そっか。いいなあ。仕事サボってでも、もっと早く来るべきだったよ」

「だが、どうせ泳がないだろ？」

彼女の意地悪な問い掛けに、まあね、と恥ずかしそうに頬を掻く

環。それを見て、彼女は静かに笑った。

こんな時、やっぱりこの四人は幼馴染みなんだと思い出す。幼い頃から知っているから、お互いの弱点を知っているのだ。

「まあ、いい経験だね。俺も来てよかったー。母さんには悪い事しただけど、パリ行きを遅らせた甲斐があつたよー」

「え。玲奈さんは何だつて？」

怒つたとは考えられないが、まさか無条件で許してくれる玲奈さんではあるまい。それは汐姉とのデートの時に痛感している。

可哀想に、と思い、哀れみの目をきに向けると、意外にも彼は笑っていた。

「学園祭では母さんをエスコートしなさい　　つて言つてた。笑つちやうよね」

「……き？」

声が段々と小さくなって行くのに気付き、俯うつむいて前髪で隠れてしまったきの顔を覗き込んで　絶句した。

普段のきからは想像出来ない表情。その瞳は深海のように暗く淀よどんでいて、唇は皮肉な笑みを作ろうとしている。

その目はどこか遠い場所を見ているようだ。僕がこうして覗き込んでいる事に、彼は気付いていない。

「
」

そして、呟かれた言葉は不運にも、隣に座る僕だけにしか聞こえていなかった。

その呟かれた言葉を消したくても、それを上回る衝撃がそうさせない。

本当の、母親じゃないのに。

その言葉は僕に別の疑問を浮かばせた。

もしかしたら

その時、突然扉が開けられた。

「美形の美形による美形の為の、特別イベントをここに開催するぞお！」

『……………』

呆気にとられる一同。そして実の従兄弟がどこぞの大統領のように演説し、掲げた紙にはこう書いてあった。

『夏のイケメンパラダイス。君好みのイケメンが見つかるかも！興味がある人は来てね！』

と。

完璧に疑う余地もなく、広告チラシだった。

「お前らには、これからじゃんじゃん働いて稼いでもらう！ちなみに反論や不満はなしだ！その代わり、今日の夜はお楽しみだぞ！」

こうしてタケちゃん、向坂家の顔に泥を塗っていくのだった。

隣のきを見ると、先程とは打って変わって、いつも通りの眠そうな顔。でも僕は忘れていない。

これはどうやら、話を聞いてみる必要があるそうだ。

「はあ……」

これから起こると思つ事態に、溜め息が隠せなかった。

第五十三話：「彼の真実」

「つ、疲れたー……」

タケちゃんが作り出したあの広告チラシは、意外な事にも反響を呼び、店内は女性だらけと言う佑樹なら泣いて喜ぶような事態に陥った。

結果、あまりの忙しさに本来ならアイス売りである僕と千歳までもが、散々こき使われてしまったのだ。

まあ、本当に災難なのは三人だろう。

遊びに来ただけなのに働かされた挙げ句、見知らぬ女性に指名されまくったのだ。可哀想としか言いようがない。

今は三人とも、僕と彼女の部屋に通されてすっかりダウン状態。

僕よりよく働いたと言っても過言ではない彼女は、平気な顔をしてテレビを見ている。

これくらいで疲れるならスポーツ選手はやっていけないらしい。理由を聞くと、胸を張ってそう答えてくれた。

疲れた体を壁にもたれさせながら、無造作に寝転がる三人を見て、溜め息を零す。

多分、誰にも聞かれたくない話なんだろう。

他人が嫌がる事。悲しむ事。楽しめる事。嬉しくなる事。その感情。その表情。

それらの全ては、小さい時から感じる事が出来た。無意識に感じ取って、それに応えようとしてきた自分がいたのも知っている。本当はそれが嫌で、高校生になってからはなるべく目立たないようにして、人と関わるのを避けてきたんだ。

皮肉にもそれが役立つたのかと思うと、笑えてくる。

準備は整った。あとは彼の中にある、あつてはならない感情を吐露^ろさせる。あとはその吐き出された感情を汲み取って、出来る限り理解するだけだ。

僕にはその感情が分からないかも知れないけど、分かるまで諦めない。それが自分の出来る事だと、理解している。

「僕、ちょっと散歩してくるよ。あ、吉、一緒に行かない？」

不自然ではなかっただろうか。呼び出す口実としては、これくらいしか思いつかなかった。

だけど彼と一緒に来る事は疑わなかった。それは勘でしかない。だけどそう思うのだ。しかし、どうやらその勘は、外れていなかったらしい。

「あー、うん。そうだねー。久々に親睦を深めようか」

すやすやと寝息を立てる琉と環の間から起き上がり、伸びをする吉。千歳はいつの間にか、テーブルに突っ伏して眠ってしまった。

空は暗く、月の光が海に反射してキラキラと輝いている。

店からそう遠くはない距離の浜辺で、向かい合う。

あまり回りくどい事をしたくない。だから、単刀直入に聞いた。

「玲奈さんが母親じゃないって本当？」

「っ」

跳ねるきの肩。動揺に揺れる瞳を見ていると、眩きが聞かれた事に気付いていなかったみたいだ。

だったら相当キてる。恐らく、限界なのだろう。無意識に眩き、無自覚で表情に出る程だ。これ以上はもう、彼の精神が堪えきれない。

「な、んで……」

揺れる瞳。揺れる体。全てが不安定で、頼りない。

「吉がそう言ったんだよ。そして僕がそれを聞いただけ」

極めて簡潔に伝えた。この場に御託ごたたくはいらないと判断したから。

「そっか、そうなんだ。俺、言ってたんだねー……」

まるで僕から目を逸らすかのように、手を^{まぶた}瞼に押し当て深い息を吐く。

「そつだよ。母さんは　いや、齋木玲奈には、息子なんて実在しないんだ」

「……」

彼の吐き捨てるような言葉を前にしても、何もしない。壱が求めているのは、相槌でも頷きでもないから。

「本当に、最近の事なんだ。気付いたのは」

震える声。

「あの人の部屋を掃除したら、見つけちゃったんだよね。この子を預けます、どうか育ててくださいって言う、本当の親からの手紙」

あるのは、絶望か失望か　それとも、他のものか。

「笑っちゃったね」

彼は瞼に押し当てていた手を剥がした。

「信じられなくて、戸籍を調べたら、それが本当だって分かった。俺は養子だったよ。それにあの人は、俺が知ってた年齢よりずっと若かったんだ」

泣きそうな表情。認めたくないと言う想いが、壱をここまで追い

込んだ。

「三十歳だつて。俺が赤ん坊の時に拾われたのだとしたら、あの人はまだ十四歳だつたんだよ。おかしすぎて、吐き気がしたね」

彼は自分の震える指を見つめる。

「外見が年齢にしては若い若いと思ってたけど、まさか本当に若かつたなんて」

笑えるでしょ？ と彼は同意を求めた。

「ずっと嘘の年齢を俺に教えてたんだよ？ 父親がいないのはどうしてかって聞くと、聞こえない振りしてはぐらかして」

「……」

「言つてなかつたけど、俺、中学校の時、部活中に頭打つてて、それまでの記憶がないんだ。千歳達の事は覚えてるけど、それ以外の事は覚えてない。だから、母さんだつて言つて見舞いに来てくれたあの人の事、分からなかつた」

「っ」

内心、驚いた。まさかそんな事が舌に起こっていたなんて。

「多分、千歳達は知ってるよ。俺とあの人の血が繋がってない事。もしかしたら、記憶がなくなる前の俺も、知っていたのかもしれない。だけど、俺が記憶喪失になつてしまったから」

玲奈さんは過去を、隠した。

そして皮肉な事に、彼はそれを見つけ出してしまったのだ。

「あの人のブランド、最近売れ出したのは知ってるよね？ それで取材の申し出が結構来てただけけど、あの人は全部断ってた。何で分かる？」

それは彼なりの自嘲だった。

「俺がいたからなんだよ。テレビだと、名前の下に年齢が出ちゃうでしょ？ でも、店のスタッフは知ってたんだと思う。マサくんとマユさんは、少なくとも、絶対に」

「……真幸さんと、真弓さんが」

「うん。本当、申し訳ないよ。三十歳なら恋愛の一つや二つ、もしかしたら結婚してたかもしれない」

空を見上げるき。その光景は儂くて、壊れそうに脆い。

「俺さ、ずっと不思議だったんだよね」

きの長い前髪が風に揺れて、潮の香りが漂った。

「あの人を守ってあげたいかと思ってたんだ。それは今まで、あの人がぐうたらで、ほっとけないからだと思ってた」

でも、と続ける。

「知っちゃうとね、簡単だったよ」

そして彼は、泣きそうな顔で言う。

「俺はあの人の事が好きなんだ」

風がさつきよりも、強く吹く。

「本当の母親じゃないって知ってから、気付いた。俺は無意識の内に、無自覚であの人を好きになってたんだよ。でも、ダメなんだ」

「吉。それ以上は、言わないで」

「俺にあの人を好きになる資格はない。だって」

「吉！」

僕の静止を無視し、彼は再度、口を開く。

「俺があの人の人생을、ぶち壊したんだから」

遅かった。言ってしまった。

鈍い音がして、拳を痛みが襲う。

目の前には、赤くなつた拳と、赤く頬を腫らした吉。

初めて他人を、本気で殴った。

震える拳をもう片方の手で押さえて、呆然としている友人の顔を睨み付ける。

「秋、ちゃん……？」

「吉は他人の人生をぶち壊したとか、簡単な事を言っただけで逃げたのか？ 好きになる資格がないって自分勝手な事を言っただけで、玲奈さんから目を逸らすの？」

「あ……」

「ぶち壊したかどうかは玲奈さんが決める事。好きになるかは吉の自由。だから軽々しく、ぶち壊したとか、資格がないとか、言うな」

「……」

「眠そうで不思議で、何を考えてるのか分からない。いつも笑っていて、優しくて明るい。それが君だろ、齋木吉人」

「……それが、俺」

「うん。君は齋木吉人でしかなくて、僕は向坂秋でしかない。だから、笑ってよ。いつでも笑顔なのが君でしょ？」

ニヤリと笑って見せると、彼も引きつる頬を、自然な笑顔に変えた。

「はは……っ。あははっ。秋ちゃん、パンチ弱っ」

「なっ」

今、それは関係ないだろ！ 感動的なシーンになんてセリフを！ そりゃあ僕のパンチなんて蚊が止まったように感じるかもしれないけど！

「あははははっ！ あー、もうっ！ なんかスッキリした！ 悩んでた俺がバカみたいに思えてきたよ！」

腹を抱えて笑う吉は、いつもより数倍も明るい。そこには昼間のような暗い姿は見る影もなく、ただ笑い続ける青年がいた。

ただあまりにも笑い続けるので、少し意地悪をしたくなった。

「で？ 吉は玲奈さんが好きなの？」

「うん。そうだよ」

ぐはっ。意地悪のつもりが逆にダメージを食らってしまった。前は顔を赤くしてたから、今回も見れると思ったのに。平然と答えてくれるから、こっちが恥ずかしくなる。

「これからアタックするつもりだよー」

「うわっ。積極的な発言……。じゃあ、言っの？ 本当の事」

「うん。隠しててもしょうがないし。見ちゃったもんは見ちゃいましたって正直に、ね」

キラキラと王子様スマイルを見せる吉が男らしく見える。「ここまで潔いとは、中々凄い。」

「じゃあ、帰ろっか。もう用もないし、今日は疲れたからね」

「ああ、そうだね。タケちゃんが泊まる部屋を用意してくれたから、今日はそこで寝なよ」

「おー。やったねー。それにしても、あの人、本当に秋ちゃんの従兄弟なの？ とても同じ血筋とは思えないくらいプレイボーイだったんだけど……」

「それは深く聞かないで……」

軽口を叩き合いながらの帰路につく。店の近くまで来ると、音が二階の辺りを指差した。

「あ、千歳だ」

「え？」

見ると、確かに窓から空を見上げている彼女がいた。その光景が何故だか微笑ましくて、頬が緩むのを感じる。

「確か今日、武斗さんが、夜のお楽しみがあるって言ってたよね？」

「あー言ってたねー」

一体、何をするつもりなんだろうか、あの野郎は。すると、隣からクスクスと笑い声が聞こえてきたのでムツとする。

「何がおかしいの？」

「いや、別にー？ 秋ちゃん、今から千歳と一緒に散歩してきなよつ。俺が呼んでくるからさっ！」

言い終わった瞬間、音は店に向かって走り出した。

「は！？ 何で！？」

遠ざかる背中に問い掛ける。もうあんなに遠い。足速すぎるだろ。

そうしてきのは店の中へ消えていった。

きとは一体、何をやる気なんだろう。理解する事が出来るのは、やはり玲奈さんしかない。

意外と二人がお似合いな事を、今更自覚するのであった。

きとは話した事で、胸に芽生えた疑問がある。

実は、僕の兄妹である菊花とあの人には、赤ん坊の頃の写真がない。それは明らかに不自然な事だけど、今まではそう大して気にしなかった。

だけど、きのは話を聞いて、ふと思った事がある。

もしかしたら、あの人も　なんて。

菊花が養子なのは知っているが、それは僕が七歳だったからだ。けど、あの人は年上だから、出自が僕には分からない。

今はそれが齒痒はかゆくて、自分が無力だと言ふ事を改めて思う。

しかし、自ら聞く事は出来ない。それが誰かを傷付けるような結果になってしまうのが、怖いのだ。

不安で仕方ない。その憶測が当たっているようで、嫌になる。

真っ暗闇の中、どうしようもない孤独を感じて、泣きそうだった。

舌が消えて数分後。寝間着の千歳がやって来た。

手を振ると、振り返してくれる。どうやら嫌々って感じではない。しかし、僕の前まで来た彼女の顔は、怪訝と不機嫌が混ざって複雑な表情をしていた。

「どうしたの？」

「老人に部屋を追い出された」

頬が膨れ気味になっているのは、怒っているからだろうか。何にせよ、面白い事この上ない。

「ちょっと歩く？」

「ああ」

鷹揚^{おつやう}として頷くのは、まだ寝ぼけているからだろう。ゴシゴシと目を擦る姿が可愛い。

「眠い？」

「ちょっと疲れた」

「今日、大変だったからね」

「あいつらも災難だったな」

波打ち際を歩く足取りはどこか危なげで、自然とその手を取っていた。彼女もそれが当然とでも言うように、握り返してくる。

「明日は休みだから、いっぱい遊ぼう。ビーチバレーしたり、スイカ割りもしたいな」

「琉二をスイカ代わりにしてみようか」

怖っ！

「冗談だ」

「千歳が言つと冗談に聞こえない……」

「それはどう言う意味だ？」

「え。特に深い意味はないですよ？」

「……知ってるか？ 秋は嘘をつくと、鼻が高くなる」

「え！？」

空いている手で鼻を押さえると、高くなっている気配はない。よかつた。当分はこのままで十分だよ。って。

「鼻が高くなる訳ないじゃん。バカか僕は」

「ああ、バカだ」

してやられた。バカにされましたよ。

クスクスと笑う彼女を見てたら顔が熱くなる感覚がして、慌てて手を離す。今の顔をあまり見られたくない。そんな思いからか足取りは自然と早くなり、彼女の先を進んでゆく。

すると何を勘違いしたのか、後ろから困惑した声が聞こえてきた。

「怒ったか？」

「お、怒ってないよ」

「なら、何で手を離れた」

「う……」

言えない。まさか、恥ずかしいからですなんて。

どう答えようか迷っていると、背中に柔らかい衝撃が走った。

夜でも分かる程に白く、力を入れれば折れてしまいそうに細い腕が自分のお腹の辺りに回されてるのを見て 彼女が後ろから抱きついているのだと気付くのに、時間は掛からなかった。

「っ！？」

のどを通り抜ける、驚きで声にならない叫び。背中の柔らかい感触が鼓動を速くし、同じシャンプーの微かな香りが、顔を更に熱くさせる。

「ごめん。私が悪かった。だから怒らないでくれ」

長い髪が風に揺られて腕に当たるから、くすぐりたい。

「お、おおお、怒ってないよ？　だ、だからそんなに気にしなくて
もいって」

ダメだ。今の僕、緊張してる。抱きつかれるのは我が家の女性陣
で慣れているはずなのに。彼女だと、どうしてこう調子が狂うんだ
か。

「他の奴ならどうでもいい事だが、気になるんだ。お前のせいだぞ、
秋」

「い、ごめんなさい？」

「何で謝る」

「クセなんだよ、謝るの」

「治せ」

そんな無茶な。長年に渡って染み付いてしまったクセは中々抜け
ないのに。

彼女の無理難題に返答を困らせていると、いつの間にか回されて
いた腕がなくなっていた。

「千歳？」

そして爆発音が辺り一帯に響き渡る。それは聞き覚えがある、
重低音。

何事かと振り向けば、空が一瞬だけ明るくなった。

「あ」

花火。タケちゃんが言っていたのは、これが。

空に咲く色とりどりの鮮やかな大輪は、見上げる僕と彼女を照らす。刹那的だからこそ美しい。燃えるように赤く、そして散っていく花。

今まで見た中で、一番感動的だった。

暫く見とれていると、ふと気付いた手の微かな温もり。それは他でもない彼女のもので、そのひんやりとした冷たさが、夏の暑さに火照った自分には心地いい。

「綺麗だな」

そう言う彼女の視線は、花火に向けられたまま。他の何も映さず、紅い瞳にはただそれだけが映る。

その横顔があまりにも儂くて、見とれていた。

「……そうだね」

君の方が綺麗だよ、なんて言う度胸はない。それにそんな無粋な言葉は、この場に必要なかった。

彼女の横顔から視線を逸らし、空を見上げる。

きらびやかな光を目にし、お馴染みの轟音を聞いて やっと分かった。

速い鼓動。熱い頬。その理由に、気付いてしまった。

今なら、舌の気持ち分かるかもしれない。

近くにあるのに気付かなかった。ずっと不思議だったのに、自覚すると笑えてくる。僕は無意識の内に彼女に惹かれていた。そして無自覚の内に彼女を好きになっていたのだ。

好き。その言葉はスツと胸に溶けて、穏やかな気持ちになる。

本当は、ずっと前から惹かれていたのだろう。だけど気付かなかった。これはもう、鈍感と言われても仕方ない。

「……」

「……なに、秋」

「や。何でもないよ」

隣の彼女を盗み見れば、目が合っただけですぐに逸らした。好きだと自覚しても、この関係は変わらない。

告白する。そんな勇氣、僕にはないだろう。今の関係を壊す勇氣も、ないと言える。恋人同士に　なんて厚かましい事は思わない。想ってるだけで十分だ。今の僕では、彼女に釣り合わないから。

だからせめて今だけは、心の中だけで伝えよう。決心がついたら、ちゃんと口にして伝えよう、この言葉を。

君が、好きです。

第五十五話：「夏の終わり」

翌日の早朝。まだ早い。いつもより早い。そう、まだ起きるには早いのだ。

「おいっ！ 秋、起きろって！ 早く遊びに行こーぜ！」

「……うるせえ」

朝っぱらから騒音を奏でる琉を、寝ぼけ眼で睨む。何か危険な事を口走ってしまったような気がするが、それはしょうがない。

自分は決して寝起きがいい訳ではない。むしろ悪いと言える。だから許せ、琉二。寝起きの僕は柄が悪いのだ。

「しゅ、秋？ なんか目が据わってるよ？」

「秋ちゃん、顔が怖い！ って言うか、上目遣いで睨まないで！ 超怖い！」

「だから……うるせえつつってんだろ……」

琉、環、杏の順番に睨んでいくと、三人が三人共、同時に目を逸らした。

口が悪いのは自覚してる。我が家では、『寝起きの秋は見るな、触れるな、喋りかけるな』が暗黙の了解なのだ。なので、千歳の寝起きの悪さは僕が責められた事じゃない。ちなみに今、彼女は別室で着替え中。琉の顔に殴られたような跡があるが、それは見ない振

りだ。

と。その時、扉が開いた。

「む。何だお前ら。何でそんなに顔が青いんだ」

「……おはよ、千歳」

「ああ、おはよう、秋」

今の挨拶は、自然に聞こえただろうか。言葉の節々に、気持ちが表れていないか、心配でしようがない。

頬が緩むのは、彼女が返事をしてくれたからだろう。しかし、彼女のする事に、いちいち一喜一憂しては身が持たない。

だからもう少し、気楽に考えよう。好きとか好きじゃないとかは別にして、以前みたいに接すればいい。そう考えると、心が軽くなるような気がした。

「秋、目は覚めたか？」

「うん。まあ、ね」

君のおかげでね、と心の中で付け足しておく。

さあ、楽しい楽しい、最後の日だ。目一杯、遊んでやろうじゃないか。

今更になって後悔していた。

目の前には、木刀を振り回す彼女と、逃げ回る琉の姿。サンングラスをしたまま走る彼女は怪しく、恐怖で顔を強ばらせながら走る琉の姿も怪しかった。

「木刀なんて振り回してたら、警察に捕まっちゃうって……」

「秋ちゃん、そう言う時はね、ミヤビ財閥の名前を出せば一発だよ？ 会長さんは千歳の事を溺愛してるから、些細な不祥事は抹消しちゃうだろうね」

黒い。黒すぎる。そんな世界知りたくなかった。

「それにしても、よく走るなあ」

環がしみじみと呟く。

確かにそれは同感だ。あまりの速さに、ビーチの人達も目を見開いて二人を見ている。いや、その前に、彼女が持っている木刀に驚いていると言った方がいいかもしれない。

「って言うか、昨日の『琉二をスイカの代わりにしよう』発言は嘘じゃなかったんだね……」。

「千歳は小さい頃から、琉イジメが日々のストレス解消法だったからねー」

笑って言う事なのか、それ。

「まあ、あの二人は放っておいて、泳ぎに行こうよー。環も泳げる事には泳げるんだからさー」

「ええー。気乗りしないなあ……」

「じゃあ海に来るなよ」

「うっわー。秋ちゃん、毒舌っ！ まだ寝ぼけてる？」

「寝ぼけてないよ。環も頼むからいじけしないで」

「うっして時は過ぎていく。でも、何か青春を無駄にしているような気がする……」。

千歳と琉の攻防戦は、千歳が逃げ回る琉の背中に跳び蹴りを食らわせて終了。

それからは、遠泳競争をしたりビーチバレーをしたり、時間が来るまで海を楽しんだ。夏休みも終わりに近付き、来年は受験などで遊ぶ暇などないだろう。そう考えると、寂しい。

僕は高校を卒業しても、会えるのだろうか。もしかしたら、会えないのかもしれない。

儂くて、頼りない関係。それを一瞬でも忘れようと、目を逸らすうとしていたのだろう。だから、バカみたいにハシヤいで、バカみたいに騒いだ。未来の事なんて、忘れてしまおうと。

そしてとうとう、その時間がやって来た。

駅の改札口。

隣には彼女がいて、改札口の向こうにはタケちゃんと三人がいる。要するに見送り。三人は急ぎの用があるようで、へりで帰るらしい。タケちゃんは忙しい仕事の合間を縫って、来てくれた。

「秋ーっ！　今回はありがとーっ！　隣の彼女もありがとーっ！」

年甲斐もなく手を大きく振る従兄弟。今年、二十八歳。

彼女ってなんだよ、彼女って。

「秋ちゃん、次は会う時は多分、新学期だねー」

「うん。き、頑張つてよ？」

パリに新学期ギリギリまで滞在するらしいきには、学校が始まるまで会えない。

玲奈さんとの関係がどうなるかは、吉の行動次第だ。だから、
『頑張れ』。

僕はその意図に気付いたのか、吉は嬉しそうに笑って頷いた。

「俺もじいさんの所で英才教育を受けさせられると思うから、ちょっと無理かもしんねえ。でも、何かあったら連絡してこいよ?」

「分かった」

英才教育、を嫌味たっぷりに強調する琉に、苦笑いを隠せない。と言つか、この男が真面目に勉強するとは思えないんですけど。

「俺も、父さんに連れ回される事になりそうだから。まあ、連絡は取り合おうな」

「うん」

環は本当に嫌そうな顔をしている。本当は、嫌なんじゃないのだろうか。でも、それは僕が首を突っ込む事じゃない。環が話してくれた時こそ、考えるべき事だろう。

みんな、忙しい。そう思う。

それが少し寂しくもあり、羨ましくもあった。

何か目的があったり、目標があったりするのって、結構凄い事だと思う。ただ流されるままに日々を過ごしている自分とは大違いだ。スピーカーから流れる機械音が電車の到着を告げる。

「じゃあね! 千歳、行こう」

「ああ」

彼女と自分の荷物を担いで、手を取り合い走り出す。背中に四人の視線を感じながら、彼女と笑い合った。

「またいつか、ここに来たいな」

「うん。またいつか、ね」

恐らくそれは、遠くない未来。その未来が必ず来るとは言えないけれど、そう思う。

これから先、僕と彼女が今と変わらず友達でも、恋人同士になっただとしても、また来たいと思える。

楽しかった夏は、終わりに近付いていた。

第五十六話：「あけまして新学期」

じりじりと焼け付く日差しも落ち着きを見せ始め、やって来ました新学期。

物語は進展を見せるのか、はたまた終わりを迎えるのか。

それは、物語の当事者しか知らない。

額の汗を拭いながら校長先生の有り難迷惑がたな話を聞き流すのに努力を費やして、早はや二十分が経過した。

本来なら、私立校ならではの空調設備が整った体育館で始業式やその他諸々の行事をしているのだが、生憎と体育館は工事中で、生徒や教師共々はこのクソ暑い中　ごほん。失礼。このとても暑い中、グラウンドに立たされると言う横暴かつ、間違えれば熱中症一歩手前と言う大胆な所業を受けているのである。

「なあ、秋。暑くねえ？」

先程から、後ろで暑い暑いと連呼している中学時代からの悪友、

辰野佑樹が同意を求めてきた。名字だけは無駄にカッコいい。認めたくもないけど、顔もまあまあいいと言える。いや、言ってしまうば顔もカッコいい。だけどバカだからモテないのだ。

「ああつ。今学期は可愛い女の子に告白されねえかなあー。いやむしろ、ハーレム作りたい」

そして人間としては最低クラスな奴だった。

「佑樹、そのハーレムに俺の」

「お前の彼女なんかいらねーよ！」

「そう。なら良かった」

現在交際中の彼女を愛して止まない高校生になってからの悪友、三井圭司が佑樹を剣呑な目で睨めば、佑樹は忌々しそうに吐き捨てる。

圭司は佑樹と同様、顔だけはカッコいい。

だが本人によると、中学の頃から僕の姉である汐姉に惚れ込んでいて、彼女が出来た事がないと言う。その為か、汐姉以外で初めて好きになれた彼女を溺愛している。

高校入学当時、『俺の理想の女性は汐先輩』と豪語していた彼の姿はもう、どこにもない。って言うか、その方がいいだろう。

汐姉を超えられる女性がいると言えば数が限られる。見つけ出すのにも一苦労だ。ある意味、圭司は幸せ者なのかもしれない。

『ではここで、新学期から新しくやって来た講師の先生をご紹介しますよ』

「あ、もうそろそろ終わりかな」

「圭司、チラチラ彼女の方を見んなよ。早く喋りたいのは分かるけど、落ち着けて」

「ゆ、佑樹に注意された……。ショック……。もうお婿にいけない……」

「失礼な奴だな！ 俺に注意されて結婚出来ねーって、どう言う意味だよ！」

「そのままの意味だよ……」

ああ、煩い。^{めんど}少しは黙ってられないのだろうか。ただでさえ暑さでイライラしてると言うのに。

軽く頭痛がする頭を押さえ、何故だか騒がしくなった前方を見る。するとそこには、端正な顔立ちをし、スーツを着込んだ男性が二人いた。騒がしくもなるはずだ。如何にも女子生徒に好かれそうな、清潔感が漂う青年と、ワイルドな風貌をした青年がいるのだから。

「チツ。何だ、男かよ」

非常に残念そうな佑樹の呟きを無視し、青年らを見てみると、教頭の声がスピーカー越しに聞こえてきた。女子生徒のキャアキャアと言う黄色い悲鳴の中、教頭は冷静に読み上げる。

『えー。左の方が、産休の原田先生の代わりに数学を担当する齋木墨先生です。齋木先生、簡単な自己紹介をお願いします』

「……齋木？」

その名字に疑念を覚えつつも、気のせいだろうと片付ける。名字など、全国で探せば珍しくもないからだ。

マイクを渡された斎木先生はボサボサとした髪を掻き上げ、恨みのこもった目で太陽を見上げる。しかしその視線が全校生徒に向かって落とされた時には、照りつける太陽への憎しみなどは表れておらず、少しだけ目尻が下がって笑っていた。

『あー……数学担当、斎木壘です。担当した生徒は、必ず進学させます。嘘です』

ズルツと、誰かがこけたような音がした。

『え、えーと……斎木先生、ありがとうございました』

自己紹介での冗談に困惑している教頭を満足げに見て、マイクを隣の青年に渡す斎木先生。空気が読めない所があるけど、面白い人だな。

『続いては、英語担当、そして二年生の特進クラスの副担任を務めてくださる、ヨシヤモトハル四谷元晴先生です』

どうぞ、と教頭に促され、一歩前に出る好青年。

彼の清潔感を更に際立たせる、シワ一つないスーツ。風に揺れる黒髪。無駄なパーツが一切ないと言える凛々しい顔立ちは、緩やかな笑みを描いている。女性なら誰しもが見とれてしまいそうな笑みだ。その証拠に、隣に立つ女子生徒が頬を染めたのを見た。

『皆さん、初めまして。今学期から英語と、二年生の特進クラスの副担任を務める、四谷元晴と申します。本来なら四月から新任する

予定でしたが、一身上の都合により見送り、今学期からと言つ形になりました。頑張りますので、どうかよろしくお願いします』

四谷先生は、いまだキヤアキヤアと騒ぐ女子生徒に爽やかな笑顔を向けて、自己紹介を終了した。

『それでは、これにて始業式を終わります。各自、それぞれの教室で担任の先生が来るまで待機するように』

暑さにやられたのか女子生徒の甲高い悲鳴にやられたのか、教頭の声はいつもより弱々しかった。

担任の話が終わり、帰りの支度も終わりにかけていた頃、彼女はやって来た。

「向坂くん」

「あ、桐谷さん。……どうしたの?」

クラスの委員長である桐谷成子が、何やら神妙な顔付きで話しか

けてきた。そのただならぬ雰囲気^{けお}に気圧されて、不思議と小声で問いかけてしまう。

「あれ、あれ」

「あれ……？」

桐谷さんが指差す方向に顔を向ける。

そして硬直。扉にもたれて立つのは、この学校のアイドルでありマドンナであり姫である、日宮千歳だった。その人は僕を視認して、手招きをしている。

「早く行ってあげなさい。なんか様子がおかしいから」

「え……」

様子がおかしい？

いまだ手招いている彼女をまじまじと見ていると、後頭部を叩かれる。

「近くで見た方が早い。それに、向坂くんはこれ以上の注目を集めたいの？ 教室のみんなはいいけど、廊下の生徒は彼女に釘付けよ？」

どうやら我がクラスメート達は寛大な心をお持ちのようで、最初こそ凄かったが、今ではもう僕と彼女が仲良く話していても、嫉妬の視線や羨望の視線は向けてこない（一部を除く）。

だがしかし、他の人間も、そうとは言えないのだ。現に、廊下からざわめきが聞こえてくるのは気のせいじゃない。

「あ……僕、行くよ。じゃあね、桐谷さん」

「はいはい。また明日ー」

机の上に置いていた鞆を取り、扉に向かう。途中、声を掛けてくれたクラスメート達に返事を返しながら。

扉の前に辿り着くと、彼女はゆるゆると扉から体を離れた。

「珍しいね、こっちの教室に来るなんて。どうかしたの？」

「いや……特にはない」

「そっか」

そこで会話は終了してしまった。背中にひしひしとクラスメート達による好奇の視線を感じる。これでは居たたまれない。

どうにか逃げる口実が欲しくて目をさまよわせていると、ふと目に付いたのは彼女が肩から下げる鞆だった。無防備なそれを何気なく取る。

「あ……」

「ねえ、一緒に帰らない？ 家まで送るよ」

軽く笑って誘う。鞆は人質だ。

「全く……。ズルいな、お前は」

腕を組み、上目遣いで睨まれてしまった。怖くはない。むしろ可愛いと思うのは、好きな人だからこそ。恋愛は惚れた方が負けと言

うが、それは本当らしい。

彼女と二人、並んで帰路につく。

帰る道すがら、彼女は親切なおばさん達から色々な人から食べ物をもらっていた。その隣で歩く僕も彼氏だと勘違いされ、色々渡されたのは素直に嬉しいと思う。……彼氏と勘違いされた事じゃなくて、色々もらったからですよ？

毎日があんな感じらしい。地元なので写真やサインを求めるなどの行為はないが、何かしらくれるのだと彼女が言っていた。

「なあ、秋」

「何？」

おばさんからもらったスナック菓子を手にしつつ、隣を見る。すると何やら浮かない表情の彼女が目に入る。

「今日来た、齋木と四谷って教師の事なんだが……」

「……あの二人が、何？」

彼女を促し、先を聞く。

「齋木と言う教師は玲奈の兄だ」

驚いた。予想はしていたが、そこまで近いとは思っていなかったのだ。

「そしてこっちが本題だ。あの四谷と言う教師は、昔、幼馴染みだった」

その言葉に更なる衝撃を覚える。何より衝撃なのは、彼女の表情。嬉しそうで、悲しそうで、様々な感情がない交ぜになって複雑な表情をしている。

「小さい頃、彼にはよく遊んでもらっていた。八つ年上の、兄のように慕っていた人だ」

懐かしむように、彼女は笑う。
その笑顔に、胸が少し痛んだ。

「だが突然、向こうが遠方に引越してしまっただけ。それから疎遠になっていたが、まさかまた会えるとは思わなかった。だから

嫌だ。その先は、聞きたくない。

だけど自分の意思とは反対に、口が勝手に動いて、彼女の言葉を先回りしようとする。

「だから、嬉しい？」

「……ああ、嬉しい」

っ。

はにかむように笑う彼女を見て、胸に焦燥感を覚えた。嫌な予感も。

そしてその予感は外れていなかった。

このまま順調に、何事もなく過ごして行けると思っていた日々は、思わぬ来訪者に粉々に碎かれる事となる。

誰も知らない水面下で着々と、物語が動き出し、終焉が近付いていた。

第五十七話：「専属モデル」

あれから何事もなく時は過ぎた。

ちょっと変わった事と言えば、ふとした瞬間に視線を感じる事や、英語の授業で四谷先生がやたらと僕を当てる事だ。あと、答えてる時、凄い見られてる。

それから一つ気付いた。どうやら僕は嫉妬深いらしい。千歳と四谷先生が仲良そうに歩いている姿を見かけると、どうも嫉妬してしまうのだ。

その逆に、斎木先生と壱が一緒にいる所を見ると、笑いそうになってしまうけど。だって、壱の顔が心底嫌そうに歪んでいるのだ。滅多に見れない表情だから、写メで永久保存したかった。

まあ、ここ二週間で思い付く変化と言えばそれだけ。

案外、平和な日々を過ごしている。

ある日の放課後。

「秋ちゃん、一緒に帰りましょー」

そう言いながら教室に飛び込んで来た杏を、クラスメートの『またか』と言うような視線が突き刺したのは、言うまでもない。

そして有無を言わず連れて行かれた先は玲奈さんのお店。

「杏、玲奈さんに何か用なの？」

聞けば彼と玲奈さんの関係は、母と息子から、よく分からない関係に変わったらしい。正直言って、理解不能だ。まあ要するに、進展も悪化もしてないと言う事だろう。

「玲奈さんがさっきメールで、秋ちゃんを連れて来いって」

「……」

なんか嫌な予感しかしないんですけど。

「大丈夫、大丈夫。玲奈さん、秋ちゃん気に入ってるから、取って食われるような事はないよー」

「何かあったら助けてよ？」

「責任とってお嫁さんにもらってあげようか？」

「バカじゃないの？」

「……秋ちゃん、最近毒舌だね」

「煩いな。さっさと行くよ」

「はいはい」

涼しそうな店内へ、きより一足先に入った。

真っ先に目に入ったのは、赤い髪をした長身の男性。その姿に違和感を覚えた。原因は、センスの良さを感じる洒落た服のせいだと気付く。

「真幸、さん？」

「あん？ 何だよ うおっ！ あ、ごほん！ あらあ！ お久しぶりねえ！？ 元気だったあ！？」

「……………」

必死すぎて引いた。外見が男なのに、オネエ言葉を使っているから、余計に引く。

硬直した僕の後ろからやって来たきりが真幸さんの存在に気付いたようで、声を掛けた。

「あれ？ マサクん、何その格好。珍しいね、店で普段着なんてさ」

「ああ、いや……………出掛けようかと思ってた時、社長から突然呼び出されたから。この格好じゃ、オネエ言葉になれねーのに……………」

「あ、マユさんは？」

「真弓は社長に呼ばれて事務室に行った」

「へー。でも、一体なんなんだろうね？」

「さあ？ 社長の考えてる事は分からん」

男らしい真幸さんと普通に会話をしている筈。玲奈さんが店の奥から出てきたのは、これから約三十分後の事なのだった。

目の前には様々な衣装と、玲奈さん。あと、鏡の前で座っている僕。

「あの一……」

「何？」

「どうして僕はここにいるんでしょうか？」

「あら、分からないの？ モデルの件、忘れた訳じゃないでしょう？」

やっぱり……。薄々感づいてはいたけど、とうとうこの日が来てしまったか……。

「分かりました。約束は守ります」

「うんうん。いい子ねえ。でも、もう一つ、お願いがあるの」

「……何ですか？」

「ウチの専属モデルになってくれない？」

……は？

「無理です！ それに、一回だけって言う約束ですよ！？」

そう言うと、玲奈さんの目が鋭くなった。それを見て、まるで蛇に睨まれたカエルのように、動けなくなる。

「私の言う事が聞けないっての？ これでも若い時は、色々と悪さをしてきたのよ？」

それ、脅しです。

「で、でも、僕なんかが専属モデルになっても……」

「私、その、なんかって言葉、嫌いなよね。……分かった。じゃあ、勝負しましょう」

「しよ、勝負？」

いよいよ話が物騒になってきたぞ。
玲奈さんがあまりにも神妙な顔をするので、緊張してしまう。
勝負つて、一体？

「秋くんが表紙で、五十万部売り上げたら、貴方はウチの専属モデル。売れなかつたら、モデルは一回きりよ。どう？」

想像より酷くない勝負に、ホッと息をつく。僕が表紙で五十万部とか、絶対に無理な話だ。この話は、有利すぎる。

「文句ない？」

「……はい」

頷くと、玲奈さんは満足げに笑った。

「秋くん、正々堂々と勝負しましょう」

「はい」

「じゃあ、真幸を呼んでくるから、待ってなさい。ピシバシしづくつもりだから、覚悟しておくように」

その言葉に、背筋が寒くなる。僕、しごかれるんですか？

「勝つのは、私よ」

勝利を確信して微笑む玲奈さんは、何故かいじめっ子を見ているような感覚がした。

「秋くん、もうちょっと自然に笑って見せて？」

「はあ……」

レンズの向こう側の真弓さんが、顔を歪めている。そこまで酷いものなのだろうか、僕の顔は。

今、僕が着ているのは、白いシャツに黒いスラックス。そして首に巻き付けた黒と白のグラデーションが施されたストール。

今年の秋の新作として売り出されるメンズファッションらしい。

「秋くん、レンズを見つめて」

真弓さんがレンズを指差す。目は自然と指を追った。

「はい、そこで物憂げな、気だるい感じの表情」

難しい注文だ。思わず顔をしかめた僕に、真弓さんが解決策を提案する。

「最近、何かもやもやする事ない？」

「もやもや……あ」

「一つだけある。四谷先生と、千歳が並んで歩いている時。

ああ、思い出すだけでもダメだ。胸がもやもやする。

「あ、その表情いいね」

「……そうですか？」

「うん。じゃあ、今度はもう一回、笑って見て？」

「……」

「あー、他の表情は全部いいのに、どうしても笑えないのかな……」

真弓さん、本人が目の前にいますよ。

顔を引きつらせながら杏と真幸さんの方を向くと、二人は苦笑いをして目を逸らした。薄情者達め。

内心溜め息をつきながら視線を戻すと、こっちを見ていた玲奈さんと目が合う。

「……秋くん、目をつぶって。家族でもいいから、好きな人を思い浮かばせなさい」

玲奈さんの助言に従い、目を閉じる。

好きな人と言われて、真っ先に浮かぶのは 彼女だった。

「その人と貴方は、手を繋いでいる。笑い合って、話している」
彼女と手を繋いでいる。笑い合って、話している。
それはとても、恥ずかしくて幸せな想像だった。

「さあ、目を開けなさい。貴方はその人に、笑いかけるの」
目を開けて、いるはずのない彼女に笑いかける。この想いが、いつか届くようにと願いをこめて。
そうすれば、自分が救われるような気がしたから。

「真弓」

「分かってますよっ」

フラッシュの音が連続する。

僕はただ、彼女を描き続けた。

翌週。そのファッション誌は、五十万部を軽く超えてしまう
売り上げを叩き出した。

何かがおかしいと思い、後から聞けば、玲奈さんのブランドが
出ずファッション誌はいつも五十万部を超えるらしい。どつりで、僕
が表紙でもあれだけ売れた訳だ。

だけど今更怒る気にもなれず、結局は流されるまま、専属モデルに。

そうして、新人モデル『アキ』は、玲奈さんの策略にまんまとハマってしまったのだった。

誰か助けて。

第五十八話：「許さないから」

季節は移り変わり、景色が紅く変わり始める。

やって来た10月は、一年の中で最も忙しいと言われる程に、イベントが多い。

中でも、球技大会や学園祭は、学生生活の二大イベントとされているから、大変なのだ。

「はい、お静かにー！」

その言葉で、教室が静まり返る。流石、鬼の成子。泣く子も黙ると言つのはこの事が。

「今日のホームルームは球技大会の選手決めよ！ さっさと決めないと酷い目に合わすから、真面目にやんなさい！」

目が本気ツメだった。

「野球は男、バレーは女。バスケットは男女別よ。自分がやりたいと思うものに手を挙げな！ 推薦もありよ！」

「はいはい！ 俺は秋をバスケットに推薦しまーす！」

窓越しに空を見ていた僕にとって、佑樹の言葉は衝撃だった。椅子から滑り落ちそうになった体を起こし、立ち上がって佑樹を睨み付ける。

「何を言い出すんだよバカ！」

「だって中学ん時、バスケットだけは異様に上手かったじゃん！」

「だけってなんだよ！ 失礼すぎる！ 傷付くだろ！？」

「うるせー！ 薔薇姫と付き合ってるクセにこれくらいの言葉で傷付くんじゃねーよ！」

「付き合ってるない！」

「だったらその赤面はなんだあ！」

「こっ、これは」

教室を通り越して、廊下中に響き渡る破壊的な音。

何があったんだと音がした方を見れば、そこには真つ二つになった教卓と、背中からどす黒いものを漂わしている桐谷さんがいた。

先程のは、桐谷さんが教卓を壊した音だったのだ。

「あんたらあ……」

あれ？ 錯覚かな。桐谷さんの後ろに修羅が見えるよ？ あらら？ 視界がどんどん霞んでいくんだけど、何でかな？

「いーい度胸、してんじゃん……」

ピシリと空気が凍り付く教室内。

桐谷さんは、ニコリと僕らに笑いかける。

「向坂くんには事情があつて手を出せないけど、辰野には手え出しても誰も困らないよね……」

ある事情とは恐らく千歳の事だろう。どんな暴行を受けるのかとビクビクしていたから、ホツと安堵の息を漏らした。こんな時ばかりは、彼女に感謝せざるを得ない。

「向坂くんは、バスケでいいわよね？」

「ひゃ、ひゃい……」

突然向けられた笑顔に、恐怖で舌が回らなかった。

「みんな、明日までに自分のやりたいの決めておいてね？ じゃあ、今日は解散。辰野は後で道場来なさい。その腐った性根を再起不能なまでに粉碎キレイにしてあげるから」

佑樹が絶叫する前に、僕を含むクラスメートは外に飛び出した。見れば、担任教師まで。

そして僕は迷わず特進クラスに向かった。

特進クラスの扉は開けられていて、千歳には容易に声を掛けられた。

僕に気付いた途端、大変驚いたような顔をした彼女は現在、亜麻色の髪を巻いている綺麗な女子生徒に肘でつつかれている。何やら微笑ましいが、こっちはほったらかしだ。

さて、どうしたものか。そう考えていた時、彼女の後ろに座る我が校の生徒会長と思わしき男子生徒が手招きをしてきた。

入ってもいいのか、と目配せをすると、頷いたので遠慮なく入室する。

迷わず彼女の元へ向かった。

「ちーとーせー。彼氏がお迎えに来たよー」

「は?」

千歳の隣に座る、亜麻色の髪を巻いている美女の言葉に、体が固まった。

彼氏? 誰が?

「かつ、彼氏じゃない！ 秋も否定しろ！」

「恥じらっちゃってかわいいー」

「^{あまね}遍！ お前いい加減に」

「はいはい。それでアキくんは、千歳に何か用かな？」

凄い。この人、千歳を軽く流してる。彼女をあしらえるのは、言ぐらいしくないかと思っただのに。

衝撃的な場面に驚いていた所、ふと違和感に気付いた。

「えっと、遍さんだっけ？ 僕の名前はアキじゃなくて、シュウなんだけど……もしかして、知ってるの？」

「知ってるよー。今、学校で女子が騒いでるの、知らなかった？」

「全然。だって、見た事ないよ？」

首を傾げると、遍さんはカラカラと笑った。

「アキくん鈍感だよ。結構人気あるのに勿体ない。私のお姉ちゃん、『生アキ、一度でいいから見てみたい』って言ってるし」

「ほお。君はそんな芸名でモデルをやってるのか。知らなかったなあ」

「会長も鈍いね。学校では有名だって言うのに」

生徒会長と遍さんの会話を聞いていると、どうも疑念が浮かぶ。

人気なんて、モデルをやり始めて一週間も経ってないし、一度しか撮っていない。それなのに人気があるとか、ちよっとおかしくないだろうか。

アキとして表紙モデルとなったファッション誌を見つけた汐姉が、家族を集めて僕を尋問にかけたのと同じくらいにおかしいぞ。確かあの時は、説明に一時間もかけたんだっけ。

それにしても生アキって……なんか嫌な響きだなあ。……あれ？
反応に困って頬を掻いていると、何故か遍さんの顔がニヤニヤ笑いになっている事に気付いた。

「千歳、そんな睨まないでよ。大丈夫だって。アキくん取らないから」

「……ふん」

遍さんのニヤニヤ笑いから顔を背けるように彼女はそっぽを向く。心なしか、その頬は膨らんでいるように見える。

「ね、アキくん」

「え？」

呼び掛けられ、彼女から目を離し、遍さんの方を向く。

「一緒に写真撮ってくれない？ お姉ちゃんに見せたいんだ。ダメ？」

「いや、勿論いいよ」

「よし。じゃ、会長、撮って」

手に持っていた携帯を生徒会長に渡し、遍さんは僕に密着してきた。いくらなんでも、これは近付きすぎなんじゃないでしょうか。クラスに残ってる人の視線が痛いです。

帰ってしまったのである。環がここにいない事に、少し安心する。環にまで変な目で見られたら嫌だからなあ。

その時。突如として腕を引かれ、耳に微かに柔らかい感触が当たった。

「アキくん。どうして人気モデルの君に、ラブレターが来ないか教えてあげる」

吐息がくすぐったくて、ゾクゾクする。

「それはね、千歳がいるから。千歳とアキくんが親しげだから、みんな遠慮してるの」

くす、と耳元で笑った気配。

「でも、それが最近、崩れ始めてる。何でか分からない？」

「……」

沈黙を肯定と受け取ったのか、遍さんはまた話し出す。

「四谷が千歳の近くにいますからよ。君が考えてるよりずっと、あの二人の距離は近い」

「……っ」

衝撃的な事実にも、息を飲む。まさか、そんな。

「あの男、何か裏がある。気をつけなさい。千歳をあんな奴に盗られたら、許さないから」

そう言った直後、どん、と胸を押し返される。強すぎる力に、体が少しよろめいた。

「ごめんアキくん。ちょっと躓^{つまず}いちゃった。引っ張^ひってくれてありがとう」

「う、うん……」

何事もなかったかのように振る舞える遍さんに、気圧されて頷く。そうしないと、いけないような気がしたから。

「かいちよー、写真撮れた？」

「ああ。かなりエロいのが」

「何よー。私がいけないっての？」

「いや、別に？　ただ、これを姉貴に見せんのはどうかと思うだけだ。向坂くんのファンなら卒倒だな」

二人の会話に苦笑いを隠しきれないと、隣の彼女が音もなく立ち上がる。

表情は相変わらずの無表情。だけどその顔は、僅かに影を落とす

ている。

「……千歳？」

「……また明日」

言うが早いか、彼女は机の上にあった鞆を乱暴に取り、足早に教室を出て行ってしまった。

突然の事に呆然としてしていると、後ろから遍さんが笑いを堪えているような声音で呟く。

「案外、四谷の出る幕はないかもしれないな……」

「え？」

それってどう言う意味？ そう聞こうとしたが、それは遍さんの微笑みによって拒絶された。

「アキくん、千歳を早く追いかけて。あの子は待ってくれないよ？ 意外とあの子も鈍感だから、気付かないかもしれないけど」

「あ……」

意味に気付いて、恥ずかしくなる。

「どうやら遍さんには、お見通しらしい。」

「僕、行ってくるよ」

「うん。バイバイ」

「向坂くん、またな」

「じゃあ！」

見えなくなつた彼女の背中を、追いかける。追い付くまで、走るのを止めないと決意して。

彼女に追い付いた時の話は、またの機会に話そう。

第五十九話：「球技大会」

ああ。ついに、ついにこの日がやって来てしまった。

『選手の方は、それぞれ指定された場所へ向かってください。バスケットは第二体育館、バレーは第四体育館。野球はグラウンドです』

放送部である生徒の声がスピーカーを通して、学校中に流される。それを聞いてぞろぞろと教室を出て行くクラスメート達。はあ、と溜め息をついて、僕もその後をついて行くのだった。

とても前を向いて歩く気になれず、下を向きながら体育館に入場した途端、耳までつんざくような悲鳴が聞こえた。

突然の出来事に驚いていると、隣の佑樹が教えてくれる。

「そう言えば、三騎士が出るのはバスケットだよ」

佑樹の言葉に、ああ、と納得する。

バスケットはあらかじめ対戦表が作られていて、それを男子と女子が順番にやっていく形になっている。今年は男子が先らしい。だから女子が二階にいて、三騎士に黄色い声援を送っているのだ。

「向坂くん！」

そう。三騎士は　え？　今、誰か呼んだ？

今まで俯かせていた顔を上げると、二階の落下予防の鉄柵から身を乗り出している無数の女子が目に入った。

見ればみんな、携帯を手に持って、こっちに向けている。規則的な電子音が聞こえる事から、どうやら写真を撮っているようである。

「きゃあー！　アキー！」

「アキくん！　こっち向いてー！」

な、何だコレ。おかしい。絶対おかしいよ。何してんの、この人達は。

「けっ！　んだよ。秋のファンかよ」

「まあまあ、落ち着きなよ佑樹。秋はモデルしてるんだからしょうがないってー」

「羨ましすぎるー！」

勝手な事を言っている二人は無視し、異様な光景を見て啞然としていた僕。だけどその中に見覚えのある亜麻色の髪を見つけて、思わずその下にまで駆け寄っていた。

「遍さん！」

鉄柵に手を置いていた遍さんが、見上げる僕を見て笑う。大声を上げなければ、悲鳴に掻き消されて相手に届かない。

「アキくん！ 千歳なら、下に降りていったよ！」

遍さんの目が、僕から外される。その顔には、ニヤリとした笑み。

「ああ。私はここだ」

すぐ近くで聞こえた声に、鼓動が高鳴る。

誰もいないと思っていた隣を見れば、いつの間にか彼女が立っていた。その名前を、僕は震える吐息混じりに紡ぐ。

「……千歳」

「何だ、秋」

「何でも、ないよ」

笑うので、精一杯だった。

真紅の双眼そつがんと目が合うだけで、こんなにも心を乱される。

時間と共に、気持ちが大きくなっていく。それがちょっと怖くて、凄じ嬉しい。

人を好きになるのって、こう言う事なんだ。

「用がないなら呼ぶな。お前はもう人気モデルなんだから、私と噂

「になったら困るだろう?」

「噂?」

「ああ。そうだ」

そう言っただけで彼女は、ほんのちょっとだけ、唇を尖らせている。その拗ねているかのような仕草に、ドキドキした。

期待してはいけない。自惚れるな、僕。彼女がヤキモチを妬いてる訳ないんだから。

でも、僕は

「千歳となら、噂になってもいいんだけどね……」

「え?」

口に出していた事に気付いて、慌てて口を押さえても、もう遅い。彼女の驚いた顔が、こつちを見ていた。

「秋、今のよく聞こえなかったんだが」

「マズい。」

「あつ! もうこんな時間だ! 僕、行かなきゃ! 千歳、応援よろしくね!」

口を挟む隙を与えず、走り出す。一刻も早くここから逃げ出した。一心だった。

「あつ、おい! 応援と言われても、私のクラスとお前のクラスは

敵同士だぞ！」

彼女の声は、聞こえない振り。

悲鳴がいまだに響く体育館内で、試合開始の笛が鳴る。

初戦の相手は、三年生。しかしスポーツは、平等だ。先輩だからと言って、容赦はしない。

ジャンプボールを制したのは、佑樹。

指先に当たったボールは放物線を描いて、圭司が素早くそれを取った。そしてその直後、僕は圭司の横を通って走り抜け、ボールを受け取る。幾度となく練習してきたコンビネーションは成功。

先輩が壁となって立ちほだかったが、中学の時、穂純と散々やり合ってきた僕にとって、彼らを抜き去るのは簡単だった。

一人抜き、二人抜き、後ろから追いついてきた佑樹にボールを回す。

僕の役目はここまで。後は佑樹と圭司、二人のクラスメイトに任しておけば安心だ。佑樹は試合が始まるまで文句を言っていたけど、理由を言ったら許してくれた。

だって、決勝戦で本気を出した方が、面白いと思わない？

そう言った時の佑樹の顔は、傑作だった。

僕らは順調に勝ち進み、決勝まで進んだ。

吉と琉のクラスは僕らと当たる事なく（と言うか琉はサボリ）、決勝戦の相手は三年生。

ただ決勝戦に入る前に、女子の試合がある。もちろん優勝候補は、彼女がいる特進クラスだ。

先程とは打って変わり、二階は男ばかり。非常にむさ苦しい。

そんな男達には共通点があった。皆が皆、ある一点に注目している。

それは体操着姿で柔軟体操をしている、日宮千歳。

機会がない限り、彼女を直視する事は滅多めったにない。だから皆、その網膜に焼き付くと、一心不乱に彼女を見つめているのだ。

それがちよつとムカつく。いや、凄いムカつく。

「秋ちゃん、顔が怖いよー」

吉が、僕の頬をつつく。痛いから止めなさい。

「秋、ヤキモチを妬くのはいいけど、顔に出すクセは直した方がいい」

環は冷静に僕を分析。出来ればほつといて。

「ねみいー」

いつの間にか現れた琉はアクビをする。もうお前帰れよ。

今はこの三人がいるだけで、イライラが襲ってくる。

しかし、佑樹は女子目当てに、圭司は彼女を目当てに、第四体育館へ行ってしまったので、この鬱憤うつげんを晴らせるようなサンドバックがない。

それに、下にいる女子がまだ悲鳴を上げて僕に手を振ってくるから、落ち着かないし。

あー、もうみんな、ちょっと黙ってくれないかなー。その口を針と糸で縫いつけたいなー。

と、笑顔で危ない事を考えていると。

「あつ！ 四谷が千歳に接近中！」

「えっ！？ 嘘っ！？」

環の言葉に、バツと身を乗り出して千歳を見ると、確かに四谷と彼女は何かを話し合っていた。

ああ、やばい。母さん、父さん。僕はいけない息子です。二人の

姿を見て、嫉妬の炎がメラメラと燃え上がっています。

「野郎……。俺らより千歳と会ったのが早いからって、調子乗ってんじゃねえ……」

……変な嫉妬してる人がここにいます。幼馴染みならではの独占欲って初めて見たよ。

「秋ちゃん秋ちゃん。ちょっといい？」

怪しげな微笑みを見せながら、訪ねてくるき。

警戒しつつも頷くと、ニヤリと笑って 叫んだ。

「ああっ！ 二年C組出席番号10番、向坂秋くんの首にキスマークがあるーっ！ これはもしや、大人の階段を上ってしまったのかーっ!?!」

「はあああっ!?!」

何言ってるのこの人！ しかも丁寧なクラスと出席番号、フルネームまで！

「えーっ！ 嘘ーっ！」

「ショックーっ！」

「いやーっ！ アキーっ！」

今までとは違う、そんな悲鳴が体育館内に響き渡った。

どうにかして否定しようと、下を見た時 こちらを見ている彼

女と目が合う。

「っ」

ひい、とかすれた悲鳴がのどを通った。

殺気を帯びた紅い瞳が、僕を射抜いているからだ。

千歳が何でこっちを睨んでいるのかは分からない。けど何故か、彼女は傷付いたような、悲しんでいるような表情をしていて、唇が僅かに形を作ろうとしていたので、目を凝らす。

「」

コ。

「」

口。

「」

ス。

全てを繋げれば

「……え？ コロス？」

……いやあああっ！ 殺されるー！？

「き！ き！ 笑ってないで助けて！」

「りよーかーい」

すう、と息を吸い込む姿がやけに頼もしい。

「あーっ！ ごめーんっ！ よく見たら虫さされだったよー！」

きりの叫びに、よかったー、など言い合う女子達。男子の中の数人も（何故か）安堵の息をついている。

それらを全て無視し、僕は彼女を見つめた。

本当に違うよ、と懇願するように。彼女だけには、誤解されたくなかった。他の人間がどう言おうとどうでもいい。でも、彼女だけには、信じて欲しかった。

それは傲慢と言う名の、想い。

喧騒の中、僕と彼女は見つめ合う。

その光景を、四谷先生が見ていたとも知らずに。それが、奇妙な三角関係を作る事になるとは、思いもしなかった。

第六十話：「神野先輩とは」

彼女の活躍で、特進クラスの女子バスケは決勝戦まで進んだ。そうなると思順番的に、今度は男子バスケの決勝戦な訳で。

只今、僕と佑樹、圭司とクラスメートの二人で作戦会議中。

「うーん……。向こうは経験者が二人か……。ちよつとキツいなー。だったら圭司はディフェンス（守備）に」

「秋。お前はオフェンス（攻撃）だからな」

「分かつてるよ。煩いなあ」

さっきから佑樹は、ずっとこんな感じだ。しつこい男は嫌われると言つが、今ならそれに共感出来る。とりあえず佑樹、一回死んでくれ。

そんな事を考えていると聞こえてきた、試合開始の準備である笛の音。

頬を二度叩き、気合いを入れてコートに向かうと、なんと、思わぬ人間に会った。

「よつ、向坂。久しぶりだな」

「……神野先輩」

もう会う事もないと思っていた。どこかへ引越したと聞いていたが、まさか戻ってきていたなんて。しかも、この学校に。

中学時代、神野先輩には色々とお世話になった記憶がある。

入学してすぐ、バスケット部に入部した僕を、神野先輩は気に入らないと吐き捨て、試合はおろか、練習でさえ満足にやらせてくれなかった。当時、エースであった神野先輩の機嫌を損ねようとする人は誰もおらず、おかげで僕がバスケットを楽しむのは授業か休み時間となってしまったのだ。

そんな嫌がらせをするのには理由があった。神野先輩は、汐姉に振られていたのだ。神野先輩こそ、キング・オブ・小さい男の称号が相応しい。

僕に嫌がらせをした事はとっくの昔に許した。だけど、一つだけ許せない事がある。

それは、汐姉を陥れようとあらぬ噂を学校中に流布した事。その事を、汐姉は気にしていない。けど、僕が神野先輩を許す事は一生ないと言える。それ程までに、僕は神野先輩が嫌いだ。

「……」

体の内から湧き上がる感情を押さえ込み、自分の位置につく。

試合開始の笛。

ジャンプボールは相手側の勝利。

神野先輩が落下途中のボールを拾い、ゴールに向かって走り出す。僕もそれを後ろから追った。

距離はそう大した事なく、すぐに追いつく。抜き去るのと同時にボールを奪ってやろうとしたが、やはりそこは曲がりなりにも元エース。そう簡単にはいかない。神野先輩は左後方を走る先輩にパスし、難を逃れる。

だが、そこで佑樹の出番だ。神野先輩のパスコースに先回りし、退路を絶ちながらもボールを受け取る。

「秋っ！」

名前と共に飛んできたボールを取り、反対側のゴールへ向かうが、行く手を阻む壁があった。見なくても分かる。他ならぬ神野先輩、その人だ。

低姿勢でドリブルを続け、勢いを殺す。易々《やすやす》と前に出る事は出来ない。神野先輩は、勝つ為なら容赦ない人なのだ。

「向坂、あの女は元気か？」

半月を描く目。

神野先輩が指すあの女とは、恐らく汐姉。明らかに侮辱と取れる言動。瞬間的に殺意が湧くが、何とか押し止めた。ここで挑発に乗ったら、相手の思うツボだ。

「それにしても、お前と日宮千歳、えらく仲がいいらしいじゃないか」

くくく、と笑う神野先輩。

そう言えば、この人は昔から他人の弱みを握るのが得意だった事を思い出す。巧みな話術で相手を揺さぶり、動揺させる手口で相手の弱点を探るのだ。

深く、深く息を吐き出す。落ち着け。落ち着くんた。

「遠目で見ても、いい女だよなあ。あんな女を自分のモノにしたら、自慢出来んだろ？ やっぱり」

神野先輩は言い放つと共に、チラリと二階を見る。

ああ、ダメだ。意思に逆らって僕の目は自然と鋭くなり、目の前の人間を睨みつける。

千歳をモノ扱いた事が、許せなかった。彼女を下卑た目で見るこの人が、許せなかった。

感情に任せて、前に出る。

が。

「ぐ……っ！」

飛び出してきた神野先輩の腕が、フックのように僕を引っ掛け、後ろへ放り投げるようにして振るわれた。

投げ出され、背中を打ち付けて体育館の床を滑る。

僕の手から零れ落ちたボールの跳ねる音が、一瞬にして静まり返った体育館内に響いた。

ファウルの笛は鳴らない。予想はついていた。多分、審判は神野先輩に買収されている。似たような事が中学時代にもあったから、答えを出すのは容易だった。

更に悪い事に、球技大会中、教師は全員、職員室で何らかの仕事をする事になつてゐる。四谷先生がこの体育館に来たのは、仕事の合間を縫つて来たからだ。普通なら、何かない限りは絶対に来ない。本来なら不正を防ぐ審判はおらず、注意できる教師もいない。

言つてしまえばここは、神野先輩の、手の平の上なのだ。生かすも殺すも、神野先輩の気分次第で決まる。

「おいおい。急に飛び出したら危ないだろ？」

「……っ」

笑いながら差し出された手を取る気にもなれず、痛む背中を押さえて、なんとか自力で立ち上がる。本当に、容赦ないなあ。中学からまるで変わつてないよ。

「おい！ ふざけんなよ！」

「……っ。佑樹っ」

声を荒げて駆け寄つてきた佑樹の言葉を遮る。

大丈夫だ。まだやれる。　　そう目で伝えれば、佑樹は渋々と戻つていった。

僕は神野先輩に笑いかける。

「神野先輩、ごめんなさい。続き、やりましょう」

頭を下げると、面白くなさそうに鼻を鳴らす音が聞こえた。

体育館に、再び静寂が訪れる。

その中に、彼女はいるのだろうか
と、無意識の内に考えてい
た。

試合はまだ、終わっていない。

第六十一話：「決着」

それから、酷い有り様だった。殴られ、蹴られ、倒されて、心身共にボロボロの状態である。唯一の救いは、顔に　かすり傷はあれど　そう大した傷はない事だろうか。体だけなら、家族への言い訳を考える必要がない。

何度も佑樹や圭司、クラスメイト達に棄権を勧められたけど、それだけは嫌だと拒否した。このまま負けるのは、僕のプライドが許さなかったからだ。

当初は離されていた得点も、今では二点差。
ボールは今、僕の手元に。それでも神野先輩の追撃は続き、止まる事知らない。

「いい加減、諦めろよっ」

「う……っ！」

強烈なタツクルをもらい、弾き飛ばされる。倒れ込んだ体育館の床は固く、冷たい。僕の手から零れ落ちたボールが転がる。

衝撃で咳き込んでいると、視界に影が入った。

乱暴に肩を上下させ、目はつり上がっている神野先輩。

様子だけを見れば、僕も神野先輩も疲労している事が分かる。違うのは、加害者が被害者かと言う立場だけ。

「まだ、やんのか」

その問いに、僕は笑った。答えは決まっている。

「もちろん、です。ボールは僕からで、いいですよね？」

立ち上がり、傍で転がっていたボールを拾い上げ、尋ねる。

神野先輩は無言で背を向けた。それを肯定と取り、既にコート外に立っていた圭司にボールを投げる。

終わりが近付いている。残り時間は少ない。

何をムキになっているのか、自分でも分からなくなってきた。

本当はプライドなんて、捨てている。

ただ、勝ちたい。それだけが僕を動かす原動力。

意地になっているのかもしれない。それでもよかった。意地なら意地で、最後までカッコ悪くやってやる。

勝つ為には、一発で逆転。二点差を一発で覆すシュートと言えば、アレしかない。

あまりにも無謀な考えだった。

試合再開の笛が鳴り、圭司からボールを受け取って走り出す。

飛び出してきた先輩を一人、二人と抜き去り、走り続ける。途中で足がもつれかかったけど、何とか踏ん張った。こんな所で倒れている場合じゃないのだ。

全身が悲鳴を上げて、下唇を噛んで堪える。

誰も見えない。見えるのは、ゴールだけ。それは別に異常じゃない。中学時代によくあった事だ。最後の最後で、全盛期の勘を取り戻しつつあった。

中学時代は、ほんの数回しか出なかった試合。高校では、一度も試合をしていない。

顔は自然と笑顔になっていた。

やばい。バスケ、やっぱり楽しいよ。

僕にはもう、ゴールしか見えない。

しかし、ゴール前にラスボス 神野先輩が両手を広げ、獲物を狙うかのように立ちはだかっているのが見えた。

こちらに向かって走ってくるが、構わずシュートの体勢に入る。

突き出される神野先輩の手を避けるべく、後ろに跳びながらのスリーポイントシュート。

中学を卒業してからは、一度も練習していないシュートだった。

勘を取り戻しつつあると言っても、不安定な所があるのは否めない。

その証拠に、跳んでいる途中でバランスを崩して、足がもつれた。

全盛期なら、絶対にしないへマだ。

ついで襲ってくる衝撃と痛み。

パサ、とリングを何かが通過する音。

着地に失敗し、尻餅をついた僕が見たのは、床を転がるボールと、試合終了を知らせる笛の音だった。

途端に響き渡る、絶叫。二階にいる人が、歓喜の色を含めた悲鳴を上げていた。

喜ぶクラスメート達の声に、やっと実感する。

試合は終わった。僕達は、勝ったんだ。

呆然としながら転がるボールを見てみると、ふと彼女の事が気になり、二階に目をやった。しかし、見つからなかった。立ち上がって見渡してみても、その姿は見当たらない。目立つ三人も、どこにいるか視認出来なかった。

この喜びを伝えたかった人がいない。それが少し寂しかったけど、気にしない事にした。

しょうがない、と諦めて顔を正面に戻すと、神野先輩と目が合う。その目にあるのは、怒りと恨み。しかし激情を映している目は別に、能面のような表情。

神野先輩は足早に、そしてどこか乱暴にこちらに歩み寄って来ていた。まるで他人事のように、その光景を見ている自分がいる。

気付いた時には、神野先輩の拳が振り下ろされていた。

頭に残る嫌な音。頬は痛いと言うより熱く、口に広がる血の味。仰向けに倒れた僕の上に神野先輩が馬乗りになる。抵抗する気力も体力もない。再び振り上げられる神野先輩の腕を見ても、ああ、痛そうだなあ、と思うだけ。

急変した事態に気付いた人が、驚愕の声を上げる。

数秒もせずに襲ってくるであろう痛みを覚悟した 刹那

「がっ！」

苦痛に満ちた叫び声を上げ、神野先輩は僕の上から吹っ飛んだ。床に背中を打ちつけ、滑る姿は先程までの僕と酷似している。視界に入るのは、長い黒髪。

「それ以上秋に触れる事は、私が許さん！」

無表情の仮面を外し、怒りを露あらわにする彼女がそこにいた。滅多に聞けない彼女の怒号に、ざわめいていた体育館が静まる。それらを見せしめ、倒れたまま動かない神野先輩を視認して、こっちに向き直る彼女はひま跪きながら僕の顔を覗き込んだ。

「痛むか？」

恐らく赤くなっていると思われる頬に、当てられる冷たい手が心地いい。その瞳に存在するのは、限りなく優しい色。

僕はそれに笑って応えた。何か言いたいのに、口が開かない。

そうして、僕は意識を失った。

第六十二話：「嘘だ」

目を覚ますと、目に入ったのは見覚えのある白い天井。
続いて、近くの椅子に座る千歳と目が合う。すると彼女は慌てたように立ち上がり、ベッドの傍までやって来た。

「秋。目が覚めたか」

長い髪を耳の後ろへかける彼女の仕草は、嫌に色っぽくてドキドキする。

近距離にまでやって来た彼女に、掻き上げられる僕の前髪。額の熱が千歳の手に吸い取られていくようで、不思議と気分が落ち着いていく。

「具合はどうだ？」

「大分楽になったよ。ユリカちゃんは？」

「私はここだ。バカ野郎」

保健室の主・ユリカちゃんの名前を口にした時、カーテン越しにハスキーボイスが聞こえてきた。

「まったく。テメエは死にてえのか？ 自殺志願者か？ そんなに死にてえなら、私が直々に殺してやるよ、このドアホ」

病人は^{いたわ}勞らないのがポリシーなユリカちゃんは、口が悪い。とにかく、口が悪いのだ。

美人なのに勿体ない、と思うのは何も僕だけじゃない。

「そう言えば、試合はどうなったの？」

「老人が教師に伝えて、試合は中止させた。環は成子に今まであった事を伝えに行き、琉二はお前とあの男が優先的に診察出来るよう、病院の手配をしている」

三人は三人で、色々と忙しくしていたようだ。あとでお礼を言わなければいけないだろう。

「中止か……悪い事しちゃったな」

中止と言う言葉が、重くのしかかる。他の人の今までの努力を、僕は無駄にしたのだ。

申し訳ない気持ちでいっぱいになっていると、手が握られた。

「私も悪かった。頑張っているお前を止めるのは、野暮だと思ったのが間違いだっただな」

彼女は長い睫毛^{まつげ}を伏せ、更に手を強く握る。少し俯き^{うつむ}気味で、彼女の頬にかかる前髪。目を凝らせば、下唇を強く噛み締めているのが見えた。

「すまない。無理にでも、止めに入るべきだった」

「いや、止めてくれなくて正解」

僕の答えに、彼女はきょとんとして首を傾げる。

「どうしても、勝ちたかったんだ。だから千歳が止めに入ったって、僕は続けてたよ」

「……そうか。頑固な奴だな」

「うん」

顔を見合わせ、笑い合う。

すると彼女はふむ、と言って顎に手を当てた。

「成子が、教室で待ってると言っていた。どうする?」

「行くよ。みんなに、謝らなきゃいけないから」

身を起こし、ベッドから降りる。全身が苦痛で悲鳴を上げるが、出来るだけ気にしないようにする。

「なら、私も一緒に謝ろう」

思わず転びそうになった。よるめいた瞬間、彼女の手が僕の腕を掴んで支えてくれたから転ばなかったけど。

「何で一緒に謝るの?」

「一人は寂しいだろ」

「……なんか千歳って、所々ズレてるよね」

「失礼だぞ、お前」

睨みつけてくる彼女を、愛しいとはつきり感じる。
こんなにも好きなのかと自覚すれば、気恥ずかしくなって、上目遣いの彼女から目を逸らした。

結局、千歳には昇降口で待っているように頼んだ。彼女に迷惑はかけたくなかったし、一緒に帰る口実が出来て丁度いい。

そんな事を考えつつ教室の扉を開けた僕を待っていたのは、満面の笑みの桐谷さんだった。

怖い、と言うのが感想です。

見ればクラスメートも何故か満面の笑みで、更に恐怖を煽る。ここはカルト集団か。

「向坂くん」

「は、はいっ！ ごめんなさ」

「あなたは男の中の男よ！」

「……え？」

桐谷さんが親指を立てた瞬間、割れんばかり拍手が起こる。周りを見渡せば、クラスメート達がこちらを向いて手を叩いていた。

……え？ どう言う事？

「よくぞ最後まで戦ってくれた！ その根性、褒めてつかわす！」

……え？ 桐谷さん何者？ お殿様？

「努力賞として、来週の学園祭は向坂くんを中心に考えるわ！ ね！？」

ね！？ と同意を求める桐谷さんに、頷くクラスメート達。

「よし！ 今日気分がいいから反省会はなし！ みんな帰るわよー！」

「あ、待つて待つて！ 状況説明もなしに帰らないでー！」

だが、僕の叫びも虚しく、クラスメート達は教室を出て行ってしまった。むなしい。むなしすぎる。

一応、僕を励まそうとしてくれたようなんだけど、正直よく分からない励まし方だった。

「向坂くん」

「あ、はいっ」

急いで帰りの用意を鞆に詰め込み、昇降口まで急ぐ僕を引き留めたのは、強敵である四谷先生だった。

相変わらずの爽やかオーラ。この人の雰囲気は、善也兄に少し似ている。でも僕は、この人が苦手だった。特に苦手なのが、何を考えているのか分からない目。

「少し時間、いいかな？」

四谷先生は、爽やかな笑顔を崩さない。

僕は、少しなら、と言って頷き、四谷先生と向き合う。

「君と千歳の事なんだけど」

「は……？」

「二人は付き合ってるのかな？」

笑顔を貼り付けたままの四谷先生は、何を考えているのか分からない。

僕と彼女は付き合っていない。だから否定するように首を横に振った。

「そっか」

「……あの」

四谷先生が出した安堵の表情に、自然と声が低くなる。何故、四谷先生が安堵したのか。その理由を探せば、答えは一つしかない。それは僕の全身を凍らせ、心を冷やした。

「四谷先生は……」

一息おいて、口に出す。

「千歳の、何ですか？」

長い沈黙。夕暮れの校舎だけが、時間の流れから外れているようだ。

「俺は、千歳の幼馴染みだよ？」

「そうですか」

取り繕うように浮かべられた曖昧な笑みに、溜め息をついた。もうこの人と話す必要はないだろう。話したくもない。

「千歳を待たせているので、帰ります」

「……っ」

無意識に不機嫌な声が出てしまった。切羽詰まったような表情で、息を飲む四谷先生。

「ま、待って……」

「もう話す事もないようなので。それに、僕にとって千歳は最優先で考えるべき人ですから」

「……君は、千歳が好きなの？」

その問いは、答えるまでもなく。
僕は何も言わずに背を向けた。

「待って！ 俺は、俺は 好きなんだ！」

その言葉に、僕は足を止めて振り向いた。
誰が、とは聞かない。答えは知ってる。

いつの間にか隣にいて、傍にいてくれる真紅の彼女。僕が好きな少女。目の前の男もそう

「君の事が好きなんだ！」

「……」

……え？ あれ？ 聞き間違いかなあ。今、とんでもない事を言われたような気がするよ。

突然の出来事にフリーズする僕。紅潮させた頬で立つ四谷先生。
まさか。いや、嘘だ。嘘だと言ってくれ。今の言葉は、冗談だったと。

懇願する^{こんがん}ように、四谷先生をずっと見続けていた。鞆を持つ手を、固く握りしめるようにして。

その時。

「嘘だ」

望んだ言葉は、後方から。聞こえてきたのは、現在進行形で愛しいと感じる彼女の声。

振り向けば、茫然自失としている彼女がそこに立っていて。

奇妙な三角関係図が、出来上がった瞬間だった。

第六十三話「変態、四谷元晴」

夕暮れの校舎に、再び沈黙が訪れる。その沈黙を破ったのは、千歳だった。

「元晴。お前は秋の事が……好きなのか？」

真っ直ぐ四谷先生を見つめ、無表情で問いかける彼女は、一体どんな感情を抱いているのだろう。その彼女が纏うまと雰囲気、不覚にも見とれてしまった。

すると聞こえる、軽やかな笑い声。

「俺さ、男も女もイケるんだよ」

あーあーそうですか。もう勝手に言ってくれ。男に告白されるのは慣れてますよー。

「だから、向坂くんも千歳も大好きなんだよね」

「……」

「……」

後ろを振り向いて、彼女と顔を見合わせる。

千歳も意味が分からないと言ったような顔で、僕の傍にやって来た。

(どつと言つ意味かな?)

(よく分かん。昔から元晴は理解不能な思考回路をしていたんだ)

(そのまま育っちゃったんだね)

(みたいだな)

「つまり、向坂くんも千歳も恋愛対象として見てるって事だよ」

ひそひそ話が聞こえていたのか、四谷先生は説明するように言った。

ああ、なるほど。そう言う事が……って納得しかけたけど、その言葉は聞き捨てならない！

「四谷先生！ ちょっと待ってください！ それ、客観的に聞いていたら二股のように聞こえるんですけど！」

「え？ そうだよ？」

あっさり言いましたよこの人ー！ タケちゃんより絶対タチ悪い！

「ほら、両手に花って、男女共通の夢でしょ？」

「……」

「……」

さも当然かのように言う四谷先生に、驚きを隠せない僕と彼女。佑樹やタケちゃん以外にも、欲望バカはいた。

四谷先生の幼馴染みである千歳は、ショックが酷すぎて硬直している。

「……秋。今更だが、私は今、貞操の危機を凄く感じている」

「大丈夫。僕もだよ」

僕の制服の裾を掴み、怯える彼女を、僕は守るように背にし、一歩ずつ後退していく。追っかけてきたらすぐ逃げられるように配慮した形だ。もう僕は、目の前の男が変態としか思えない。

「千歳は出会った時から目をつけてたんだよね」

ふと脳裏をロリコンと言う言葉がよぎった。

「再会した千歳はテレビで見るよりずっと綺麗で、向坂くんは廊下で一目見た時から惹かれていた。だから俺は君達二人に、恋に落ちた」

地獄に落ちてください。

「ああ……！ 言い表しようのないこの感情……！！」

やばい。とうとう目が危なくなってきた。

いまだ僕の制服の裾を掴んでいる彼女の手を、しっかりと掴む。走る体勢は、整った。

「……逃げるよ」

小声でそう告げれば、握り返される手。

条件反射で緩みそうになる頬を隠して、チャンスを探る。

「この身は既に、君達のもの」

今だ。

四谷先生に背を向けて、駆け出した。後ろで何かを叫んでいるが、無視して昇降口まで急ぐ。

今日は、初めて本物の変態に会った日になってしまった。

三人を千歳の家集合するよう電話で呼びかけ、事の顛末を話した。
三人を千歳てんまの家ちに集合するよう電話で呼びかけ、事の顛末を話した。

それを聞いた三人のリアクションは多種多様なものだ。

「うっわー。四谷っち、そんな特殊性癖持ちだったのー？」

いつも笑顔を崩さない壱が、顔を引きつらせている。ドン引きしているようだけど、ここに被害者がいるんだから自重して欲しいものである。

「あー……えっと」

環は憐れむあわような目で僕らを見てくる。コメントに困るなら言わなくていいよ。

「どうする？ 四谷、ぶっ飛ばすか？」

「お前が私にぶっ飛ばされたくなければ、真面目に考える」

「はい……」

今回は千歳の味方だ。琉が可哀想、とか全く思わない。むしろもっと苦しみ。僕ら以上に不幸になれ。

「四谷つちも攻略不可能な二人を選ぶなんて、趣味がいいのか悪いのか分かんないよねー」

壱が顎に手を当て、顔をしかめて言う。それに頷く環と琉。意味が分からない僕と、何故か顔を赤くさせて壱を睨む千歳。何だか変な構図だ。

「趣味はいいんじゃないかな？ それにしてもレベル高すぎだと思っけどさ」

「それ以前に、二股ってのがもう信じらんねえよ」

環と琉が苦笑い気味に言うのだが、口が引きつってて目が笑っていない。

千歳はもう三人から意見をもらうのを諦めたようで、自らが用意

した紅茶に口を付けていた。その紅茶は僕にも用意されていて、いまだ湯気を立てるソレはテーブルの上に存在していた。
いただきます、と呟いて紅茶を手取る。いい香りと湯気が鼻孔びょうをくすぐり、気分を落ち着かせる。アロマテラピーも、こんな感じなのだろうか。

一口含めば、口内に広がる甘すぎない味。それがまた、疲れきった体と心に安らぎを与える。

「美味しい……」

「それはよかった」

「あ」

心中で呟いたつもりが、思いつきり口にしていたらしい。恥ずかしさで頬を掻きながら、照れ隠しに笑った。

「いや、この紅茶、本当に美味しいよ。なんか、身も心も温まるって言うか……」

……あれ？ 身？ 僕、何か忘れてるような……。

「っ！？」

何気なく背中に手を当てれば、全身に電流が走った。

思い出した。僕、全身傷だらけじゃん！ と、自覚してしまえば痛みがぶり返してきた。

「ぐぐぐ……」

「しゅ、秋!? あっ！」

僕の呻き声に、彼女が何か気付いたようで声を上げる。

四谷先生の事で頭がいっぱいで、痛みや病院の事を忘れていたのだ。何とマヌケな。

「病院行ってない! どうしよう!?!」

彼女の珍しく焦った声に、三人が慌てて立ち上がる。薄々気付いていたけど、彼女は動揺すると口調が乱れるようだ。

「琉は秋ちゃん背負って! 環はここから近い病院を手配! 千歳は秋ちゃんを励ます! 俺は秋ちゃんの家族に」

痛みに堪えながら、壱の制服の裾を引っ張る。

「頼むから……家族には言わないで……」

後が面倒くさいから、と付け足すと、壱は分かったと言うように頷いた。

「俺は秋ちゃんの家族に何か言っつて、帰りが遅くなるって誤魔化すから! 環、必死になっつてついで来るように!」

「分かつてるよ!」

「うわ! 秋、お前、超軽いじゃねえか! ちゃんと飯食ってんのか!?!」

「秋、頑張つて! 私がついてる!」

ごめん。本音を言うと、君達、凄^{ひそひそ}い煩^{わづら}い。

検査の結果、打ち身と擦り傷くらいで済んだ。それでも背中^{おもさ}の痣^{あざ}は痛々しかったようで、三人と彼女は顔をしかめていた。

神野先輩は床に背中を打ちつけた際、頭もぶつけて脳しんとうを起こしたらしい。舌がそう言っていた。

思い起こせば、今日は色々な事があつた。

嫌いな先輩に会つて傷だらけになり、好きな人の幼馴染みに告白されてその好きな人と二股されたり、病院に大騒ぎしながら駆け込んだり。

僕の日常に、平穩がない事を改めて知らされた日だった。

来週も学園祭がある。今夜から不安で眠れない日々が続くだろう。

誰かアロマテラピーセットをください。

第六十四話：「時は金なり」

球技大会の翌日。

「来週の土日に、学園祭があります」

朝のホームルームで、桐谷さんがそんな事を言うもんだから、嫌でも思い出してしまった。このクラスの今年の学園祭は、僕中心に行われると言う事を。

「さあ、何がやりたいか意見を出しなさい。ちなみに、向坂くんの意見を先に聞くから」

「え？ 僕？」

「うん。何かやりたい事ない？」

そう突然言われても、思い浮かばない。と言うかそもそも、学園祭に興味がないのだ。

「えーと……みんなのやりたいヤツを、やりたいなあ……」

悩みに悩んだ末、人任せと言う結論に到着。だって面倒くさいじやん。自分で考えるの。

「じゃあみんなの意見を聞いて、多数決で決めるけどいい？」

「うん。それでいいよ」

「じゃ、何か意見がある人、手え上げなくていいから適当に言いなさい」

桐谷さんも中々の面倒くさがりだと言う事が発覚。

「メイド喫茶がいいと思いまーす」

「えー！ やだー！」

「キモーい！」

「バカ野郎！ メイド喫茶こそ男の夢！」

「えー。逆に執事喫茶の方がよくなーい？」

「だよなー。男子ばっか楽しようとしてズルいし」

桐谷さんが自由を許した途端、メイド喫茶か執事喫茶か男子と女子で対立しようとしていた。

何でみんな、そこまで喫茶にこだわるのかな。って言うか、普通の喫茶でいいじゃん。メイドや執事にこだわる必要がある？

「うるっさいわボケ共お！」

桐谷さんの一言で静まり返る教室。

「もう間を取って性別逆転させればいいでしょ！ 時間を無駄に浪費すんなー！」

「ごめん桐谷さん。一言いい？ 性別逆転させるってどう言う事ですか？」

とまあ、そんな訳で僕のクラスは『性別逆転喫茶』に決定。それは男子が女装し、女子が男装すると言う、色んな意味で平等なものだった。

そして現在、クラスメートは意見を出し合って厨房係と給仕係の割り当てている。

「やっぱり向坂くんは給仕係だね」

「うんうん。それはそうだよー」

「何着せちゃおうか？」

女子は一致団結すると怖いもので、反論出来ない。僕はもう、女装させられる事が確定だった。

「やっぱりウィッグは必要だね？」

「いるいるー！ 茶髪の巻き髪がいいかもー！」

「わー！ 絶対可愛いよ！」

もう勝手にしてくれ……。女装は小さい頃から汐姉にされてたから慣れてるし。あーでも、やりたくないな……。……。

「なあ、秋」

諦めて窓の外を眺めていると、佑樹が声をかけてきた。確かこいつも、給仕係に選ばれたはずだ。慰めてほしいのか知らないけど、僕は慰めてやらないからな。

「ウィッグって何？」

「……カツラの事だよ」

「おお、なるほどー！」

「……」

はあ、と溜め息をついて、窓へ視線を戻す。

ホームルームが終わるまで、空を見つめていた。

時が経ち、学園祭を翌日に控えた今日。

今日は衣装を着る事になっている。佑樹はナース、圭司はバスガイドと言う、何とも悲惨なものであった。そして、かく言う僕の衣装とは。

「……なんで女子の制服？」

そう。よりによって、この学校の、女子の制服を渡されたのだ。

「だって、この方が面白いじゃない。本当に女子と勘違いする人がいるかもしれないでしょー？」

そう言うのは発案者、桐谷さん。

「全然面白くないよ」

「何よ。私の提案に文句あるっての？」

「素晴らしい提案だと思います！」

これがヘタレの性さがってヤツだね。なんか無性に悲しい。

男子の給仕係は別室に通されていった。そこで化粧と着替えをするらしい。

佑樹と圭司はムダ毛処理中とかで、とてもじゃないが目も当てられない。僕はそう言うのがあまり生えない体質で、女子生徒が行う『ムダ毛チエック』とやらをパス出来た。

化粧は将来メイクアーティスト志望の女子が施し、髪は親が美容師をしている女子がセットするようだ。こうして見てみると、このクラスは人材が豊富のように思える。

「うっ……スカートって落ち着かないなあ……」

「まあまあ、いいじゃん。せっかく綺麗なんだから、活用しないと勿体無いわって」

「にしても、憎たらしい程に美人よねー。可愛いつて言うより、綺麗なモデルみたいよ」

メイクアーティスト志望の小林さんが、朗らかに笑った。それに続いて、桐谷さんが言う。

褒めてくれているのは分かっているけど、素直に喜べない。

「まあ、これでみんなを追い出した甲斐があるってもんよ」

実は僕が化粧をする前に、小林さんと桐谷さん、髪をセットするクラスメイト以外は全員外に出されたのだ。改めて、姿見に映る自分の姿を確認する。

黒のスカートは膝上、カッターシャツの袖は肘まで折られており、

腰には結び目が前にくるようにブレザーが縛られていた。体を動かせば二年生の証である赤いネクタイが揺れ、ついでに緩くウェーブしたセミロングの茶髪が揺れる。そして千歳がいつも愛用しているのと同じ、黒のニーハイソックス。パツと見、秋あきによく見かけるラフな格好の女子高生である。悲しい事に、汐姉そっくりだったり。

「さあ、行くわよ向坂くん。ドカンと一発、驚かしてやろうじゃないの」

そう言った直後。桐谷さんが僕の手を取り、教室まで引つ張っていく。正直、気が乗らないのだが、ここまで来たら覚悟を決めるしかないだろう。

廊下を早足で駆け抜けた桐谷さんが、教室の扉を乱暴に開ける。桐谷さんと共に一歩、足を踏み出せば、教室から様々な悲鳴が上がった。

「ちょ、嘘!? 向坂くん!?!」

「向坂!? マジで!?!」

「やばいよ! 超きれーじゃん!」

本っ当に、勝手な事を言ってくるクラスメート達だ。つい顔をしかめてしまったが、それぐらいは許してほしい。

「秋、何でお前は女に生まれてこなかったんだ……」

「黙れ。今更何言つてやがるこの単細胞が」

床に拳を打ちつける佑樹を足で踏みつけ、吐き捨てるように罵る。

女王様だ、とか言う声が聞こえてきたのですぐに止めた。この格好でいつも通りに振る舞うと、そうなるのか。今後は注意しよう。

「一瞬、汐先輩かと思ったよ。超そっくりだね」

「圭司もそう思った？」

やはり、僕の容姿と汐姉はどこか似ている。性格は正反対と言ってもいいが。

「……」

「……圭司？」

何故か圭司が顔を赤くさせている事に気付く。

「いや、なんか、汐先輩に呼び捨てにされてるみたいで……」

「……」

気持ち悪い、と思った。

僕の周りには、こんな変な奴ばかりだ。

と、人間関係について悩んでいた時、肩に手が置かれた。振り向けばそこには、ニコニコ笑顔の桐谷さんがいて。

「向坂くん。明日から二日間、秋子ちゃんとして頑張ってるね」

僕にはその笑顔が、悪魔にしか見えなかった。

兎とにも角かくにも、僕は明日から、二日間女装して接客しなければいけないようだ。

そう思うと、自然と溜め息が出た。

願わくば、何も無い事を祈る。多分、無理だろうけど。

第六十五話：「前途多難」

屈辱だ。何故僕が、こんな醜態を晒さなければならぬんだ。

今すぐカツラを投げ捨てて、この制服を脱ぎ捨てたい。でも出来ない。そうすれば僕は明日から『露出狂』と呼ばれる事になるだろう。それは嫌だった。

状況を説明すると、僕は今、女装姿で校内を歩いている。『性別逆転喫茶に来てね』と書かれた看板を掲げながら。

事の始まりは、桐谷さんが僕を『宣伝係』に任命し、プラカード（手持ち看板）を渡した事からだった。

『秋子ちゃん、これ持って校内回ってきてね？ 拒否したら怒るよ？』

笑顔で脅されては、断れるはずもなく。

そんな訳で、僕は今、校内を回っているのだ。

校内には生徒と部外者が入り混じり、大変な混雑模様。しかし不思議な事に、僕が進もうとすれば道が出来ていた。モーゼか。いや、それより、そんなに気持ち悪いのか僕の女装姿は。

「……」

ジロジロ見られると、居心地が悪い。

それに、ひそひそ話も止めてほしいのだが、仕方ないだろう。『性別逆転喫茶』と書かれた看板を掲げているのだから、『僕は男です』とでも言ってるようなものだ。だって現に、『あの子、男かな

？』とか『女にしか見えな〜い』と聞こえてくる。悪かったな女顔で。聞こえないと思ったら大間違いだぞ。

と言った感じで、僕は今、色々な意味で機嫌が悪い。無愛想でここまで歩いて来たのは、それが理由である。女王様、とかまた聞こえてきたけどもう知らない。勝手に言ってる。

校内を全て回り、教室に帰ってくれば。

「いらっしやいませー」

ナースの佑樹とバスガイドの圭司が迎えてくれた。口紅が嫌に赤くて気持ち悪い。全体図は放送禁止並みにグロい。あと服のボディラインがゴツくてなんか嫌だ。

「あつ、なんだ秋かよ」

「違うわよ佑子！ 秋じゃなくて秋子ちゃん！」

「ああら、ごめんなさいね圭子！ 秋子ちゃんもごめんなさい！」

「バカじゃないの」

案外ノリノリな二人を無視し、中に入って桐谷さんを探すが、すぐに見つかった。執事服を着ているのが桐谷さんだ。今は女性客を接客している最中だが、僕も給仕係なので声をかけるのは何らなんおかしくない。

「桐谷さん」

「はい？」

軽く肩を叩けば、桐谷さんは笑顔で振り向いた。接客サービスの基本である笑顔は完璧のようだ。

「あ、向坂くん。もう終わったの？」

「うん。次は何をすればいい？」

「じゃあ、お客さんのオーダー取ってくれる？」

「分かった。……？」

話していると、桐谷さんの肩越しに、こちらを食い入るように見つめる四人組の女の子に気付いた。外見は幼い。中学生ぐらいだろうか。

「あ、あの」

四人組の内の一人　スポーツでもやっているのだろうか　日

に焼けた女の子が声を上げた。

桐谷さんはそれに完璧な笑顔で応じる。

「はい。何でしょうか？」

「その綺麗な人は、男の人なんですか？」

「……」

「……」

思わず唾然。ここは『性別逆転喫茶』だ。だから男は女装し、女は男装する。この子達もそれを知っているはずなのに、まるで信じられないと言つように聞かれるとは……。

「……ぷっ」

桐谷さんが堪えられないと言つ感じで吹き出した。気持ちには分かんなくもないけど、そこは無理をしても堪える所だよ、桐谷さん……。

その後、どのお客さんに接客しても同じような事を聞かれる。僕の女顔はそこまで重度のものなのか。

そう思いながら厨房係 飲食店は、学校側から簡易キッチンを用意してもらえ。教室がただっ広いので、スペースに困る事はない から注文の物を受け取った際、横にいた桐谷さんが慰めるよ

うに肩を叩いてきた。

「さ、向坂くん。そんなに落ち込まないでよ……」

「……桐谷さん、顔が笑ってるよ」

呆れ半分、怒り半分で笑う美少年ルックスな桐谷さんを見たその時だった。

聞き覚えのある声が耳に届いて、まさかと思いながらその方向を見る。

「あら、秋は？ 見当たらないじゃないの」

人差し指を唇に当て、物足りなさそうにする美女。

「汐。秋は逃げないから落ち着きなよ」

その美女の頭を軽く撫で、困ったように笑う美青年。

「ここに秋お兄ちゃんがいるんでしょうか？」

美女と手を繋ぐ、儂げな雰囲気的美少女。

「でもこの看板、性別逆転喫茶って書いてあったよ？」

少し小さい印象を覚える、幼さを残す顔立ちの美少年。

教室の扉に、見覚えがありすぎる顔が勢揃いしていた。

あまりにも異質。美女は高貴な雰囲気を惜しげもなく出し、美青年は丁寧な物腰を徹底し、美少女は可憐な表情を崩す事なく、美少

年は陽気な笑顔を浮かべている。いつ見ても、完璧に整った容姿をお持ちな我が兄妹。

給仕係もお客さんも、突然現れた四人に釘付けで、教室は静まり返る。美形を見慣れているであろう桐谷さんでさえ、四人が出す才一丁に圧倒されていた。

何でここにいるんだ。学園祭には絶対来るなって言ったのに。まあ汐姉が従う訳ないと思ってたけどね。言っても言わなくても、みんな来てただろうし。

「桐谷さん、ちょっとこれ持ってて」

「あ、ああ、うん……」

手に持っていた皿を桐谷さんに渡した後、溜め息をついて、四人の元へ向かった。

「何してんの、みんな」

そう口に出せば、四人は目を見開き、絶句した。僕だって、今更気付いたみたいだ。

「う、嘘……秋なの？」

「汐姉、顔をペタペタ触るの止めて」

「す、凄い。高校生の時の汐にそっくりだよ……」

「善也兄、そんなに目え擦ったら赤くなるって」

「秋お兄ちゃん、どうして女子制服を着てるんですか？」

「菊花、色々な事情があるのさ」

「秋兄ちゃん、ついにそう言う趣味が……」

「裕太、ねえ裕太。君、表の看板見たでしょ？」

兄妹達に触られたりイジられたりしながら、頭の片隅で考えていた。

いまだ向坂ブランドは、絶大な人気を誇る。その証拠に、後方から聞こえてくる様々な囁き。

僕は美形兄妹に囲まれて、この学園祭を乗り越える事が出来るのだろうか。

「ねえ、秋？」

「うん？ 何？」

「写真、撮ってもいい？」

「ダメに決まってるでしょ」

「ケチ」

「ケチって……」

なんか、前途多難だ。

第六十六話：「お化け屋敷」

丸テーブルに座る僕を除いた兄妹。視線が集中しているのに気付いているのか気付いていないのか、それぞれがそれぞれ、様々なリアクションを示している。

僕はそれを遠巻きの一人として見ていた。だって、一緒にいると目立つから嫌だし。もう手遅れな感じもするが。

「秋」

汐姉が指をパチンと鳴らし、僕の名前を呼んだ。ここは指名制じゃない。でも名前を呼ばれたからには、行かなくちゃならないだろう。って言うか凄いやつになっちゃったよ、指鳴らすの。

「はい。何でしょうか、お客様？」

「私そっくりの外見でその口調、気持ち悪いから止めて」

「……」

酷くない？　ねえ、酷くない？　もうちょっと言い方あるよね？

「まあそんな事はどうでもいいわ。ケーキセット二つで、ドリンクは紅茶ね。ケーキは私と菊花の好きなやつでお願い」

「汐姉はチーズケーキで、菊花は母のショートだよね？」

「そう。よく出来ました」

頭を撫でられた。圭司の視線が刺さるよつに痛いです。

「善也と裕太はどうするのよ?」

「あ、ぼくはコーヒー」

「おれ、オレンジジュースがいい」

「牛乳飲みなさいよ、牛乳。あんた、小さいんだから」

「小さい言わないでよ!」

「だって事実じゃない?」

「ちょっと静かにしてよ。営業妨害だって。僕が怒られるでしょ?」

桐谷さんの視線を感じてハラハラドキドキしていると、菊花が含み笑いをして僕を見た。菊花がこの笑顔を浮かべる時は、何かある時なのだ。

「秋お兄ちゃん、任せてください」

何を? と思ったが、それを口にする前に、菊花は動き出した。

「汐お姉ちゃん、ユウちゃん、喧嘩は止めてください。それ以上続けるのなら、嫌いになります」

途端に、姿勢を正す二人。その様子に菊花は満足げに微笑み、善也兄は苦笑い。これからは心中で菊花を『影の統率者』と呼ぶ事に

して、厨房へと急ぐ。

そこで見た光景に、唾然して、絶句。厨房係、総勢十三名は、我が兄妹を一目でも見ようと身を乗り出して、本来やるべき仕事を怠慢していた。仕事しろよ。

働いて働いて、ようやく訪れた休憩時間。

やっとこの忌々《いまいま》しい制服を脱げるのか、と安堵したのも束の間。

「あ、それ脱いじゃダメ。向坂くん、まだあるんだから。二時間したら帰ってきてよ?」

美少年スタイルな桐谷さんから言い渡された死刑宣告に、肩を落としたりしたのが二十分前。

今は女装したまま兄妹と校内を回ってます。視線が痛いよー。

「あつ、ここ面白そうじゃない?」

汐姉が指差すのは、『Haunted House } trick

or treat」と書かれている看板。要するに、お化け屋敷だ。

比較的楽な出し物として知られるお化け屋敷は、人気のあまり、各学年に一つと言う特別措置が設けられていた。そうしなければ、全学年の大体のクラスがお化け屋敷を希望するだろう。さて、今年の幸運なクラスはどこかな……って。

「特進クラス!？」

生徒にのみ、事前に配られたパンフレットに書かれていたのは、特進クラスだった。って事は、必然的に千歳も中にいる訳で。

うわあうわあうわあ。なんか、複雑と言うか何と言うか。とりあえず言えるのは、今の姿を見られたくないと言う事だけだ。でも、千歳は一体どんな格好をしているのか見てみたい気もする。いやいや、待て。今の僕を見たら引くって。見られた瞬間、色んなものが終わりそうな気がするし。あー、でもやっぱり見てみたいなー。どんな仮装してるんだろ。

「秋。あんた、お化け屋敷が怖いのか？」

「怖くないよ」

押し黙り、その場から動こうとしない僕を、汐姉は勘違いし、からかいを含めた声音で言った。

僕は、少なからず負けん気が強いと自負しているつもりだ。なので汐姉の物言いに、少しムツとして、条件反射と言わんばかりに言い返してしまった。

「じゃあ、入れるのよね？」

「う、うん」

「決まりっ。さあ、みんな行くわよっ」

後悔しても、遅かった。

「菊花、私から手を離さないようにしなさいよ？」

「はい。でも、大丈夫ですよ。お化けには自信がありますから」

「自信って何だよ、菊花。意味わかんねーって。なあ、善也兄ちゃん？」

「うーん……。ぼくには何とも言えないなあ。でもね、菊花？ 無理は禁物だよ？」

扉の奥に消えていく兄妹達の後ろ姿を見て、思う事がある。

僕の負けん気は、矯正が必要のようだ。

右を見ても人っ子一人おらず、左を見ても同じ。流石、我が校の中にある教室で一番の面積を誇る特進クラスだ。暗幕が垂れ下がる室内はまるで迷路のように入り組んでいる。

……ま、何が言いたいのかって言うと。僕、迷子になりました。

説明するには約三分前に遡る。さかのぼ

三分前、出てくるお化け（生徒）があまりにもリアル且つグロテスクな特殊メイクを施されていて、その尋常じゃない怖さに菊花が恐慌状態に陥った。それにキレた汐姉（妹を愛して止まない）が出てきたお化け（生徒）を次から次へと蹴り倒し殴り倒し、トドメの一本背負いを決めていた。それを止めようと善也兄は奮闘し、裕太は菊花を慰めようと奮闘し。そして僕は、何故か執拗に追いかけてくるお化けから逃げ回っていた所、いつの間にか一人になっていたのだ。って言うか、お化けにストーキングされるってどうよ？

「……くっ」

何だか別の意味で背筋が寒くなったので、気分を紛らわすように歩き出す。

一人になった途端に心細い。自然と早足になりながら暗幕で仕切られた角を曲がると、道は行き止まりだった。問題は、他にありません。

「」

声が出なかった。驚きでもなく、恐怖でもなく、異常なまでの美しさに。

そこ一点だけにスポットライトが当たり、豪華な椅子に座るのは人形のような少女。黒と白のコントラストが映えるヒラヒラした衣装。薄布が幾重にも重ねられた膝上のスカート。手首まで覆い隠す袖。衣装のそこから中に散りばめられたリボン。膝を包む黒のニーハイソックスに、それと同色のブーツ。

紅い唇。閉じられた瞼。漆黒の長髪はツインテールに結い上げられ、爪には光沢を放つメタリックな黒いマニキュアを塗っている。眠るゴスロリ少女。そんな言葉が頭を過ぎった。と言うか、見覚えあるよ、この人。

じつと見つめていると、少女の目が徐に開かれていく。瞼の奥にあったのは、血のような真紅の双眸。この学校で、紅い瞳と言ったら一人しかいない。

「おや。ここまでたどり着けるとは、中々肝の据わった女性だな」

「え、いや、あー」

なんか勘違いされてる。主に性別とか。

「褒美に、貴方の名をこれに刻んでやろう」

そう言っただどこからか取り出したのは、小さな手のひらサイズの十字架。これが景品って訳か。……や、可愛いですよ？（女の格好をした）男の僕からでも、センスの良さが分かります。でもさ、ちょっと待って。って事は、ここゴール？

「さあ、名前を述べよ」

「あ、向坂秋です」

「は？」

真紅の双眼が、目いっぱいに見開かれる。

「しゅ、秋？ 向坂秋って、私の知ってる向坂秋？」

「ま、まあ……」

「おまつ、何だその格好はっ」

「これは桐谷さんの陰謀だよ。千歳こそ、そのゴスロリは何なの？」

「こ、これは遍の陰謀で……」

「……千歳も苦労してるんだね」

「お前もな……」

痛々しい空気が僕らを包んだ。

第六十七話：「鈍感な平民A」

どっしりと構えて座るゴスロリ少女な千歳の隣で、膝を抱えて座る僕。なんて変な組み合わせだろう。片や有名人、片や女装したモデル。変だ。変すぎる。

でも、今の僕らは傷心に浸っていて、そんな事に気を配る余裕はなかった。

「……ところで、秋はなんでここに？」

「あー。兄妹四人と来てただんだけど、ゴタゴタでちよつとねー……」

「ああ、そう言えば、さつき無線で遍がなんか言ってたな。……確か、『高橋くんの顔にクレーターが出来て、メイクなしでお化粧だよ。マジ笑えた。超ウケる』とか」

「それ、汐姉がボコボコにしたお化粧さんだねー」

高橋くんって言うのか、あのお化粧。それにしても遍さん、明るいなー。ごめん。軽く現実逃避。

「なるほど、汐先輩なら納得だ。で？ 秋は兄妹達とはくれたのか？」

「うん……なんか、変なお化粧にストーキングされて」

「……そいつ、どんな格好してた？」

あれ？ 声のトーンが若干下がったような気がする。

「ええと……ミイラ？」

「……それ、多分、元晴だ」

「……え」

「このお化け屋敷にミイラなんていない。密かに紛れ込んでいたんだよ」

きゅ、急に鳥肌が立ってきました。マズいよあの人。やばいよあの人。

「それにしても、私が見抜けなかった秋の女装を、元晴はよく見抜けたな。少しムカつくが、そこは認めるしかなさそうだ」

「……？ なんで千歳がムカつくの？」

意味不明な言葉に、首を傾げて聞いてみた。椅子の位置が高いから、見上げるようになって少し首が痛い。

当の千歳は、こっちをチラリと見て手を横に振る。

「気にするな。ただの独り言だ。この鈍感野郎」

「ど……っ！？」

「冗談だ。口が滑った。許せ、オカマ」

「オカ……っ！？」

酷い！ 酷すぎる！ 言葉の暴力だ！ 大体、僕はオカマじゃない！ 女装してるから説得力はないかもしれないけど、これでも歴れっきとした男だ！

「正確な指摘は、言葉の暴力とは言わない」

「人の思考を読まないで！ しかも正確じゃないからね！？」

ツッコミって疲れるっ！

「オカマにならないって、断言出来るのか？」

「出来るよっ！ 汐姉に誓ってもいいね！」

「何故汐先輩に誓うのかは分からんが、秋の気持ちは分かったよ」

汐姉は約束を破ると、散々怒鳴り散らしてから、口を利いてくれない。期間は最長で二週間。律儀で頑固な汐姉は、これらを己の気が済むまでやり遂げるのだ。

すなわち、汐姉に誓うと言う事は『ボコボコ、シカト、何でもこい』を約束したも同然の事なのである。

「……オカマにならないとしても、お前が元晴を好きになる事はないよな？」

「なっ、ないに決まってるでしょ！ 好きになるなんて天地がひっくり返ってもない！」

「……ふふ。大袈裟だな、その例えは」

「……なんで嬉しそうなの？」

「……」

うつわつ。一気に不機嫌顔になった。こっちを睨みつけているような気もしないではない。……って、よく分からないし。

「……な、何か勘に障る事でも言った？」

「だからお前は鈍感なんだ。……はあ」

「す、すみません……」

溜め息をつかれてしまったのは、謝るしかない。笑顔の理由も分からないんじゃないか、鈍感って言われるのも仕方ないか。

「なんか、ごめんね？」

「……まあ、いい。鈍感なのは知ってるから、今更だ。だが、このまま許すのも、なんとなく癢しゃくだ」

「なんとなくですか……」

「罰として、私と明日の学園祭を回ると約束しろ」

……え？ それ罰ですか？ むしろこちらとしては嬉しい限りなんです。

「……嫌か？ もしかして、先約がある？」

「ない。あつたとしても断る」

「いや、そこまで優先してくれなくてもいいんだが……。でも、優遇されるのも悪い気分ではないな」

無表情ながらも、どことなく嬉しそうな彼女。

むう。またまたよく分かんないけど、千歳がいいならいいか。

「あ、僕、明日の午前は働き詰めだからさ。午後からでもいい？」

「ああ。私も午前は働くからな。では、ここは危ないから、私が秋の教室まで迎えに行く。それでいいか？」

「うん、いいよ」

ここが危ないと言うのは僕も同意出来る。理由は簡単。ミイラの変態がいるからだ。いやはや、困ったものである。あーあ、本当に死んでくれたらいいのに。

「……秋、その笑顔は止める。どす黒く感じる」

「え、嘘。玲奈さんに怒られるかも。『アキは神秘的なイメージで売り出すから、変な笑い方しないでよ』って言われてるのに」

頬をペチペチと叩き、引き締める。変態が絡むと、どうしても思考が危なくなってしまう。自重自重。

「さあ、もう行け。そろそろ汐先輩達が心配する」

「んー、そつだね」

立ち上がり、ホコリや汚れを落とすようにスカートはたを叩く。汚したら桐谷さんに怒られる危険があるからだ。

「じゃあ、帰るよ。出口はどこ？」

「ここだ」

彼女が椅子の後ろの暗幕を持ち上げた。眩まばゆい光が、暗闇に慣れた目を刺激する。

「うわー……。凄い分かりにくい出口」

「ここまでたどり着かないと、半永久的に彷徨さまよう事になる。係員に言えば途中退場出来るが」

「係員いたの？」

少なくとも、僕が通っていた道に係員らしき人はいなかったんだけど。

「ああ。場の雰囲気を壊さないように、お化けの仮装をしているからな」

「分かりにくいわー!」

「遍と環の提案だ」

「ああ、納得……」

あの二人、腹黒そうで悪知恵が働きそうだし、悪巧みとか好きそうだし、笑顔で悪質な事を言うところとか、気が合いそうだもんなあ。あれ？ 全部の単語に『悪』が付いてるよ？ って言うか僕、何気に酷い？

「ま、いいからさっさと出る。早くしないと環が犬の耳カチューシヤをつけて追いかけてくるか、元晴が地の果てまで追いかけてくるぞ」

「どっちも嫌だ！ って言うか環、犬の耳カチューシヤつけてんの！？」

「狼男の設定だからな。遍の雪女は迫力があつて怖いぞ。見なかったのか？」

ああ、そう言えば見たような見ていないような。変態ミイラに追いかけてられてよく見なかったよ。早く死なないかな、あの変質者。

「また黒い……」

千歳の呟きは、僕の耳に入らなかった。

何にしても、明日が待ち遠しいくしょうがない。

……あ。でも、それってデートになるのかな？ ……ふ、深くは考えない事にしよう。うん。

第六十八話：「セクハラお断り」

翌日。学園祭二日目。

千歳との学園祭回りに胸を躍らせていた僕に、思わぬトラブルがやって来た。

「秋子ちゃん、可愛いー！ こっち向いてー！ きゃー！」

「はいはい！」

「こっちも秋子ちゃん指名だー！ 女にばっか独占させられるかー！」

「はいはいはい！ でも店内ではお静かにしてくださいー！」

『性別逆転喫茶』は前日のお客からの口コミもあったおかげで、大忙しです。ちなみに、僕を指名してくる人は男女の比率で表すと4：6。女性が多いのは何となく納得出来るが、何故男性がここまで多いのだろうか？ ……アレか？ これも汐姉効果？ 普段はパツとしない僕でも、化粧をすれば何とかなるって？ 余計なお世話だ！ あ、これってノリツツコミ？

「向坂くん！ ぼさっとしてないで働いてー！」

「はい！」

そんな感じで、本当に冗談抜きで忙殺されそうな時間は経ち事件は起きた。

「秋子ちゃん、男でもいいからデートしよーよ」

手をベタベタと触る男が、事もあるうに僕を同性だと踏まえた上で、堂々と誘ってきたのだ。セクハラだと思っただけですが、そこそこどうなんでしょう？ 実はこのやり取り、数分前から続いている。さっきから桐谷さんの『ちゃっっちゃと働けコノヤロー』な視線が突き刺さってくる。しかし、僕は悪くない。目の前にいる四人組の男達が悪いのだ。

「どっ？ 一回ぐらい、男とデートするのもいいと経験だと思っよ？」

そんな経験は望んでません。しかし曲がりなりにも客は客だ。お客様は神様だと言われる接客業で、客を粗末に扱うのには少し抵抗がある。なのでここは丁重にお断りして帰って頂くべきだろう。

「あの、お客様。大変申し訳ありませんが、現在店内は混み合っております。ですから」

「まあまあ、そんな事より。損はさせないからさ、行こう？ 俺達、結構いいカップルに見えと思うし？」

他の三人の、耳障りな笑い声が店内に響く。

「……」

人の話を最後まで聞かない人は嫌いだ。大体、目の前の男を美形だと思えない。僕の目はきやら琉やら環やらを見慣れたせいか、肥えてしまったのだらう。それが悪質な事だとは自覚しているが、

仕方ない。僕の周りに集まる人間が、美形ばかりと言っただけなのだ。

っつか、いい加減、手を離してくだ

「ひゃい!？」

「おー。反応まで可愛いー」

「っつか、本当に男？ 見えねーっつて」

「いいねー」

背中を撫でられて、思わずのけぞりながら奇声を上げる僕に対する反応を見せる他三人。セクハラとしか言いようがない行動に、堪忍袋の緒が切れそうなのを感じるがそこは笑顔。口の端とかヒクヒク引きつっつてると思うけど、気にしない気にしない。

キレたら今までの事が全部無駄になってしまうのだ。女装も、営業スマイルも、下手したら売り上げも。

ああ、思い返せばなんて哀れな自分。何より大きいのは女装だ。校内を回らされて女装姿を晒したのに、それが無駄になるなんて堪えきれない。無理。絶対、無理。悲しすぎるっつてそれ。営業スマイルをなるべく崩さないように努力してきたのに、酷すぎるっつてそれは。

でもごめん。これだけ言わせて。

男にデートのお誘い、加えてセクハラされる僕っつて可哀想だ。

「……………ん？」

笑顔のまま落ち込んでいた時、嫌に教室が静まり返っている事に気付いた。僕と男達のやり取りに引いたとしたら納得出来るけど、それにしても静かすぎるような……。なんか当事者達も呆然としてるし……。でも、何で？

顎に手を当て、むう、と唸っていた所 突如として手が引つ張られた。突然の出来事に、ぎゃあ、と声が出たのは僕がチキンである証拠だろうか。出来れば気付きたくなかった。

「そう驚かれると、もっと苛めたくなるんだが」

「ち、千歳!？」

笑みを含めた声に慌てて振り返れば、後ろに制服姿の千歳が立っていた。これはどう言う事だろう。

「さっさと行く わっ?」

状況把握が出来ない僕を余所に、千歳は手を繋いだままどこかへ行こうとするが、もう片方の手を男が掴んでいる為、進めない。それによって彼女は前につんのめり、素っ頓狂な声を上げた。

途中で何とか体勢を立て直し、その原因を探ろうと辺りを見回す姿はその様子は何ともいじらしく、ストレスで痙攣していた頬はあつという間に緩んでしまう。殆ど条件反射と言っている。

「……………ん?」

つんのめった原因を探っている内に、異変に気付いたようだ。形のいい眉を歪め、しかし無感動な紅玉の双眼をしながらも千歳は口

を開く。

「何だ、そこのお前ら。何故こいつの手を握っている？」

「あ、い、いや」

訝しげな表情を見せる彼女に、男は慌てて手を離す。冷やかしていた他三人の男達は、ぼうっとして彼女に見とれていた。だが、それは仕方がない事だろう。テレビで見る日宮千歳が目の前にいるのだ。浮かれない方がおかしいってものである。

だが、つんのめった事により幾分か機嫌が悪くなった彼女は、それに構わず僕の手を引く。

「おい、秋。早く用意して行くぞ」

不機嫌な声音で告げられた言葉に、頭上で『？』マークが飛ぶ。それに目敏く気付いた彼女は、更に不機嫌が増した声を上げる。

「何をとぼけている。昨日約束しただろう？」

「え。もうそんな時間？」

壁掛け時計を見れば、確かに針は昼だと認識出来る時刻を指していた。働き過ぎとストレスで時間の感覚がなくなっていたのだろう。今更ながら、よくやったと自分を褒めてやりたい。

「成子、秋は連れて行くぞ？」

「煮るなり焼くなり、勝手にどうぞ」

彼女には逆らえないと言つように、肩を竦める桐谷さんの姿が横目に映つた。

その言葉がまるで、死刑宣告のように聞こえたのは僕の気のせいだろうか。……いや、気のせいじゃない。何故なら、他校の生徒が千歳を一目でも見ようと、わざわざここまで来ているのだ。自分はそれらを敵に回したも同然。しかし、それでも僕は彼女と学園祭を回りたい。出来れば平穩に。

そんな複雑な心境に、苦笑いするしかなかった。

第六十九話：「その頃」

秋と千歳が顔を合わせる少し前。壱人は東奔西走していた。

「壱人くん、指名入ったよ！」

「はい。今行きまーす」

長身に似合うスーツを着た壱人は、いつも通りにこやかな笑顔を浮かべる。不満顔の女の子達に微笑み、謝る姿はホストさながら。ウェイターとして働くクラスメートは、そのプレイボーイな動作に呆れを込めた視線を向けた。

「琉二くん、お帰り。早速だけど、指名あるからすぐ着替えてね」

「……………」

たった今、教室に帰ってきた琉二は、ウェイターの言葉に疲れきった顔で頷く。今までどこにいたのかは知らないが、疲労が随分と蓄積されているようだった。昨日の疲れがまだ残っているのかもしれない。その様子を哀れむように見るクラスメート一同。

「琉、頑張りなよ」

「おお……………」

励ます壱人の顔にも、疲労の色が見える。

二人をこうまでさせる原因は、学園祭の出し物だった。壱人と琉二のクラスの出し物は、ホストクラブ。双方の容姿を生かす事が出来る出し物だったが、逆に二人の指名が集中してしまうと言う弱点がある。そのせいで疲労困憊する二人に、クラスメートは同情を隠せない。

「齋木くん、そろそろ上がりだよな？」

ウェイターに扮した男子委員長に問われ、壱人は覇気のない笑顔で頷いた。

指名が集中する壱人と琉二は休憩時間が被らないよう工夫していた。琉二は午前、壱人は午後と言う形で。

やっと休めると言う事で、嘆息する壱人。後は頼むと言うように琉二の肩を軽く叩けば、生気が感じられない目を向けられた。

「さ、齋木っ」

「ん？」

スーツのネクタイを緩めた時、出入り口からウェイターが駆けてくるのを見て、壱人は首を傾げる。ウェイターの頬は真っ赤に紅潮していたのだ。その原因は、彼が叫んだ内容ですぐ分かった。

「お前を呼んでくれって、超美人なお姉さんが！」

「え……」

目を見開く壱人に、ウェイター達やホスト達の『何でお前ばっかり』な嫉妬や羨望が混ざった視線と、厨房係となった女子達の『どんな関係？』と好奇の視線が突き刺さる。見渡せば先程まで彼が相

手をしていた客も、こちらを凄^{しみ}い目で睨^{にら}んでいる。敏感な吉人は、己の頬が引きつるのを感じた。

気まずい店内。その雰囲気^{ふんいき}を更に助長させる存在が、出入り口からやって来た。

「Bonjour・Comment?（こんにちは。ご機嫌いかが?）」

流暢^{りゅうちやう}なフランス語を話しながら、茶色の長髪に金のメッシュをあしらった美女が吉人の元へ歩み寄る。

スリムなジーンズ、白のプリントシャツ、黒のライダースジャケットに身を包む玲奈は、実年齢より相当若く見えた。

「玲奈さん……迎えに行くって言ったでしょ?」

「いいわよ、そんなの。方向音痴でもないんだし」

吉人の言葉をサラリとかわす玲奈。

並々ならぬ玲奈の美貌に店内の視線が一気に集中し、吉人は苦笑せざるを得ない。琉二を見れば、うんざりとした顔で玲奈を見ていた。

「じゃあ俺、抜けるね?」

「あ、うん……」

ぼつっとしている男子委員長に了承を取り、吉人は玲奈の腕を取って店を出る。聞こえてくる悲鳴に苦笑いしながら、彼と彼女はその場から逃げ出した。

その頃、特進クラスの前には、長蛇の列が出来ていた。

「現在、中が大変混雑していますので、入場はもう少しお待ちください」

吸血鬼の格好をした女生徒が叫べば、返ってくるのは不満の声。

「どづいづことだよ。もう一時間待ってるのに」

「客入れる気あるのか？」

「あはは……ごめんなさい」

困ったように頬を掻き苦笑いをする女生徒に、不満を漏らしていた客は一斉に口をつぐむ。

女生徒は美少女と形容するに相応しい容姿ふさわを持っており、その美貌に男女関係なく見とれたのだ。背中の真ん中辺りまで伸ばされた黒髪に、大きな黒曜石のような瞳。綺麗とも可愛いとも言える彼女は、正しく美少女まひよと言っている。

一瞬で静まり返った廊下。その様子を、入り口付近から顔を出し

て見ている人影が三つ。

「出た、理月の魔性の微笑み」

面白い、と顔にしつかり書いてある遍を見て、隣の環は溜め息をついた。快樂主義者である遍にとって、面白い事は極上のスイーツ。それをよく知っている彼は、悲観するしかない。

「理月は自分の外見をよく理解してるから、意識的だろうね。それがまた面白いんだけど」

「萌えるわよ、あの微笑みはっ」

遍の隣に位置する少女が、頬を紅潮させて騒ぎ出す。遍の悪友であり、千歳の悪友でもある小さな少女、艶子。どこか生々しい名前とは裏腹に、可憐な容姿をした彼女は、いつだったか自らを『腐った女子』と呼称していた事を遍は覚えていた。それを彼女らは『あー、納得納得。艶子は人間的に腐ってるから』と勘違いな解釈をしているのだが。

「でも、何でこんな事になってんの？」

白い犬の耳が付いたカチューシャを装着し、少しだけはだけた制服姿で問いかける環に、白い着物姿の遍は窮屈そうに顔を歪めながらも答える。

「アレだよ、アレ。……この着物きつい」

アレ、と指された方向を見て、環は瞬時に理解した。

目に入ったのは、壁に張り出された写真。その大きさは小さめな

ポスター程もあり、嫌でも目立つ。更にそこには、ゴスロリに身を包んだ千歳と、見目麗みめしい女（に見える）生徒が写っていた。環にとって、片方は幼馴染み、もう片方は友達である。

「あの展示してある写真が欲しいなー、ってさっき通り過ぎたお客さんが言ってたの聞いたわよー？」

猫耳を頭につけた制服姿の艶子の言葉に、うんうんと頷く遍。

「千歳と女装してる秋のツーショットがサンプルじゃ、そうなるか。……可哀想に」

こればかりは、秋に同情してしまう環。その原因の一端に、自分の恋人が絡んでいる事が容易く想像出来たからだ。

複雑な環の心境など露知らず、遍は着物の帯を何とか緩めようと試行錯誤しながら、そうそう、と相槌あいつちをうつ。

「朝から『いくらですか？』『アレも特典ですか？』って言う間い合わせが凄くて煩いって、理月が愚痴ってた。ちゃんと非売品って書いてあるのにな」

「しょうがないわよっ。あたしだって欲しいもの！」

「はいはい。あでこは黙ってなさい？」

「あでこじゃないっ！ あたしは艶子！」

コントを始めた二人を余所に、環はふと気付いた事を口にする。

「……でも、何で出口から誰も出てこないの？」

客は入り口から入るばかりで、出口から出て来る様子は一向にない。不思議現象とも言えるソレに、環は首を傾げた。

「私達が作った迷路を攻略出来る人が、そう簡単にいると思う？」

「……いや、いないね」

エセ雪女の言葉に、環は失笑を禁じ得ない。

千歳、環、遍、艶子、理月、悟史（生徒会長の事である） 特
進クラスを代表する天才達の手によって作られた迷路は、一度入つたら奇跡でも起きない限り脱出不可能だと言える、大変意地の悪いものだったのだ。同じクラスと言えど、クラスメート達でさえ理解出来ないソレは、『ダイダロスの迷宮』^{ラビュリントス}と言う別名で呼ばれている代物である。

「あ、でも、一人くらいはクリア」

「いないわよー。誰も来なくて暇すぎるって、千歳言ってたし」

僅かな期待を抱いていた環の言葉は、艶子によって粉々に打ち碎かれる。

「アキくんだって、ゴールまで行けたのは偶然っばいしね。もうちょっと簡単に作ればよかった。このままじゃ、アキくんだけだよ、クリアした人」

「そうだね。……でもそれなら、リタイアする人がいないってのはおかしくない？」

その答えを持つ遍は、胴を締め付ける帯を親の敵を見るような目で睨みつけながら、口を開く。

「それがさあ……あのツーショット写真を特典代わりに欲しいって言う人が異常に多くて、誰も諦めようとしななんだよね」

「写真の焼き増しを渡して帰ってもらうのはダメなの？」

環の問いに、遍は首を横に振った。

「千歳が『焼き増しするな、展示用の写真も盗まれないようにしろ』って言ってたんだよね」

それを聞いた環は、そっか、と言って写真を横目で見た。

千歳がそう言った理由を考えて、頭に浮かんだ答えは秋にとって最悪なものだろう。脳裏に爽やかな笑顔がチラつくが、環はあえて無視した。意識してしまうと、秋の事を思って涙が出そうになるからだ。女装させられた上に、変態に狙われるなんて余りにも可哀想じゃないか、と残酷な神様を恨むエセ狼男。

「仕方ないから最終手段を取ろうって、さっき理月と話してきた」

あー、早くコレ脱ぎたい、とぼやく遍の言に、ハッと己の思考から覚醒する環。

「最終手段？」

「ゴール以外の行き止まりに行ったら、そこで失格。つまり強制リタイア。そうでもしないと誰も出てこないから。……それに」

途中で言葉を切った遍は、何か言いにくい事でもあるかのように環の耳に顔を寄せる。

「そろそろ千歳が上がる時間なんだよね。交渉するにもその本人がいないんじゃないからさ。それで苦情が来ても困るし」

「それなんだけど、千歳に時間延長頼めないの？」

「……私に千歳の邪魔をしろって言うの？」

「邪魔？ ……あ、そっか。千歳、秋と学園祭回る いたっ!？」

全てを言い終える前にローキックを食らい、環の視界が微かに滲む。

「バカ。声が大きい」

「す、すみません……」

「長らく成子の尻に敷かれてきたせいかな、環は女性にとことん弱かった。」

「あの二人の邪魔するなら、私が阻止するから」

「しないって……。俺達だって、千歳と秋が仲良くなるように今までやって来たんだよ？」

「ああ、それもそっか。……事情が事情だから、最終手段を施行してもいいよね？」

「うん。じゃあ俺が無線で全員に伝えるよ」

「よろしく。私は会長にあの写真を死守するように言ってくるからその物騒な物言いに、環は驚愕する。」

「死守って、そんなに凄いの？」

「うん。かなりの人数が強行手段に出ようとした。ああ、あと、ミイラ男が狙うはずだから注意しろって千歳が言ってたし」

「ああ……ミイラ男なんて、ウチのクラスにいたっけ？」

「さあ？ よく分かんないけど、いるみたいだよ？」

「ふっん……」

内部構造は把握しているが、人事関係は全く把握出来ない環と遍だった。

【おまけ】

秋と千歳が顔を合わせた丁度その頃。

吉人は玲奈をエスコートすると言つ名目で、学園祭を堪能たんのうしていた。隣を歩く玲奈は、お目当てのクレープを手にいれて、ご機嫌な様子である。それを横目でチラリと窺うかがい、幸せってこう言つ事なんだろうなあ、と彼は実感している。

その時だった。玲奈が廊下の人ごみを見て、車に轆ひかれたカエルのような声を出したのは。

「何アレ……。近寄りたくもない集団ね……」

苦々しく吐き出された玲奈の言葉に、確かに、と吉人は頷く。

長蛇の列に並ぶ人の目が皆、血走みなっているのだ。その異様な雰囲気なたじろぐ二人。それが特進クラスの中へ続いていると気付いて、吉人は端整な顔立ちを歪めた。

「原因はアレみたいだね……」

「え？ あ……」

吉人が指す方を見て、目を見開く玲奈。しかしその美貌は崩れず、それすらも美しいと思える。

「あの写真、もしかして千歳ちゃんと秋くん？」

「そうみたい。それにしても、よく分かったね？」

「まあ、商売柄ね」

人を見る仕事だから、と写真を見つめたまま呟く玲奈。その頬にはしっかりと笑みが浮かんでいる。

「やっぱり、秋くんはいいわ……。次回は女性服だけ着せて、その後はメンズ用とレディース用で一緒くたに出せば……」

ふふふ、と怪しい笑い声を漏らす玲奈の隣で、吉人は秋に同情した。この人に目を付けられたら、逃げる事は不可能だと、彼は痛い程理解している。

「アキは公式的に男って事にして、女装版の名前も考えなきゃ……」

「玲奈さん、それはちょっと秋ちゃんが可哀想だよ……」

「そう？ 案外喜んでやってくれそうな気もするけど」

「喜んでやったら、俺は秋ちゃんと距離を置こうと思う」

「冗談よ」

分かっているよ、と返せば背中を思いつきり叩かれて呻き声を上げた。大袈裟ね、と玲奈に白い目で見られて、吉人は溜め息をつく。彼が幼少の頃から病弱なのを、彼女は忘れていているらしい。仮にも育て親なのに、と吉人は心中で呆れていた。

「人のいい秋ちゃんでも、女装姿が全国に流れちゃうのは流石に嫌だ思うよ？」

「そう……まあ、大切な専属モデルだし、その辺は何とかするわ」

玲奈の『何とかする』は、絶対と同等の意味を持つ。それを知っている壱人は、安堵の息をついた。

(これで秋ちゃんの名誉は守られた……かな?)

いまいち自信は持てないが、壱人はまあいいかと開き直って話題を変えた。

「ところで、専属にしたのは聞いたけど、ちゃんと契約したの？まさか口だけじゃないよね？」

「あ……」

「ぶっ」

しまった、としつかり顔に書いてある玲奈に、つい吹き出してしまった壱人。だが、瞬時に鋭い眼光が向けられた事に気付き、ごめんごめんと謝った。

「でもさ、だとしたら早めにきちんと契約しておかないと。余所に取られちゃうかもしれないし。秋ちゃん、そっちの業界で結構注目されてるんでしょ？」

「……まあね。問い合わせ殺到よ。って言うかあんた、私より経営に向いてるんじゃないの？ その抜かりない所とか特に」

「そっ?」

「ええ。ま、そんなのはどうでもいいから、早くここから離れましょ。空気が悪くて堪えないわ」

この人はどこまでマイペースなんだと、思わずにはいられない
人だった。

第七十話：「放置プレイとケーキ」

あの後、千歳に急かされながらも化粧を落とし、ウィッグも取って制服（勿論男子用だ）に着替えた。

「ふむ。久しぶりに会った感じがするな、その姿だと」

とは、別教室から出てきた僕に対する千歳のコメントである。喜んでいいのか分からないのでとりあえず、ありがとうとだけ言っておいた。

「で、千歳はどこに行きたいの？」

「そうだな……特進の方には近寄るなど遍に言われているから、反対方向の一年生から二年生、三年生と回っていくか」

歩き出した彼女を小走りで追い、隣に並ぶ。

「なんで特進の方はダメなの？」

「昨日撮った写真が張り出されているからだ。女装姿のお前と今の姿ではバレる確率など知れているが、万が一と言つ事もあるだろう」

千歳はチラリとこちらを見ながら、悩ましげな溜め息をついた。

「あの写真に写る女がモデルのアキだと知ったら、客が混乱に陥る事は目に見えている。お前はその中に、自ら身を投じたいと思うのか？」

「う……お、思いません」

僕は悪くないはずなのに、どうしてか肩身が狭い。恐らくは、彼女の責めるような目が原因だろう。

「あのー……何か怒ってる？」

「……」

一瞬だけ目をこちらに流し、すぐに戻した彼女はスタスタと先に歩いていく。置いて行かれては堪らないと慌てて追いかけるが、視線さえ向けてもらえず無視された。

「ちよ、千歳？」

「……」

「ひ、日宮さん？」

「……」

「……」

放置プレイとは、大変びじ辛いものである。いい子は真似まねしないように。

彼女の言った通り、まずは一年生の階から回る事にした僕らは、出し物の一つであるカフェにいた。

「んっ。これは中々……」

目の前でケーキを美味しそうに頬張る彼女。怒っていた理由は結局分からずじまいだが、その怒りがケーキ一つで済めば安いものである。あのまま放置プレイを続けられていたら、僕は泣き出していただろう。

「……何を見ている」

「え。見てちゃいけない？」

「見るな」

「は、はあ……」

見ても減るものじゃないのに、どうしてそこまで怒るんだろうか。女心ってよく分からない。

頭を抱えたいくなるような悩みに苛いらまれながらも、僕はポーカーフェイスを保ってる。……とでも言えたらいいが、実際は営業スマイルのしすぎでもう顔の筋肉が動く事を拒否してるのだろう。

「……美味しい？ そのケーキ」

「ああ。学生にしては、な」

「そう……」

お腹空いた……。入店した当初はそうでもなかったのだが、フォークに乗ったシヨコケーキの一片が彼女の口に運ばれていくのをこうして見ていると、涎よだれが出てきそうな程の空腹感に襲われている。これが甘党の宿命なのか？

と、その時。僕らの座る席に、女の子が足早にやってきた。外見からして、同年代ぐらいだろうか。少し紅潮させた頬が印象的だった。

「あの、モデルのアキさんですよね？」

「は、はい」

「私ファンなんです。握手してもらってもいいですかっ？」

「ああ、勿論いいですよ」

玲奈さんから、ファンは大事にしるとの教えを頂いている。すっかり板に付いた営業スマイルで返事をすれば、女の子は喜色満面で手を握ってきた。

いやはや、何とも嬉しい事であろうか。こんな僕のファンとってくれる人がいるなんて。学校みんなはどうせ冷やかしだろうか、余計にそう思うのだ。

「ありがとうございます！」

「いえいえ。応援してもらえて嬉しいですよ」

顔の前で片手を振れば、女の子が申し訳なそうな顔をする。

「日宮さんのお食事中邪魔しちゃってすみません」

ああ……何と礼儀正しい子なんだろうか。この人、絶対いい人だ。慌ただしく彼女と僕の間を右往左往する目が面白くて、ついクスクスと笑ってしまった。

「あ、あの……?」

「あ、いや、気にしないでください。ね、千歳?」

「ああ」

紅茶が入ったカップを置き、彼女は微かに頷く。その顔は相変わらずの無表情で、でもそれがテレビに映る彼女なんだと知らされた気がした。

日宮千歳と、目の前にいる少女。どちらが本物の千歳なのか考えて、すぐに振り払った。バカらしい。誰であろうが、答えは変わらないのだ。どちらも彼女でしかない。全てを含めて、そこに存在するのは『千歳』。

彼女を変えたいだとか、傲慢な事は思わない。僕が出来るのは、ただ想う事だけなんだろう。それが少し切なくて、静かに笑った。

「おい」

「は、はい……？」

頭をペコペコと下げながら去っていく女の子に手を振り続けたら、絶対零度に近い温度を持った声が僕に降りかかってきた。

「デレデレするな、みっともない」

「デレ……っ！？」

どう反応したらいいのか困る。つか、デレデレなんてしてない。するとしたら千歳にしか……ごほん。今の忘れて。

羞恥で頬が熱くなるのを感じて、自分の手を押し当てる。彼女はそんな僕を数秒見つめ、すぐに廊下の方へ視線を移した。

「……どうやら私は、どうあっても衆人の目に晒される運命らしいな」

日宮千歳を一目でも見ようと廊下に集まる人だかりを、彼女はゆっくりと見回し、辟易へきえきとしたオーラを隠す事なく堂々としていた。

注目される事に慣れているのだろう。日宮千歳の大変さを少し理解出来た……ような気がする。

「今年はイベントが無くなって、楽が出来ると思ったのに……」

「そう言えば、今年はミスコンも後夜祭も二年生は不参加なんだよね？」

問いかければ、「あ、ちと」紅色がこちらを向いた。……唇の端にチョコレートがついてるよ。

「あ、ちと」

「不参加だな。恐らく、来週に修学旅行があるからだろう」

「……」

言うタイミングを逃してしまった。まあ、いいか……可愛いし。あ、本音が出てしまった……。

「この学校は会社の規模関係なく、令嬢や子息が多い。学校側としても、学園祭の疲れが後に引いて何か事故でも起きたら死活問題だ。特に私はイベント参加を禁じられている」

伯父が手を回してもしたのだろう、とうんざりした顔で呟く彼女。修学旅行が控えてるとあって今回は二年生も納得したのだが、一部がそれに異議を唱えているらしい。なんでも『日宮千歳がいないミスコンなんて無意味』とか言って抗議していた事は、もうすっかり噂になっていた。僕はその一部の中に悪友がいない事を願う。

「今年の行き先はフランスらしいね。千歳は自由行動、どうするの？」

「遍と理月と一緒に行動する。あと腐った女も」

「腐った女？ 何それ」

「知らない。本人がそう言っていた。そう言うお前はどつするんだ？」

「舌に誘われてるから、案内してもらおうかなって思ってる」

「そうか。途中で会えたらいいな」

「そうだねー」

ああ、穏やかな時間だ……。僕が求めていたのは、これなのかもしれない。なんか今、凄い幸福感を感じてる。

そして、何故かこちらを怪訝な目で見てくる彼女。その視線に狼狽^{ろた}しながらも、弱々しく笑い返せば目を逸らされた。僕の顔はそこまで酷いんですか？ 顔が赤いのは怒ってるから？

「ち、千歳……？」

「う、煩いつ。そろそろ行くぞっ」

「あ、ちょ、ちょっと待って」

立ち上がる千歳を慌てて引き止める。この店から出るのなら、ソレはどうにかした方がいいからだ。

テーブルの上にあったお絞りを持って身を乗り出し、きよとんとしている彼女の口を拭^{ぬぐ}う。

「っ!?!」

「わっ」

瞬時に目を見開いて驚愕する彼女に、口に当てていたお絞りを強奪されてしまった。そのお絞りは今、彼女の手の中でクシャクシャにされている。

「お、おおお、お前……っ！ ななな、何をするっ!?!」

「いや、チョコレートが口についてたから」

「だ、だからと言って……」

視線をあちらこちらにさまよわせ、唇や指先が小刻みに震わす姿は、普段の威風堂々とした千歳とはかけ離れていており、僕の笑いを誘う。

それが気に入らなかったのか、彼女はこちらを吊り上げた目で見た。

「お前……覚えてるよ……」

「……」

あまりの迫力に、声も出せなかった。どうやら僕は、彼女の逆鱗に触れてしまったようだ。うねっているように見える黒髪が恐怖を煽^{あお}る。

睨む千歳。 怯む僕。 ざわめく人々。 学園祭は、
やっぱり前途多難
だった。

第七十一話：「反省会と言つ名の後日談」

学園祭が終わり、一日だけの振替休日をダラダラと過ごした。

そしてその翌日、いつも通り安寧な(?) 学校生活を迎えたとはかり思っていた僕の考えを否定するかのようになり、スピーカーから流れる名前。思わず自分の耳を疑った。

『向坂秋くん、日宮千歳さん、斎木壱人くん。至急生徒会室へお越しください。これは生徒会長命令です』

鈴の鳴るような声で紡ぎ出される名は、間違いなく己の名前。その聞き覚えがある声が誰だか気付いた。学園祭の時に千歳から紹介された友達、理月さんだ。

『特に日宮千歳さん。サボろうなどと考えてはいけません。そんな場合は私が副会長の権力を最大限に行使して、全校生徒の目の前でスリーサイズを暴露及び授業中の居眠り写真を配布しま』

スピーカー越しに聞こえる、壊さんとするような扉を叩く音。次いで聞こえたのは、怒りに染まった聞き覚えがありすぎる低いとも高いとも言い表しにくい声。

『理月っ！ スリーサイズは個人情報だろうがっ！ 大体、いつ盗撮したんだお前はっ！』

『スリーサイズは遍から教えてもらって、写真は遍から』

『またあいつか！ と言うか結局、全部遍の仕業なのか!?!』

『うん。遍、悪戯に関しては凄いから』

『笑顔で開き直るなっ！』

『あ、向坂さんと齋木くん、早く来てください。日宮さんはここにいますから』

『おいっ！ 何を勝手に』

そこで途切れる校内放送。教室までならず、廊下 いや、学校全体が静寂せいじやくに包まれる。皆、状況を理解出来ないようだった。その空気に堪えきれず、僕は教室を飛び出して生徒会室へ向かった。何があるのかは見当もつかないが、あの教室にいるよりはマシだと数秒で判断したからだ。

生徒会室でまず最初に見たのは、ご機嫌斜めな千歳と人のよい笑みを浮かべる理月さん。それとヘラヘラ笑う壱人に、くつろいでいる生徒会長。女と男で、向かい合うように黒い革張りのソファに座っている。

美形が集まると、脳内で背景に薔薇がプラスされるらしい。初めて知った。

「秋ちゃん、おはよー」

「アキくん、おはよう」

にこやかに笑顔で接してくれるきと会長におはようと返しつつ、
とりあえず会長の横に座った。

「おはよ、向坂くん」

「あ、おはよ。副会長も大変だね？」

「あはは、まあね」

綺麗で可愛らしい笑みを向けられ、少し気恥ずかしくなりながら
言葉を交わす。

美少女としか言いようのない整った容姿に、これまで何人もの男
が魅了されたのか……。人柄良し、愛想良し、成績優秀に眉目秀麗、
スポーツだつて出来る才色兼備。ここまで完璧な人間、僕は見た事
ない。

「秋、おはよう……」

「あ、う、うん。おはよう……」

どんよりとした空気を全身から漂わせている千歳に、面食らった。
ただその気持ちも分からなくはない。僕の場合は実の姉の手によつ
て個人情報を出されてるのだ。

「暗いぞ、日宮。もう少し明るくしろって」

「会長……他人事だと思つて……」

「そう言われても、本当に他人事だからなあ」

苦笑いする会長と、半眼で睨む千歳。確かに、先程放送された内容は所詮しょせん他人事に過ぎないだろう。それならば、早めに用件を聞いてさっさと退散した方がいい。

「ええと……何で僕達は呼び出されたの、かな？」

騒がしい体育館内に、反響する高らかな声。姿の見えない放送部員は、スピーカーから己の存在を主張する。

『只今より、学園祭反省会と言う名のベストカップル授賞式、開催しまーす！』

戸惑う二種類（男声と女声）の声が入り混じり、木霊こだまする。

僕はその様子を舞台袖から見ていた。……何故だ。何故こんな事になった。誰か一から十まで今の状況を説明してくれ。

「ベストカップルだと？ はっ。バカバカしい」

右隣の千歳が鼻で笑えば、左隣の壱が首を傾げる。

「って言うか、何で俺達ここにいるのかな？」

「僕だって分かんないよ」

何も知らされずに、連れられた先は体育館の舞台袖だった。全校生徒が揃っているは、訳分からん企画を発表されるはで、脳内はパンク寸前だ。膨大な情報量を整理出来ない。

『今年は事情があり、二年生のイベント不参加と言う学校側の判断に不満たっぷりな方々の怒りを沈静化すべく、水面下で生徒会と写真部が作り上げた企画であります！ 審査方法は生徒会と写真部の独断ですが、必ずや皆さんも納得出来る結果と言えましょう！』

事態がようやく飲み込めた全校生徒達は、いいぞー、やったー、などの野次を飛ばして煽り始めた。

うん。状況は分かった。でも、それじゃあ何で僕はここに？ 両隣に立つ二人も訝しげに顔を歪めている事から、僕と同じ気持ちであるのだろう。

『まずは第三位！ 学園祭に多いに貢献してくれた二人組です！
こちらをご覧ください！』

「何だあの仕掛けは……」

「うっわー、大掛かりー」

突如として天井から垂れ下がってきたスクリーンに、嘩然とする千歳と壱。映画館並みの大きさがあるソレに、流石の全校生徒達も困惑気味である。

『正体不明の謎の美女と我が校のお姫様です！』

スクリーンに映ったのは、いつぞやの写真。その二人組は間違いなく、女装している僕とゴスロリ千歳。

体育館は『可愛い』『綺麗』『誰！？』と、様々な叫びで埋め尽くされる。

「ほう。やはり、アレはお前だと気付かない者が大半のようだな」

ニヤリと口の端を吊り上げる千歳の姿は、何故かしてやったり顔。壱が僕の肩を叩いて慰めてくれる。ありがとう、壱くん。僕はいつも君の優しさに助けられてばかりだね……。

『この美女が働いていた某クラスの委員長に尋ねた所、このような回答を頂きました』

「桐谷さんに……？」

「一体どう答えたんだろうな？」

「フォローしてくれてると思うよ？ 秋ちゃんを追い込む事はないでしょ」

『名前は秋子ちゃん、委員長さんの友達で、普段は女子校に通う十七歳。働いていたのは友達のよしみとして手伝ってくれたから

だ、そうです』

「見事に嘘だねー」

「あいつは詐欺師に向いてるかもな」

「……あはは」

ナイスフォローですね、本当にありがとうございましたとしか言えませんが、これって助かったのか……？

『我が校の制服を着ていますが、それは委員長が用意したものであり、当校の生徒ではないので探しても無駄です。卒業生の一人ではないかと言う説もありますが、全くの無関係のようです。他人のそら似と言うヤツですね』

えー、と不満の声を上げる男子一同（女子も含む）。複雑な心境を抱えたまま、放送部員によって企画は進行していく。

『ではでは、続いて第二位ー！』

まだ続くんですか。もう勘弁してください。

第七十二話：「これぞドタバタコメディー」

げんなりしている僕とは別に、体育館内のボルテージは最高潮を迎える。まだ第三位なのに盛り上がりすぎだと思う。いや、それ程までに千歳人気が凄まじいと言う事だろう。ならば納得。

「よかったねー、秋ちゃん。みんな、向坂秋とは気付いてないみたいだよ？」

「いいような悪いような……なんか複雑」

「『性別逆転喫茶』で女の格好をしていたら男にしかならない。だが、それでもお前は女と認識されたようだ。おめでとう」

「みんな、その前提を知ってて女だと思ってるからさ。秋ちゃんは本物だよ、おめでとう」

「おめでとうじゃないよ！ 本物って何だ、本物って！」

くそう。二人揃ってさだから、必然的に僕がいじられる運命なんだよね。あー嫌だ嫌だ。

「まあ、そう落ち込むな。女の私から見ても綺麗だったから」

「千歳、それフォローになってないよ。秋ちゃん更に落ち込んだじゃったし」

「あ、悪い」

「もういいよ……」

最初からフォローなんて求めてないし。もういいもん。放つて。

と、体が見えない重圧に押し潰されそうになったその時、女生徒達の悲鳴が体育館に反響し、お耳に大変よろしくない影響をくださった。単刀直入に言うと、煩いって事なんだけど。

「な、何だこの絹を裂くような悲鳴は……っ！」

千歳は両耳を押さえ、堪えきれないと言うように顔を歪ませる。キーンと耳鳴りがする感覚を彼女も味わっているらしい。大丈夫？ と気遣ってやりたいが、今は無理。だって僕も耳痛い。もうこれだけで充分なのに、そこで追い討ちを掛ける司会。

『うひゃー！ 女子にはちょいと酷な第二位だったね！ かく言うわたくしも女子だったりしますが、それは置いておきましょう！』

女子に酷？ いまだ悲鳴が轟く中で、千歳と顔を見合わせてスクリーンに目を移す。舞台袖からステージは暗幕で隠れていて、身を乗り出して覗き見ないといけないから大変だ。いちいち面倒くさいと言っのが本音です。

「「あ」「

二人して暗幕の影から見たそれには、クレープを頬張る女性とスツ姿でソフトクリームを食べる男性が映っていた。どちらも見覚えがある。ありすぎる。って言うかここにいる。

「……きっ？」

「……吉人？」

「あはは。撮られてたんだー」

呑気に笑う彼が少々羨ましいです、千歳さん。その目で訴えると、彼女も同意するように頷いてくれた。いやはや、どうしたらここのまですぐ爽やかキャラになれるのか……。

「それにしても、凄い人気だな。お前はアイドルか」

呆れた目をきに向け、いつもより低いトーンで紡がれる言葉に苦笑してしまう。それを千歳が言うとは思わなかった。自分の事を棚上げしているのだろう。それにきも気付いているようで、誤魔化すように頬を掻く。

「アイドルって……もうちょっと他に例え方ない？ 千歳って昔から例えるのが一般的って言うかさー、独創性が見られないんだよねー」

「バカ。例えに独創性を求めてどうする。簡単な方が分かりやすくいい」

「えー。そんな事ないと思うけどー」

「昔からと言えば、お前はこーんなちっちゃい時から玲奈にベツタりだったよな」

「はいはい。話を変えたいなら言えばいいのに」

「煩い！」

幼馴染みの会話って和むね^{なご}。なんかほのぼのするよ、微笑ましくて。僕には幼馴染みって言える人がいないから、こうしてじゃれあう姿がちよつと羨ましかったり不思議だったりする。ま、そんな事どうでもいいか。

『さてさてお次は、お待ちかねの第一位！ 皆さん、失恋の覚悟はよろしいですかー！？』

なんだそれ。失恋の覚悟って、大袈裟だなあ。

「って言うか、なんで僕はここにいるの？」

「はあ？ 何をいきなり」

「そんな哲学的な事を聞かれても分かんないよ？」

「いやいや、存在理由とかは聞いてないから。普通に、どうしてここに連れられたのかって事だよ」

「それは つ！？」

地を這うような呻き声^{うめ}と、天を突き刺すような悲鳴。男女混声の絶叫に、千歳の口が驚きと共に閉じられる。

「さっ、向坂あああ！」

「殺す！ 絶対殺す！」

「ひっ、ひいひいっ!」

怖っ! 殺すとか、僕が何したって言うんだ! 尋常じゃない殺気を撒き散らすな!

「いやー! アキー!」

「羨ましー!」

「日宮さん可愛いー!」

「……っ? 何故私の名前が出るっ?」

「いつ、きうー! 僕、何かした!? ねえ! 男子の怒りを買うような事しましたか!？」

正に阿鼻叫喚と化した現状に驚いている壱の襟元を掴み、恐慌状態に陥りながらもしつかりと問いかける。

「ちよっ、秋ちゃん落ち着いて! お、男の子は泣かないんだよ!」

「泣いてない!」

「ええー……」

視界は滲んでいるけど泣いてはいない。でも男の子ってのはジェンダー差別だと思う。男だって泣きたい時はあるさ。そして今がその時!

「うっ、うっ……」

「うわー！ ごめんごめん！ 許して泣かないでー！」

「吉人、秋を泣かしたな！？ 最低！」

「さっ、最低！？ 俺泣かしてないよ！？」

「その前に泣いてないよ！ ギリギリで堪えてるんだからねっ！」

そこ、微妙な顔するな！ 『扱いに困るなー』って顔に書いてあるぞ！ そりゃあ、男が泣いたら気持ち悪いかもしれないけど！
って言うか僕だから気持ち悪いのかもしれないな

「向坂くんっ、君はなんて可愛いんだ！」

むぎゅっ。

……ん？ むぎゅっ？ そ、それにこの声は……。

千歳の顔を恐る恐る見れば、顔面蒼白。舌を恐々と見れば、顔面蒼白。……これはもしかしくなくても。

「さ、き、さ、か、くん」

耳に吐息がかかりましたよ皆さん！ はい、犯人確定！ よし
！ それでは

「ぎいやあああっ！ はな、はな、はな、はな、離せえ！ この変態
ー！」

「しゅ、秋を離せ元晴！」

「うーん。いくら千歳の頼みでもそれは無理」

「……秋を離して」

ああ、マズい！ 千歳のこめかみに青筋がつ！ 怒ってる！ 怒ってますよ！

「そんな怒らなくても、後で君も抱きしめてあげるから」

「くっく！？」

怒りのオーラが一気に消えた！ しかも鳥肌立ってるし！ いつもの強気な千歳はどこへ！？

「四谷先生っ、秋ちゃんを解放してください！」

「解放？ なんか物騒だね」

あんたが言うな、あんたが！ 実際物騒なんだよ！

『はいはいはい！ それでは、十分に会場が暖まってきたようなので、そろそろご当人達をお呼びしましょう！ どうぞ、出てきてください！』

ぐあー！ 何と言うバッドタイミング！ そして僕は何故ここにいるんだ！

『あれ？ もしもーし。斎木くん、向坂くん、日宮さん？ あれー？ おっかしいなー。誰も出て来ませんねー』

えー、ちよつとー、などのブーイングの嵐が起きる体育館内。司会者の放送部員は焦りの声を出す。

『だ、誰か様子を見に行つてあげてくださいーい』

それからすぐ、ドタバタと荒々しい足音が聞こえてくる。この現場を目撃されてはマズいと思つたのか、自分を拘束している変態の腕が緩んだ。そのスキについて、腕の中から脱出。一目散に壱と千歳の元へ走つた。

「秋ちゃん!」

「秋つ! 大丈夫か!？」

「全つ然大丈夫じゃない……」

「そつ、そつか……」

「そりゃそつだよね……」

「見て、この全身から漂う疲労感。まるで生命力を吸い取られたみたいだよ」

「そ、そつだな。ちよつと痩せたんじゃないか？」

「うん。俺もそつ思つ」

「この数分間で? だとしたらマジでエネルギー吸われてるって」

つと、こんな話してる場合じゃないよね。足音が段々近付いてきてるし

「日宮、どうした!? 何かトラブルでもあったのか!？」

大股で駆け込んできた生徒会長の後ろから、ひよっこりと理月さんが顔を出す。

「あれっ? 四谷先生、ここで何してるんですか?」

「あ、いや、特に用はないよ。ただ向坂くと日宮さんにベストカップル賞のお祝いを……」

「はあ? 何言ってるのこの人。さり気なく日宮さんって呼び方を直してるし。……って、待てよ。ベストカップル賞って!」

「ま、まさか……また女装しなきゃいけないの? それで全校生徒にカミングアウトっ?」

「い、嫌だ……。そうしたら僕は破滅する。明日から『女装好きの変態』と言うレッテルを貼られるなんて御免だ。」

「え? 何を言ってるの向坂くん。今からじゃ間に合わないでしょう?」

「あ、それもそうだね」

理月さんの発言に、失いかけていた我を取り戻す。……ん? あれ? それじゃあ、僕ここにいない必要なくない?

「ああもうつ！ どうでもいいから早く出てくれないか！？ これ以上騒ぎが大きくなると生徒会の立場が悪くなるから！」

「会長、それが本音だな？」

「本音も何も事実だつーの！ とにかく、このイベントの目的は日宮を人前に出すって言う事なんだよ！」

「失敬な。勝手に人を対人恐怖症にするんじゃない」

「日宮が見れば全校生徒の怒りは治まるの！ 分かったか！？」

「まあ、なんとなく？」

「じゃあ早く出る！」

「うわつ。押すな押すな！」

「ちよつ、何？ 千歳、押さないでよー」

「バカ壱人っ！ 私じゃない！」

……何やってんの、あの三人。千歳が壱と生徒会長の間挟まれて苦しそうなんですけど。その光景はまるで……。……まるで？

「うーん。目の保養になるおしくらまんじゅう？」

「それって例えなの？」

わ、理月さんに変な目で見られた。なんか恥ずかしい。

「や、ただそう思っただけって言うか……」

「そっか。……うん、面白いね」

「そ、そうですか？」

「なんで敬語？」

「いや、面白いなんて言われた事ないからさ……。どう反応していか迷っちゃったよ」

「そう？ そんな事ないと思うけどなあ。四谷先生も っていないや。どこに行ったのかな？」

「……逃げたな。相変わらず神出鬼没な奴め。二度と目の前に現れるな。」

「おいつ、やながわ梁川！ アキくんもこっちに連れて来てくれっ！」

抵抗する千歳ときを一生懸命に押す生徒会長は汗だくになっていた。こちらに顔を向けて叫ぶ様子はとても必死で、少し同情してしまふ。だけど、なんで僕が呼ばれているんですか？

「って言うか梁川？」

「あ、それ私の名字」

ああ、理月さんのかー……。ん？

「あろう……」

「なあに？」

「グイグイ押すの、止めてもらえませんか？」

「無理」

わあ。なんて可憐で綺麗な微笑みでしょう。

「どうしても、止めてもらえませんか？」

「会長命令ですから」

「あはははは。ですよー」

「あはははは。そうですー」

……何だこの会話。いやいや、今はこの状況をどうするべきかと考えよ。って、痛いっ！？ ちょ、理月さん！ 僕の体が会長にガンガン当たってますって！ 押してますって！

「いたっ、いたっ！？ や、梁川！？ 俺も押されてるんだけど！？」

「頑張ってください」

「何を！？」

「ですから、頑張れ」

「詳細を求むぞ副会長！」

「求めないでください生徒会長」

「僕を間に挟んでの喧嘩は止めてくださいっ！」

「みんな、これ以上押さないでよー！ このままじゃ俺が一番下敷きになっちゃうってー！」

「ぎゃあぎゃあ喚くな吉人！ 私なんて二番目なんだからな！ 押し潰された衝撃で口から内臓でも出たらどうする！？」

「その内臓が俺の体につ！？」

「そう言う問題じゃないだろ、このドアホ！ お前なんか舌噛み切っつて死ね！」

「ひどっ！ それが幼馴染みに向かって言う言葉！？」

「知るかそんなもの！ 昔は病弱だったが、今は健康なお前に情けをかける気はない！」

「梁川ー！ お前は俺に何か恨みでもあるのかあ！？」

「え？ ありませんよ？」

「り、理月さんっ！ 痛い痛いっ！」

「大丈夫？ 向坂くん」

「何だその扱いの違いはっ！ って言うか心配するぐらいなら押すの止めるー！」

「ちょ、本当に痛い！ 痛いですってば理月さん！」

「あっ、向坂くん。ブレザーの裾を掴んでるって」

「わっ、わっ！ やばっ！ 倒れ うぎゅっ！」

壱の いかにも圧迫されて自然と声が出ました的な 悲鳴が聞こえ、僕達はいつの間にかステージの上に倒れ込んでいた。壱が倒れる途中で躓いてしまったのだが、条件反射で足を庇った為に体の向きが九十度回転し、千歳と会長の順でその上に倒れ込み、理月さんを背中に乗せた僕が会長の腰元にしがみついている もはや将棋倒しでもない 小さな山が出来てしまった。二階に設置されたライトが一齐にこちら目掛けて向けられ、いきなりの事に目が眩む。失明するんじゃないかと不安になったが、それを見透かしたかのように理月さんが耳元で囁いた。

「大丈夫だよ。失明する程のものでもないから」

「あ、そう……」

それなら一安心だ。ほう、と一息つく。その刹那、下から二段目に位置する千歳が叫んだ。

「お、重い〜！ お前ら、さっさと退けっ！ 私に内臓を吐かせる気か！？」

「ぎゃー！ 秋ちゃん助けてー！ 千歳の内臓が降ってくるー！
体は大丈夫そうだけど今度は制服が汚ちやうー！」

「降ってくる訳ないだろうが、この被害妄想者！ お前なんか三途
の川で溺れ死んでしまえ！」

「俺は死んだ後も死ぬの！？」

「だ〜っ！ 梁川、アキくん、早く退いてくれえっ！ 日宮と齋
木は知らんが、これ以上は俺の身が持たん！」

「会長、どう言う意味だそれは！」

「そつだよー！ 千歳は分かるけど俺まで巻き込まないでー！」

「お前もどう言う意味だ！」

「日宮と齋木は運動が出来るだろ！ 俺は根っからの文化系なんだ
よー！」

「そんな事は関係ないだろう！ 私だって凄く辛い！」

「この場合は俺が一番辛いよー！」

ああ……何だコレ。視線が突き刺さるように痛いなあ……。

「ごめん、理月さん。起き上がれる？」

背中にしがみついている彼女に問いかければ、あー、と濁った返
事が返ってきた。

「ごめん。なんか……足、くじいちゃったみたい」

「……マジ？」

「うん。マジ」

「……実は僕も、くじいちゃったみたいなんだよね……」

だから会長の腰元から離れられないのだ。だって離したら、顎が『ガンツ』ってなるから。何だそんな事かって思った人は気を付けた方がいい。アレって結構痛いんだよ。

「向坂くん……マジ？」

「うん。マジです」

「……あはは。困ったねえ？」

「……あはは。困ったよー」

……本当に、困った事になりました。二人で苦笑いを交わしている間も、下の争いは続いている。

「かつ、会長！？　なんか頭に冷たい水が！」

「あ、それ俺の汗だわ」

「なあっ！？　拭けっ！　今すぐ拭けえっ！」

「どう考えても無理だろ」

「別にいいじゃんかー。もう諦めなよー」

「私に他人の汗を被る趣味はないっ！」

……や、本当に困ったなあ。

あ、そうそう。スクリーンに映っていた写真は、僕が千歳の口についていたチョコレートを拭っている瞬間だった。これがベストカップル賞なんて、今年の学園祭ではカップル来客率や学校内でのカップル率が少なかったんだらう。不運な年だなあ、全く……。

第七十三話：「ユリカちゃんは元レディース（噂）」

それから時は経ち、生徒会の数人に手伝ってもらって何とか立つ事が出来た理月さんと僕（アルプスにおじいさんと二人で住む少女を主人公にした某アニメの名ゼリフを佑樹が叫んでいたので、それは後で殴りに行くとして）。足をひねった僕らはそのまま保健室に直行。授賞式を済ませた後に吉は多少の打撲、千歳は擦り傷、会長は体調不良と言う何とも変な形で保健室に全員集合してしまった。

「この私に、ここまで手間かけさせるんじゃないよ、バカ共がっ！」

『ごめんなさい……』

五人仲良く保健室の主に謝罪する光景は何とも言い表せない。ところで、ユリカちゃんの頭に二本の角が見えるのはツツコンだ方がよろしいのでしょうか。いや、やっぱり止めとこう。幻覚だよな？ うん、そうに決まってる。

「向坂ア！ テメエ何よそ見してんだ、アア、！？」

「ひよええっ！」

怖えー！ びっくりして生きてる内にそう出す事のない声出しちやっただよー！

「先生のありがたーいお説教を聞かないなんて悪い子だな。よし、根性焼きするか？」

「しませんしません！ 許してください、イヤァー！ 笑顔で煙草を

近付けないでー！」

「安心しろ。顔に傷は付けん」

「それは不良のよくやる手口なんじゃ!？」

「お、よく分かったな。ご褒美に後で特別折檻だ」

「うきゃー!」

墓穴掘ったー! と頭を抱える時間もユリカちゃんは与えてくれず、そのまま保健室の床に組み敷かれる。ちょ、マジ? 根性焼きとか冗談でしょ? ってか、貴方は仮にも教師デスヨ!?

「私は欲望に忠実な教師だからなあ」

ダメだこの人ー!

「せ、先生っ! どうかその辺で許してやってください!」

か、会長ナイスっ! 背中から後光が見えるよ!

「あ、ああん? なんだ、テメエ。体育の授業中、ここのベッドを貸してやった恩を忘れたのかあ?」

「……」

押し黙る会長。弱い、弱いですこの人。ってか生徒会長がサボっていいのか。

なんだその別次元な会話。そしてあまりにもそっくりな声マネでした。声帯模写ってヤツですね。

「でも、何で保健室に？」

「んー。ここは何気に設備がいいからね。食堂のテレビよりこっちのテレビの方が画質いいし、冷蔵庫にユリカちゃんあいりんが愛飲してるコーラいっぱいあるし。まあ、ユリカちゃんが買い貯めたおつまみ食べながら家から持ってきたノートパソコンでネットサーフィンでもしてるんだと思うよ？」

「……っ」

千歳と話すのに夢中なユリカちゃんの下からなんとか抜け出て、何か知っていきそうな理月さんに問いかければ苦笑いと共に返答があった。千歳も何やら図星のような感じでビクリと肩を揺らしていた。学校に何しにきてんの？

「しゅ、秋。そんな目で見るな」

「いや、そこまで傷つかなくても。別に責めてるって訳じゃないし。ただ、何で保健室なのかなあって思ってる」

「だって……保健室は居心地がいいし……授業は退屈でつまらないから」

「あー、分かる。遍はいつも屋上らしいけど、サボるのには保健室が一番いいって言ってたしね。サボると言えば、艶子は学校にいないで家に帰っちゃうんだよ。早退になっちゃうからやめろって言うてるのに。なんだったら、私がいつも使ってる生徒会室にいてもい

いんだけどなあ」

うむ。特進クラスの女性陣は相変わらずなようです。

「そついやあ梁川も……」

ユリカちゃんが口をつぐむ。それは何故か。理月さんの笑顔が黒いからです。いや、決して嘘ではなくマジで。

「冷蔵庫の一番奥」

「うが」

理月さんの眩きにつめき声を上げるユリカちゃん。

「一升瓶」

「ぐあ」

「職務怠慢でコンビニへ」

「あつ」

「職権濫用で保健委員をパシリに」

「ぎゃ」

「校長を脅して」

「ス、ストップ！ 私が悪かったからもうやめてくれ！」

今の会話を見てて思ったのだが、もしかしたら理月さんって最強なのかもしれない。うん、なんとなくだけ。

「一体どこでその情報を手に入れたんだ……」

「別にいいじゃないですか、そんな事」

うふふと笑いながら髪をくるくる指に巻きつける姿は悪女そのもの。うっ……どうしてだろうか。何故か汐姉の顔が脳裏に浮かびました。

「ねえ、秋ちゃん」

「んあ？」

肩を叩かれたので振り向いてみれば、そこには杏の姿。頬をポリポリと搔いて、大変お困りの様子である。

「会長がさっきから部屋の隅で何かやってるんだけど……」

「……」

杏が指差す方向を見れば、確かにいた。部屋の隅に背中に哀愁漂わせる会長が。

「……僕は何も見てない。僕は何も見てない。めんどくさいから何も見てない」

「おーい。現実逃避はやめてー」

「やだ」

「現実見ようよー」

「い、や、だ」

收拾不可能となったこの現場に現実などいらなのさ。……なん
て、ダメ人間の言い訳みたいな事を思ってみるのだった。ふう、コ
ーラでも飲むか。

第七十四話：「出発しましょう」

翌日。修学旅行の行き先はフランスである為、空港には生徒が溢れかえっていた。ちなみに全員私服。僕はピツタリと体にフィットする所々破けている黒い長袖シャツと細めなジーンズ着用中。あとはヘビ革のスニーカーと言った感じで、なんとなくロツカーな格好だ。これらを着て修学旅行に行きなさいと玲奈さんに言われ、試しに試着したらなんかエロいと言う感想をもらってしまった。一流力メラマン真弓さん曰く、僕の体のラインが分かってしまうらしい。体が細いとエロいのか、と初めて知った瞬間であった。

「いいよな、秋は。フランスまで特進クラスの美少女達に囲まれてんだろ？ しかも特等席で」

さっきから佑樹が煩い。特等席と言うのは昨日行われたベストカップル賞の賞品で、修学旅行の際の移動にはファーストクラスの座席を用意されているらしい。その後も優遇されるのだとか。嬉しいつちゃ嬉しいが、特進クラス女性陣とこれからを共にすると思えば内心ビクビクである。だって、あのノリについていけない自信がないのだ。

「はあ……憂鬱」

「けっ。勝者の余裕かコノヤロー。サングラスまで掛けてカッコつけやがってー」

「んな訳あるか」

サングラスは玲奈さんに命令されたから掛けているものであって、

別に僕が好き好んで掛けている訳じゃない。なのに色の薄いサンダラス越しに見える佑樹の顔は不満げだ。

「まあまあ、佑樹。俺と一緒になんだからいいじゃない。ほら、妖精さんも喜んでるアハハ」

「け、圭司。妖精はいないよ……」

「秋、スルーしてやってくれ……！ あいつも今はつらいんだ……！」

圭司は最近になって彼女にフラれたショックからか、精神的におかしくなっていた。これには僕も流石の佑樹もノータッチな問題であった。この修学旅行中に立ち直ってくればいいのだが、その望みが叶う可能性は薄い。

「佑樹、圭司を頼んだよ」

「おう。尽力を尽くすぜ」

ガシツと固い握手を交わす。友情が深まった瞬間だった。中学時代からの縁はこの先も切れそうにない。

「あ、アキくんごつちだよー」

「あれ、遍さん」

「はいはい遍です」

担任教師から伝えられた集合場所に向かってしていると、いつの間にか遍さんが隣に並んでいた。相変わらずのゆるゆると毛先だけ巻かれた髪は派手だが、服装は白のロングスカートに黒のシャツと案外シンプル。曲げた左腕には冬用のコートとバッグを掛け、右手でキャリアケースを引いていた。それを見て抑えきれない衝動を感じ、立ち止まる。

「？ アキくん、どしたの？ わっ」

首を傾げる遍さんからキャリアケースを強引に奪い、抗議の声が耳に入る前に歩き出す。数秒遅れて慌てたような足音が後ろからやってくる。

「アキくん、いいよ。私持つから」

予想通りの言葉が隣からかけられ、苦笑混じりに顔を向ける。

「僕が持つよ」

「でも」

「いいから気にしないで。小さい時から姉さんに『女の子には優しくしろ』って言われてるせいで、クセなんだよこう言うの。それに、僕はこう見えても男なんだからさ。これくらい平気だし、少しくらい頼ってくれてもいいよ?」

啞然とする遍さんに、もう抗議は受け付けておりません、と少しだけ冗談を交えた拒否を口にして、前方を向く。その間でも空港は騒然としており、勿論喧かれた言葉なんて聞き取れるはずもなかった。

「危ない危ない……これは嫌でもモテるわ」

「? 何か言った?」

「いや、何も」

「……? そう?」

「うん、そうそう」

……なんか釈然としないが、本人が言うのならそうなのだろう。まあいいや、と意味もなく笑えば隣から溜め息が聞こえてきた。……今、呆れられたよね絶対に。

「……千歳が可哀想になつてきた」

「え。何で?」

「アキくんは知らなくてもいい事だから。もうお子様はあっち向いてなさい」

いや、お子様って言われても僕と貴方は同じ年デスヨ？

「アキくんの鈍感バカ」

「いきなり何ですか！？　　ってか酷いよ！」

「あつ、理月達だ。おーいつ」

無視された。無視されましたよ僕。目から変な汁が出そう。

「ほら、アキくんも手え振って」

「え？　　ああ、はいはい」

遍さんの指差す方向を見れば、黒服に囲まれた特進クラスの中でも飛び抜けて優秀と言われる通称天才組のメンバーが揃っていた。それに琉と壱もいる。……でも、何で黒服の怖そうなお兄さんが一緒なの？

「みんな、おはよーっす」

あまりにも場違いな明るい声に、天才組メンバーが一斉に溜め息をついた。

「遍……お前と言う奴は」

色の濃いサングラスをかけたまま重苦しい声音で呟く千歳。極力目立たないようにしているようで、服装は黒と白のワンピース。せめてもの防寒対策なのか黒のタイツを着用していて、膝下のブーツ

を履いていた。一目では日宮千歳だと気付かないだろう。パツと見
ならば今時の女の子である。

「ん？ なぁに、千歳？ 私がいなくて寂しかった？」

「違う。この人だからの中、秋を連れ回すなんて自殺行為もい所
だろうが」

「あーそれなら大丈夫。サングラスが役に立ってくれたよね？」

「うん、まあね」

遍さんの言う通り、ここでサングラスが大変役立ってくれたのは
事実である。今では以前のように街を歩けなくなってしまったが、
これからはサングラスを掛けて出歩けばいいのだろう。帰ったら玲
奈さんにお礼を言わなければ。

なんて事を考えていると、突然背中をポンポンと軽く叩かれた。
振り向けばそこにいたのは黒髪をツインテールにした小柄な美少女
で、その可愛らしい顔には喜色満面の笑み。

「向坂くん、初めまして。あたし艶子。よろしくねっ」

「あ、よろしくね。えっと……艶子さん？」

「んにゃ。さんはやめてほしいわねー」

さん付け嫌いなものよー、と苦々しげに言われてしまった。それで
は、こんなのはどうだろう。

「艶子ちゃん？」

「っ……も、もう一回呼んで？」

「？ うん。……艶子ちゃん」

「しちそうなまです」

「え？ お、お粗末様でした……？」

その瞬間、千歳と遍さんの溜め息が聞こえたような気がした。

第七十五話：「妖怪さんと思いきや」

「うう……っ。向坂さんの苦笑い顔もまたいいわ。困り気味に下がる眉尻、非常に萌えました……。この高ぶる感情を同人誌にぶつきたいよお、遍え……。っ」

「あー、はいはい。それは帰ってからにしょーね、あでこちゃん」

「く……。っ。あたしとした事が、一生の不覚！ ただの修学旅行だと思つてナメてたわ！ たかが修学旅行、されど修学旅行ね！ 何でこんな時に限つてデジカメ没収なの……。っ！？ 陰謀！？ 教師の陰謀なの！？」

「それはあんたが一般人に向けて見境なくパシャパシャ撮つてたからじゃない？」

「なっ、何で分かつたのっ！？」

「あ、当たつたんだ。適当に言つてみただけなんだけど」

「ああ……。っ！ 飛行機乗つてから返されても時間は戻せないのよ！ あのデジカメ、画素数が凄いのよ！？ いえ、それだけじゃない。しかも不幸な事に、予備のデジカメはキャリアケースの中だし！ 更に加えてそのキャリアケースも手元にないって言うのに！」

「知らないし、興味ないし。そんなに欲しいならどっかで買えばいいじゃん」

「あの画素数を知ってしまったら、そこら辺の安いカメラじゃ物足

りないわ!」

「今のあなたの姿、親が見たら泣くと思う。……あ、その黒服さん。私のキャリアケース、特進クラス用に指定された場所まで運んでおいて? ちょっと遅刻しちゃったから、出し忘れちゃったの」

「はっ。了解しました」

「あ! ついでにあたしのキャリアちゃんを取り戻してきてー!」

「はいはい、バカな事言わないの」

「今のヨーロッパ、千歳はどう思う?」

「ふむ。別にどうとも思わないが……しかし、日本と比べて治安が悪いし、それに関しては心配性の伯父が絡みそうで怖いとしか言いようがない。もしかしたら、今頃フランスに先回りしているんじゃないかと思ってしまう」

「あはは。ミヤビの会長さんならやりかねないねー」

「ああ……理月はあの人と会った事があるから、分かってくれただろうと思った」

「うん。ミヤビの会長さん、ずっと千歳の小さい頃の自慢話してた
「よ」

「……っ。あのバカ伯父、恥ずかしい真似を……」

「遍さんは何故か興奮状態の艶子ちゃんをどうどうと宥め、千歳と
なだ

理月さんはよく分からない世間話に突入しちゃったので、僕は完全に手持ち無沙汰状態。はつきり言って、かなり暇ですよ、ええ。思わず貧乏ゆすりしてしまいます。

「おはよ、秋ちゃん」

「き、いつになくハイテンションだね……」

「それダジャレ？」

「違うわ！」

男子高校生がダジャレ言うか！？ あ、いや、いるかもしれないけどさ。でも僕は違うよ？

「うす、秋」

「あ、琉。おはよー」

「なんか久しぶりな感じすんな？」

「うん、確かに。あ、あっちでは自由行動、一緒に回るけどよろしくね？」

「おう、ボディガードなら俺に任せとけ」

いや、別にそう言う意味で言った訳じゃないんだけどなあ……。まあ、いつか。琉らしい言葉だし、ね。……あ、ボディガードと
言えば。

「この黒服さん達は何してるの？」

「それは学校側から手配されたSPだよ」

琉の後ろから現れた環。彼の話によれば、この黒服さん達はSPらしい。……でも、それじゃあここにいる理由になってなくない？

「詳しい話はサトくんが知ってるから、聞いてみたら？」

「サトくん？」

「生徒会長の事だよ。畑中悟史。はたなかだからサトくん」

「ああ、会長か」

そんな名前だったんだね、会長ってば。サトくんねえ……なんか、マスコット人形を思い出すなあ。

「アキくん。今、失礼な事を考えただろう？」

「いや、滅相もございません！」

会長、何ですかその笑顔。超怖いっす。

「そうか？」

「うん！ そうそうそう！」

「ならいいんだが……っておい、勝手に走り回るな、柏木に西園寺！ そろそろ搭乗時間だぞ！ 荷物をしっかり持って、忘れ物がな

「いか確かめるよ！」

うまく誤魔化せた事に安堵の息を漏らし、額に浮かんだ汗を拭う。だが、まだ訝しげにこちらを見ている会長。その目を避けるように衣服などを詰め込んだキャリアケースとは違い、必要なものを持ち運ぶ為の鞆を肩にかける振りをする。持ち運びに特化された肩掛けタイプが今はありがたい。マジ感謝です、玲奈さん。

黒服さんの事は聞けなかったけど、やはり己の命には変えられない。生徒会長は僕の脳内にある危険人物リストにランクイン。ちなみに、第一位は現在ダントツである変態だから。……あれ、なんか鳥肌が。

ファーストクラスやビジネスの座席はエコノミーのように並ぶ必要なくサクサクと進める。だから今、すっげえ痛いです。何がって視線が。うん、ごめんなさい皆さん。でも、これは僕の意思じゃないんですよ？ そちら辺を理解してください。まあ、男子の視線が刺々《とげとげ》しいのは特進クラスの美少女さん達に囲まれてるせいなんだろうけどね。

「うっわ、凄く見られてるねー。さすがアキくん」

「うん……。多分みんな、『テムエだけ何でそっちなんだよ』とか『マジウゼー』とか思ってるんだよ……」

「相変わらずのズレた思考だね、向坂くん」

「それは今更だって。ってか理月、そのバカを見るような目はやめてあげなよ」

遍さんと理月さんが何やら言っているが、よく分からない。ズレたとかバカとか途切れ途切れに聞こえてくるだけだ。……一体何を話しているんだろう？

「秋ちゃん秋ちゃん、あそこの女子達、こっちに向かって手え振ってるよ」

「あ、ホントだ。……誰に手を振ってるのかな？」

「秋……お前なあ……。あれは明らかにお前に対してだろーが」

「ええ？ そうなの？」

「そうに決まってるって。きも琉もそうだって思ってるから秋に言うってんだよ」

「う……そ、そうなの？」

三人に問い掛ければ、返ってきたのは頷きだった。……マジですか。

それじゃあ、と女子に向かって手を振り返せば、きゃあきゃあと

黄色い悲鳴が上がった。名前ばかりが先行している有名無実な僕でも、こうしてファンになつてくれている人がいる。多分、心が広原のように広い人なんだろう。感激して涙が

「ふみゅっ!？」

突然、ぬつと伸ばされた手に頬を引つ張られる。何事かと滲む視界で現状を確認しようとするれば、背中に何かのしかかっていた。な、何コレ! 新手の嫌がらせ!? それともあの有名な妖怪『子泣きじじい』が、僕の目に余るへタレつぶりに業を煮やしてやつて来たのか!?

「……ふっ」

「ひいつ!」

耳に息吹きかけられたー! いやー! 妖怪なのに吐息は生暖かいよー!?

「ご、ごめんなさいごめんなさい! へタレなら直しますから許してください! ってか、そろそろ頬の痛みが限界ですー!」

「ほお。もう限界なのか? 軟弱な精神だな」

「これから毎日筋トレしますから手を離してくださいー! お願いします子泣きじじい様ー! うあいたっ!？」

「ごっん、と。脳天に強い衝撃を受け、目の前にいくつもの星が現れました。

「い、いたあ……」

「誰が子泣きじじいだ」

その言葉と同時に、背中の中の重みがなくなった。先程と変わらない滲んだ視界でゆっくり後ろを振り返る。目が合ったのは、千歳さん。子泣きじじいなんかではありませんでした。間違えてごめんね？

「ほら、何をぼつつとしていて。さっさと進め」

「え？ ああ……はいは うおわっ？」

促されるままに前を向くと、忘れていた重みが背中に返ってきた。……ふむ。彼女は一体、何がしたいんでしょうか。ってか、さつきは恐怖で気付かなかったけど、凄く柔らかくていい匂いがします。や、どこの部位が柔らかいかと聞かれるとちょっと困るけど。……って、僕は変態かっ！

とまあ、自分にツツコミをいれまして。恐らく背中に乗っているであろう彼女を落とさないようにバランスを取りつつ、首だけ振り向く。意外と至近距離に顔がありました。心臓が飛び出るかと思っただよ。

「何だ？ 何をしている？」

「いや、それはこっちのセリフ」

「ああ？ ……ああ」

僕の言葉に首を傾げ、すぐに理解出来たのか千歳はゆるゆると頷いた。

「別に意味はない」

「ないの？」

「うん。まあ、なんとなくだよ」

今の『うん』って頷く仕草が可愛かった。誰かこの感情に共感してください。

「おい、ぼさぼさするな。このまま運べ」

「ええっ？」

「何だ、嫌なのか？」

「いや、別にいいけど……体力持つかなあ」

「どう言う意味だ、それは。お前の体力がないだけか？ それとも私の体が重たいとでも言いたいのかつ？」

「あうううっ！ ぜ、前者です前者ですっ！ だから耳を引っ張らないでううっ！」

「嫌いバーカ」

「子供！？」

こうして、何とも微妙な感じで修学旅行は始まったのだった。視線が凄かったのは、言うまでもないだろう。

第七十六話：「離陸しまして」

「ああん、1000万画素を超える超高画質で動画も撮れちゃう文句なしの高機能に加えて高性能なコンパクトデジタルカメラ『EUCIL-1000』ことあたしの愛しいカトリーヌちゃんっ！ ようやく帰って来てくれたんでちゅねっ！」

これは飛行機に搭乗し、早々にカメラの返却を担当教師に強要してそれに成功した艶子ちゃんの第一声である。最初から最後までほ息継ぎはしておらず、締めくくりは赤ちゃん言葉。そこへ遍さんの厳しいツツコミが一つ。

「あでこ、キモい」

理月さんの冷やかかなツツコミがまた一つ。

「艶子って、本当に気持ち悪いんだね」

ついでに千歳の忌々しげなツツコミがまた一つ。

「ふん。気色悪い喋り方をするな。吐き気がする」

「もーうつ。みんな、DSさんだからあつ」

……うつん。艶子ちゃんって『不屈の精神』の言葉が似合うと思うんだよね。あ、勿論、これは褒め言葉じゃないよ？

何はともあれ、さあ行くぞと乗り込んだ初体験ファーストクラス。

ベストカップルの特典により、僕と千歳は隣同士になるようになっていて、他は特に決められておらず自由席も同然。なので自然と三騎士、生徒会、騒がしい二人組（言わずもがな、遍さんと艶子ちゃんのコンビだ）に分かれた。

あ、これは余談なんだけど、隣席の千歳は椅子に座ると足を組むクセがあるみたい。うん。だから、短めの裾からチラリと覗く太ももとかが何とも言えないぐらいエロいですよ全国の青少年諸君！黒タイツって意外とヤバイよっ！？何がヤバイのかって聞かれると説明しにくいけどっ！

ちよつと前……いや、出会った当初ならそれぐらいでは動揺しなかったかもしれない。でも、それは過去の話。いくら『そういうモノ』にあまり興味がない僕とは言え、好きな女の子の事ならやっぱり違う訳で。

……まあとにかく、何が言いたいのかって言うかね？

女の子が、男の前ではしたくない格好をするんじゃないやありませんって事。その行為は僕を男として意識してないのか、それとも気を許してくれてるからなのかは怖くて聞けないけど。何てったってヘタレですから。

まあ、そんなこんなでいつの間にか時間は経過し、飛行機が離陸して一時間が経った頃。

千歳は早速アイマスクをつけて熟睡。

そのアイマスクに油性マジックで目を描く悪戯大好き遍さん。

艶子ちゃんはデジカメで千歳の寝顔を激写。

理月さんは会長と今後のプランを相談中。

きは本を黙々と読んでおり、環はノートパソコンで何かやっ
て、琉は千歳と同じく爆睡している。

そして、僕は音楽鑑賞と言った所。

どうやら今着用しているのは最新のヘッドホンらしく、重低音の
サウンドが耳に心地良く響く。それでいて、音量は最大ながらも周
囲の話し声が聞こえるのだから凄い。

ヘッドホンの隅に『MIYABI』とあった時は、どう反応して
いいものか困ったけど。相変わらず、高性能なものを開発している
母さんが会社からサンプルとして貰ってくるものも、いつも高性能
なヤツばかりだし。

ヘッドホンからは洋楽と邦楽がごちゃ混ぜに流されている。その
中では知っている曲もあつたりして、体は不思議とリズムを刻んで
いた。

シンセサイザーで作られた特徴的で独特な音にギターやベースが
加わり、テクノポップとはまた違う雰囲気メロディー。イントロ
は穏やかに始まり、サビは軽やかながらも優雅さを感じさせる曲調
で進んでいく。

そこに広がる、透明感と力強さを兼ね備えた歌声。それは悲しみに
満ち溢れた歌詞を見事に歌い上げている。

これには、凄い一言に限るだろう。いや、さすがと言うべきか。

奇跡の歌姫『Re: N』。

金髪に紫色の目、異国風な顔立ちをした自分より一つ年下の少女
だ。テレビで見る彼女はとても大人びていて、可愛いと言うよりは

美人と形容した方がいいのかもしれない。

だけど外見だけではない、確かな実力。だからこそ、彼女はこうして人気歌手になっている。

そこまで考えて、ふと気付いた。

それは隣で眠る千歳と同じなんじゃないか、って事に。

「……ぷっ」

気付いてしまうと、どうにもならない。つい笑いが零れてしまう。そうして暫く一人でクスクス笑っていると、何やら隣から視線を感じた。

振り向くと、そこにはアイマスクを外した千歳が。遍さんは起きる気配でも察知していたのか、既にいなくなっていた。

「あ、ごめん。起こしちゃった？」

「いや……なんか、目の辺りがもぞもぞしたから」

「へ、へー。そうなんだ」

現在、僕の視界には、口元に人差し指を当てた遍さんがいる。それも千歳の死角にいるものだから、アイマスクを額に上げたままの当人は気付かない。

あのジェスチャーは、『バラすな』と言う解釈をするべきなんだろうか。って言うかそうすべきなんだろう。

「あー……あはは」

「？ 何が面白い？ 漫談でも聞いているのか？」

言うが早いか、千歳は僕の耳からヘッドホンを奪い取った。
無論、漫談を聞いていた憶えはないので流れているのはRe:N
の曲だろう。

案の定、千歳は一瞬だけ訝しげな顔をして、すぐに納得したよう
な顔になった。

「Re:Nの歌だな」

「あ、千歳も知ってた？」

「当たり前だろう。今時、Re:Nを知らない奴なんて稀だ」

それを貴方が言いますかね。てか、君の場合もまた然りだよ、そ
れ。

なんて呆れていると、千歳の口から驚愕に尽きる言葉が出て
きた。

「それに、あいつと私は遠縁の親戚だから」

うん？ ちょっと待ってね？

「あ、嘘じゃないかな？ 名前もRe:Nではなく、ちゃんとし
たのがあるんだ」

Re:Nだからリンとか言う簡単なオチじゃないぞ？ そう
言って千歳は、無表情を少し崩した笑みを頬に描く。

「姓が月岡つきおかで、名がフレアローズ。正真正銘、私の親戚だよ」

「……」

いや、なんかもう、凄すぎて二の句が継げませんが。君んとこの家系って何気に凄い人ばかりだよな。今、訳も分からずちょっと感動してるよ。

「テレビじゃ良い子のフリをしているが、実際はワガママなお嬢様だ。私も従姉の^{あつた}新も、アレには色々と手を焼いた」

お嬢様って言うのは千歳にも当てはまると思っただけ……まあ、今この場でそれを言うのは野暮つてもものだろう。何と言っても、千歳が昔を懐かしむように笑っているのだから。

「アレと初めて会ったのは中学生の時……三年前だ。私と新が二年で、ローズが一年だった。確か、イギリスからこっちへ移住してきたんだ」

ヘッドホンから流れる音楽に身を任せるよう、千歳は目を閉じた。

「ローズは……人形みたいな顔をして、平気で人を傷付けるような奴だったよ。本当に、薔薇^{ばら}みたいな棘^{とげ}を持った女の子……自分を棘でしか守れない、小さな子供だった」

お祈りのように両手を握り締め、漏れる重苦しい吐息。

「それは私も、新も同じだった。でも、だからこそ、私達は理解し合えたのだろう」

薄く開けられる目は、どんな感情を映しているのだろうか。その

心の内には、何を。

「自分の身は、自分で守らなければ意味がない。結局、最後に信じられるのは自分なんだ。他人に守られる生き方は、私には出来ない」

ああ、どうしてだろうか。

手を伸ばせば届く距離なのに。

今にもその震える手を掴めるような距離なのに。

どうして、こんなにも、遠く感じるのだろうか。

ふう、と人知れずついた溜め息が脳内で響く。

千歳はあの直後にまた寝た。どうやら眠気が残っていたようで、眠り始めたのは数十秒もかからなかった気がする。

胸を占める空虚感にまた一つ、溜め息をついて目を伏せれば、こちらに向かってくる人影があった。

「ちょっと、いい？」

「……環」

「……何、その顔」

見上げた僕の顔が相当情けなかったのか、困り気味に笑う環の顔が見えた。

「場所、変えようか」

チラリと僕の隣を窺うように見た事から、千歳の安眠を妨害しないようにと言う意図なのだろう。

それに賛同するよう、小さく頷いた。

環に連れられたのは、人気の少ない通路。

壁にもたれかかった彼はモデルでもやった方がいいんじゃないかってぐらい、そのポーズが様になっている。

長い沈黙の中、環は通路の床を見続けながら口を開く。

「……秋はさあ、将来の夢とかある？」

「夢？」

「そう、夢」

「うーん……ない、なあ」

小さい頃は警察官や消防士とか色々あったけど、年を重ねるに連れてその希望は薄れていった。でも、周りを見ていればそれが普通なんだと分かる。

中学の頃、バスケットプレイヤーになると夢を語っていた佑樹。今ではその話題が出る事はない。

だから、そうやって大人になっていくものだと思っていた。夢が叶う人なんて、限られている。

「そっか」

「うん」

「……っ」

一瞬、環は考え込むと、意を決したように顔を上げた。

「あのさ……さっきの千歳を見て、どう思った？」

「どっつて……」

「あ、いや、特になんないんだ。……ただ、ちょっと心配で」

心配？ 何が？

僕の疑問に気付いたのか、苦笑を零す環。

「俺達、卒業したら離れ離れになっちゃっから。もう、千歳を守れなくなるんだ」

「え？」

どこか虚ろな目で紡がれた言葉は、静まった通路に響いた。

第七十七話：「夢がよかった」（前書き）

気が付いたら一ヶ月以上経ってましたね、弓槻です。
読者様、大変お待たせいたしました。

姫の最新話です。

あ、お知らせが八つほどあります（多い

・えむさんの指摘により、今までの前書き後書き削除しました。今後は最新話だけに書いていくつもりです。

・それから、姫の夏休みの間のお話をブログに移す考えです。何にせよ多すぎ。

・ブログは明日、きちんと更新します。今日はもう眠いから許して。

・これから一ヶ月に一回ぐらいの不定期更新……かも。

・学園祭の番外編、やっと書き終えました。うっかりデータ抹消してしまったあの頃の自分を張り倒したい。

・ブログで細々と平安版の姫を書いていこうと思案中。

・金曜日、バイト先に携帯電話忘れてきてそろそろ禁断症状がやばい。明日取りに行つて来ます。

第七十七話：「夢がよかった」

「特進クラスとその他諸々インフランスー！」

遍さんと艶子ちゃんが仲良く手をつなぎ、せーのと足を揃えて空港の出入り口を飛んだ。そして着地した。

二人とも、ノリが一緒だ。案外ウマが合うのかもしれない。その他諸々つてのは、僕と壱と琉しか当てはまらない。

普段の僕なら、指を差してでも笑っていただろうか。もしくは、苦笑しながら注意していただろうか。

だが予測は予測。所詮は僕の想像でしかない。

「大人になるって事は、一緒にいられなくなるって事なんだ」
「千歳もそれを知ってる」

何時間か前に聞いた、彼の言葉が重くのしかかる。環は一体何を考え、僕に打ち明けたのだろうか。

大人になるってどう言う意味？ 千歳は前から知っていた？
考えれば考えるほど坩堝むすぼにはまっていくな。

それでも、先を歩く千歳の肩が揺れているのを見て、心が多少軽くなったような気がした。

とりあえずは、あの二人に感謝すべきだろう。遍さんや艶子ちゃんが騒ぐ度に、気持ち軽くなっていく気がする。

「……よし」

一生に二度とない、修学旅行なんだから。さっきの事は帰国するまで忘れよう。最後の最後まで、楽しみたい。環の言う通り、いつか彼ら四人が離れ離れになってしまうのだとしたら……僕は少しでも、多くの思い出を彼らの中に残せるように頑張るだけだ。

先を歩く千歳の肩は、まだ少し揺れている。

恐らくは笑っているであろう彼女を見るために、僕はその背中を追った。

笑顔を見れたかどうかは、ご想像にお任せ。

翌日の夕方。

昨夜、ホテルにチェックインした後は各自の部屋で待機となり、結局どこへも行かなかった。

そして今日はクラスごとの団体行動でルーブル美術館の見学が主だった。てか全部それ。集合時間だけ決めて、各々が好きなように周り半日を過ごすと言うなんとも充実したい一日だった。その後はレストランで夕食をとり、ホテルに帰ってきた。フレンチに大満足。

ホテル帰宅後は自由に行動してもいいと担任教師様からのお告げがある。……と言っても、ここは日本より治安が悪い為にホテルから半径50メートルまでらしい。この時ばかりは、学年全体がひとつとなつてずっこけた。

とまあ、そんな訳でたつた50メートルなら外出する価値なしと決め込んだ同部屋である佑樹と圭司と僕は、とりあえず世間話をしながらトランプをしていた。種目名、ばばぬき。

「ねみいなー」

「はあ？ 佑樹、レストランに向かうバスの中で爆睡してたじゃん」

あくびを漏らす佑樹に、妖精さんが見えなくなった（立ち直った）圭司がカラカラと笑ってツッコミを入れる。見慣れた光景だ。

僕らが三人集まった場合、ボケとツッコミの役割はローテーションでぐるぐると回る。誰かがボケれば誰かがツッコんで誰かが笑う。それなりに居心地のいい空間と言ってもいい。

「ほら、秋。ちゃっちゃんと選べよ」

「う、うーん……」

佑樹の持つ手札は二枚。圭司は既に終わっていて、僕と佑樹の一騎打ちとなつてしまったのだ。

さあ、どうする僕。右か、左か？ 二者択一。これほど難しい事はない。

「ほら、ほらほらほら」

「佑樹うるさい」

「はっはっは。気にすんな……ん？ 誰か来たみたいだぜ？」

コンコンと部屋のドアをノックする音が聞こえ、三人揃って首を傾げる。

何の用だか知らないが、こんな男三人が集まるむさ苦しい部屋に来るなんて相当の物好きだろう。いや、もしかしたら担任様かもしれない。佑樹が何か不祥事でも起こしたのかも……。

「誰だ？ 圭司か秋の客かな？」

「さあ？ 俺は知らないけど？」

「僕も知らないよ？ でもまあ、いいんじゃない？ 見られて困るようなものもないし……外で待たせるつてもアレでしょ」

コンコン、と再度聞こえる催促の音。何やら早くしろと急かされているようだ。

仕方ない。よっこらせとオッサンくさい事を呟きながら重い腰を上げる。このホテルは鍵がない限り、中から開けないと入れない仕組みになっているのだ。もし閉め出されてしまった時は廊下で夜を明かす事になる。

「はいはい、いらっしやいま……え？」

目の前にある面子メンシを見て、自分の目を疑った。

「アキくん一時間ぐらい久しぶり。会いたかったよ？」

「こら遍。そう言う冗談を人前で言ったらダメだよ」

「ん？ 秋、お前風呂上がりか？ 髪が濡れているぞ」

「おふう！ 向坂くんの風呂上がり頂き！ これは目に焼き付ける事、必須ですね！ 今、あたしの血液が鼻に集中しようとしている！」

特進クラスの中でも選りすぐりの一部。通称、天才組の女性陣が部屋の前にいた。……夢？

「夢じゃないぞ、秋」

「ですよー」

あっはっは、と僕の軽やかな笑い声が、むなしく廊下に響く。

「それで、みんなどうしたの？」

首を傾げて問えば、ニヤリと笑う女性陣。ああ、何だかとても嫌な予感。

心中で得体のしれない恐怖と不安に駆られる僕を知ってか知らずか、遍さんは胸元からカードを取り出す。

「これ、何か分かる？」

「その前に、どこから取り出してんだよとツッコミたい」

「気にしない気にしない。……実はこれ、招待状なんだ。秋くんも、

行くでしょ？」

遍さんの白い指先は自らの唇をなぞり、それは妖艶に半月を描く。アキくんではなく秋くんと言われた事に違和感を覚えながら、僕は何も言えなかった。……前々から思ってはいたけど、色気ありません。

「うわっ、アキくん照れてんの？　かわいいー」

面白いものを見たと思えば遍さんは口に手を当てて笑い、上目遣いでこちらを見ている。その横でお腹を抱えて笑っている理月さんと、呆れたような顔をして遍さんを窘める千歳、まだ鼻を押さえている艶子ちゃん。

先ほど行われた遍さんの仕草は日本にいる汐姉みたいで、人知れずその姿を脳内で思い描いた。シスコン？　違うよ、姉思いなだけだよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1353d/>

姫と三騎士と平民A

2010年10月10日04時26分発行